
架空戦国小説・夫婦雛物語

赤城康彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

架空戦国小説・夫婦雛物語

【Nコード】

N3380J

【作者名】

赤城康彦

【あらすじ】

小豪族大高氏の嫡子として生まれた千丸は、大高氏を征服した中村氏の娘、雪姫を妻として娶る。

本来なら一家の頭領となるはずが、先祖より受け継いだ城一つを守るために中村氏の家来として、征服者の娘婿として、幾多の戦場を駆け巡ることになった。

若き小豪族夫婦と、それを巡る人々を通じて描き出される戦国絵巻。
完結。

第一章 夫婦難

序章

少年の目に、大勢の兵士たちがうつる。

今自分のいる城を取り囲み、槍の穂先を天に向けている。陽の光が穂先を照らし少し動いたびに、きら、きら、と輝く。

その輝きがあちこちに散らばり飛んでいる。

父がだっこして窓からそれを見せてくれていた。

「父上、いくさは負けたのですか」

少年の言葉に父は力なく頷く。

「そうじゃ」

それだけ言うと、父は少年を下ろし手を引いて階下へ向かう。狭く急な階段を下りながら少年はこれから何が起るのかわからないまま父に付き従った。

「これからは」

「はい」

手を引きながら、父は喉に何か詰まったような声で言った。

「これからは、わしは主ではない」

「？」

言葉の意味がわからない。今日まで父は「殿」と家来から呼ばれていた。

「いくさに負けたからですか？」

十一歳（数え年）の子供でもそれくらいはわかる、それが父にはつらい。

「そうだ」

「では、父上のお殿様は」

「いっな」

いくら我が子でも、受け止めねばならぬ現実を口に出されるのは

堪えるようで。渋い顔をして我が子の言葉を止めた。

そうこうしているうちに大広間にたどり着き、あぐらをかいて深く顔をたれていた家来衆が一斉に顔を上げた。皆ぼろの鎧を身にまとって、刀を投げ捨てるように床に放り投げていた。

広間の中央には降伏の使者に出した家来が戻ってきていて、他の家来と同じようにあぐらをかき深く顔をたれていた。主に平伏しているのだろうが、かなり疲れている顔をして今にも眠りこけそうだ。それから少年は侍女に手を引かれ自室へと連れて行かれ、まだ陽は高いというのにそこで無理矢理寝かしつけられた。

寝巻きに着替え布団に入る前、侍女は言った。

「若様、今までのことは夢でございます。夢でございました」

涙目の侍女の言葉がよく飲み込めないけれど、ここで寝て起きればもうその夢は終わるのだとなんともなしに思っ。目を閉じた。

殿の嫡男だったのは夢で、目覚めれば自分は何なのだろうと思いつながら眠りについた。

第一章「夫婦雛」 その一

少年、千丸せんまるは父、大高輝種おおたか・てるたねの嫡子として生まれた。それから千丸三つの時、母お志野は突然剃髪し（髪を下ろすこと）出家した。父と上手くいかず、かと言って実家にも帰れず、半ばやけくそであてつけの出家だった。

念仏者で、常日頃念仏を唱えてばかりで男らしい野心のひとつかけらも持ち合わせていない輝種に、お志野はほとほと飽き飽きして見限ったのだ。まだ二十五にの女盛りの身としては、三十七年の離れた年寄りの夫はあまりにも弱弱しすぎた。

実家はすでに敵に攻め滅ぼされていて離縁して帰ることもかなわなかった。

「わたくしも、あなた様のように毎日念仏を唱えて暮らしとうございます」

そう言つて、夫と我が子に背中を見せて。尼になつてから一度も会えなかった。不運というのは続くもので、お志野は出家した寺で流行り病にかかつて、亡くなった。

家を出てゆく母を止めることも出来ず、力なくうつむき加減に母を見送る父の背中中は、小さく丸かった。気性の激しい母のこと、実家が健在なら無理矢理でも離縁して出て行つただろう。そしてそこでまた新たな出会いを用意してもらい、そこに嫁ぐかもしれない。「賢婦二夫に仕えず」など、きれいごとにすぎない。この乱世の世、女は政略に使えるならばとことん使う。出戻りであろうと未亡人であろうと十にもならぬ幼子であろうと。

そして今、その母の実家を攻め滅ぼした中村家に、今度は大高家が負けた。

母の実家も大高家も、小城ひとつの小豪族の家。いくつもの城を持ち、そこにたくさんの家来を住まわせている大豪族中村家から見れば、蟻にも等しい。

戦らしい戦も無く、輝種はあつさりと降伏を決め。中村家当主、なかむら・いえなり中村家成はそれを認めた。

輝種は豪族でも武士でもなく、ほんとうにただの念仏者だった。家来たちが血を流しひとりまたひとりと倒れる最中も、部屋に閉じこもつて念仏ばかり唱えていた。

「わしが念仏を唱えるのは家や家来の無事を祈つてのことじゃ」

と、言い訳しながら何もしない。これでは家来たちもやつてられない。家来の一人、津川太郎左衛門は主の不甲斐なさを嘆きながら一人敵陣に突っ込み名誉ある戦死をとげ、それがようやく大高家の名誉を守っていた。

それがなければ、今頃どうなっていたか。

「主のみならず家来も腑抜け、皆腑抜け、腑抜けの家じゃ」
と陰口をたたかれてばかりだつたらうから。聞けば母の実家はま

だ善戦したという。

それはともかくとして、千丸は父と家来二人とともに中村家当主中村家成の居城である式頭城しきとうじょうに向かっていた。

子馬にまたがって空を見上げながら、父の後ろについていった。空は青く、太陽は光り輝き大きく白い雲が優雅に泳ぐ。そこから目を落とし、父の背中を見た。

大きな馬にまたがる父の背中は、小さくて丸かった。

第一章「夫婦雛」 その二

「若」

千丸の横で大人の馬を駆る若者が、背をかがめて耳元で小さく耳打ちした。

「なんだ十兵衛」

相手の声にあわせて、千丸も小さな声で答えた。父は聞こえないのか聞こえぬふりをしているのか、黙々と馬を歩かせる。

「空を御覧なされ」

と、津川つがわ・じゅうべい十兵衛は言った。十兵衛はさきの戦で戦死した津川太郎左衛門の息子であった。年のころは千丸より四つ上の十五。背丈は高めだがまだ顔には幼さが残る。しかし戦を経験しているせいとその顔に十分なまでに精悍さをたたえた、年に合わぬ逞しい少年だった。

ちなみに先年元服も済ませ、初陣も済ませている。その初陣で父は戦死し、仕える家は攻め手に降伏した

「空ならさつきも見た」

「いいえ、もう一度御覧なされよ」

「どうして」

「よいから御覧あれ」

と促され、仕方なくまた空を見上げれば

「あつ」

と思わず声を上げた。空で、鷹が舞っている。鷹は晴天の空と白い雲を背に悠々と空を泳ぎ、時折太陽にも背を向けて、千丸は眩しくて手を上げ日差しを防いだ。真っ直ぐ羽を伸ばし、鋭いクチバシをまん前に向けて、鷹は風に乗り、空を駆け巡っている。それはひとこと、優雅という他になく。空の王者の風格十分であった。それを領きながら見る十兵衛。

「かつこいい」

と千丸が言えば。

「そうでござろう」

十兵衛は得意げにうなずいている。すると、うしろで咳払いする声がある。舌打ちしながら十兵衛は背を伸ばし姿勢を正す。後ろを見れば老臣、氏清うじきよ・はるかげ晴景が、じつとふたりを見据えていた。

「そちの鷹好きにも困ったものじゃ」

「何を言う。鷹のあの優雅さ、強さに惚れてどこが悪い」

「わしが言いたいのは、鷹を馴らせず飼えもせぬくせに、
というの
じゃ」

と言われ、ばつが悪そうに十兵衛は黙り込み。千丸はおかしそうに十兵衛を見やった。晴景はおかしそうにするでもなく、これまた黙って口をつぐんでいた。内心、本心の奥の奥では口には出さぬが、今自分たちがどこに何をしに行くのかわかっているのか、と言いたかったのだ。それを言わなかったのは主の輝種の心情を慮ってだった。しかし若い十兵衛にはわからない。

息子や家来たちの会話が聞こえているのかそうでないのか、輝種は黙々と馬を進めていた。やがて山道に入り、狭いあぜ道の上り坂を登ってゆく。その先に、式頭城の大手門が見え。そこに、中村家の門番らしき家来が数人たむろしていた。

第一章「夫婦雛」 その三

家来たちは大高家一行がお城にやってきたのを受けて、馬から下りた一行を待たせてひとり場内に入っていた。ほどなくして、番人の頭らしき髭面の男がやってきて。こちらへ、と太く威圧的な声で一言言つて、後ろも見ずにずかすかと城内に導いてゆく。馬は大手門の前で番人が預かった。

男は降伏した被征服者に礼をつくすような優しさは持ち合わせていないようだ。他の番人も同じようで、皆面白おかしそうに一行を見ている。

千丸はその男たちを見て怯えている。まだ十一の少年には、男たちの威圧的な態度はただ怖く。今にも鬼となつてとつて食われるのでは、と思つた。

十兵衛はそれを見て取つて、男たちを睨みつけ、千丸のそばにいてやった。晴景はすすすたとさりげなく輝種のそばにいてやった。輝種も千丸同様どこか怯えているようで、思わずため息をつきそうなのをかるうじてこらえた。

山頂に本丸がある。大高氏の居城、大高城とは規模が違う。大高城は小高い山の上にたち、一応の高塀と空堀をめぐらせた、大農家の館を少し大きくしたようなこぢんまりとした小さな城だが。式頭城は近代的なつくりで、都の貴族、とまでいかぬものの、大富豪が住むような大きさ、それに加えて風情と壮麗さがあつた。

「これが城か」

と思わず十兵衛はうなり、千丸はその大きさに顔を目一杯上げて本丸を見上げている。

「これ」

と言う目で晴景は十兵衛を見据え、男に付き従う主の後ろを着いてゆく。やがて案内役が門番の頭から中村家成の直臣らしき侍にかわり、城内にはいり、どこかの一室に押し込められた。

ふすまをぴしやりと閉めた侍がどたと足音を響かせ部屋から遠のいてゆく。千丸はまだおびえていた。さつき鷹を見た楽しそうな気持ちはどこへやら、口を真一文字に閉じてただ体を震わせていた。この足音がまた舞い戻って、今度こそ鬼にとつてくわれるのでは、という気持ちだけが心の中にうごめいている。

晴景と十兵衛は不憫そうに千丸を見て、輝種は無関心を装う。もう、己の命運がどうなろうと知らぬという風でもあった。心の中でひたすら念仏を唱える、最悪の事態になった後に無事極楽浄土へと導かれますように、と。

それを見る十兵衛の気持ちは穏やかでない。父はこの腑抜けの主のために討ち死にしたのか、とやるせない気持ちでいっぱいになる、おまけにおびえる我が子に声もかけもしない。これでは城を守るために死んだ者も浮かばねば、子も不憫である。

これが主でなくば、殴り倒してしまふところだ。拳を握り締め、十兵衛は晴景とともに、ただ不憫な千丸のそばにいてやっていた。

第一章「夫婦雛」 その四

「よう来られた」

と中村家成に声を掛けられたのは、部屋に押し込められて四半刻ほど過ぎた後のことだった。

十兵衛と晴景を部屋に残し。広間に連れてゆかれ、左右に家来集、上座に家成。家成は口ひげをたくわえた風格ある壮年の男だった。輝種は縮こまって平伏し、その斜め後ろに千丸が同じようにして座している。

「そのようにかたくならずともよい。面を上げよ」

といっても輝種は完全に畏縮してしまって顔を上げようとしないう、はてさてかくも小心なものかと少し呆れているところ。

「はい」

という元気な声。千丸だった。面を上げよ、という家成の声に素直に従ったのだ。これには家成も左右の家来集も少しあつけにとられ、やがて、くくくと声を小出しに笑った。

千丸はどうして笑われるのか不思議な面持ちで小さく首を振ってあたりを見回す。輝種はますます硬くなり、額に脂汗を浮かべた。

「良い声じゃ。ええと、名はなんと申したか」

物言わぬ輝種を無視し、千丸に話しかける。家成や家来集たちは、輝種を相手にするよりも子の千丸を相手にした方が面白そうだと、みな千丸を見ていた。

ただ言うことを聞いただけなのに、どうして周囲の視線が父ではなく自分に向けられるのかわからないまま。

「千丸と申します」

と応えた。やはりどこかおどおどしているが、それは十一の子供である以上仕方のないことだ。

「ほう、千丸と申すか」

「はい」

再びの元気の良い返事。もうこれだけで、父の存在を打ち消して周りとの会話の中心となっている。

「年はいくつになる」

「十一になりました」

と、家成は千丸に次々と話しかけ、果ては好きな遊びや食べ物、碁は得意かそれとも将棋が得意かと聞く始末で。完全に征服者と被征服者の会話ではなく、近所のおじさんと子供の日常会話となっていた。

「やあやあ、そちはまこと元気が良いの」

「ありがたきおことは、ありがたきしあわせにございます」

と会話が一区切り終わって間が空いた。いつしか、家成は千丸を我が子を見るような優しい眼差しで見つめていた。が、輝種に対しては全くの反対の視線で睨みつけていた。本来なら輝種が何か応え

ねばならぬのに、そうせずに子供の千丸ばかりが喋っている。

礼儀作法云々以前の問題であり、それで怒りに触れて首を飛ばされても仕方がないことである。

—この男はだめだ。—

家成はもう、父親ほど年の離れた輝種など知らない。この沈黙の間をもっとも重く受け止めていたのは、他ならぬ千丸であった。鬼に食われるのでは、と思っておびえていたが、家成の意外な気さくさに心がほぐされ会話が弾んでいた。が、それが止んでさつきとは打って変わって張り詰めた空気が広間に漂っている。

この大人たちの変わりように上手く対応できず、父と同じように平伏しなおして、おどおどしている。それを見て取った家成。次に口を開いたとき、さすがに輝種も思わず顔を上げるほど突飛なことを言い出した。

第一章「夫婦離」 その五

「ふむ、千丸という名からして。元服もまだか……」

と言ってしばらく黙って、それからぴしゃりとひざを叩き。

「よし、ここで会ったのも縁じゃ。わしがそちを元服させてやろう」と言うのである。さすがにさつきまで黙りこくっていた輝種もこれには驚き、思わず顔を上げた。

「輝種よ、異存はないな」

もちろん、ありようもない。征服者の言うことには従わねばならない。しかし、元服、いわば成人式である。それが父である自分ではなく、征服者に委ねられようとは。子に対する父権までも征服されてしまったのである。

家成は千丸が気に入った。はきはきとした元氣の良い声に従順な素直さ。征服者を前にして、被征服者の子が父を出し抜いている。

それを見て、仕込めば将来的に見込みがあると踏んだのだ。

千丸はわけがわからずばかんとしている。そこへまた家成の鶴の一声。

「その後で、嫁を娶らせてやろう。よい娘がおつての、その娘をくれてやろう」

である。

輝種は、もつたいなきお言葉、とだけ言つて平伏し続け。千丸はますますばかんとする。元服も婚姻も、全て家成が取り仕切ると言うのである。しかも、婚姻の相手は家成の娘であるという。これは、征服者が被征服者に対しては寛大すぎるほどの処遇である。

よほど千丸が気に入つたのであろう。そうと決まれば話は早い、思い立つたが吉日と、家成は立ち上がり。

「もうよいぞ下がれ。沙汰あるまでここでゆるりと過ごせば良い。なに、遠慮はいらぬ。ここを別荘と思つてくれてもよいぞ。千丸」

と言つた。輝種を無視し、千丸に振つた。これが何を意味するのか。輝種は平伏している頭をさらに下げ、息子を伴つて下がつていった。父親としての役割を分捕られ、あぐくにあからさまに無視をされ。齡五十をすぎた老境の身には、命が助かつたとは言え、あまりにも慈悲あるようで無慈悲な処遇であつた。

だが、そうだからこそ、今このような目にあつてゐる。乱世の世である以上、致し方なきことでしかなかった。それがいやなら、自分が家成の立場になればよいのだから。それが出来ない以上、被征服者としての道を歩まねばならない。

これも運命と、輝種は全てを悟り、何もかも諦めていた。そうとはつゆ知らず、千丸は父の後ろについて十兵衛と晴景の待つ部屋へと戻つた。

ふたりは、主と若君が無事もどったことを喜び、家成の言ったことを聞かせると、目を丸くして仰天して驚いていた。

「まことでござるか、若の元服式を！」

「しかも、お姫様を頂戴おひさまつかまつるとな……」

と言ったあと、呆然としてなんと言っただよいのかわからない。それこそ、領地の半分を取り上げられるか、他所へ、もっと貧しい土地へと追いやられるか。と思っていたのに。

それには触れず、ただそれだけを言ったというのだ。これはどういうことか。

「ともあれ、喜ばしく、めでたいことです」

晴景は咄嗟に、わざと大きな声ではきはきと言った。ここは家成の居城である。余計なことを口走り、家来たちに聞かれてはいけなから。とりあえずそう言っただ話を止めた。

「晴景の言うとおり、喜ばしくめでたいことじゃ。家成様に感謝しようではないか」

と輝種は言う。

この腑抜けの主が心の底からそう思っているかは疑わしいが、ひとまず大高家は安泰である。千丸はわけがわからないのか、ぼかんとしている。

それもそうだ、まだ十一である。この大人たちの急ぎ足な事態にはなかなかついてゆけないようだ。ただ、家成様というお方が良い人でよかった、と、ほっとしている。

「わたしは、元服するのですか」

「そうじゃ」

子の問いかけに、父は応える。

「その後で、お姫様を頂戴されるのですか」

「うむ」

「父上」

「なんじゃ」

千丸はどこかしらうきうきしているようだ。被征服者の子としての自覚がない。それどころか、結婚して妻を持つ、ということもよくわかっていない。まるで新しい友達を紹介してもらえるように、はしゃぎ気味なところまであって、それを見る十兵衛と晴景の目はこころなしか潤んでいる。

それを見、輝種はしんどそうにしている。人の気も知らないで、というふうに。

「お姫様とは、どのようなお方なのでしょうか？」

「さあのお。それは会ってみねばわからぬな」

「そうですか……、ですが楽しみです」

父のそっけなさも気付かず、千丸はこれからのことで頭が一杯だった。

第一章「夫婦雛」 その七

それから家来と女中が部屋に来て、布団を敷いてくれた。もう陽は落ちあたりは暗くなっている。

「明日、殿が姫君と千丸殿を謁見なさるということじゃ」

と、輝種以下をぎよろりとした目で見据えながら、そう告げる。

三人の大人は、「ははっ」と頭をたれ、千丸も同じようにして。

「はい」

と応えた。そのあまりの元気の良さに女中たちや家来はくすつと笑う。女中はともかく、家来も武士とはいえまた人である。子供の無邪気な返事は心が和むように。

「よきお返事でござるぞ」

とぎよろりとした目をにこやかにして、思わず応えてしまった。

家来や女中たちが去った後、今日の用事は全て終わったのだという安堵感が襲い緊張感が吹き飛ばしたせい、途端に眠くなり。寝

巻きに着替えそのまま布団に入って夜を過ごした。

翌日。

起床と共に、女中が布団を片付けに来て、昨夜来た家来もやってきた。

「さて千丸殿、それがしについて来てもらおうか」

と言った。父と一緒にではなく、千丸一人で来いというのだ。十兵衛がそれについてなにか言おうとして晴景に目で止められた。輝種はただ、「どうぞよしなに」と応えた。

千丸はどきどきしながらも、家来の後を着いていった。昨日の広間ではなく、また別の部屋であった。そこに通されると、家成と、小さな女の子がいた。

家成はその女の子と鞠で遊んでいたようだ。ふたりの間には赤い鞠がひとつ置かれていた。

「よう来たの、千丸」

「はい」

平伏して応える。

「呼んだのは他でもない。そこなお雪に会わせとうてな、いやせつかちと思うが早いほうが良いと思ったのじゃ」

「ありがとうございます」

「ほほ、くるしゅうない」

と言った後、鞠を拾い上げ、女の子に手渡した。女の子はにこやかに鞠を受け取った。鞠が好きなのだろう、父から受け取って大事そうにかかえている。が、目の前の男の子にやや戸惑っているようであった。

「これ、挨拶をせぬか」

とうながされて、はっとして。

「おはつにお目にかかります、お雪ともうします」

と、少しおぼつかない声で言った。黒くつぶらな瞳のおさまる目をぱちくりさせて、千丸を見ている。千丸は千丸で、女の子、お雪を前に呆けていた。

その名の通り、雪のように白い肌をし。それと対をなすような、艶の良い黒髪に黒くつぶらな瞳。緊張のせいか、紅を塗ったように赤い唇を真一文字に締め切っている。清楚さを感じさせる可愛らしいお姫さまであった。

その『お姫様』という立場のため、同年代の男の子とあまり話すこともないのだろう。が、どこかしら素朴なおいもしないでもなかった。が、さすがにそこまで気付けない。

「さて」

と言うと家成は立ち上がり。

「あとは若いもの同士、ゆるりとお互い物語るがよからう」

と言つて、そそくさと退散してしまった。

部屋には他に誰もいない。いきなりふたりつきりにされても、幼いふたりにはどうすればよいのかわからない。

ふたりが固まったまま、時はゆっくりと流れていこうとしていた。

第一章「夫婦雛」その八

千丸は、こまったなあ、と思いながら。あたりをきよるきよる見回していた。

障子は開け放たれて庭が見える、外から涼しげな風が部屋に入り込み初夏の暑さをやわらげてくれる。

お雪は、鞆を手にしたまま下を向いてじっとしていた。婿になるという男の子を前にして、どうしよう、と思っている。

十一と九つの幼子では、気の効いた言葉もとっさにはうかばず。しかも、ふたりとも異性の友達というものもなく。特にお雪は恥ずかしがりやなのか、その頬をうつすらと桜色に染めてしまっている。せみの声が聞こえた。ふたりが黙りこくるのもおかまいなし、みんなみんな、とやかましく騒ぎ立てる。子孫を残そうと必死に叫ぶ

せみの声を耳に、これから夫婦めおととなるふたりは終始無言のまま時が過ぎてゆく、かと思われた。

「あの……」

声を掛けたのは千丸。やはりそこは男の子、この状況をなんとかしようと思いい切って話しかけてみることにした。

お雪は少し驚いたように、はい、と小声で応え。うつむいたまま続きを待った。

「鞠は好きですか？」

という言葉に、声もなく頷く。何も言わないことに、やや戸惑いを覚える千丸。もしかして、嫌われているのでは、と思った。

なんだかよくわからないけれど、これからこの娘こと夫婦になるのだ、ということだけはわかってる。ならば、嫌われるようなことがあつてはまずかった。

これから一緒に暮らすのだから、仲良くしないと。ただそれだけを思った。

「私も好きです」

とっさに出た言葉だった。

うそだった。男の子である千丸は鞠で遊ぶことはなく、同年代の男の子たちや十兵衛と一緒に、泥んこ遊びや合戦ごっこなどの遊びしか経験がない。

でも、お雪となんとか仲良くしようと、うそをついてしまった。

そうとも知らず、お雪は目をぱちくりさせて、うそつきな男の子をまじまじと見ていた。

「ほんとですか？」

「はい」

「でも、男の子が鞠で遊ぶのですか？」

いくらなんでも男の子が鞠で遊ぶなど、にわかには信じられなかった。もしそうなら、この若様はかなり軟弱な若様だ。などと子供のお雪が思っわけもなく。ただ、変なの、と思った。

でも、その千丸の妻になるのだ。これは、父からの命令だった。

お雪に断る権利はない。もちろん、千丸にも。

「他はわかりませんが…、母と……」

突き詰められて、応えに窮する千丸。どうしよう、うそがばれたかな、とおどおどしている。じゃあどうすればよかったんだろう、と考えあぐねているところ。

「お母さまですか」

お雪が聞いた。どこかしら、さっきと目つきが違う。疑いの眼差しから、どこか哀しさを帯びている。

「はい。母上に鞠を教えてもらって。それから女中たちと一緒に遊んでいました」

ままよと、千丸は嘘をつき続けようと思ったが、意外な言葉がお雪の口から出た。

「いいな……」

「え？」

「お母さまと鞠で遊べるなんて、おうらやましゅうございます」

「あの……、でも、もう母上はいません。病にかかって……」

言いながら母のお志野を想ったものの、記憶もほとんどないし鞠で遊んだこともない。乳を飲ませるのも乳母の役目であり、お志野が直接なにかしら子育てに手出しすることはなかった。そのせいか、あまり母親というものに対しこれといった感情を持つことがない。

お雪は言った。

「わたしも、もうお母様はおりませぬ。千丸様のお母さまと同じように、病にかかり」

言うなり言葉を止めて、またうつむいて、体が震えだした。亡き母を思い出したのだ。

生まれて間もなく亡くなって、鞠で遊ぶなど出来っこなかった。子として、せめて一度でも母に甘えたかった、それなのにもう母はなく……。

大粒の涙がぽたりと、鞠に落ちてはじけた。慌てたのは千丸だった。

「お、お雪どの。どうしました」

と、急いでお雪のもとまで来て。

「わたしは何かいけないことを言ってしまったか？ そうなら許してください。お雪どのを泣かせるつもりはなかったのじゃ」

と、必死になってお雪を慰めるものの、どうして泣いているのかわからない。

「お雪どの、お許しください。お許しください」

床に手をつき、何度も何度も頭を下げて詫びる。その様はまるで張子の虎が頭を振っているようで、そんな風にお雪の目にうつったのか。必死に謝る千丸を見て、きよとんとした後。

「うふふ」

と、目に涙を浮かべながら笑った。よほど頭の下げようが可笑しかったのだろう。

「よかった、許してくれるんですね」

千丸は千丸で、お雪が笑ったのを見て安堵して、笑った。それからよほどそれが可笑しいのか、ふたりはつられるようにして笑いあっていた。

第一章「夫婦雛」その九

それから数日の後、ついに千丸の元服の日がやってきた。

最初お雪と会って以来、お雪とは会えなかった。家成いわく、次は婚礼の儀じゃ、と。

お雪と気が会って、以来千丸はお雪が好きになった。といっても、幼い千丸にはそれが異性への恋というよりも、新しい友達が出来たという感覚のほうが大きい。

その日も晴れていた。

「良き元服日和ですな」

と晴景が感慨深そうに言った。目も潤んでいる。

中村家に攻められて、一族は存亡の危機に瀕した。だが、滅亡はせず中村家に征服されたとは言え、嫡男の千丸がこうして元服式を迎えられたということが。大高家の家来として何より嬉しかった。

「ようございました、まことようございました」

と、鼻をすすりながら何度も何度も言っている。

「よしなされ晴景殿。みつともない」

横で十兵衛が呆れたように言った。この老人の喜びようときたら若い十兵衛から見ればみつともないことこの上ない。

「何を言うか。おぬしは嬉しくはないのか」

「それがしも嬉しゅうござる。しかし、あまりにも取り乱しすぎではないか。それでは中村家の家来どもにも笑われましようぞ」

「こわつぱが一人前の口をききおるわい」

と、ふたりは言い合う。

輝種はというと。あいかわらず、何の感慨もなさそうにしている。とりあえず、身支度をして。あとは成り行きに任せるといった感じだ。

その父を、千丸は少しだけ見た。千丸自身、父にはこれといった感情もない。物心つく前から、晴景をはじめとする家来たちが教育をしてくれた。同じ城にいなから、部屋も別々に暮らしていた。

それが当たり前のご時世だった。

だから、何も思うことはなかった。でも、少しくらいは喜んで欲しかった。「よかったな」の一言くらいあっても、と思わないでもないが。そう思っても詮無いこと、と子供ながらに思っていた。

ともかく。この日は千丸の元服式だった。

やがて中村家の家来が一同を迎えに来た。輝種を先頭に、後ろをついてゆく。

大広間に着いた。上座には家成。

千丸は教えてもらったとおり、そのまま上座の前まで来て、正座して平伏した。真ん中で分けた前髪がぶらんとたれる。今日は子供

の証ともいえるその前髪を切り落とし、名前も変わる。

大人になるのだ。今日より自分は大人になるのだ、と胸が弾む。それから、妻を娶る。そう思うと、さらに胸が弾み、頬が赤らんだ。どうしてそうなるのか、とっさにはわからないけれど。そうなってしまった。どうにも落ち着かない。

脳裏には、しきりとお雪の顔が浮かぶのは、どうしてだろう。

輝種以下も、隅によって同じように平伏している。

空気が頬をかすめて流れてゆく、それ以外のことを感じられないほどの沈黙。家成はじつと上座から千丸を見下ろしている。やがて、こほん、という咳払いが聞こえた。

第一章「夫婦雛」その十

それから、ほとんど覚えていない。前髪を切り落とし、子供の証とおさらばして。千丸は、いや、大高輝虎は大人になったという感慨を覚えながら、家成に酒を注いでもらった。

家成はご機嫌だった。

その家来たちも、家成への忠誠心厚いのか輝虎に慶びの挨拶の言葉を送ってくれた。もちろん、晴景と十兵衛も。父も、「よかった」と言ってくれた。

それが嬉しかった。父は、自分を子として慶びの言葉と輝の一字を送ってくれたのだ。

名前に輝の一字があるのは、父輝種の輝の字を送ったのだ。そして、虎。それは家成のあだ名でもだった。

近隣の豪族や土豪たちは、家成を恐れて虎と呼んでいた。やがて家成は舅になるので、輝虎はふたりの父から名をつけてもらったということになる。

輝虎、凜々しい名前である。

家成とて馬鹿ではない。輝の一字を使うことで、輝種の面目を立たせ。そうすることで、服従することに対する不快感を和らげ不満を軽減できると踏んだのだ。それがさらなる十年二十年後につながるかもしれない、と……。

それにまた己のあだ名をつけることで、お前は私の家来なのだぞ、という示しにもなる。そう、名前そのものが隷属の証となるのだった。

もちろん、本人にそれがわかるわけもないし。教えられることもないだろう。

「よき名を付けていただき、ありがたき幸せに存じまする」

と、輝虎は素直に喜んでいた。それよりも、気になることがある。

「あの……」

と、勇気をふりしぼって、家成に問うたことがあった。なんじゃ、よい言うてみいと言われ。それでは、と。

「お姫様とはいっつ会えるのでしょうか」

と、言った。これには家成も家来たちも大爆笑だった。

——かわいいものじゃ、もう色気づきおってからに。——

誰しもそう思った。

「わはは。まあ待て、やがては毎日会えるのじゃぞ」

笑いを堪えながら家成は言った。なんとも無邪気なものだと、輝虎を見て、大高家に関しては完全に征服したことをこのとき確信した。

続く

第一章 夫婦離 頁二

第一章「夫婦離」その十一

婚礼の儀も、よく覚えていない。ただ、質素なくせに作法だけはしっかりと堅苦しい。ふたりとも、カチカチに固まっていた、それだけは覚えている。

やっと会えた、とはしゃぎたいのを堪え。輝虎は作法にのっとり、上座に座して。その横にお雪。

小さな子供がおめかしをして、並んで座っている。

だれかが言った。

「ほんに可愛らしいのう。夫婦離じゃ」

それを皮切りに、一同囃し立てる。家成もその中に混じっていた。堅苦しい作法に身をかくしながら、上座にあるふたり。

酒もまわり、みな機嫌が良い。

それを見る、一人の女性。髪に白いものが混じっているが、よく見ればそれほど老けてはいないようだ。どこかしら苦勞の影がしのばれる。

女性、お藤はお雪を眺めながら。何度も何度も。

—まだ九つというに、もうお嫁に行かされるのか。—

と、そう思った。しかも相手は主君の征服した家の嫡男ときている。

—家成様も、なんと無慈悲な。いくら一夜情けをかけただけの侍女の子であるといえ。—

そうとも思いながら、潤んだ目でなんとかお雪を見守っている。だが、ほんとうに可愛い。

花嫁衣裳に身を包み、顔を下げ気味にして、静かに喧騒の中に身をおいている。その横には、亭主となるこれまた幼い童子。

人形のようにだ。

かわいらしい。

ほんとうに、かわいらしい。匠の技でこしらえた雛人形をふたつならべたのだ、と言えば簡単にだまされそうなほど。かわいらしいお雪は、その名の通り色白で。初めて、いや生涯一度きりになる婚礼の儀に身をかくしている。それは、輝虎も同じだった。

その輝虎も、色白く田舎の小さな豪族の子にしては良い顔立ちをしている。成長すれば、さぞ美男美女の素敵な夫婦になるであろう。それを思うと、乳飲み子のころから手塩にかけて育ててきた乳母として感慨深かった。

しかし……。

と、お藤は思う。

いや、今はめでたい席である。それは後回しにしておこう。

今はただ、縁あつて結ばれたふたりを、この夫婦雛の将来に幸あらんことをと願うばかりであつた。

第一章「夫婦雛」その十二

戦、降伏、元服、婚礼と忙しい日々が過ぎ去り。早二年の月日が流れた。輝虎とお雪、晴景や十兵衛らは二つ年を重ねた。

小高い山の上にある大高城という小城の主は、幼い輝虎に代わり。先代輝種は、隠居をし出家もして、寺にこもった。

輝種の役目は、もう終わったのだ。これからは、その生涯を終えるまで念仏を唱えるだけ。

戦もあつた。野心燃え盛る家成は、飽くなき領土欲をもってその勢力図を塗り替えてゆく。それに、大高家も協力しなければならぬ。

だが、まだ幼い輝虎には戦は早すぎるので、代わりに晴景や十兵

衛がわずかばかりの手勢を引き連れ戦場を駆け巡った。

戦のたびに、若い十兵衛は見違えるほどに精悍に、逞しくなつてゆく。一軍を率いる大将としての貫禄も出てきている。それを見ながら。

「おれも早く戦にゆきたい」

と、輝虎は言い。

その度に。

「もうしばらくのご辛抱でございますよ」

と晴景はなだめるのだ、が。それも耳に入らぬと、若すぎる主はひたすら木刀を振るつた。

十兵衛はそれを見て。

「まだまだ！」

と、喝を入れる。稽古の相手をするたびに、輝虎はぼこぼこにされる。

容赦はなかった。戦に出て一働きしたいというのなら、なおさらであった。それが十兵衛なりの忠義の現れであつたし、それぞれ兄弟のように接してきた男同士なのだ。

庭での稽古中、熱くなりすぎて木刀を放り投げお互い激しく殴りあつた事もあつた。一度や二度ではない、何かのたびにそうなつてしまうことが多くなつた。だが、あまりにも体格差と経験が違いすぎていたし、なにより、十七の十兵衛と十三の輝虎（共に数え年）では無理もないことだつた。

最近また一段とその回数が多くなつた。とにかく輝虎は十兵衛に突つかかるのだ、それこそ親の敵のように挑みかかる。

だが、その都度その都度、輝虎は口から血を流し、地に伏せて悔し涙を流し、十兵衛は怒鳴つた。

「それくらいで泣くようでは、大将などつとまりませぬぞ！」

涙が頬についた土を洗い流してゆくのを感じながら起き上がり、再び挑みかかろうとすると、晴景が慌てて止めた。

よしなされ、もう十分でございます、と言つた後十兵衛を睨み。

「やりすぎだぞ」

と戒める。その度に十兵衛は、甘すぎると言いたそうに舌打ちをする。彼自身、やるというのなら、何度でも相手になってやるという気持ちでいるのだ。そうでなくてなんで稽古の相手がつとまるものか。

晴景自身も武士であり男である、野暮ったいことは言わない。だが、やはり主家来の最低限のけじめはつけていてほしい、というのが本音であった。

しかし、どうしてまた殿はそうに勘気を起こしたのか、これでは稽古というより本当に喧嘩でしかない、と気がかりだった。当の輝虎はというと、今度は地べたに座り込み、涙をひたすら溢れさせるのみであった。

そこには、負けた悔しさだけがあった。

だから、それは止まることはなく、いつまでも続いてゆくのであった。

第一章「夫婦雛」その十三

「なんともまあ」

お雪の乳母として共に大高家にやって来たお藤は、呆れたように言った。家来にぶちのめされた主の姿を見て、頭を抱えたくなくなってしまった。

この若い主は自分の立場と言うものがまるつきりわかっていないようであると、そんな印象を持たざるをえない。

いくら教養というものが行き届いていないような僻地の小豪族の家とはいえ、そこまで酷いものかと、ため息をつくことが多かった。「お姫様が心配していますよ」

その通り、お雪は最近、はらはらどきどきと輝虎を心配する日々が続いた。それを言われるたびに、輝虎はばつが悪そうに苦笑いをするだけだった。

家来の十兵衛と事あるごとに大喧嘩ばかりして、自分のことをあまりかまってくれないと、お雪はお藤にこぼしていたのだ。

「わたしはもう、きらわれてしまったのでしょいか」

九つで他家に嫁ぎ、まだ十一になったばかり。心細いと言うものではない、ただ不安で仕方なかった。

「すまん」

と言いながら鞠をつくも、腫れた頬は痛々しく。輝虎はそのことばかり考えているようだった。それがお雪には辛かった。

それに気付けない輝虎も、やはりまだ子供だった。

ちなみに、夫婦としての営みはというと……。言うまでもなく、なかった。まだふたりとも若すぎる。それでそういうことがある方が、かえっておかしいというものであった。だから、寝所も別々だった。

だが、もうそろそろ一緒に寝るくらいはいいのでは……。と言う声が侍女たちの間でささやかれ始めていた。

その為には、何としてもふたりが仲良くしなければいけなかった。「あの頃は……」

ある日の夜、お藤はお雪を寝かしつけた後、自室の布団に潜り込んで考え事をしていた。真つ暗な中、薄ぼんやりと見える天井を見ながら、ぽそつとつぶやいた。

「輝虎様も優しくかったのに。毎日お姫様と鞠で遊んでいたのに」

嫁いで間もない頃、主としての稽古や習い事の合間を縫って、よくお雪の元にやってきては、鞠について遊んでいた。

生家とはまるつきり違う他家の雰囲気になくなかったり、寂しくなったりして、よく泣くこともあった。その度に、輝虎は優しく声を掛けてお雪を慰めようとしていた。

それは夫婦と言うよりも、ふたつちがいの兄と妹という感じだった。

た。

第一章「夫婦雛」その十四

こんな事もあった。

外に出ていた輝虎が、何かを持ってやって来た。それを見せた途端。

「きやつ」

と、お雪は悲鳴を上げて泣き出してしまった。

お雪の悲鳴を聞いて、すわっ、と晴景とお藤が駆けつけてくれば、カブトムシを手に、おろおろとする輝虎がそこにいた。

「お雪、どうした。なぜ泣く、泣いているだけではわからぬではないか」

必死になって、輝虎はお雪をなだめようとしている。だが、一向に泣き止む気配がない。

ふたりの大人は、それを見てきょとんとしていた。どうやら、輝虎は獲ってきたカブトムシを見せようとしたようだった。

「殿、あの……」

仕方なく、お藤は耳元でこそつと、言っでやった。

「お姫様は虫が嫌いなのでございます……」

それを聞いて、輝虎は不思議そうにしていた。だが、女子おなこは男のように虫取りをしないし、虫を好きにもなれないものだと言っでやっったところ、ようやく言われた事がわかって。慌ててカブトムシを庭に放り投げて。

「お雪、わたしが悪かった。許してくれ。虫が嫌いとは知らなかったのだ」

と懸命に詫びた。だが、それでもお雪は泣き止まない、よほどシヨックが大きかったのだらう。それどころか。

「虫もきらいですが、輝虎様もおきらいです」

と言い出したのだ。虫を手づかみして平気でいられるなど、お雪にとつては信じられなかった、そういうものは虫と同罪であった。

「わたしがきらいになったのか。すまん、この通り許してくれ」

頭を床につけひたすら詫びるも、どうもお雪は許してくれそうになかった。ただ。

「おきらいでございます」

と言うだけだった。

「こまつた」

たまりかねて、輝虎は救いを求めるように大人たちを見る。晴景は、その様が可笑しいのか笑いをかみ殺している。お藤は、どこかに行っていた。

庭に放り投げられたカブトムシは、そ知らぬ顔してどこかへと羽ばたいていつていた。

やがてお藤は鞠を持ってきて、輝虎に渡した。

「そつだ、鞠で遊ぼう。鞠は好きであろう」

渡されるや否や、小さな両手で包み込んだ鞠をお雪に差し出す。

すると、大粒の涙をこぼす目に光が戻って、鞠をじつと眺めた後。

「もう二度と虫などお見せになりませんか」

と言いながら鞠を取ろうとする。その時、お互いの指先が触れた。

お雪の目は、泣き腫らされて真っ赤になっていた。それを見ながら、

輝虎は言った。

「神仏に誓つて、もうせぬ」

「ほんとうですか、約束ですよ」

「ああ、約束だとも」

このときになって、ようやくお雪の顔に笑顔が戻った。

いつの間にか大人は姿を消して。それに気付かず、ふたりは手まり歌をくちずさみ、無邪気に鞠をついていた。

第一章「夫婦雛」その十五

それから、輝虎と十兵衛の稽古を超えた大喧嘩はおさまることはなく。家来たちの間では、子供どうしがいがいあって、あれで家が保てるかと、いい陰口のエサになってしまつて。

いい加減、晴景も腹に据えかね。

「殿……」

と、真つ赤な頬の若い主に言つた。

雨雲が空を多い、小雨をぱらつかせる湿り気の多い日だつた。汗がべたつくのをこらえ、ふたりとも机に向かい領土の統治に関することを色々となしている時、合間を見計らつて晴景の口が開いた。「このごろのあれは、いくらなんでも……」

手加減しない十兵衛も十兵衛だが、懲りない殿も殿である、と小言をいい始める。そんな輝虎は、うんざりするように応えた。

「わかつている」

「ならばなぜあのような」

「あれは、稽古だ。稽古の相手は十兵衛を置いて他にはない。それだけのことだ」

「しかし、木刀をかなぐり捨てて相手につかみかかるなど。戦でそのような働きをする武者など、古今聞きません」

「事と次第による。太刀を失えば、そうするしかないだろう」

「ですが、相手もまた丸腰というわけではありません。いかな豪傑でも、丸腰で武器を持つものに勝つのは」

「……」

黙りこむ輝虎。そつぽを向いて、庭をじつと見る。

その時、拳が強く握り締められるのを、晴景は見逃さなかつた。

もう、喋るのも面倒くさい、という若い主を見て。まだまだ子供でおわすなあ、と内心ため息をつく。

「お姫様も心配されております」

「……」

黙したまま、その細い首が頷く。小雨の滴る庭先に、輝虎は何を思い浮かべるのか。晴景にも、子供はいる。だけれども、輝虎の年頃のころは、多少の反抗期はあれど、そこまで意固地になることはなかった。

「哀れに思し召さぬか？」

「何が」

哀れ、それがお雪のことだと察し。急に首を返し、輝虎は晴景を見据える。だが、老臣は続ける。じつと、目と目を合わせ、決して捕らえて話さない。

「考えてもみなされ。お姫様はまだ十一でござる。嫁いで二年になるとはいえ、幼き身で他家にゆき、共はお藤殿だけ」

「それがどうした」

「殿」

「なんだ、早く言え」

早く言え、と命令口調だが。輝虎の声がわずかに震えている。内心、このお人好しそうな老臣がそのように接するのは今回が初めて。それまで、どこかなめていた。

晴景はたしかに、武士にはお人好しではある、が。そこは、この乱世に生きる武士なのだ。その気になれば、輝虎など遠く及ばない人生経験を積み重ねている。

「そのお姫様のだんな様は、どのどなた様でございましょうな」

「おれだ」

「で、ござる。それがわかっておいでか」

「わかつている」

「いいえ、わかつておりませぬ」

いつになく厳しい晴景に、輝虎はやや閉口しているようだ。さきほど十兵衛にのめされ、今度は晴景の小言。握り拳につづき、奥歯を噛み締める。

構わず、小言は続けられる。

「わかつておいでなら、なぜもつとお姫様にかまってあげませぬ。毎日毎日、輝虎様はおつしゃつておいでじゃそうな。ここで頼れるのは、殿だけなのですぞ。か弱き女子の身のお藤殿に何もかもまかせつきりにして。もし、万一のことがあれば、お姫様の身は誰がお守りするのでございますか。如何？」

そこまで言わせるな、と言いたげにため息をつき。晴景はずっと、じつと若い主を見据えていた。その若い主は、齒をかちりと鳴らせた、と思つたら。声を殺し、突然涙を溢れさせた。

「わかつている、わかつている」

それから、ただ、そればかり繰り返すと。爺、と言って。何事がぼつりぼつりと語り始めた。

第一章「夫婦雛」その十六

「わかつている、わかつているのだ」

「ならばなぜ」

「爺、他言するなよ」

はらはらと涙をながす若い主が、自身にとっては大切なことを今話そうとしているのを察して。晴景は黙って頷いた。

「十兵衛、あれは」

「あれが、どうか？」

「あれは、お雪を馬鹿にしおった」

「は？」

咄嗟には何のことかわからないが、何も言わず黙って話を聞き始める晴景。その晴景に、とつとつと輝虎は語り始める。

「毎日毎日、おれを鞠遊びなどに駆り出して。あのお姫様はおれを軟弱ものにするつもりなのか、などとほざきおったわ」

「ほ、ほう」

「おれがお雪と鞠をつくのは、お雪を哀れに思つて、一緒に鞠をついているのだ。爺の言つとおり、お雪は寂しそうじゃ、それがいたたまれぬ」

「は、はあ」

「だが、十兵衛はそれがちつともわかつておらぬ。この間も、おれをぶちのめした後、鞠遊びにウツツを抜かすからだと言いやがった」
「言いやがった、と一城の主が足軽言葉など使つて、その無念さいかばかりかと思い、それと同時に、この若い主の心情が少しは理解できたような気がした。」

「十兵衛にしてみれば、お雪は仇の家の娘じゃ。それも気に食わぬのである」

一理ある。十兵衛の父、太郎左衛門は中村家との戦で討ち死にしている。十兵衛自身はお雪には大げさなほどの敵意はなくそれなりに気は使つたりするものの、その心境は複雑かもしれない。それが、輝虎にぶつけられているのかもしれない。

全ては推測でしかないが、十分ありうることもあつた。思わず、どちらも子供じゃと言いかけて、止めた。

「お雪を守るのは、おれしかおらぬ。おれが守らずに、誰が守るのだ。だから、お雪を馬鹿にして罵るものも決して許さぬ。たとえ十兵衛であろうとも……」

それから、輝虎は黙り込んだ。涙は止まらない。大粒の涙が頬を伝つて拳に落ちる。けれども、涙では無念さは洗い流せない。

輝虎の言葉を聞きいささか安心はしたものの、やはり子供だのうと、心の中でつぶやいた。そのいかにも子供らしい無邪気さは、確かに微笑ましいかもしれない。だが、もっと大切なこともある。それに気付けないのもまた、無邪気さゆえか。

気がつけば、涙のつたう輝虎の頬が紅い。やはり気恥ずかしかったらしい。

それを見て晴景は。

「殿、お姫様をお想いであれば。十兵衛に仕返しの喧嘩など仕掛け

るよりも、おそばにいてあげなされ。それがなによりも、お姫様のためござるよ」

と、さつきとはうってかわって優しく言った。その晴景の頬も、年甲斐もなく紅くなっていた。

第一章「夫婦雛」その十七

さて十兵衛である。

この若者は、暇があればいつも木刀を振り回すか馬を駆るかしている毎日を送っていて。いかにも男くさい性質の持ち主だった。それだけに、自身が武士である、という自覚も強い。戦でも、よく働く。

主のそのまた主である、中村家成から。

「戦である」

と、声がかかるたびに、わずかばかりの手勢を引き連れては槍を突き突き戦っている、のだが。

その度に。

「面白くない」

と、苦い顔をする。

中村家は、父の仇である。当初、「戦での仇は戦が終わればなし」のならいに従い、その遺恨を消そうと思ったが。

どうもそれが出来ない。

晴景はベテランだけあって、今は中村家の陪臣（家来のそのまた家来）としてよく働く。

ゆえに、晴景の気苦労は耐えない。それについて説教をすることもあった、しかし。

「わかつているのだが……」

と、苦い顔をするだけで黙り込んでしまっただけだった。仕え甲斐

のない先代のために……、という侍としての悔しさ。せめて、父を討ち取った者を討ちたかったが、それも出来なかった、という子としての哀しさ。

それらがごちゃ混ぜになって、自分でもどうして良いのかわからなかった。

そのうつぶんを、戦で晴らせば。敵の首級をいくつも挙げて、手柄も立てられたが。それは仇の家に貢献していることでもあり……。「親父、おれはどうすればよい？」

と、上の空で、空を見上げてつぶやいた。

自身馬上にあり、目の前には草原が広がる。今日もまた戦だった。命を懸けて、主のそのまた主の家の領土拡大のために働かないといけない。

向こうに見えるは、幾多もの兵たちと、その上げる土ぼこり。みな目を血走らせて、いまかいまかと突撃を待っている。

空は晴天、絶好の戦日和であった。

十兵衛は鎧兜に身を包み、右手には槍。その槍で何度その兵たちを屠って（ほふって）きたか。

「十兵衛！」

怒鳴りつける声。十兵衛と同じ馬上にある若者、氏清晴景の子、^{うじきよ・よしかげ}氏清善景の声だった。年は二十歳。^{はたち}今回のこの戦、体調を崩した年寄りの父に代わり、この善景が大将として戦に出ていた。年の若い十兵衛は副将だった。

中村家に敗れて降伏した時には、父とともに敵と戦おうとしたが。その機会はなかった。戦いらしい戦いをしたのは、十兵衛の父、太郎左衛門のみといってもいい。しかも、命を懸けて主家の名誉を守らんと、自ら討ち死にを果たしたのだ。でなければ、大高家が腑抜けのそしりを受けかねないと思ったのだ。

「ん？」

大将の怒鳴り声を聞き、とばけた返事をして。

「お、おう。おるわおるわ、おれの槍に突かれたがっている連中が」

と、語気を改め気を吐いた。

「どうした、おぬしらしくもない」

「そうかな」

「そうだぞ、さっきまで、ぼおつとしおつて。まさか怖氣ついたのではないだろうな」

「なんの。いつもの通り、この槍で一働きをするまでのことよ」

「ならいい」

と、言いながら、ごくりとつばを飲んだのは善景だった。この善景、父に似てお人好しの面相をして、その通りお人好しであり。戦働きよりも、内政の仕事に向いている温和な性格の持ち主だった。自身それをよくわかっていて、戦のたびに十兵衛を頼りにしていた。その十兵衛が、いつもと違う様子を見せて、にわかに不安になってしまったのだ。

「情けない……。――」

と、思いながらも。今回の戦で頼るのはやはり十兵衛しかいない。善景も槍を構え、十兵衛に目配せすれば。十兵衛は頷いた。敵方の人数はこちらとそう変わらない。どちらも作戦らしい作戦もなく、正面切つてのぶつかり合いになりそうだった。

「腕が鳴るわ」

と言うや否や、突然陣太鼓の響きが高らかになる。ほら貝が鳴り、空を揺るがす幾多もの叫び声がこだまして。地響きが轟く。

「来たぞ！」

「よし、我らも行くぞ――！」

真つ先に十兵衛が駆け出す。それに続く善景。これではどっちが大將かわからない。うしろからは、自軍の兵たちがわめきながら大將と副将に続く。

双方ぶつかり合う。太刀、槍の弾ける金属音が響き、それを人の喉より押し出された声が掻き消して。青い草原が血に染まる。

第一章「夫婦雛」その十八

どこまでも広がる青空。お天道様は恵みの光を地上に降り注ぎ、それを取り囲む雲たちは思い思いの姿になって、風の向くまま気の向くままの空の旅を満喫してるようで。

青空は、青空が広がる限り、どこに行っても青空を見る事ができて。お天道様も同じように見る事ができる。

「今日はまたよい日和にございますね」

障子は開け放たれて、部屋から大空を眺められる。お雪は、その空の青さに微笑んだ。輝虎はそれを見て、頷いた。

「ああ、いい日和だ」

「輝虎様」

「え？」

「いまいちど……」

と言いながら、ちいさな手で包んだ鞠を差し出した。最近、輝虎は鞠をつくのが上手くなった。さっきも、手まり歌を唄いながら、鞠をついてくれて。

「や、次はお雪の番だぞ」

「でも、いまいちど輝虎様が鞠をつかれるのをみとっとうございますもの」

「みたいのか？ そんなによかったかな」

「はい、ようございました」

「そうか」

と言いながら、鞠を受け取り、こほんと咳払いをして。再び手まり歌を口ずさんで、鞠をつく。我知らず頬を緩ませ、まんざらでもなさそうだった。

それが終わって、満面の笑みでお雪に鞠を差し出す。

「さあ、次こそお雪の番だぞ」

「はい」

お雪は鞠を受け取って、はきはきとした声で手まり歌を唄い、鞠をつく。

ひとついしだん（石段）あがりや

ひとつまりつけ

ふたつあがりや

ふたつつけ

おてんとさま（お天道様）は

それみてわらへ（笑え）

みつつあがりや

みつつつけ

よつつ　いつつ　むつつ　ななつ　やつつ　ここのつ

とう

とうあがりや

とうまりつけ

とうあがりや

そこはおじょうど（お浄土）

それ

おてんとさまが

わろうつる

おてんとさまも

つけや　つけや

まりつけや

「お粗末さまでした」

鞠をつき終えたお雪は鞠を床において、おじぎをして。輝虎は、何故か頬を赤くして、ぼおっとしていた。

第一章「夫婦雛」その十九

まりわかに
鞠若子。

いつの間にやら、輝虎は家来よりそう陰口をたたかれるようになっていた。

先の戦で、十兵衛と善影が血みどろになって戦っているときにも輝虎はお雪とともに鞠をつき遊んでいた。

いや、輝虎も家来たちやその家族とともに、戦勝祈願のお祈りをしている。何も思っていないわけではない。

なにより、輝虎時自身早く戦にゆきたいのだ。だが、まだ若すぎると留守番をさせられているのだ。

その合間、お雪のそばにいてあげたにすぎない。もとより、家来たちとて同じことをしていたではないか。

幸か不幸か、鞠若子の陰口を輝虎は知らない。知らないから、陰口なのだが。

先代のときは念仏、で今は鞠。家来にしてみれば、二代も続き、主と仰ぐものがこの体たらくでは。とため息をつくことが多い。

主とは、そういう目で見られる存在なのだ。いかに幼い身でも、しっかりして、家来を安心させなければならぬ。

幸いにも、それを心配する家来もいる。氏清親子であった。

「父上……」

と、とある晩。城下にある氏清氏の邸宅で、善景は晴景と酒を酌み交わしながら問うた。

「殿が鞠若子と言われていることですが」

「あれか」

晴景は我知らず、酌を手にしたまま顔を伏せた。善景は続けた。

「はい、そうです。今日も、他のものがそう言っておりますので、注意をしたのですが」

「ふむ」

「なんとも、苦い顔をしておりましたよ。良い子ぶりおって、と言

いたげに」

「そうであらうな」

「父上はそれについて何とも思っていないのですか」

そう言われて、晴景はしかめ面をし、酒を飲み干した。勢いあまつて、げつぷをした。

「思っておる、だが。待たねばなるまい」

「待つとは、何を待つのですか？」

「初陣じゃよ」

「……」

善景は黙り込んだ。それは、彼自身考えなかったわけではなかった。

所詮、我々は武士である。どのように人をいつくしもうが、戦でかくたる働きをしてこそ、その価値が認められるのだ、と。

それは、今までの経験からいやというほど痛感していた。

「それまで、言わせておけい」

「ですが、あのままでは、家来どもの団結力が乱れかねません。皆が殿をあなどり、まともにお下知（命令）を聞くかどうか」

「それは、殿次第じゃ。それより」

じろつと、息子を睨む晴景。目じりのしわには、今まで乱世の世で生きてきた年月が刻まれているようであった。

「お下知は、聞いてもらうものではない。聞かせるものじゃ」

善景はなにも言わない。居室の中で、風がそよいだようだった。

燭台の火が、揺らいだようだった。

第一章「夫婦雛」その二十

その鞠若子の輝虎は、今日も十兵衛を相手に木刀を振るう。

だが、今までと違うのは、決して木刀をかなぐり捨てたりしない

ことだった。

「よいですか、十兵衛に勝ちたければ……」

決して武器を捨てぬことだ、と晴景が教えたのだ。

むしろ、十兵衛に木刀を捨てさせるような気構えでゆけ、とも教えた。これが、以外に効果てきめんであった。

お互い木刀をぶつけながら。

――や……。――

と、十兵衛は異変に気付いた。輝虎は決して木刀を捨てようとしていない、ひたすら打ってくる。隙だらけでところどころにアザをつけてやったものの。

すこしあせった。

――はて、いつもなら……。――

木刀をかなぐり捨ててつかみかかってくるのが、この鞠若子の殿様は、すこしはやり方を心得たようだ、と。内心感心してもいた。

「もういいでしょう。今日はこれまで」

いつになく穏やかな物言いで、稽古が終わった。さすがに、指南役が先に木刀を捨てるわけにもいかない。

ただそれだけのことだった。それが、大きかった。

「おれは殿をあなどっていたようでござるわ」

稽古を終え、輝虎とわかれた十兵衛は、井戸端で井戸水を飲みながら同僚の善景に言った。

「あなどっていた？」

「お、いやいや。そう怪訝な顔をするでない。なに、あの鞠若子殿もすこしはやり方を心得たようでござる」

鞠若子、その言葉が十兵衛からも出た、善景を前にして。それがどういう意味か。みんな、輝虎のことをそう思っていると、思っているのだろっし。また、善景もそうだろうと。

何より、幼い頃から兄弟のように接していた十兵衛ですら、そんなことを。と思うと、心中穏やかではなかった

十兵衛は同僚が眉をひそめるのを見止めて、少しぎくつとした。

「あきれたものだ」

「なにがでござる」

「むしろ、それはおぬしがもっと早く教えねばならんことだ。おぬし、今の今まで、何を教えてきたのか」

「い、いや。それは……」

「あと二、三年もすれば初陣にゆかねばならん。その時に、初陣首を取られたら、それはだれのせいだ」

「……」

何もいえなかった。武道の指南役は、年も近く幼い頃よりともに遊んだ十兵衛に任されている。それが、最近まで稽古以前の大喧嘩をやらかしていたのだ。

まさか、本番でもそうしろというわけでもないだろうに。

「憎いか？」

咄嗟に、十兵衛はわからなかった。憎いか、とは。

「太郎左衛門殿をお討ちになった家成公が憎いかと、聞いておる。また、その家成公の娘婿になられた殿も憎いか。鞠若子など、おぬましでそう言うのか」

「よ、善景殿」

「ならば」

「どうか、その先を言うのはご勘弁ください」

「殿の首と、姫の首をはねればよい、そして、津川家の旗を立てればよい」

「……」

いよいよ、十兵衛は黙り込んだ。輝虎と雪姫の首をはね、反逆せよとは、善景も似合わず怖い事を言う。それは、自身が一番感じていた。

「それが、太郎左衛門殿のお望みであることならば」

「ちがう」

必死になって、十兵衛は声を絞り出した。この、豪気な若者がそこまでうろたえるのは、珍しいことだった。

「親父は、親父はただ殿のために……」

ぶつぶつ念仏を唱えるような喋り方になって、さすがにこのときになって、善景は十兵衛が哀れになってきた。

続く

第一章 夫婦雛 頁三

第一章「夫婦雛」その二十一

十兵衛が言葉を詰まらせ押し黙ってしまった、それを哀れそうに善景が見ているとき。どこからともなく女性の声が聞こえた。

よく聞けば、少し年の長けた女性と小さな女の子とが何か話しながらこちらに向かっているようだった。

「おや」

と、耳を澄ませば、それはお雪とお藤のふたりであつた。物陰から姿を見せ、手には籠、その籠の中には桑の実がたくさん詰めこまれていた。

お雪とお藤は善景と十兵衛を見止めて、軽く会釈をした。十兵衛はお雪を見止めて少し動揺しているようだった。

「やあ、これはお姫様にお藤殿。桑をおとりにお出かけであつたか」「はい、お腹が空きましたねとおはなしをしてたら。ならば桑をとりゆこうとおひい様が申されまして」

お雪は恥ずかしそうに籠を小脇に抱えていた。善景は微笑ましい気持ちだった。大高城のある山、大高山周辺はたくさんの桑の木がなっている。どうやらふたりはその桑の木の実をとってきたのだろう。草ののびる季節、お藤はともかくお雪はいくらか大変な思いをしたにしがいない。

葉には虫がつき、下手をすればその虫まで一緒にとりかねない。それでも桑の実を採って、虫嫌い以上に桑の実が好物なのだ。

この小さな女の子の存在が、ある意味大高家の運命を握っていると言つてもいい。それを快く思えない者もいる、時世ゆえなのだろうが、そのせいでひとりの小さな女の子がとばかりを食らっているのだ。

それは、お雪にはわからないのだけれども。少なくとも善景は、

お雪には、嫁いでよかったと言えるような仕合せな生活を営んでほしかった。

「あの……」

と、お雪は善景と十兵衛を見て、籠を差し出した。

「家中のみなさまにも、おわけしようとおもって……。おふたりも探しておりまして。どうぞ」

小さな声で、ぼそつと言った。それを見て善景は微笑んで、それではいただきます、と言い。ひとつつまんで口にした。家中のものにもわけようという心配り。

お雪はお雪なりに、みんなと仲良くしようとしている。

十兵衛は、少しの間黙っていて、お藤とお雪を少し困らせてしまった。なにやらふたりを見て、おろおろしているようだ。どうしてそのような、とお藤はやや困り。お雪はどうしてよいのかわからない。

そう思いつつも、お雪は十兵衛にも籠を差し出した。

「十兵衛殿も、どうぞ」

この若者は夫をぼこぼこにしている上に、陰口までたたいていた。ぼこぼこにするのはともかく、陰口や、さっきまで善景に言われていたことは、わからない。

だけど、輝虎と兄弟のように接してきたという。なら、それはお雪にとっても兄のような存在だった。

「これは、かたじけない」

といって、十兵衛は桑の実を取り口に入れる。口の中に甘酸っぱさがひろがる。籠を持つ手も小さい、それもそうだ、まだ十一の幼さだ。

その少女に対して、どういう気持ちを抱いていたかと思うと、自分が恥ずかしくなってくる。

「美味しい、いや、おいしゅうござるよ」

と、つとめて笑顔で言った。そうすれば、お雪も笑顔で返す。その時、心の中で雪解けでもあったかのように、なにやら軽やかな気

持ちになった。

第一章「夫婦雛」その二十二

それから、輝虎と十兵衛の稽古を超えた大喧嘩はなりをひそめ。ようやくにして、「普通の稽古」がとりおこなわれるようになった。氏清父子もほつと胸をなでおろせた。が、いまだ家来たちの間には、幼い主に対する不信感がくすぶっていた。厳しいことだが、お雪が一度や二度桑の身をくばったところで、行き先の不安が解消されるわけではなく。

例の「鞠若子」という陰口も、十兵衛が言わなくなったただけで。他の者たちは、ことあるごとに。あの「鞠若子様」は……、とひそひそ話に興じている。

それは男衆のみならず、女中や侍女たちでさえ、時折口にするほどに広まっていた。

お藤もそれは知っていたが、他所の家では迂闊に注意も出来ないせめて、自分だけでなく、年寄りでもいいから誰か男の家来をつけてほしかった。と思わずにはいらなかった。

その度に、お雪の母、おさなを思い出さずにはいらなかった。

侍女として中村家に仕えていたある日、主の家成の夜伽をつとめた。家成の、男としての欲求をみたすこともまた、侍女の役割でもあった。

そして、お雪を生んだ。だが、それが彼女の命を縮めることになってしまふとは。

おさなは、家成の激しい愛撫に耐えられず「堪忍」と我知らず叫んでしまった。生まれつき体も弱く、野心燃え盛る武勇の士に身を委ねるにはあまりにも華奢すぎた。

これでは家成にしても可愛がり甲斐もなく、あっさりと捨てられ。

失意のうちに暇をもらい（侍女をやめること）、生家に帰った。

帰ってしばらく、子を見ごもっている事がわかった。あの一度きりの夜伽で、子種を授かっていたのだ。

やがて、お雪を生んだ。しかし、産後の肥立ちが悪く、間もなく息を引き取った。享年、十八であったという。

その、生まれつきの体の弱さのために、主に捨てられ、その上産んだ子の顔もろくに見ずに若くして亡くなろうとは。同じ侍女の出としてお藤は哀れに思えて仕方なかった。

そのおさなの子、お雪は、家成の子ということで。中村家で育てられることになったのだが……、それは家成がおさなとその娘を哀れに思ったからでなく。

お雪を政略に使う魂胆で、引き取ったのだ。乳母は、お藤が任せられた。お藤は少女時代から、家成の先代家時に仕えたベテランの侍女でもあった。少し年も長けていたが、母乳も出た。だが、不思議と言うものはあるもので。お藤は今まで子をなしていない。

先代家時の夜伽を何度かつとめることもあったが、なぜか子は出来なかった。

それだけに、お雪を我が子のようにいつくしみ、大切に育て上げた。鞠を教えたのも、お藤だった。

嬉しそうに鞠をつくお雪の笑顔を見るたびに、おさなには申し訳ないが、こうしてお雪を育てられることを天に感謝したものだ。だが、父親である家成はお雪に積極的に会おうとはせず。正室や側室の生んだ子ばかりかまっていた。

可愛げのない侍女の産み落とした子などに、興味はないようで。

そのため、お雪はお藤がいなければ、ほとんどひとりぼっちだった。そのお雪が、家成の征服した小さな家の幼い主の嫁になると聞いたときは。

「なんと無慈悲な」

と思わずにはいられなかった。嫁にやるのなら、同等の家にか、せめて中村家の信頼する家来の誰かの嫁として嫁がせて欲しかった。

それが、辺境の小豪族の家に、とは。しかもまだ九つの幼さで。

「捨てられた」

と思った。おさなに続き、このお雪も捨てられた。捨て駒として、いいように利用されたのだ。もし、その大高家という小豪族の家が反乱でも起こせば、まず間違いなくお雪は殺される。

そういう危険性も考えられないでもないだろうに、男の家来をつけなかった。さすがに、自分ひとりでは、万が一のときにどうしようもない。己だけが死ぬのはかまわない、だが、我が子のようにいつくしみ育てたお雪が殺されるなど、考えただけでも気が狂いそうだった。それを決めたのは、水より濃いはずの血でつながる父親の家成だった。

だから、主に対し、「無慈悲」と思ったのだ。

それは結果的には杞憂に終わりそうだけれども。まだ「終わりそうだ」という域を出たわけではない。

まだお雪も幼ければ、夫の輝虎も幼くまだ完全に大高家を掌握しきれていなかった。氏清父子や最近仲直りした十兵衛らが良くはしてくれるものの、これからの不確定要素はあまりにも多かった。

お藤は思わず天を見上げ、お雪の母、おさなに。

「どうか、その空の上から、おひいさまを見守って……」

と、言わずにはおけなかった。

第一章「夫婦雛」その二十三

そんなお藤の願いも虚しく、お雪の夜泣きはなかなかおさまることはなかった。今のところ、泣き声はしない。夜泣きのたびに、お雪の部屋に慌ててかけつけ、寝かしつけたものだが。

さて、今夜はどうであろうか。虫の音を子守唄代わりに、お藤はお雪の身を案じていた。

せめて同じ部屋で寝られればいいのだが、それもそうそう出来ない。お雪も十を越した。そろそろ自分ひとりで寝られるようになってもらわないと。

と、それぞれ別室で夜を過ごしていた。もちろん、お藤もなにも思わないでもない。やはり一緒に寝てあげたい。

布団を並べて、おとぎ話を聞かせてあげたり、子守唄を唄ってあげたりしてあげたい。

しかし、それではいつまでたつてもひとりで寝る事ができない。

やがては、夫輝虎と寝なければならぬが。その輝虎が戦にゆけば、ひとりで寝なければならぬのだ。

だから、今のうちからひとりで寝られるようになってもらわないと。

そう思っているうちに、疲れから睡魔に襲われた。お藤ももう若くはない。睡魔に襲われれば、抗うこともできずそのまま眠りについてしまった。

夢の中で、とろんとした目をするお雪に子守唄を唄ってあげていた。

同じ時刻、輝虎はなぜか寝付けなかった。

変に目が冴えて、横になることすらおっくうだった。今日の十兵衛との稽古で、ようやく一本がとれそうだったのに、とれなかった。それがやけに悔しくて、眠ることを妨げてしまつて。

小手を打たれた右手が今もじんじんする。よく見れば、まだ赤みがかっている。

「ええい、もうやめた」

眠れないのに、無理に眠ることもないと。城内をほっつき歩く。ほっつき歩いて、どうするとうわけでもないが、落ち着かないのであてどなく城の中をさまよつた。

最初こそ暗くて怖かったが、たんだんと暗闇に目が慣れてきて。うすばんやりとだが、廊下が見える。闇の中には、なにもなく、このまま進めば闇に飲み込まれそうだった。

城中にある家来たちは、みな寢息を立てて眠っている。城全体が眠っているみたいだ。起きているのは、城門にいる見張り番だけだろう。

足の裏が、床板をすべり。その感触を味わいながら、この、暗闇に包まれた小城が自分のものなのだと。今さらのように思った。

小さな城だ、小さな輝虎でもそれほど時間をかけずに簡単に一回りは出来る。最後に来たのが、お雪や侍女たち女奉公人のいる奥の間であった。奥の間といっても、大きな名家のように大奥などたいそうなものなどなく。堅いしきたりもないので、輝虎はもちろん、晴景や十兵衛らも自由に出入りできるし、女たちと話も出来る。

それを思うと、なんと小さな我が家であることが、と思った。

そこも、眠っていた。

そろそろ、自分のしたことに飽きてきて、自室に戻ろうかと思ったとき。何かが聞こえた。

それは、すすり泣きの声であった。誰かが、泣いているようだ。誰だ、と思いながら聞き耳を立てていると、それはあまりにも聴きなれた声だった。それは、お雪であった。

「お雪……」

と、足をしのばせお雪の部屋の前まで来れば。やはり、そこからすすり泣く声がする。そつと、ふすまを少し開ければ。布団に包まり、向こうを向いてすすり泣くお雪の姿があった。

「お雪、おい、お雪」

と、小さな声で呼んでみた。だが、気付かない。仕方ないと思い、そつとふすまを開けて部屋に入り、そつとふすまを閉じた。そこでようやく、お雪はこの異変に気付き、輝虎を見止めた。

「あ……」

と、声を出そうとしたら。「しー」と、輝虎は人差し指を唇の前で立てる仕草をして、しゃがみこんで。

「泣いているのか」

といった。布団にくるまるお雪の目は涙で潤んで、頬には涙のつ

たつたあとがあつた。輝虎の言葉に、お雪は無言で頷いた。

「いつも泣いているな。夜が怖いのか？」

「いいえ」

「ではどうして、そのように泣くのだ」

「わかりません。ふと、涙があふれてどうにもとまらなくなります」

「もう、寝よ。寝れば泣きやめる」

輝虎は何と言っていいかわからず、寝よと言って立ち上がろうとしたが。

「いけないで」

と、お雪が布団から手を伸ばし、袖をつかんだ。

第一章「夫婦雛」その二十四

「お雪、そなた」

「いけないください。どうか、ここにいて……」

「聞き分けのないことを申すでない。寝よと言ったら、寝ぬか」

「ならば、一緒に寝てくださいませ」

「えっ……」

さすがに、啞然としてお雪を見やった。うすぼんやりと、暗い部屋の中、その目だけは輝いていた。一緒に、涙も輝いていた。

「さびしゅうございます。お藤もわたしをひとりにして、一緒に寝てくれません。輝虎様も、まだ一緒にねてくれないではないですか。みんな、本当はわたしのことがおきらいなのですか？」

一言一言話すたびに、涙のつぶが溢れ落ち、頬をつたう。今までたまっていたものが、涙とともに溢れ出ているようだった。

「わたしは、みんなにきらわれるようなことをしてしまったのですか？ 家中の方々は、みなわたしをきらっているようです。どうして？ どうして、わたしはきらわれているのですか？ わたしは、

いないほうがいいのですか……？」

お雪に涙を流させる、不思議な気持ち。言葉では上手く話す事ができなかった。

大高家に嫁いで早二年と半が過ぎようとしている。それまで、周囲の大人たちは自分をどのように見ていたのだろう。お藤をはじめとする大人たちの心を知らず知らずのうちに感じ取って、それが胸の中でうずくまっていたようだが。

まだ幼い身でそれがわかるわけもない。

輝虎も、まだわからない。

ただ、ふたりがわかちあえる事があるとすれば。共に鞠をつく事だった。その時だけ、大人たちから解放されて。お雪と輝虎はそのまま、子供になれて、気持ちを共有できる。それが、お雪に涙を流させる一因でもあるのだが。

もちろん、まだそのことにも気付けない。いずれ輝虎と一緒に寝ることだって、ただお藤が添い寝するのはわけがちがう。まだ早すぎるというのが理由だが、どうしてもまだ早いのがわかっていてわけではなく……。

「なら、おれと一緒に寝れば。寝るか」

「はい、寝ます」

「そうか……」

心なしが、輝虎の頬が紅い。白い寝巻きの襟首からみえる白い肌が、そうさせていた。気のせいかな、胸元は嫁いだときよりもふくらみが増しているようにも思えた。

それになるべく気にしないように、そっと布団の中に入ると。お雪がしがみついていた。寝巻きの胸元あたりが、その涙で濡れたように、少し湿り気を覚えた。

しがみついて、お雪は、輝虎が以前よりも大きく感じられていた。どうしてもいいかわからず、輝虎はお雪の肩に手を触れた。細くて、少しでも力を入れればそのまま折れそうだった。ついでに、鼻をなでてゆくにおい。

それを感じたとき、まどろみも感じて。
やがては、ふたり共に布団の中で寝息を立てて眠っていた。

第一章「夫婦雛」その二十五

「ひえっ」

という、朝の第一声はお藤のものだった。

あるうことか、自分の知らぬ間に輝虎とお雪が一緒に、しかも同じ布団の中で寝ていたのだ。

「と、殿。これは」

お藤の狼狽する声で目を覚ましたふたりは、寝ぼけまなこをこすりながら半身だけ起こした。お藤の声を聞き、侍女たちも続々とやってくる。その場に立ち尽くし、呆然とする。

お雪はどうしていいのかわからず、おろおろしながら言い訳を考えていた。だが、輝虎は動じない。今こそ、爺に言われたように、お雪を守るときと。毅然とした態度をとって言った。

「見たままだ。お雪と一緒に寝た」

「そ、それはわかります。し、しかしまだ早いのでは」

「おれとお雪は夫婦めおとだぞ。夫婦が一緒に寝て何がいけない」

「だから、早すぎると……」

「何が早いのだ」

「そ、それは……」

早いと言う理由を詳しく言えず、あわわわ、と口ごもりながら周りの侍女を見回した。侍女たちは目を点にして、事の成り行きを見守っていたが、輝虎優勢とわかると、皆くすくすと笑い出す。

この事態が、可笑しいらしい。

内心、軟弱と思われた鞠若子のこの殿様を頂き、これからやっていけるのだろうか。と不安に思うこともあった、が。この毅然とし

た態度を見て、それがかわりつつあるようだった。

皮肉にも、鞠若子呼ばわりされることを心配していたお藤がそのことに気付けなかった。

「もうよろしいのでは……」

「そうです。殿の言われるとおり、おふたりは夫婦ですし」

と、ふたりをかばう。お藤も、今まで輝虎のことを鞠若子と言っていた侍女たちがそう言うことに内心驚きながら。それに従うしかないかと思い始めた頃。

「お藤、ごめんなさい」

と、お雪が言った。布団から出て、床に手について謝っていた。

「わたしが、わがままを言って輝虎様と一緒に寝てもらったのです。悪いのはわたしなのです」

「お、おひい様……」

「お藤の言うとおり、これからひとりで寝ますから。それで許してもらえますか？」

というお雪に、侍女たちは目を見合わせて、ほほうと頷いていた。つきり、輝虎が夜這いをかけたものと思っていたのに。

お雪はお雪で、侍女たちにさとされて少し困った顔をしたお藤に悪いと思ったのかもしれない。そばで、輝虎が少し残念そうな顔をしていたのは気付けなかったが……。

こうして、お雪の言葉が最終的に通って。このちよつとした「事件」は、侍女たちの間で語り継がれることとなった。

それと同時に、輝虎とお雪の行く末についての話題も語られることとなった。正直、このふたりこれからどうなるんだろうと、ある意味家の行く末よりも気になっていた。

まず三人以上の人数（といっても、大高家の侍女はそれほど多くはないのだが）が集まれば、必ず、輝虎とお雪のことが話題になるのであった。

第一章「夫婦雛」その二十六

戦。

中村家よりの使者が。

「戦があるゆえ、準備を整え出陣するように」

と、声も頭も高々と輝虎をはじめとする大高家の面々に告げた。

使者は次の中村家に属する家へと急ぎ馬を走らせる。

「相変わらず、威張りくさりおって」

と、十兵衛はこぼしながらも急いで鎧兜に身を包む。氏清父子をはじめとする家来たちも同じように鎧兜に身を包み。武装した侍たちが大高城の城門前に集まった。

その数、ざっと二百五十。

はつきりいつて、小勢である。しかし、小豪族である大高家が出せる人数はそれがせいぜいであった。

しかも、武具もまたぼろといつていいほど、粗末で。十兵衛や晴景らの数騎の馬もやせ馬で。

輝虎は、幼い日にみた中村家の軍勢の華麗さを思い出すたび。己の家の小ささを思わずにはいられない。これでは、負けて当然であった。

――どうしておれはこんな小さな家に生まれたんだろう。――

と、思うこともたびたびある。でも、だからお雪とめぐり合えたのだけでも。

「殿、こたびもまた、お留守番の方をたのみますぞ」

と晴景。顔にしわの目立つ年齢だが、ベテランらしい威厳と強さを持ち合わせていた。強さといっても槍働きだけではない、領土の統治や兵を率いての戦をし。長年先代輝種を支え十兵衛の父太郎左衛門と共にこの大高家を命がけで守ってきたのだ。

それはこれから変わらない。今、戦にゆくために鎧兜に身を包むその姿は。どこか輝いて見えた。

「おれも早く戦にゆきたい」

「もうしばらくのご辛抱でござるよ」

「あとのくらいだ」

「さて、時が来れば自ずとゆくことになりましょう」

「時が来れば、か……」

と、少し黙ったとき。自分を見る視線に気付いた、その目は不安げに輝虎を見ていた。

鞠若子様が戦に出たところで、どのくらいの働きをすることやら……。と、いささか主に対して心細さがあるようだ。

中村家にこき使われ、その戦場で死ぬかもしれないという不安がありその上。女と鞠をつく軟弱者が主、という心細い気持がないまぜになっているようだ。それを不意に感じ取ってしまった。

輝虎はため息をついた。実際、自分が戦でどのくらいの働きが出るのかはわからないし。家来の抱える不安をどう解消すれば良いのかもわからない。やはり、戦しかないのだろうかと思った。

主がため息をつくのを見て、晴景と善景はどうしたのかとやや戸惑った。しかし、十兵衛はちがった。

「殿、それがしはその時が楽しみでござるぞ」

と、大声で言ったかと思えば後ろを振り向き、後に控える侍たちに向かって。

「なあ、おのおの方もそうでござろう。我が殿の働きをはようみたいであろう。なにせこの十兵衛が指南したのじゃ。ゆくゆくはおれと首数争いをするのは必定ぞ！」

と吼えたかった。これには氏清父子も目を丸くしていた、他の連中も同じように目を丸くしていた。

この十兵衛。最近まで個人的感情から輝虎とぎくしゃくしていた。だが、同僚である善景の言葉と、採った桑の実を配る雪姫の心配りに心を打たれ、それまでの己を恥じた。

討ち死にした父の想いを受け継ぎ、彼もまた使命感を感じていた。なにより、輝虎は主である以上に、幼い頃より一緒に遊んだ「友垣」

であつたし弟のようなものでもあつた。それを忘れかけていたが、それだけに彼は彼なりに、その償いと輝虎を励まそうと必死だった。どこか不器用だが、いざとなつたら剛直で頼りになれる頼もしさがある。

「十兵衛……」

輝虎はその名を口にして、吼えたけた若武者を見る。その肢体から、いやというほどの男のにおいを感じた。すると。

「そういうおのれこそ、おれが戦に行く前に討ち死になどするでないぞ。おのれがいなくなれば、誰と首数争いをすればよい？ 他に誰がおれの相手がつとまるのだ」

と、突っ込んだ。それを聞き十兵衛は笑った。

「なんの。それがしほどのものがむざむざと討ち死になどしましうや。こたびもまた、この槍で一働きをして、相手に目にもの見せてくれましようぞ。なあ、善景どの」

と、ぽんと肩に手を置かれた善景はおどろきやあつて、おうよとなるべく強い口調で応え。隣で少し呆れ顔で見る父の視線をなるべく意識ないようにしていた。

「おのおの方もおなじでござろう。武士として、大高家ここにありと、敵味方に知らしめようぞ」

ふたたび、少し前まで一緒に陰口を叩いていたものたちに、あらん限りの大声でどなった。輝虎と十兵衛のやり取りに気合の一声、それは不安に駆られるばかりで何かを忘れかけていたものたちを奮い起こしたようだった。もちろん、輝虎も。

「そうだ。武士として、存分に戦ってくるがよい。その時になれば、おれも武士として戦う。おぬしらと共に戦う。十兵衛などに手柄を独り占めさなどさせぬぞ」

と、言った。それは、皆が陰で鞠若子とよばわっている軟弱な若殿ではない。一人の武士としての、輝虎がそこにいた。拳を握り締め、目を真っ直ぐに、城門にある二百五十の武士に向けている。

すると、晴景に善景、他の家来たちも次々と声を張り上げた。した。

我も武士なり、何のために槍を引つさげ刀が腰にさげておるのか、我らの武勇をみせつけてやろう、そして、初陣をお待ちしております、という声。

陰口を叩いていたものたちもまた現金なものだが、こうした主の一声があるとなしでは、従う家来たちの気合の入れようも違ってくるようだ。

十兵衛の単純なほどの剛直さがきつかけとなって、みんなをひとつにした。それは、声を張り上げさせる若い主がいたからこそだった。

この瞬間。もう輝虎は、鞠若子ではなくなった。まだ十三の若さで、家を背負わねばならない重圧をひしひしと感じながらも、潰れることは許されない。

そうしなければ、この城一つも、お雪も、守れない。

出陣のほら貝がなる。それを背に、戦場に向かうものたち。

それを見送りながら、輝虎はまだ見ぬ戦場に思いをはせていた。

第一章「夫婦雛」その二十七

それから、さらに四年の月日が流れて。

輝虎とお雪が結ばれて、六年が経って。その間、大高山周辺の色が緑やら紅色やら、白くに染まって。そういった色の移り変わりと共に、輝虎も幼い主でなくなってゆき。お雪も、小さなおひい様ではなくなっていった。

ふたりとも、見違えるほどに大きくなっていった。

ついでに言うと、お雪は今ではちゃんとひとりで寝られるようになって。お藤を安心させた。

それはそれとして、耳をすませば、庭で木刀の叩き合う音がする。輝虎と十兵衛の稽古だった。

かなり激しく打ち合っているらしい、怒号と共に木刀の音は庭中に響き渡り。稽古の激しさを物語っていた。

それが終わったかと思うと、今度は馬のいななきの音がして。蹄の音も高らかに、大高山を駆け下ってゆく。

「殿、それでは置いてけぼりを食らってしまいますぞ」

「ぬかせ！」

と、大声が上がる。輝虎と十兵衛であつた。並んで馬を駆って併走しているが、この競争、キャリアで勝る十兵衛がやや有利なようであつた。

あぜ道をはさんでいる、日差しを妨げ影を落とすつつそうと生い茂る木々から、槍のように突き立てられた一筋の木漏れ日が向こうまで幾重にも続いて落ちている。主を乗せた馬は、木漏れ日を蹴破るようになしてその中を突っ切る。

ふたりの左手は手綱を握り、右手には木の棒がある。輝虎は右手を少し上げて、木の棒をやや掲げ。

「その時、槍でお前の背中を突いても先頭に立ってやる！」

と、まくしたてれば。十兵衛はにっこり笑う。

「あつはははは。どうぞ、その意気でござる」

「茶化すな、おれは本気だ」

「おお怖や。ならそれがしも、本気でお相手つかまつろうぞ」

「望むところ！」

と言いながら、輝虎も笑っていた。風を切り、頬をなでる風の感触がくすぐつたい。

光が見える、ふたりはその光の飛び込もうとする。あぜ道をはさむ木々が途切れ、陽光が一気に顔をなでれば、汗がにじむ。それ以上、風を切る。

馬はいななき、地を蹴り走る。

下の里を抜けて、里をふたつに割る川原にたどりつけば、こーん、こーん、と何かのぶつかる音。風を切る音。

男どもの怒号。

そのころお雪は、自室のふすまを開けて、頭の白いものの増えゆくお藤や連れの侍女と共に、お菓子に舌鼓を打つ。お天道様は恵みの光を部屋に注ぎ込み、恵みを受けた女たちは明るく笑いあっている。

そのお雪の手には、鞠があつた。その鞠は、以前にもまして小さくなっていた。

第一章「夫婦雛」その二十八

お雪は鞠を持ってふと立ち上がり、城下を見下ろした。

部屋のふすまは開け放たれ、陽の光が部屋の注ぎこまれて。そよ風が頬をなで、長く伸ばした髪を揺らす。

「いつ見ても、かわいらしい」と、お雪は言った。

緑に彩られた平野に「生えて」いるみたいに、こんもりと小山が突き出し。その間に、川が山をよけて曲がりくねっている。

その周りを囲むように、田畑が広がり。小山の斜面にそって、まるで小山に張り付いているような田畑もあつた。その中にちらばる、下の里の家々。

日の光を注がれて、田畑や山が緑色に光っている。

大高城のある、大高郷で一番高い大高山から。その景色が一望できた。

お雪はそれを「かわいらしい」と思っていた。一望するたび、のどかな風土がこの大高郷から匂いだすのを感じ、心を優しく撫でくれる。それが、「かわいらしく」感じられる。

温暖な気候に肥沃な大地に恵まれて、郷は平和だった。その領主である大高家にしてみれば、そのおかげで無理に他郷に押し入り、戦を起こす必要も理由もないのだから。大高家より先代の輝種のよ

うな人物が出るのも、頷ける話だった。

それを、父が侵攻した。だから、こうして今ここにいるのだが。それはお雪に話されることはないだろう。

それはそれとして。

一人侍女が立ち上がり、お雪の横に来て。

「今、殿はどのあたりでしょうか」

と言った。

「えっ」

「いましがた、十兵衛殿とともに馬を責めて（馬を駆って）ゆかれましたが。ここから見えますでしょうか」

「さ、さあ。わかりません。あまりにも、なにかもが小さすぎて

……」

きよろきよろと、鞆を手の中できろきろと転がしながら輝虎の姿を求めるお雪に、侍女のお凜おりんはくすつと笑った。

輝虎とお雪のことは、侍女たちの間では、お喋りの中心的話題であつた。いつのころも、どこでも、女性にとって男女の仲というのは永遠に興味の対象であり、何よりも強く惹かれるもののようにだ。お凜はお雪よりも六つ年上の二十一（数え年）で、最近大高家に仕えてだした新人の侍女だった。

「馬鹿十兵衛めが、殿に無礼をせねばよいのですが」

と言った後、「あつ」と口をつぐんだ。が、後の祭りのようだった。

「これ、いくら幼馴染でも言いすぎですよ」

と、正座で改まるお藤の一喝の声。お凜は愛嬌のある顔で振り向き舌を出してから、「すいません」と頭を下げた。お藤のそばの同僚の侍女は笑いをかみ殺して、お雪はきよんとしていた。

「いつまでもお転婆では困ります」

「はい」

「殿方を、しかも家中きつての勇将である十兵衛殿を、馬鹿よばわりなど」

「でも、昔はよく遊んだ仲でございますもの、お互い馬鹿と言いがいながら。十兵衛『殿』はその昔、わたしに剣の稽古で負けて大泣きに泣いたころもございますし……」

と、幼馴染の十兵衛との昔話を披露する。剣の稽古までしていたそうだが。それは稽古というよりも、チャンバラ遊びに近いものがあった、というよりそれそのものだが。お凜にとっては、今でも剣の稽古と、心の中に留まっていた。ふと、脳裏に泣き喚く子供の頃の十兵衛の面影が浮かび上がる。

が、お藤がそんなことを知るわけもなく。

「これ！」

と、ぴしゃりと言った。またもお凜は、今後はさすがにぎくつとして、さっきよりも深く頭を下げた。他の者は、ますます笑いをかみ殺すのに必死だ。

お雪も、くすくすと笑って。これ以上大きな声で笑わないようにするのが大変そうだった。

いつものことながら、このお凜の話すことは面白いし、その振る舞いもまた面白い。明るい性格は誰からも好かれて（お藤には説教の対象となったりするが）、どこかおとなしすぎる自分とは大違いだ。うらやましい気持ちと一緒に、内心姉のようにも慕ってもいた。なにより、頼もしい。

「何か困ったことがありましたら、どんどんこのお凜にお申し付けくだされませ。お力になります」

と、おじぎをしながらも、凜とした声で言ってくれたこともある。困ったこと、ではないが、最近お凜に話したい事が出来て。それをいつどこで話そうか。気がつけば、そんなことを考えてもいた。

陽の光を受けて、きらきらと光る川面に手を突っ込んで。手で水をくみ上げ、輝虎はごくごくと喉に押しがなす。

川の水の冷たさが、喉を潤し通り抜け胃袋に、きーんと響く。

「かぁっ」

と、手で口元をぬぐいながら声を上げる。

「稽古の後の一飲みは格別だなあ」

かがめていた腰を上げ、腕を伸ばし背伸びをする。

そばで十兵衛が、自分の馬と輝虎の馬の手綱を取って。もう片方の手には、木の棒を二本。

「さて、殿。そろそろ帰りましょうか」

「え、もう帰るのか。まだ陽は高いぞ」

「いいえ、帰るのです。稽古は終わりました、次は晴景殿とのお役目もございましょう」

「ふーむ、爺とかぁ。つまらんなあ」

と、空を見上げる。白い雲が、空を気持ちよさそうに泳いでいる。あの雲に乗れば、どこへでも行けそうな気がした。

雲には乗れないが、馬がある。その馬で、駆け回りたい気持ちがまだ強く残っていた。

「爺とかぁ、ではありませんぞ。それが殿のお勤めでござるのに」
「まあ、そうだがな」

苦笑し、手綱と木の棒を受け取り。馬に乗る。

十兵衛は、輝虎に同情するように笑った。気持ちはわかる。部屋に閉じこもっての内政の仕事など、かつたるいものだ。

せっかくの馬もある。その馬で、駆け回ることの楽しさを味わったら、やみつきになる。今まで行けなかった遠いところも、馬があればすぐに行ける。

馬と共に全身で風を切り、道を駆け抜ける爽快感は格別だ。男児に生まれれば、その爽快感にやみつきになるのは、当然のことである。それなのに、部屋に閉じこもっての仕事とは。本当にかつたるいものだ。

同じ男に生まれていながら、晴景にはそれがわからんのか、とさえ難癖をつけたくなってしまう。

まあようは、外で遊びただけなのだが。

ふたりの『やんちゃ坊主』は、次は負けぬと言いながら馬を並べてお城へと帰る。

小高い大高山のてっぺんに、ぽつんと建てられた小さなお城へと。その道中、ふと、輝虎は思った。

―お雪は、今、何をしているのかな？―

今その城の中にいるお雪を思うと、何故か空を見上げたくなくなってしまつて、大きな白い雲を瞳に映し出していた。

第一章「夫婦雛」その三十

いつのころからだろうか。

ふたりの体が大きくなるにつれ、今までの距離をあけてしまうようになつたのは。

鞠をつく手が大きくなるにつれ、鞠を触れることも少なくなつてゆき。

気がつけば、つかれるよりも、その手に抱かれることの方が多くなつていった。

中村家から大高家に嫁いだから、ずっとその鞠はお雪のそばにあった。

父が、「持ってゆくがよからう」とくれた鞠だった。これが、唯一の、父とのつながりだった。

もう、ところどころにほつれが出て、なおすことも出来ない。それをお雪は優しく包み込むように胸に抱いて。

鞠をつくときは、別の新しい鞠を使うが。実家から持ってきた鞠はずっと離さずに。

いつもそばに置いて、腕に抱いて。

今もまた、そうして自室にとじこもっていた。お藤に、「誰も近づけぬように」と頼んで。

「どうしたのかしら？」

お凜が、仲間の侍女とともにお雪の様子をうかがう。ふすまも障子も締め切り、何か一人で悩んでいるようだ。

さきほど、輝虎と会ったはずだ。その輝虎と何かあったのだろうか。

ただ、様子がおかしかった。顔を真っ赤にして、部屋に飛び込んだのだから。

「ははあ。――」

と、お凜は何かに気付いたようだが。なんにも言わずに部屋を後にした。

ここは、余計な茶々を入れないほうがよさそうだから。

夕陽が落ちて、空が茜色に染まる。その茜色が、障子紙を通り抜け、お雪の顔も茜色に染めようとする。

だけど、お雪の顔はもっと、紅かった。

輝虎は輝虎で、腕を組み、これまた自室に閉じこもり。なにやら考え事をしているようであった。

さきほど、お雪と会った。お雪に会いに行こうと、奥へと行く途中。お雪とばったりとでくわしたのだ。

すると。

「あっ……」

と言うや否や、お雪は脱兎のごとく輝虎から逃げ出したのだ。

声を掛ける間もなかった。

その後姿を見送り、右手を少し上げて、何故か輝虎自身も足を止めてしまった。まるで床に根っこでもはっているかのようだった。

「一体どうしたというんだ」

逃げのお雪におどろいた、それ以上に、それを止められなかった。逃げ出す直前、顔が真っ赤になっていたのと思うと。

頬がほのかに火照りだしていた。

続
く

第一章 夫婦雛 頁四

第一章「夫婦雛」その三十一

どうしてあんなことを。

そればかり思っていた。

あるうことか、亭主から逃げ出してしまったのだ。自分から会いに行こうとしながら。

莫迦、莫迦莫迦莫迦。

と、自分を責めたてる。だけど、胸のつかえは取れない。

―輝虎様は、どうおもわれたかしら……。―

自分から逃げ出した女房を。

それより、どうしてこうもぎこちなくなってしまったんだろう。小さいころ、一緒に鞠について遊んでいたときは、そんなことなどなかったのに。

あのころから、一緒に寝てお藤を驚かせてしまったところから、少しずつ少しずつ、お互いの距離がひらいていった。

それに気付けなかった。今や、それが日常になってしまっていた。あの時、輝虎と一緒に寝てくださいませ、とせがんだけれど。今、同じことが言えるのだろうか。

―とてもとても、そんなこと……。―

言えない。

ふと、庭で木刀を振るう輝虎の姿を思い浮かべた。

ずっと前、輝虎に会いにゆくと、自分の亭主は庭で木刀を振るっていた。

それを少し離れて見ていた。

額から汗を流し、引き締まった腕は木刀を振り上げ振り下ろす。なにより、その横顔は、一緒に鞠をついて遊んだ輝虎ではなく。

ひとりの男になりつつある輝虎の横顔があった。

―そうだ、あれから……。―
胸が、きゅんと締め付けられるような思いがしたのを、今でもはっきりと覚えている。

素振りを終えると、その男の横顔を向け。

「やあ、来てたのか」

と言った。自分が来たのにも気付かないほど、夢中になって素振りをしていたようだった。

来てくれて嬉しかったのだろう、顔に満面の笑みを浮かべていた。それからどのくらい経ったのか。

自分でもわからない胸のつかえ。それをつくった、木刀を振るう輝虎の姿。その横顔。

日に日にそれが大きくなっていった、それこそ、胸が張り裂けそうだった。

第一章「夫婦雛」その三十二

いけない、このままでは。何とかしなければ。
そう思い、お藤にお凜を呼びに行かせた。

お藤は、わかりました、とだけ言って。しばらくして、お凜を伴って部屋に戻ってきた。

「何か困ったことがあれば、どんどんとお申し付けくださいませ」
と言ってくれた頼もしい侍女に、相談しよう。

この胸のつかえはなんなのか、どうすればいいのか。
自分ひとりでは、どうしようもなさそうだった。

「ありがとう、お藤。もう下がっていいですよ」

「はあ……」

お藤は、誰も近づけると言ったお雪が、今度はお凜をつれて来いと言ったような変わりぶりを不思議がりながら。頭を下げて部屋

を後にした。

お凜は、愛嬌のある明るい笑顔をお雪に向けている。

「私に御用とか。どうなされました？」

凜とした、澄んだ声だった。その声を聞き、心がやや落ち着いた。

「実は……」

鞆を手の中でころがしながら、次の言葉が出ない。

お互い正面向き合って正座をして。お凜はしっかりとお雪の目を捉えて離さない。が、お雪はめをきよろきよろさせて、お凜の視線の捕捉から逃れようとしているようだった。

――まだまだお若い、十五におなりになったばかりなもの。――

その落着きのなさを見て、微笑ましいやら可笑しいやら。

お雪は、やつのことで声を出した、が声にならない。

「その、あの……、て……」

「て？」

「ああ、あの……」

と、しどろもどろだ。

て、の後ろに何が続くのか。考えるまでもなかったが。

「手が、どうかなさいましたか？ ご安心くださいませ、おひい様の手は細くて白いきれいな手でございますよ」

お凜はわざとボケてみせた。すると。

「いえ、そうではなく。て、輝虎様のことで」

と、お雪はか細い声をやっとな出した。

「輝虎様。殿のことでございますね、それがなにか……。まさか、殿に何か悪いことでもされたのですか？ さきほどのことは、もしやそれで。ならばけしからぬことです、おひい様に代わってこのお凜が、成敗してくれましょう」

またボケるお凜。いよいよお雪は慌てた。

年の離れたお藤より、こういう相談は年の近いお凜のほうが、何もかも察してくれると思って期待していたのに。思いっきり肩透かしをくらったようだった。

「輝虎様を、成敗？ と、とんでもない！ そ、そうではなくて」「はい？」

慌てたお雪は、そのはずみか、自分から何もかも喋りだした。お凜は、何も言わずに笑顔でそれを聞いてあげていた。

「最近、どうもおかしいのです。輝虎様のことを想うと、何故か頬が暖かくなります。それだけならまだしも、輝虎様とお会いすると、胸が張り裂けそうになって……。これは、どうしたことでしょう。今さっき、お会いしたとたんに、逃げ出してしまったのです。輝虎様が嫌いではないのに。むしろ、おそばにいたいというのに。それなのにどうして、わたしは、逃げてしまったのでしょうか」

それから、黙り込んで、うつむいて、ひざに置く鞆に視線を落としていた。

お凜は、うんうんと頷いていた。話を聞いていて、自分もまた胸が張り裂けそうだった。

もうこれは、言ってあげなければいけない。自分が、ちゃんと教えてあげないと。

「それは……」

と言うと、お雪は顔を上げて、次の言葉を待っているようだった。今度はきよろきよろしていない、一言一句聞き逃すまいと、お凜と見つめ合っている。

くす、と笑うお凜。おひい様は、まるで自分を姉のように思っているようだった。

すう、と息を吸って。それから静かに、ゆっくりとお雪の心に届くようにその言葉を言った。

「それは、恋というものです」

「恋。恋、というものですか」

「はい、恋でございます」

お雪は、両手のひらを頬にあてていた。頬は、暖かった。

「わたしは、輝虎様に、恋をしているというのですか」

「その通りでございます」

と、言うや否や。お凜はお雪の手をとり。

「この気持ちを、輝虎様にお伝えするのです」

はしゃぐような物言い。手を取られたお雪は、頬を赤くしたままきよんとしていた。

かと思えば、手を離して、今度は自分の手を組んで。

「素敵ですわ。恋する乙女が、想い人にその胸のうちを伝えるなんて。ほんとうに、なんて素敵なのでしょう」

と、目をキラキラと輝かせる。

その昔聞いた、恋物語が脳裏をかすめてゆく。その恋物語に何度胸をときめかせたことが。

女ともだちと一緒にあって、その恋物語の感想を言いあつては、きやあきやあさわいでいたものだった。

その恋物語のまつただなかに、お雪がいる。想い人、輝虎に胸をときめかせ、頬を赤く染めている。

これが都の貴族なら、その気持ちをうたに詠み、そつと想い人に伝えるところだろうが。そこはやはり、素朴な田舎の地侍の娘としてそだったお凜のいうことは、なんともストレートなものだった。

それはそれで、可愛げはあるのだが。はたしてお雪かというと。

「そ、そんな……。で、できるのでしょうか。なんだか、こわく思います……」

と、震えていた。

初めて覚えるこの感情に、ただ、心が打たれていた。

ましてや、気持ちをうたに詠み、そつと伝えるなどという、風情のある方法など思いつくこともないし。さきほど述べたように、お凜がそんな気の効いたことを教えてあげるなど期待できそうもない。

「とてもとても……」

と、お雪は首を横に振るのであった。頬は真っ赤なまま。

「でもおひい様、ならどうなさるのですか、このまま黙っていては……」

それはわかつていいる。だが、自分自身にもどうしようもないものを、人に言われたからといって、そうなのですかと出来るといいうわけでもなく。

いやしかし、ここで一番肝心なのは、輝虎とお雪は夫婦なのである。うかつにも、ふたりともそのことが完全に頭の中からどこかへと飛び立っていったのには、気付いていなかった。

第一章「夫婦雛」その三十四

さて、お凜がお雪を憧れの恋物語の主人公にしようとやっきになつて、お雪は頬を真っ赤に染めてそれに身もだえしているころ。

そばで聞き耳を立てるものがひとり。お藤であった。障子紙に影がうつらぬよう、壁際によりそつて耳をとんがらせている

大切なおひい様が、お凜を呼んでなにやらひそひそ話をしているようだ。これは捨て置けぬと、立ち去るフリをしてまた戻つて。

やがて、目を潤ませてどこかへとほんとうに立ち去つていつてしまった。

城のどこかの隅っこに隠れて、自分自身も胸が張り裂けそうなのを、我慢をやめて一気に張り裂さいた。

次から次へと、涙が溢れてくる。今までどんな辛いことがあつても泣くまいと思つていたのに、今度ばかりは泣かずにはおれなかった。

すると。

「や、お藤殿、どうなされた」

と言っ声。

はっとして涙を袖で拭いたが、ときすでに遅し。目は真っ赤でも誤魔化せるようなものではなかった。

「ど、どうなされた。何を泣かれておられた？」

情景であつた。たまたまどこかへとゆくお藤を見かけ、どうしたのかと思ひ後を着ければ、おいおいと泣いているではないか。これはただ事ではないと、失礼……、と声を掛けずにはおれなかった。

「あ、情景殿」

「どうなされた。何があつたのですか、目が真っ赤ではありませんか」

老境の粹に達した情景の温和で心配そうな顔が、とどめていた涙をまた溢れさせる。この方なら、何を話しても……、そんな気にさせて、涙と共に押し出す言葉。

「聞いてくだされ、おひい様が、おひい様が」

「おひい様が、どうかなされましたか？」

「はい、それが……、輝虎様に恋をなされておると」

お雪の身に何かあつたのか、思わず身構えお藤の言葉を聞けば。

それは老境ながらも、歴戦の武士として戦ってきた者にはなんともむずがゆく、聞いているこつちまで顔から火が出そうなものだった。「こ、恋でござるか」

恋、それはあまりにも耳にするにはなんともむずがゆい。ちよつと、引いてしまった。それを抑えて、じつと話を聞いてあげた。

「はい、そうでございます。おひい様は、輝虎様に恋をなされておるそうです」

「は、はあ……」

「もう、わたくしはそれを聞き、いてもたつてもいられなくなつて恥ずかしながらもこうして隅で泣いている次第でございます。だつて、泣かずにおれないでしょう。今まで、恋などというところではなかったのですから」

その通りだった。実際、大高家は中村家に侵略されて、支配下に

置かれていたのである。それをより確実なものとするため、頭領である輝虎の首輪の代わりとして、お雪が嫁がされたのだ。

お雪の扱い一つで、大高家の忠誠度がうかがい知れる、というわけだ。大事に扱えばよし、でなければ叛意ありとかなんとか難癖をつけ、事次第によれば潰す。

かつて善景が十兵衛に言ったようなことがいつおこってもおかしくない。下手に忠誠を誓われるより、いっそ反逆してもらった方がいい場合もある。藁の下でくすぶる火種の心配など誰もしたくはないものだ。

そんな中で、お雪とお藤は大高家で年月を過ごさねばならなかったのだ。恋どころの話ではない。しかし、今現実にお雪は輝虎に恋をしているという。

「おなごとして生まれたからには、やはり想い人に恋焦がれていたものでございましょう。それは、おなごの夢でございますもの。わたくしには経験がございませぬけれど、恋というのは、ほんとうに良いものなのでしょうね」

そう語るお藤の頬は、涙を流す目以上に真っ赤だった。

第一章「夫婦雛」その三十五

このことは、どうかご密に。という言葉を最後に、お藤は自室へともどっていった。ご内密もなにも、晴景にはこのことを誰にも言うつもりはない。

言ったところで、「何を甘つちよろいことを」と同僚たちに言い返されるのがオチだからだ。それ以前に、恋云々という話自体、受けつけられないというか……。

しかし、それは輝虎とお雪の仲がうまくいっているのだといっていいかもしれんと。なら、お家も安泰と思い、ひとり何とか納得し

て。彼もまた自分の邸宅へとひきあげてゆく。

ふと、お藤の涙を思った。あの気丈な女性がおいおいと泣いていたのを思い、その心中や気苦労はどのようなものであったか。察してあまりある。

そんな中、ひとつ気になることもあつて。もうそろそろ、と何度も心の中でつぶやいていた。

なんとも、おのれ自身もまた気苦労の耐えぬことであろうか。

「お互い、年寄りはずらいのう」

ぼそつと、声に出してしまった。

そんな年寄りの気苦労も知らず、若い娘は自分が仕えるおひい様に。

「そのお気持ちをお伝えするのです」

ばかり連発していた。連発されるたび、おひい様は真つ赤な頬に両手をあて、身もだえばかり。

話が全然進まない。でも、お互い楽しそうだ。おひい様のお雪は最初こそ戸惑つてはいたが、侍女のお凜に励まされ少しずつでも勇気がわいてきているようである。

主従という枠をこえて、ただ若い娘同士恋について語りあつていった。

では、若い男同士ではどうかというと。

輝虎は自室に十兵衛と善景を招きよせ、しきりに戦の話しをねだっていた。落ち着かない、どうにもこうにも落ち着かない。

お雪のことも気になるが、戦のことも気になる。いや、何もかもが気になって落ち着かない。出来ることなら、なんでもいいからこの手でわしづかみにして振り回したくなる気持ちが胸の奥底から際限なく湧き出てくる。

十兵衛も善景も、同じようにねだられるまま戦の話をした。男児として生まれ、武士として生きている男なのだ。

体は出来上がっている、気持ちの準備はいつでもいい。あとは、ご父君（中村家成）よりのお沙汰を待つのみ。

それまでは、十兵衛や善景のしてくれる戦の話で憂さを晴らす
しかなく。耳を働かせながら、拳を強く握り締めていた。
―おれはもう十七なのだ。―

まだ戦を知らぬ悔しさをこめて、この小城一つの主は何度もそう
胸の中でつぶやいていた。

第一章「夫婦雛」その三十六

願いは叶う。今まで生きていて、これほどまでにそう思ったこと
は無い。

にわかに城中が慌しくなった。

皆、胸躍らせていた。

「輝虎よ。こたびの戦、そちにも働いてもらっぞ」

という家成の言葉をたずさえ、中村家よりの使者がやってきたの
だ。輝虎、十七にして初陣となったのだ。

もう留守番などしなくてもよいのだ。皆と一緒に出陣が出来るの
だ。

「ご父君のために、存分に働きます」

胸が高鳴り、今にも飛び上がりそうなのをやっところえて、そう
使者に告げた。

使者はそれを察したか、いつも通りの高飛車ながら、握られる拳
を見て顔を自ずと引き締めていた。それほどまでに、輝虎は初陣を
待ち望んでいたのだ。

使者の去ったあとのはしゃぎようときたら、まるで子供のようだ
った。

「初陣だ、初陣だぞ」

と、何度も何度も拳を振り上げていた。

お雪はその様子を女中や侍女たちから聞いた。

やがて、輝虎がお雪に会いに来た。

「お雪、聞け。初陣だぞ」

「初陣でございまするか、なんとも喜ばしいかぎりです。おめでとうございます」

という、妻としての言葉。その裏にある、ひとりの少女としての気持ちとは、どうなのだろうか。

がら、と障子を勢いよく開けて、ずかずかとやってきたのだ。はっとする間もなく、そのまま初陣の話し。

その嬉しさはわからないでもないけれど、あまりにも無邪気すぎるのではないか。

――これが、胸を打つような恋を覚えたあの輝虎様なの……。――

あの時の、胸を締め付けさせた男の横顔は、今はなかった。ただの無邪気なものがそこにいるだけ。

もっと他にも、話すことがあるだろうに。初陣の話ししかしてくれない。ということとは、自分のことなど、たいして想ってくれていないのだろうか。

ただでさえ会話の機会が少なかったというのに、久しぶりに長話ができると思えば、これだ。

が、しかし。お雪は武家の娘として生まれ育ち、武家に嫁いだ。

ならば、これこそ無上の喜びとせねばならない。という武家の道徳をそのまま、十五の少女が持てるかどうか。

初めて覚えた恋というもの、その恋の行き場。

それがどこなのか、わからなくなった。

第一章「夫婦雛」その三十七

こういう時は、「ご武運をお祈りいたしております」と言っのだと、お藤から教わっていた。

いずれは輝虎は戦にゆくのだから、それを笑顔で見送らねばならない。

でも、笑顔など、とてもつくれるものではない。

胸の奥底から何かが沸き起こり、喉を痞え（つかえ）させようとしていた。

「……？」

無邪気に初陣への心意気を語る輝虎だったが、お雪の異変に気が付き話を中断した。

しばし、沈黙が流れた。

なんとも、気まずい沈黙だった。

自分の妻が無理に笑顔をつくろうとしているのに気付いて、あれ、思っても遅かった。

「……、お雪？」

といつても、ただ「はい」と返事をするだけで、なにも言わない。これは一体どうしたことか、輝虎には皆目見当もつかない。どうして、お雪の笑顔にどこかしら影がひそんでいるように感じるのか――どうしたんだ。おれが初陣なのが嬉しくないのか。――

長いまつげがさがり気味なのを見、胸騒ぎを覚えた。唇も震えているようだ。紅を塗ったような、赤い唇だった。すつくと立ち上がった。

「すまん、用事があるのを思い出した。またあとで」

と、そそくさと立ち去ってゆく輝虎。

お雪は正座のまま遠くを見る眼差しで、壁と向きあっていた。

――わたしは、武家のむすめだもの。――

ただそれだけを思った。

涙は出そうで、出なかった。

そそくさと自室へとひきこもった輝虎は、部屋の真ん中で腕を組み考え事をしていたかと思うと。

にわかに右手で頭を抱えた。

― おれ、お雪になにかしたのかな。―

そればかり思った。

待ちに待った初陣に胸を躍らせて、その喜びをお雪とわけあおうと思っていたのに。ながいまつげは、さがり気味で。

その笑顔には、どこか影がひそんでいるようで。

そんなお雪を見たのは、初めてだった。

「お雪は、おれの初陣を喜んでくれないのか？」

つい、ぼそつと声に出していつてしまった。

それを聞く者があるとも知らず。それを聞く者とは、他ならぬ十兵衛であつた。

部屋をたずねて。「よろしいですか」と声を出そうとしたまさにその時。輝虎のつぶやきが聞こえた。

― なに？―

と、動きを止めそのまま立ち去っていった。初陣について色々と話そうと思っていたが、そのつぶやきを聞きそれどころではなさそうだというのを察した。

― こりゃ一体どうしたことだ。殿とおひい様になにが……。―

あつたのかは知らない。しかし、かといって捨て置けぬ。

ということ、幼馴染みのお凧のもとへと早足でゆく。こういう場合は、お凧ならなにかしっておるかもしれぬと。

そうすれば、ばったりと出くわしたはお凧そのものであつた。

「あつ」

「あゝ」

と、互いに間の抜けた声を出しあい。同時に動きが止まった。なんだか妙に息があつていた。

「おい、お凧。殿とおひい様がだな」

と言うや否や、お凜は手を差し出し止し。

「馬鹿。ここで話すことではない。どこか人のおらぬところへ」

と、ふたり城の隅へとゆく。十兵衛は、馬鹿と言われたことが少し気に食わなかった。

「殿とおひい様のことでしょ。あたしもそれを言いたくてあんたをたずねたのよ」

「そうなのか。おれも同じだ。いや殿がな、おひい様は初陣が嬉しくないのか、などとつぶやいてだな。こりやどういうことだ？」

「そんなことを……」

城の隅っこについて。ふたりはわけを話し合った。お凜もやはり十兵衛と同じで、お雪の様子がおかしいのを見て。

――十兵衛ならなにか……。――

知っているかもと、十兵衛をたずねたわけだが。それから語られる輝虎のつぶやきを聞いて、なんとも言えなかった。

お凜は、輝虎がはしゃいでお雪のもとまで来るのを見ていたから。おそらくは、と見当はついていて。その見当を、そのまま十兵衛に言ってやった。

「あれはなによ、おひい様の気持ちも知らずまるで子供のようにはしゃいで初陣初陣と叫んで。見ているこっちが恥ずかしいくらいよ。だいたい、十兵衛」

「な、なんじゃ」

いきなりふられて、十兵衛は少し驚いた。だが、構わず続ける。

「あんた殿に何を教えたのよ」

「はあ？」

「そりゃ、初陣で心が弾むのはわかるわよ。でもね、だからといって、馬鹿みたいにはしゃいでいいわけじゃない。おひい様は今とても不安定なお年頃なのよ。それなのに、それなのに……」

と、途中言葉を詰まらせた。今にも泣きそうだった。

「いたわりの言葉もなく、初陣じゃ、おぬしも喜べ、だなんて。あまりにも一方的で身勝手すぎるわ。あの優しかった殿が、気がつけ

ば阿呆みたいにガサツになってしまつて。こうなつたのも、十兵衛、おぬしの教え方が悪い」

「え、ええ。おれのせいなのか？」

突然の言葉に、十兵衛は自分を指差しきよんとしてしまつた。

「それよ。それがいけないのよ。あのね、女はね、喧嘩の強い弱いよりも、優しさが好きなのよ。優しさに触れさせてほしいのよ。なのに……。馬鹿がいらぬことを教えてしまつたために……」

「ちょ、ちよつと待てい！」

わけもわからず一方的に悪者にされて、しかも馬鹿とまた言われて黙つてはいられなかつた。

「まるでおれが殿をならず者に仕立てたみたいな言い方だな。それに男児に向かつて馬鹿などと、いくらおぬしでも聞き捨てならぬ」

「へえ、ならどうするのさ。あたしを斬るのかい」

「斬りはせぬ、だが、謝れ。さっきのことを謝れ。いくらなんでも無礼だろうが」

「いやだ」

と、お凜は十兵衛に向かい、あかんべえをする。もうしつちかめつちやかで話にならない。

だいたいこのふたり、何を話すためにお互い顔をあわせたのか。それなのに城の隅で喧嘩である。まったくこの様は、どうであろう。

第一章「夫婦雛」その三十九

十兵衛とお凜が城隅で喧嘩をしているころ。

また輝虎の部屋を訪ねるものがあつた。

「よろしゅうございますか？」

と言つ声にはつとして。

「いいぞ」

と応える。

が、顔はふすまにむかつて、目は壁を見ようとしているのほうしてだろう。

それもそうだった、よろしゅうございますか、と言うその声は、お雪のものだったからだ。

やがてふすまがそつと開けられて、すこし足をたたんだ正座気味の姿勢で、お雪は部屋に入り。同じように、そつとふすまを閉じた。その間、輝虎は畳を見ていた。

「輝虎様」

指先を畳につけると。細い、澄んだ声で自分の亭主を呼んだ。だが、亭主は気まずそうな眼差しのまま、頷くのがやっとだった。やや一息の間があつて。

「ご武運を、お祈りいたしております」
という言葉。

それから。

「ありがとう」
という応え。

このしばらく前の、壁とのにらめっこ。ただ時間がすぎゆくだけだった。

すると、ため息が出た。そしたら、そうだ、と思い立って。今、こうしていた。

そうしたら、ありがとう、という言葉がかえってきた。

ありがとう、と言った人は、困ったように照れ笑いをしていた。それを見ていたら、おかしくてこっちも笑っていた。

第一章「夫婦雛」その四十

それから三日ほどのち。

新しい鎧具足が威風堂々と、朝日のさす大広間に仁王立ちして。

その具足を身に着けているのは、他ならぬ輝虎であつた。

出来立てなのではころびも無いし、椿油が功を奏し、艶^{つや}もある。

つくりこそ質素ではあるが、一城の主がつかうものだけであつた。同じように鎧具足で身を固める家来たちの、なんと貧疎なことかやがては輝虎の鎧具足も同じようになるのだろうか、今は真新しい。

輝虎は、家来たち一同を見回し。

「では、陽が中天に昇るころ、出陣とする。それまで、飯でも食つて英気を養つておけ」

と命じ、立ち去つてゆく。立ち去つてゆくとき、一陣の風が家来たちをなでていったようだった。

十兵衛は拳を握り締め、この間のお凜との喧嘩は無理矢理忘れて、叫びたい気持ちを必死でこらえて気合と根性を飯より先に腹に溜め込んでいる。

そうかと思えば、そばでは氏清父子が親子して涙ぐみ。

「ようございました、ようございました」

と、肩をたたきあっている。

あれから六年、この日をどのような気持ちで待ち望んだことか。

下手をすれば、なかったかもしれないどころか、今自分たちはこの地上にはいないのだから。

それは、女たちも同じだった。

あのとき、攻め手から女であることの悲劇と悲惨さを味わっていたかもしれないのだから。

でもそれはなく、若殿の凜々しい武者姿を見ることが出来ようとは。

いつも元気で騒がしい女中や侍女たちも、輝虎の姿を見るたびに押し黙り黙礼をし。中には氏清父子よろしく涙ぐんでいるものまであつた。

やさしげな面持ちににじむ優雅さ。鎧具足を身にまといても、荒々しさは微塵も感じなかった。

今改めて見れば、幼少のころの鞠若子というあだ名が、良い意味

でとても似合う。通り過ぎるたび、そよ風に頬をやさしくなでられるような気がした。

そして、その行く先に、ささやかな嫉妬がおくられて。そよ風に流される

お凜ですら、この間十兵衛と喧嘩したことをいとも簡単に忘れて、そうだった。

――くやしい。――

ふと、素直にそう思う自分に気付いたときには。輝虎はお雪の部屋の中。

お藤は、挨拶をすませてさつさと部屋を出た。

婚礼の儀のとき、大きくなれば素敵な夫婦になるであろう、と思ったが。その通り、ふたりが相對したとき、自分の予感が当たったことに感激すらしていた。

今度は、晴景に見つかからないようにと気を配って、城の隅へ。

お雪は、つつましかに指先を畳につけて亭主を出迎える。

――またおれも同じことを繰り返すものだ。――

と輝虎は自分に呆れながら、この間と同じように困ったように照れ笑いをしていた。

「座つても、いいかな」

「まあ」

亭主の言葉に、お雪は可笑しそうに笑い。微笑みながら。

「ここは輝虎様のお城でございます。なにを遠慮なさることがございましたよう」

と言った。

「や、たしかにそうだった」

やっぱり困ったような照れ笑いの輝虎。この間、お雪を悲しませたことをまだ引き摺っているようだ。

「いやしかし、城といってもそなたのいた式頭城に比べれば、小さいものだ」

と座りながら言う。

「いいえ。小なりとも、お城はお城でございまする」

「そう言ってくれるか。ありがとう」

「どういたしまして」

「そうだな。そしておれはこの城の主なのだ。この城を、守らねばならぬ」

この城を守る。それは大高家やその領土、家に仕える家来たち、さらにはこの家に嫁ぎにきたお雪を守るということ。

「この城一つが、おれの全てだ」

と、しみじみと言った。

だから、今こうして鎧具足を身にとっている。

不思議なものだった。初陣の知らせを聞いたときにあれほど昂ぶっていたのがウソのように、落ち着いていた。

こうして、お雪と向かい合わせに座っていて。鎧具足の重さも忘れて。

自分が何を言いに来たのか、忘れる始末だった。

—どうしよう。—

言葉もない。阿呆なやつよ、とおのれをのしり、頭の中で必死になって言葉をつむぎだそうとする。

いや、何を言うべきかはわかる。肝心なのは、それをどのように言おうか。それが思い出せぬ。

「……？」

お雪は輝虎の沈黙に少し戸惑ったが、ややあって口を開いた。

「そのお姿、とても凛々しゅうございまする」

「お、そ、そうか。いや何、この鎧の重いこと重いこと」

なにやら、すっとぼけた応えをかえしてしまった。

お雪もお雪で。

「まあ。それは大変でございましょう。輝虎様を乗せるお馬も、さぞ大変でございましょうね」

と、ふたりして、すっとぼけてしまっていた。

第一章「夫婦雛」最終話

そうではなくて。

―おれは何を言っている。―

―わたしたたら、何を。―

戦を前にして、ここまでとぼけられるものか。

なんともかんと、お互いの気持ちは太陽より先に中天に昇っているようで。

恥ずかしそうに輝虎は右手でうなじをかき、何か観念したように、それでも明るく、ため息をついて。

「それでは」

と、立ち上がった。

そうすれば、お雪もそれに続いた。「えっ？」という感じで、何かを待っているように、じっと亭主を見据えていた。

「大丈夫、初陣首など取らせはさせぬさ」

お雪が自分のことを心配してくれているのだと思い、つとめて明るく優しげに言った。その言葉を信じないわけではないのだろうが、右手がやや上がり袖がゆらいだ。

それに釣られるように、裾もゆらいだ。

ゆらぐたび、ふたりの距離が縮まってゆき。輝虎の障子を開けようとしていた手が、すーっと動いて、お雪の手に届いた。

一緒に鞠をついていた手が、ふれあった。

指先すこしからませれば、年月を感じた。お互いを瞳でうつしあい、今までのこともその瞳の中から見出せそう。

どちらからともなく、ひきあうようにしてさらに近づき。

瞳を閉じて、ゆっくりと、互いの唇が近づいて。触れた。

生まれて初めての、くちづけだった。

本当の太陽が中天に差し掛かるころ。

お雪が城から見下ろすもの。

ひとつの小さな一団が旗をなびかせ、のどかな田園風景を見せる
大高郷を横切っている。

その先頭に、輝虎がいる。

それを、ずっとずっと、見守りつづけた。やがてそれは、小さな
点になって、見えなくなっていた。

その間、口ずさむ手まり歌。

おてんとさま（お天道様）は

それみてわらへ（笑え）

そここのところを、何度も繰り返して。空を見上げた。
青い空の中、雲が白く筋を引きながら風に流されて。

お天道様は、その雲が可笑しいのか、笑っているようだった。笑
いながら、その恵みの光でお雪を優しくなでていた。

第一章「夫婦離」 終わり

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」に続く

第二章 あやめ（菖蒲）の旗

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その一

夜空を覆う漆黒の空にちらばる星くずたちをながめ、輝虎は、その夜空の向こうにある我が城を思う。

初陣より数えて何度戦に出たことであろう。

今までの戦の数を数える気にはなれないが、気がつけば、早三年の月日が流れたことは思い出せた。

甲冑を身にまとい。騎乗にて戦場を駆け巡り、槍をふるい。その槍で何人突いてきただろうか。

これからも、何人突いてゆくのだろうか。

すこし視線を下げれば、闇を払いのけるように火をとす小さな城が向こう側に見える。それを囲む兵ども^{つわもの}。

今も騎乗にて、その中にある。家来の津川十兵衛、氏清晴景、善景の父子。付き従う二百の侍たちも、一緒にその中にある。

それらもまた、闇を払いのけるかがり火を、夜を昼にでもするかのよう焚いている。

大きく息を吸い込む音がした。

「火矢をかかげよ」

ところどころに号令が響き渡る、輝虎も続いて号令をかける。弓を持つものたちはたちは一斉に矢に火をつけて、いつでも矢を放てるように弓を構える。

その時、頬をかすめるもの。瞬時に風を切る音が通り過ぎるや否や、かつ、という地に何かがあたる音がした。

「矢……」

どこかで誰かが叫ぶ音がする。それから矢継ぎ早に聞こえるうめき声。自分たちの囲む城から矢が放たれてきている。

「放て！」

闇を突くようにして槍で城を指し示し、号令を下す。

夜空に、火が舞う。

火は吸い込まれるようにして漆黒の空に浮かび上がって、一瞬の間だけそれに幻想的な美しさを感じて、それから城に向かって落ちてゆく。

それと入れ違いで城から矢が闇に紛れて放たれる。そばで誰かが餌食になって、どおっと倒れる音がする。

城の裏手からときの声が上がった。裏手に回った別働隊が城に突入したのだ。

双方矢を止める。

齒を食いしばる。

そうすれば、ついに正面の門も打ち破られる。

「かかれ」

の掛け声とともに雪崩れ込む。輝虎も馬を駆ってその雪崩の中に家来たちとともに突っ込んでゆく。

どこをどう走ってきたかなど覚える間もなく、狭い城壁の囲む中人であふれ、それを時に馬脚で蹴り倒しつつ槍を振るう。混乱の中、よく馬などに乗って戦えるものだと思っただ。

「おのれ！」

という、頬をぶつような怒号がした。

同じ騎乗の武者が突っかかってくるのを、反射的に槍で突けば。

喉から血を溢れさせながら落馬するのを視界の隅でとらえながら、また別の者を突く。

「！！」

不意に視界に飛び込むもの。ひとり落馬する者があった、家来の善景だ、相手の槍をかわしたはずみでバランスを崩し、そのまま落っこちてしまったのだ。

「しっかりせい！」

急ぎ十兵衛が駆けつけ、善景に群がる敵兵たちを払いのけるが。

善景は背中を打ったらしく、痛そうに顔をしかめながらほうほうの

体で十兵衛のかげに隠れるようにしながら、ようやく自分の馬をつかまえ乗った。

ふっと笑った。なんだか、善景の慌てぶりが可笑しかった。後で親父殿の晴景に「なんと無様なことよ」としぼられるだろう。

日が昇った、と思うほどあたりが明るくなる。

そうではない、自分たちの攻めている城が火に包まれたのだ。その火に完全に闇は払いのけられてしまい、暗闇の世界の中にわかに光明の世界が出来る。

が、その光明の世界の中にあるものは凄惨を極めた。

業火に焼き尽くされようとする小さな城。そこから這い出す死兵ども。それを生ける兵たちがむらがって食い散らかしている。

どちらも、血みどろになって戦っていた。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その二

初陣より三年。輝虎は戦ってきた。

これからも、戦ってゆく。

妻である雪姫の父であり、主君である中村家成がその胸の中に燃え盛る野心を抱き続ける限り。娘婿として、家来として、家成の野心をおのれの野心として、小さな城一つを守るため、戦い続けねばならなかった。

ある日のこと、お雪がたずねたことがあった。輝虎がつかの間の休息をお雪とともに過ごしていた時のことだった。

「輝虎様が戦にゆかれるとき、いつも思うのですが。その戦でたくさんの人をあやめております、手柄になるとはいえ、それがこわく思うのです」

「え、怖いのか？」

「はい」

このお雪の言葉に、輝虎は少々面食らったようだった。戦にゆくことを、妻に責められているようで。しかし、自分は武士なのであり、お雪はその妻である。

が、お雪としては幼いころよりともに年月を過ごしてきた輝虎が人を殺すなど想像しがたいことだった。幼少のころ、一緒に鞠をついたり、寂しさのあまり輝虎と一緒に寝てとせがんだこともあった。その輝虎が、戦となれば何かに取り憑かれたかのように鬼神のごとく働くという。

普段もどちらかというとおとなしめで、虫も殺せぬような男なのに。人を殺すことよりも、そのギャップが怖いのかもしれないが……。

「欲のためや、怒りや憎しみで人を殺すやつもいるだろうが、おれは違う」

と夫は言う。どう違うのか、お雪にはわからない。どちらも、人を殺すことには変わりがないではないか。だが、輝虎は「違う」と言うだけの確固たる信念があるようだ。

「おれはただ人を殺しているのではない、義のために戦っているのだ」

「義、でございますか」

「そうだ。我が君であり、そなたとおれとを引き合わせてくれた父君である家成公への義のために、おれは戦にゆくのだ。決して、非道なことはしていない。神仏に誓って」

なんとも、苦々しそうな物言いだった。

しかし、因果というかなんというか、かつて居城の大高城が囲まれたことがあった。それが、いまや囲む側になって戦っていたりもする。

城攻めのとき、それだけは、ひしひしと感じる時があった。

お雪はなにも言わない。何を言っているかわからない。

それを見た輝虎は急に態度を改めいつもの輝虎に戻った。お雪が悲しそうにするのを、辛く思ったのだ。

輝虎は、お雪が好きなのだ。好きな人の悲しそうな顔を見ることほど、辛いものはないのだから。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その三

家紋とするあやめ（菖蒲）が紫色の花を咲かせるころ。山の頂に居座り最後まで粘っていた雪もみんなとけて。

陽が昇れば暖かな空気が肌を優しく撫でてくれ。蝶は舞う。

その蝶が木刀の切っ先に止まるのを見て、十兵衛は拍子が抜けた。同僚の善景と相対し、隙を狙い急所に打ち込もうとした矢先のことだった。

「ありやあ……」

と、吐息とともにもれる声。

濡れ縁に腰掛け、城の庭で稽古を見学していた輝虎もこの事態に拍子抜けする。十兵衛と善景の双方の間合いにちゃっかりとやってきたこの珍客は、「お呼びでないですか……」と言わんばかりにまた空へと舞ってゆく。

それを目で追えば、中天に輝く太陽がその光で瞳を刺す。

「ん……」

眩しさを覚えて片目を閉じて手で陽をふせぐ。眩しさを覚えれば、やんちゃ小僧が目覚めます。

馬で駆けよと囃し立てる。

——こんな天気の良い日に城に閉じこもるなんて、もったいない。——と立ち上がったそのとき。

「殿、もう稽古は終わりましたかな」

と後ろでささやく声。

「げ、爺」

「げ、とはなんですか。さあ、まだまだ仕事はありますぞ」

「ちえ、わかったよ」

しぶしぶと、老臣晴景とともに奥へと引つ込んでゆく。家来ふたりはそれを見て笑いかみ殺す。

自分の治める領土の内政に関する仕事をこなすのも、もちろん輝虎の仕事だ。サボることは許されない。

その仕事が終わったところ、もう陽は落ちてしまつて馬で駆けることは出来なくなつてしまい。ため息をついて、奥の間へと行く。その奥の間に、お雪がいる。

途中、侍女などの女奉公人とすれ違った。彼女たちは、輝虎に頭を下げた後決まつて考えることがあつた。

―今夜こそは……？―

である。

悲しいかな、輝虎とお雪、今も寢所は別々だつたりする。

―あのとき一緒に寝たのは、なんだつたのかしら……。―

幼少のころ、ふたりが大人の目を盗み一緒に寝たことがあつたのだが、ほんとうにあればなんだつたのだろうか。

変な話だが、年齢的にも身体的にも、もう一緒に寝ても問題はないどころか。そうすべきなのに。

「さて、わたしはこれにて」

と、輝虎がお雪の部屋に來ると同時に、お藤はどこぞへと引つ込んでゆく。ふたりに氣を使っているのだが、主を見て今までのことを思い出すたびに、氣の使い甲斐のないことよと心の中でそつとため息をつく。そりゃ、おひい様は可愛い。そのおひい様にはいつまでも、汚れを知らぬ乙女でいてほしいという氣持ちもあるのだが。

「甲斐性というものを持ち合わせておりませぬのか」

と輝虎を問い詰めたくなる。

お藤にしてみれば、安心してよいやら心配すべきなのか、複雑な心境だつた。

やがて夕食が運ばれてきて、ふたりで食す。

その間、会話は止まることはなかった。やっぱり一緒にいたい

だ、だからこうして一緒に夕食をとっている。一緒にいて、いろいろとお互い物語りたい。

そこで、輝虎は言った。

「今宵は、ここで寝る」

双方動きを止め、岩のように堅くなった。燭台の火だけがゆらいで、ふたりの顔をほのかに照らし出していた。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その四

「あさつて、出陣だ」

「存じております」

「今までの戦とは違い、長らく帰ることが出来ないかも知れない。だから、その……」

「はい……」

お雪はただ「はい」とだけ応えた。

重い沈黙がのしかかる。

お互いに目を合わせつつも。輝虎は、お雪のその白くて細い首筋が気になり、その下にあるものはもつと気になる。

ふたりはそれぞれ、今の自分の年を考えた。輝虎は二十となり、お雪は十八（ともに数え年）。めおとになって、もう九年が過ぎたのだ。

輝虎とて、男だ。

――抱きたい。――

と思ったことは一度や二度ではない。が、それを実行に移せなかった。

あの日のことが、まだ心のどこかに染みのように残っていて、それにまだ恥じらいを感じていて。正直、怖い。

未だ知らぬものへの怖さもあり。

うかつに触れれば、それこそお雪という名の通り、雪のようにとけて消えてなくなるんじゃないかという怖さもあり。よくあのとき消えなかったものだと思える。

そのことが、戦以上に怖かった。敵の大將の首を取るほうが、まだたやすく思えるほどだ。

それほどまでに、怖い。今それを正直に感じていた。

が、その前に食器を片付けさせよう。さすがに食器をそのままにしておくのは、どうかと思った。まずはそれから思ったとき。

「殿……」

障子の向こうで、侍女が静かに輝虎を呼ぶ。

「お凜か」

またいいタイミングで来たものだが、おかしいとおもった。侍女のお凜は家中でも一二を争うほどの元気な性格をしているのである。小さなころ、家来の十兵衛とけんかをしてボコボコにしたこともあるというほどの、女傑といってもいい女である。

その元気さゆえに、お雪が一番信頼する侍女でもあり、同じ女性としても憧れを抱いているほどだし。一時期、お凜はお雪の恋愛指南役をもしていたのだ。といっても、その指南は押しの一手法かりだったか……。

それはともかくとして、どういうわけかお凜は声を潜め静かに輝虎を呼んだ。ほんとうなら、ここには来ずに同僚の侍女たちとなにやらよからぬ期待に胸を膨らませているはずだ。

お雪もこのことに気付いている様子だ、静かに事の成り行きに任せるしかない。何があったのだろうか。

「家成公さまよりのお使者が、おいででございまする」

そういうことか。輝虎は伏し目がちに、わかった、すぐ行くといつて立ち上がった。

「後で戻る」

と言って、行ってしまった。

お凜は、後に残されたお雪に頭を下げて、なんにも言わずに立ち去

った。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その五

それからしばらくの後、輝虎はお雪の部屋に戻ってきた。食器はすでに片付けられていた。

何かとたずねてみれば案の定。

「戦だ」

という。

「ご出陣が早まったのでございますか？」

「違う」

「では、どのような」

「久遠殿の城が突然攻められたそうだ。才木のやつら、上手く身を隠してやって来たらしい」

そこで、その援軍に行けということになったのだという。

「先手を打たれてしまったな。こうなったら是非もない」

と、穏やかに言った。こうなってしまった以上は、味方を救いに行かなければならないだろう。今夜の決意は、また次の機会へと取っついておいて。

「輝虎様……」

「お雪」

互いに名を呼び合ったあと、輝虎はお雪の手をとりひきよせ、抱きしめた。いい匂いがした。

お雪は輝虎の胸に身を預け、瞳を閉じた。胸板から響く心音が耳を打つ。

「ご武運を、お祈りいたしておりまする」

静かにささやいた。そのささやきが、輝虎の胸に響くように。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その六

菖蒲あやめの花が、戦場に咲く。

中村家の家来である久遠実成くおん・さねなりは、その花を咲かせるためにひとりの家来に命を賭けさせて、式頭城へ向かわせた。敵の目を盗み命がらがらたどりついた家来は、涙ながらに窮状を訴えた。知らせを聞いた家成は。

「左様か」

と、救援のための援軍を出せという早馬（伝令）を急ぎ各家来のもとに向かわせ、輝虎はそれに応じた。

雪がとけて、草花などの生けとし生けるものが土より目覚め蝶が舞い出すころ、紫の花が剣先のようにとがった葉の上に咲く。その菖蒲あやめの花が、大高家の家紋であつた。

杜若かきつばたと似てはいるが、よくよく花びらを見れば、菖蒲あやめの垂れ下がる花びらに紫色と黄色の虎班の模様が見受けられる。杜若かきつばたにはそれがなく、中央から爪部にかけ白から淡黄色の斑紋が見受けられる。それが、菖蒲あやめと杜若かきつばたの見分け方である。

旗に、その菖蒲あやめの花びらが描かれている。丸の中に虎班のある花びらが三つ垂れ下がり、その上に同じく三つの花びらが天を仰いでいる。もつとも、色は黒で。本来のように紫ではないが。

それはともかくとして。一番最初に久遠家の居城である久遠城にたどりついたのは、輝虎率いる大高の軍だつた。その数二百。以前は二百五十の兵を出せたものの、相次ぐ戦のために人員が減つてしまつたのだつた。

「もうすぐ久遠城に着きまするぞ」

と、行軍中十兵衛が問うた。味方がまだ合流する様子がないが、まさか我らだけで突つ込むのか。と続けた。

——のろまどもめ。——

内心そう思っていたのは口に出せないが、いや、それは輝虎も同じだった。

「そうだな」

と言つてしばらく黙った。どうしようか。味方が着くのを待つている間に城が落ちてしまふかもしれない、かといって自分たちだけで突っ込んで勝ち目があるかどうか。

中村家の家来集は、それぞれが自分の城と領土を持つ豪族であり。中村家は豪族連合の長という立場であつた。その長の座は、力でもぎ取つたものなの言うまでもない。

ほとんどの家来たちは普段は各居城にいて、いざと言う時に郷や村の若者を率いて戦いにゆくという戦争のやりかたであつた。家成の出す早馬とて同じタイミングで各家来のもとに着くというわけでもなく、また出発のタイミングもそれぞれまちまちでもある。

その中で、やんぬるかな、輝虎の軍勢が最初に到着してしまつた。

「ちつ」

と舌打ちする。

「いくしかあるまい」

槍を持つ手に力がこもる。目前には久遠城。大高城のように山の上に建つておらず、田園の広がる開かれた平野部にぽつねんとあり。大高城と同じような二階建ての質素な小さい城だ。それを囲む才木の軍勢は、ついに来たかと迎え撃つ。敵の救援はあらかた予想が着いていたのだろう。そんな相手の思惑など知らず、輝虎は槍を振るい。

あやめ（菖蒲）の旗が、戦場を駆け巡る。それはまるで、槍や刀を葉のかわりにして咲いた戦場の花のようだった。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その七

敵將、才木長久は馬上にて苦々しく舌打ちした。思ったより早く援軍が来たものだ。旗印を見れば、菖蒲あやめの花の紋。たしか、大高輝虎とかいう若い武将のものだ。

「家成の娘婿か」

家成が自分の娘を家来に嫁がせているのは聞いてはいた、その娘婿として、輝虎の名を覚えてはいた。

「あつ」

城の中で誰かが声を上げる。

「援軍じゃ、援軍が来たぞ」

その声を聞き久遠家当主実成は、二階から菖蒲あやめの旗の軍勢が才木の軍とぶつかり合っているのを見止めた。天は我らを見放さず、救援要請に行かせた家来は無事式頭城にたどりついた。それまでに、どのくらいの日数がかかったことか。

「よし、我らも出るぞ」

急ぎ階下に降り馬に乗り、家来から槍を受け取り、城から打って出た。三十になったばかりのこの実成、それほど戦上手というわけではないが、義に厚く生真面目な性格をしていた。

輝虎は、敵を突き突き才木長久を探す。混戦になり、敵の顔がよくわからず見つけられない。援軍ついでに大将首を挙げようと思っていたが、なかなか難しいものだ。

「殿！」

十兵衛の声だ。でも、声が聞こえただけで何を言っているのかわからない。

「深追いはやめなされ。なるべく我らから離れぬよう」

かなり大声をあげているようだが、やはりよく聞き取れない。しかし、深追いをしてしまったかなというのは考えていた。声のした方を向けば、十兵衛がこっちに大口を開けてなにやら叫んでいるのを見た。

それも一瞬のことだ。この戦場の中余所見は命取りになる、すぐに向き直ってひとり歩兵を突いた。向き直るのがもう少し遅ければ、

歩兵の繰り出す槍の餌食だ。

周りを見た。味方が少ない、やばいかもしれない。十兵衛はそこを叫んでいたのかもしれない。

「あ、くっ……」

一度こつちを向いたきり、戻ってこようとしないのか出来ないのか、ただひたすら敵兵を突く輝虎に十兵衛はやきもきさせられた。仮にも一軍の将ともあるう者が、勇だけが頼りの一平卒のような振る舞いなどして。

その振る舞いから、敵大将を捜し求めているのは容易に想像できた。気持ちはわかるが、雑兵が討たれるのと輝虎が討たれるのでは、同じひとり討ち死にでも全然違う。それがわかっているのか。

「十兵衛。殿は、殿はどこに？」

善景だ。彼は常に十兵衛から離れようとしなない。喧嘩の弱い男だが、こういう時安心できるというのは、なんともかんと。むしろ、輝虎は下手に喧嘩が強くなってしまった。それが、あんな行動を取らせてしまう。

——いつそ鞠若子そのままではよかったわい。——

善景の呼びかけを無視し、憎憎しげに突っかかる騎馬武者をひとり槍で突いた。善景の父晴景は老体に鞭打って、なんとか槍で敵を突き伏せている。もう誰にもかまうゆとりなどもちえなかった。

——早く来いのろまでも——

相手方はこつちよりは五、六十人多い。このまま味方が来なければ、負けないにしても壊滅的なダメージを食らってしまう。十兵衛は未だ来ぬ味方の軍勢にもやきもきさせられていた。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その八

そのやきもきが通じ、城の門が開き実成の軍が加勢してきた。

「助かった」

十兵衛は内心安堵を覚えて。さらに善景にいたっては、弾むような気持ちだった。自分たちが才木のものどもとぶつかれば、それを見て城から打って出てくれるかと期待していたが。その期待は当たった。

もし実成がびびって城から一步も出ず、全て大高軍にまかせつきりにしようとしていたら、どうなっていたことやら。

「輝虎殿。恩に着る」

と、大声で叫ぶ実成。援軍が余程嬉しいのか、混戦の中で笑みを浮かべっぱなしだ。輝虎もそれに気付き、笑顔で応える。混戦の中で、それ以上のことをする余裕はさすがにない。

「おのれ家成めの娘婿めが」

もうすこしで城を落とせたものを、あの若造のせいだと、恨み言を口走るのは長久であった。輝虎と名前で呼ばず、娘婿と呼ばわることに遺恨の念がこめられている。直に名を口にするのもはばかられるほど、憎悪しているようだ。

「引け」

と号令をかける。こうなつては早く切り上げるほかはあるまい。それこそ才木軍は引き潮のように、城から離れようとしていた。家来たちはよりそれに敏感になつていたようだ。その行動の早さは、あつけにとられるほどだ。

「逃げるものは追うな。久遠の城を守ることを第一にせよ」

輝虎はそう家来たちに号令を下す。自分たちの目的は、あくまでも久遠実成の救援であるのだ。無理にそれ以上のことをすることはない。と言いたいところだが、当の輝虎は長久の首を獲る気満々であった。

内心。

—もう少し粘れよ。—

と文句をたれていた。もう少し粘ってくれば、長久の首を獲る機会がやってきたであろうに。結局、長久はまんまと逃げおおせた。

その機転が大将の素質のひとつなのだが。若い輝虎にはまだ理解できていないところがあった。

とにかく、こうして久遠実成の救援という家成からの命令は果たした。

その時になつて、他の武将たちの部隊が次々とやってきた。辺りをきよるきよると見回し、すでに才木の軍勢はいなくなっている。

結局、実質的に援軍としての機能を果たしたのは、輝虎の部隊のみだった。

―のろまどもめ。―

と遅刻したものに恨み言を心の中で唱えている間に、輝虎が実成と一緒に十兵衛たちのもとまでやってくる。そこへ、他の武将たちもやってくる。

今回一番の手柄を立てたものに、遅れの詫びのかわりに、ねぎらいの言葉をかけているようだ。十兵衛はそれを見て、ため息しか出ない。

やがて輝虎や実成、各将たちは久遠の城に入り。家来たちは農家や寺社などを飯の宿として、久遠の郷に駐屯することになった。

家成がやってくるのだという。もともと、才木長久を討つために攻撃の計画を立てていたのだが。その予定が早まっただけのことと言い、自らも出陣へと踏み切った。

「ご父君がここに来られるのか」

と、家成自らの出陣を聞いた輝虎は、久遠の郷を囲む山を見。その向こう側にある我が郷のお雪を想った。またこれからは、しばらくは城に帰れない。ということは、お雪とは会えない。

瞳に映し出す白い雲に、空を舞う蝶や小鳥たちに、想いを託すしかない我が身をも想う。今できることは、それしかなかった。

久遠の郷に軍旗が居並び、郷を埋め尽くすように人で溢れかえろうとしていた。普段は閑静な辺鄙なこの郷が、にわかに慌しくなってきた、人で埋まろうとしている。

それと同時に、殺氣立つてもきていた。

これから、どうやって敵をたくさん殺し己たちの強さを思い知らせるか。皆そのことで頭が一杯だった。

郷の者たちは、その殺氣に縮み上がりそうなのを何とかこらえながら、酒や女で武士たちをもてなしてゆかねばならなかった。

そんな時に、事件が起こった。足輕が数人、里の娘に乱暴をはたらいたのだ。酒びたりになり、その娘に向かい伽をせいと、いやがるのを無理矢理てごめにした。

数刻後、乱暴をはたらいた足輕たちの首が晒された。

そぼの立て札には、「この者共、郷の者に狼藉をはたらいた咎により斬首」と書かれていた。娘は、領主である実成が奉公人として雇うということで、家族とのけじめをつけることになった。その全てを指示したのは、家成であった。

むやみに殺氣立ち、いらぬ所業を犯すものは軍規を乱す。そのよくな者に、弁解の余地などない。

愚か者どもの馬鹿面をよく見ておけ、と諸将は晒し首のもとへと集められた。集められた理由は他でもない、一罰百戒の意味を家来たちに教えるためだ。輝虎は晒し首を見て。

―おそろしいお方だ。―

と思った。もちろん、狼藉を働いたも足輕が悪いのは言うまでもない。だが、この者どもが殺氣立つ理由をつくったのは、家成なのだ。ついでに言えば、こういったことは今回が初めてではない。今まで何度かあったことだ。

自分は、その家成への義のために戦っている。

「さて、家の食い扶持が増えましたなあ。これからもまた、戦で手柄を立て褒美に預からねば」

と、晒し首を前にしてのんきなことを言うのは、久遠実成だった。さつきまでも、これからしばらくも。

「輝虎殿のおかげで……」

と、しつこく礼を言われる。それも無理はない、落城寸前のところにあって、真つ先に駆けつけ敵を追い払ってくれたのは輝虎なのだ。感謝などよいというのは無理な話だ。そこへきて、生真面目な性格ときているから尚更だった。

最初こそ「いえいえ、どういたしまして」と謙虚に、軽く受け流していたのだが。さすがにそのしつこさに閉口し、かといってむげにするわけもいかず、無理矢理笑顔をつくりお礼の言葉をこらえねばならなくなっていた。

帰り道、実成がにつこりとこつちを向いた。もう輝虎にべったりだ。

―来るか？―

と、思わず身構える。お礼の言葉などもう聞き飽きたのに……。

「今度の戦」

あれ、と思った。てつきり、輝虎殿のおかげで、から始まると思つたのに。そのまま、聞いてみることにした。

「お屋形さま（家成）は、いよいよ才木長久とのケリをつけるようござるぞ」

「それは、いつものことでしょう」

「いやいや、確かにそうだが。今まで何度も手こずらされていますからなあ。おかげで私は危うく首を獲られるところでしたよ。ほんとうに、輝虎殿のおかげで」

ああ来た……。と思いながら、笑顔をつくり、いえいえと返す。

「それはそうと。今朝のお屋形さまのあの目、尋常ではござりませなんだな。このご出陣で、今度こそは長久めの首を獲るつもりでござろう。それまで、陣を引くこともあるまい」

今度は、空を見上げた。そんなこと言われずともわかっている、というか、その今朝に、大広間で諸将を前にしてそう言ってたでは

ないか。だいたいこの実成、何を言いたいのか。真面目な顔をして、どうにも『天然』の気があるようだ。

「ゆえに」

さて、次は何を言うのかと待てば、神妙な顔つきになっているのに今気付いた。さつきまで、笑っていたのに。この変わりようは。

「この間のような端武者の如きお振る舞いは、自重されたほうがよろしいかと。命はひとつしかござらぬ、その命をつまらぬ小戦こいくさでなくされることもないでしょう」

ぎくつとした。そのまま、実成は続ける。

「武勇をお示しになりたいのであれば、やはり大戦おおいくさでなければ。でなければ、武勇の使い損ではなからうか。雑魚の首などいくら獲ったところで、ものの数にもなりませぬ」

という、思わぬ説教に、口をつぐみ考え込んでしまった。またしつかりと見られているものだ。

まあ、そうですが、いやしかし。と口を開こうとすれば、そこを見計らったかのように、ぴしゃりと言った。

「長久などは、小物でござるよ。この世の中には、まだまだ大物がおりもつす。ご自慢の武勇は、それにお使いなされ」

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その十

輝虎は、実成の言葉にきょとんとしてしまった。ふと前を見れば久遠の城の門。家来たちが一礼をしながら、扉を開く。そのまま中に入ってゆく。

「大物、ですか……」

それは、どのような。と言っているあいだに、背中の後ろで扉の閉まる音がした。実成はそうですなと頷きながら。例えば、あくまでも、例えですぞと、前置きをした上で。ぼそつと。

「ほれ、お屋形様のような」

と言った。

言葉が出ない。この男、何を考えているのやら。

「そ、それは畏れ多いことを」

「そうかな」

「えっ」

「戦うのであれば、やはり大物でなければ。それでこそ、戦い甲斐があると思われぬか。考えてもみなされ、長久がどのようなものか」と言われて、考えた。あの時の兵数、いかほどであろうか。こっちの二百より、五、六十人ほど多かったであろうか。それが、長久の出せる兵力だとすれば。

そうなのだ、彼もまた輝虎や実成と同じ小豪族に過ぎないのだ。家成の統一事業に未だに反旗を翻し、同じように家成を嫌う他の小豪族たちと結託し、とことろでゲリラ的な抵抗をしているに過ぎない。

久遠の城攻めも、そのゲリラ戦法の一環であつたのだ。そしてそれが、長久の出来ることの限界なのだ。中村家のような大豪族ならば、そんなみみっちいことはまずない。多勢をもつて、一気にもみ潰しただろう。今度こそ、危ない。と実成は言う。

「この久遠の郷に、二千もの兵が詰め掛けている。いやはや、我が郷のなんと狭いことよ」

耳を澄ませば、どこからともなくの馬のいななきや人の声が絶え間ない。気のせいか、郷の温度があがつたような気がしないでもない。晒し首を見に出たときも、人の往来の耐えぬことキリがない。

兵数二千。その数を聞いて戦慄を覚えずにはいられない。今まで、そんな兵数での戦に出たことがない。その二千でもつて、長久をもみ潰す。

「んー。どうやら、それがしの出番はないようですね」

と、ぽそつと言った。相手方がどんなに数を集めようが、七、八百ががせいぜいだろう。とすれば、勝負は呆気なくつく。これは、

思ったよりも早く帰れるかもしれない。と考えたとき、胸が弾むのを覚えた。

―お雪。―

ふと、その顔が脳裏に浮かんだ。この腕でお雪を抱きしめた感触がにわかに蘇えってくる。

―ご武運をお祈りいたしております。―

と、いうその言葉は、今も胸の中で響いていた。

続く

第二章 あやめ（菖蒲）の旗 頁二

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その十一

陽が沈み、月がたくさんの星たちをともなつて夜空に浮かび上がる。月は三日月。その身を弓なりに反らせて、細々とした姿を下界にさらす。

大高の郷は夜の闇に包まれて、人々は燭台に火を灯す。火を灯せば、わずかばかり闇は払いのけられて、自らの手をほのかに照らす。大高城で、お雪も同じように自分の手を照らし出す。その手に数珠が垂れ下がる。

闇に飲み込まれまいと、あるかなきかの勇気を振り絞り、数珠を握り締める。周囲を見渡せば、壁やふすまは闇に飲み込まれて。そこからわずかばかり、その身を燭台の火ですくい出す。

同じようにして、向かいの仏壇も半身を闇に、半身を火に照らす。仏壇に飾られた本尊は、闇に抗うようにして我が身に書かれた御文をぼやっと浮かび上がらせている。

それを見て、仏壇の前に座り。数珠を持つ手を合わせて、本尊を見上げながら唱題を上げる。

すると、ふすまの開く音がして。それに続く声。

「おひい様」

とお雪を呼ぶのは、お藤であった。

「もうお休みなさいませ。朝からずつとではございませぬか」

手燭を持ち、すすとお雪のもとまで歩み寄る。心配そうな顔をしている。それもそうだろう、さっき言ったとおり、お雪は朝からずつとここで唱題を上げてばかりで、ひとつも休もうともしない。

「でも……」

と、言おうとすれば。お藤は後ろに振り向いて。

「お凜、いるのでしょうか？ 隠れてないで出てきなさい」

と言った、すると同じように手燭を持ったお凜が。

「てへ」

と言いたげに舌を出しながら現れた。

闇を照らし出す火が増えて、明るさが増す。三人の顔がはっきりと見える。灯火は闇を払いのけて、それぞれの顔を照らし出す。その灯火に三人は寄り添う。

火のぬくもりが、闇の冷たさを払いのけるようにして頬を撫でる。そうすれば、心根にまでそのあたたかさが届いているようだった。お雪は、それに安堵を覚えて、思わずほっと一息つく。

「お疲れでございますね」

と、お凜。いつも明るい笑顔をしているこの侍女が、少し沈んだ顔をしていた。お藤同様、お雪を心配しているのだ。

「そのようにご無理をなされては、お体を壊してしまいますよ」

というその言葉に、お雪は、とりあえずは頷いた。でも、やめようとは思わなかった。今輝虎は戦にゆき、命を賭けて戦っている。それなのに、自分がゆっくり休むことなど出来ようか。

それを察して、笑顔をつくろうとしたお凜の顔が、また沈んだ。どうしよう、どう言ってお雪を安心させようか、そればかり考えた。でも、何を言っても気休めにしかないような気がして、笑顔をつくることもままならない。

若いふたりの娘が悲しげな顔を灯火に寄り添わせているのを見、年配者のお藤はため息をつく。やっぱり、まだまだ若い。こういう時こそが、年寄りの出番だと言わんがばかりに、こほんと咳払いをする。

そうすれば、若いふたりは何かを求めるような眼差しをお藤に向ける。

「笑顔でございます。おひい様が暗い顔をなされては、みな暗い顔をせねばなりません。戦より戻られた輝虎様も、そのようなお暗い顔で出迎えるつもりですか？」

求められている言葉、というより年寄りが今若い娘に求めている

ことを、お藤はありのままの気持ちで言った。こう言うてはなんだが、やはり男どもにしてみれば、年寄りの自分よりも若い娘の笑顔が好きだろう。戦から戻った時、若い娘が笑顔で出迎えてくれるのなら、戦から生きて帰りたいという気持ちにもなるだろうし。また、自分たちも男たちが帰ってくることを信じてやらなければいけないだろう。

所詮、男は単純な生き物だ。こっちの気を持ちようひとつで、生かすも殺すもなすがまま。生きて帰ってほしいというのなら、そういう方向に行くように、仕向けてやればいい。

「そうですね。お藤の言うとおりですね」

お雪は、お藤の言葉を聞いて、我知らず微笑を浮かべて頷いた。母親代わりになって自分を育ててくれた乳母の言葉には、不思議な魔法がかかっているようで。すると、そばでその様子を見ていたお凜が。

「あ、そうだ。おひい様おひい様」

と、耳元で何かつぶやく。何ぞ妙案でも思いついたようで、さつきとは打って変わっていやにうきうきしていて。その妙案がなんなのかわからないが、灯火に照らされるお雪の頬が、にわかに赤く染まり出していた。お藤は目を点にして、あやうく手燭を落とすようになった。

どうやらお藤の魔法の言葉は、お雪よりもお凜に強くかかってしまったようだった。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その十二

「そんなものなのか」

と、輝虎は言った。

長い行列だ。

前も後ろも、人で埋め尽くされている。今自分が進んでいる道に、びつしりと人で出来た黒い線が埋め尽くしている。空を舞う鳥が見れば、まるで蟻の行列のように見えるかもしれない。

主君であり舅でもある、家成率いる二千の軍勢の中にその身を置き。途中前に立ちほだかるべき敵が、頭を下げて許しを乞うのを見かけるたびに。

「そんなものなのか」

と、吐息と共に吐き出す言葉。

才木長久と結託し、中村家成に逆らい続けた豪族たちが、二千の軍勢を前にして簡単に手のひらを返して。気がつけば、二千の軍勢は二千五百へと膨れ上がっているではないか。

それまでに、小戦のひとつも起こらなかった。

なんと歯がゆいではないか。

降伏をするくらいなら、最初から抵抗などせねばよかったのだ。

家成に許された途端、輝虎たち家来集に、まるで旧友のようにふてぶてしく話しかけるものもあり。

――貴様はそれでも武士なのか。――

と、何度そのあごに拳を叩き付けてやろうと思ったかわからない。潔く戦って死ぬ、とまでは言わないが。そう思わずにはいられない。最近まで、その者たちと命がけで戦っていたのだ。当然、命を落とした者もいる。それが。

「そんなものなのか」

という言葉を吐き出させる。

「それが、戦国の世の武士でござるよ」

と、晴景は達観して言う。

武士の誇りだの意地だの、そんなものは世が平和な時の戯言にかすぎないのだ。乱世ともなれば、誰もが、我が身の安全を第一に考える。

「しかし」

と、輝虎は言い返す。

「ひとりくらいは、いてもよいのではないか。武士として、戦い。戦って、己をまっとうするものがあっても、よいのではないか」

すると、晴景は首を横に振り、なにも言わなかった。

血気にはやる若い主に、何を言ってもわかってもらえそうにないからか。それとも、自分がそういう生き方をしてきたからか。

ただ、ぼそつとつぶやくように。

「それが正しいかどうか、最後はご神仏がお決めになります。我らはただ、家成様のお下知に従うのみでございます。それが、今せねばならぬことです」

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その十三

楽、というものはそこに楽しさを感じるから、楽に思えるわけだが。

今回の戦は、楽ではあったが、楽しくはなかった。かといって、つまらぬというのも、違った。

中村の軍勢二千五百の前に、騎馬武者が立ちはだかった。脇に何かを抱えている。

その何かは、白い布に包まれ。よく見れば、赤く染みが浮いているではないか。

騎馬武者は言った。

「才木長久が首を、中村家成様に献上しに参りました」

騎乗にて軍の中ほどにいた家成はそれを聞いて。

「なんと、まことか。すぐにそやつを呼んでこい」

と、騎馬武者を招き寄せた。もちろん、両脇には家来たちが詰めて、不穏な動きをさせぬよう身構えている。その中に、輝虎もいた。

武者は家成の前まで来ると馬から降り、跪いて（ひざまずいて）。「我が主、才木長久が首をお届けに参りました。今、それをお見せ

いたしまする」

それを聞き、家成は眉をひそめた。

「我が主だと。おぬし才木の家来なのか」

「その通りでございまする」

「で、どうしてまた、主を討った」

返答次第では許さぬというつもりか。それを察した武者は、跪いたままぶるぶると震えだしていた。地面に下ろされた白い布にくるまれたものは、黙してなにも語ろうとはしない。ただ結び目を風にゆらせている。

輝虎は、固唾を呑んで、それを見守っていた。

武者の言い分は、やっぱり、という感じだった。

久遠の城攻めも失敗し、いよいよ家成は怒り心頭、今度こそ本気の本気で才木家を潰しにかかるうとするだろう。そうなれば、もう勝ち目は薄い。だから、いい加減無駄な抵抗はやめて降伏をしましよと言った。

だが聞き入れてもらえず、そのため、これ以上無駄な戦を続けて余計な犠牲を出さないためにも、やむなく主である才木長久を討ったという。

「なるほどそちの言い分もつともである。長久めも愚かなことよ、早く我が下につけばこのようなことにならなかったものを。まあ、今さら言っても詮のないことであるがな」

と、がははと豪快に笑い出した。そのあけつひろな笑いに輝虎は驚き目を見開き、舅と白い布に包まれたものと、それを持ってきた武者を交互に見つめていた。

「なんということだ。――」

長久の首は自分が獲ってやろうと思っていたのに、恐れをなした家来にあつさり横取りされてしまつて。こんな馬鹿馬鹿しいことがあつていいのか、そう思わずにはいらなかった。

「まあよい。では長久の首を見せてもらおうか」

と言うと、武者は白い布の結び目ほどいた。布が開かれ、そこか

ら眠るような長久の顔が現れた。頬の下からあごにかけて、赤い血がこびりついている。

思わず、輝虎は目をそらした。首など見慣れているはずなのに、今回は見たくはないと、不意に思ってしまった。

「これ輝虎よ、何を目をそらす。まさかこの『うつけ』に噛みつかれると思ったか」

輝虎の様子を見た家成はけたけた笑っていた。それにつられ、他の家来たちも笑い出す。実成はうなずきながら声を抑えて笑っているが。

―むごい。―

実は主君の手前、笑っているフリをしているだけで、内心は長久を哀れに思っていた。つい先日自分の城が攻められたのだが、それは昔のことである。願わくば、平和的解決をと望んでいたのだが。その望みは外れてしまった。

いや、平和的に解決はした、といえばしたと言えるであろう。こたびの出陣、犠牲は長久の首ひとつ、たったそれだけで済んだのだから。

―けったくその悪い……。―

輝虎は飲んだ固唾を地に吐き捨てたい気持ちだった。確かに楽しかった。確かに早く帰れそうだった。だが、けったくその悪さのこの出陣だった。

―馬鹿野郎！―

と、長久の首とそれを持ってきた武者を蹴り飛ばしてやりたかった。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その十四

それから数日、大高の軍勢は、大高郷に帰りつき。十数日ぶりに、

輝虎は大高城の床を踏みしめた。

今にも泣き出しそうな、曇り空の日だった。

やけに空気は湿っぽい。それにつられ、心まで湿りそうだった。

今回の戦、手柄を立てたような、立てられなかったような、半端な気持ちだった。

敵を撃退したものの、それだけ。あとは、雪崩を打ったように、とんとん拍子でことが進んだ。それ以上に、けったくその悪さを引き摺ってしまった。

——まったく、なんだったんだろう。——

そう思いながら、お雪のいる奥の間へとゆく。しかし、これもまた、長く帰れそうにないと言いながら、早く帰ってきてしまった。名残惜しさのあまり、思わず妻を抱きしめてしまった。お雪は、輝虎に身を預けてくれた。

それも思い出して、やけに背中がむずがゆい。頬が張ったような気がして、奥歯を噛み締める。

——ああ、なんか……。——

その後の言葉は出ない、思わず天井を見上げて。たまたま近くにいた女中が、ぽかんとした顔をして、輝虎を眺めていたのに気付く。襟元をただし、咳払いをして、なるべく知らぬ顔をしながら、そそくさと歩く。

まあしかし、兎にも角にも、早く帰れたのだ。ここは、素直に喜びたかった。陣中であれだけお雪のことを思い続けたのは、どのどいつだ。複雑な気持ちだった。武士としての気持ちと、ひとりの男としての気持ちと、ごちゃ混ぜに混ぜくりかえされている。

やがて、お雪の部屋まで来て、障子に手をかけて、そっと開いた。「え？」

輝虎は我が目を疑った。そこにいたのは、幼き日のお雪。小さな手で鞆をついている。いつもうたっていた手まり歌をくちずさみ、鞆はばんぼん跳ねている。

輝虎が来たのを見とめたお雪は鞆をつくのをやめ、笑顔に向けた。

小さな手でもっていた鞠を置いて、指先を畳につけ。

「おかえりなさいませ」

と、言った。それから。

「輝虎様も……」

と、ふたたび鞠を手に取り、夫に差し出す。それを見て、右手が浮き上がるようにして動いて、鞠でなく、その手にふれようとした。胸に、どっと溢れてくる気持ち。武士としてではなく、男としてでもなく、小さいころ一緒に鞠について遊んだ男の子の気持ち。

―お雪を守るのは、おれしかない。―

そう、想い続けた。でも、その想いはどこに仕舞っていたんだろう。初陣より三年の月日が流れ、ただ、戦で首級を挙げることはかり考えていて。

だけど、この間、現実を見せられて。その時、心の中は、どんなだったろうか。己ひとりが戦に逸っていた、それが、輝虎に馬鹿を見せた。

「お雪」

と、妻の名を呼んだ。

「はい」

という返事。いまいちど見返せば、そこには、成長し美しくなつたお雪がいた。手には鞠を持っていた。輝虎が来るまでのあいだ、鞠について遊んでいたのだろう。

その鞠を持つ手に、輝虎は触れていた。ふたりは頬を赤く染めていた。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その十五

「しばらく、こうさせてくれ」

と、ぼそっと、輝虎は言った。頭こぶをたれて、悲しそうな、疲れ切

った表情をして。

輝虎の顔が赤いのは、自分のしていることへの照れではなく、なにか感情が噴き出しそうなのを堪えているのかもしれない。

お雪はどうしていいかわからず、言われるがまま、手にふれさせていた。

戦で何があつたか知らないが。帰ってきたと思つたら、子供が母親に甘えるようにして、手にふれてきて。突然のことに照れもあつたが、それも徐々にさめてゆく。

長く帰れそうにないのが、思ったより早く帰ってきて。輝虎も無事であると聞いて、待ち侘びていた。待ち侘びるあまり、鞆をついて遊んでいた。

それが、幼き日のことを思い出させてしまったことに、お雪は氣付いていない。

輝虎の手のひらは、つめたかった。それがやがて、ぬくもりをおびてきた。

「お雪の手は、あたたかいな」

また、ぼそつと言った。

そういえば、こうして長くその手にふれるなど、初めてではないか。

夫婦になつてどのくらい経つのだろう、ほんとうに、初心なものだ。

いま輝虎の脳裏には、一緒に鞆をついて遊んだ幼き日々のことが、浮かんでは消えて、消えては浮かんでを繰り返していた。あのころは、主の幼さに不信感を抱く家来たちに随分と悩まされてしまったけれども。

でも、楽しかった。ふたりで一緒に手まり歌をくちずさみながら、鞆をつけて。その時が一番、心の底から楽しいと思えるときだった。男女のことなどまだ知らず、ただの仲良しとして、一緒にいられることがなにより嬉しかった。

今は、どうだろう。

どうして、帰り着くや否や、甘えるように妻の手のぬくもりを求めねばならぬのか。

できることなら、あのころにまた戻りたかった。

ただ、仲良く一緒に鞠をつけた、あのころに戻りたかった。

手にふれてて、お雪の手の小ささを思った。それ以上に、輝虎の手は大きくなっていた。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その十六

ふと、目をさす陽の光。え、とおってお雪は顔を上げれば、障子紙が茜色に染まっていた。

「輝虎様、雲が晴れたようです」

その言葉を聞き、輝虎も顔を上げた。確かに、さっきまで曇り空のせいで冷たそうに白かった障子紙が、茜色になっている。自分が頭を垂れているあいだに、空は晴れ夕陽が顔を覗かせたようだった。

「そうだな」

手にふれて、言葉を出せなくて、そのままにいたいと思うと共に、どうしようとも思っていたが。空のおかげで、言葉を交すことができた。

自分のしてることにはっとして、輝虎はそつとお雪の手から、自分の手を離して。静かに立ち上がって、障子を開けた。

頬を撫でるそよ風を感じながら、夕陽が空を茜色に染めているのを見上げる。

「さっきまで曇っていたのに。すっかり晴れたなあ」

「そうでございますね。夕陽がとてもきれい……」

いつの間にか、お雪も立ち上がって輝虎の隣にいた。鞠は床において、夫と共に夕陽を眺める。

それから、一緒に濡れ縁に座る。そよ風と夕陽の光を受けている

と、なんだか心が和んできて、空と一緒に曇っていた心も晴れてゆくような気がした。

―考えてもはじまらないか。―

ふと、そう思った。けったくその悪いがどうのこうのなど、どうでもよいではないか。こうして城に帰ってこれて、お雪と一緒にいられるのだから。

考えてもみよ。久遠の城を救援にいったときに、命を落としたものもあるのだ。それが、天下を動かすような大戦ならば、死に甲斐もあるうというものだろうが。

結果として、小戦で終わってしまった。そんなことで命を落としたものの無念は、いかほどであろうか。大戦であろうが、小戦であろうが、戦である以上命を落とすものが出るのは仕方がないにしても。やはり、己の生き死のことを思うとき、つまらないもので命を落としたくはない。そんなことになるより、こうして妻と共に一緒にいられることのほうが、どれだけ大事なことが。

お雪は、じっと、輝虎に手にふれさせていた。それがどういうことか。

「おれは果報者だ」

「え？」

「お雪がいてくれる」

「……」

お雪はうつむいてやや黙って、なにやら両手のゆびさを絡ませながら。

「私も、輝虎様のもとに嫁げて、仕合せでございます」

と、言った。輝虎もうつむいて、両手の指先を絡ませていた。

「そう言ってくれるか……」

「はい」

「ありがとう」

こんどは、ふたりの手が触れ合って、指先を絡ませていた。それから。輝虎は、お雪のいる奥の間から出ることはなく。

夜は静かにふけてゆき、風もなく、草木もひそやかなお喋りをやめ、ただ闇夜に身を預けていた。

同じようにして、城も闇夜に身を預け。ただ、降り注がれるような月や星たちの光やきらめきを、受け止めるのみだった。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その十七

いままで、手にふれることすら少なかった初心なふたりが真に結ばれて。

暖かな空気に、その身を重ねあいながら、包まれているあいだにも。事態は刻一刻とかわってゆく。

才木長久が家来の裏切りにより討たれ。それから、諸豪族の動きは二分化したとあっていい。

中村氏のもとに駆け込み傘下に入る豪族と、他のもっと大きな豪族のもとに駆け込み庇護を求める豪族と、である。

中立はなかった。それはすなわち、孤立無援となって、最後には滅亡してしまうからだ。いや、もっともどちらかにつくかで生き長らえるか滅びるかも決まるのだが。

今のところ、確実にというものはなかった。駆け込み組の豪族にしてみれば、これは完全な賭けのようなものだったし。

位置関係もある。どっちの所領に近いかで、どこに駆け込むかを決めなければならない。そうしなければ、「私は敵です。攻め滅ぼしてください」と言っているようなものだからだ。しかし最後の運は、天が決める。

その運が、着いた側にありますようにと祈るしか、彼らのなすことはなかった。

家成は、居城である式頭城の自室の中で、最近側室とした少女に酒をつがせ物思いにふけていた。

―才木は滅ぼした。さて……。―
なら、その次はどうするか。

燭代の火が細々とともる部屋の真ん中にどかっと座り込み、右手に持つ杯を差し出せば、少女は瞳を伏せてうやうやしく酒をつぐ。名はお鹿といい。年は、輝虎に嫁いだ娘のお雪よりひとつふたつ下という。父の名は、才木長久という。

―綾山りょうざんの首を獲るしかあるまいなあ。―
ぐるぐると、思考をめぐらせるも。結局はそこにたどりついてしまつ。

―それしかないであろうな。ええい、もう面倒じゃ。続きは明日にすればよい。―

考えあぐねて、杯を置いたと思ったら、お鹿の手を取り引きよせる。

才木一族の男衆はことごとく仏門に入れた。女も同様に髪を下ろさせ仏門に入れた。しかし、このお鹿はたいそう美しかったので、側室にした。

散々抵抗したにつき才木の一族の血は、根絶やしにするつもりであった。が、せめてもの情けで、俗世間とかけ離れた仏門に入れることで、生きながらにしてその血を根絶やしにすることにしたわけだ。流す血の量くらいはこころえている、ということか。

では、お鹿はどうなるかというと。

「うぬの血に中村の血を混ぜ込んでしんぜようぞ」

と、あまり趣味が良いとはいえない言葉をかけ、押し倒した。お鹿はただ、されるがままだった。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その十八

風雲はつねに動いている。

つねに、誰かの頭上にのしかかってくる。

中村家成がその野心のままに領土を広げて。ついには、綾山氏との領土にまで接した。

これに、当主の綾山常光りょうざん・つねみつが黙っているわけもなかった。次から次へと、豪族たちが庇護を求めてくる。

いわく、中村氏の家来などになりたくない、おなじなるなら常光様の家来がよい、と。

ひげを蓄えた精悍な面持ちとは裏腹に、穏やかな性格をしているこの壮年になるうかという男は、その豪族たちを受け入れている。それは、そのものたちへの哀れみもあるが、どうにも中村家成が好きになれないというのもある。

いつしか雌雄を決せねばなるまいと、つねに心に語りかけていた。放っておけば、家成が稜山氏居城である飯歌城いいたじょうに攻め入ってくるのは、火を見るよりも明らかだ。

あの家成のこと、才木長久の領土を手に入れたくらいでは、満足はするまい。

むしろそれを機に勢いを増してやってくる。

ある日の昼下がり。自室の障子を開けて、濡れ縁に寝転んで日向ぼっこを満喫しようとしたが、できなかった。どうにも、色々と考えてしまう。

鼻をほじくりながら。

—あの男の欲は底なしじゃのう。—

などと感じてしまうが。

その貪婪どんらんさは、乱世に生きるもののかかしであり。それを思うと大きな黒雲がこちらにむかってやってきて、全てを飲み込もうとしているようでもあった。

もう十分であろう、などと家成は思わない。常光はそう思うが。実際、今で十分満足している。だから、こうしてのんびりしていたかったのに。

まさに、家成は黒雲であった。なら、常光はなんであろうか。

「このわしが、黒雲を払いのけるお天道様とでもいうのか……。――
少なくとも、駆け込みの豪族たちはそう見ている。いや、家来たちも同じようだ。常光など、なんとも因果な名をつけられたものだ。それは買いかぶりというものだ、と言いたかったが。それどころではないようだ。その点に関して、選択の余地はなさそうだった。

「やらねばなるまい」

と、舌打ちしながら鼻くそを飛ばしながら言ったとき。一計を案じ、すぐに家来を呼んでその一計の実行にとりかかった。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その十九

それから数日、式頭城に怒号が飛んだ。

「あの餓鬼」

という、大豪族の当主らしからぬ言葉まで飛んだ。

それこそ、目の前にいる城にやってきた綾山家よりの使者に斬りかからんがばかりに、血相を変えていた。

「このわしに、飯歌の城まで来いと申すのか」

と言いのけた後、本当に腰の刀を抜こうとしたから家来は慌てた。「お怒りはごもつとも、されどいかなる理由があるうと使者をお斬りになるのは……」

昔から続いた習慣に逆らうことになる。そうなれば、家成の名を汚しかねないと言った。

それでやっと怒りをどうにか鎮め、使者を蹴飛ばすようにして追い返したのだった。

何をもつて家成は怒ったのか。使者のたずさえた手紙に書かれた内容は、こうだ。

親愛なる中村家成様へ。

近頃ご盛況の様子実にうらやましく思われます。それがし（常光）も、父と慕うあなた様（家成）に仲良くしていただきたいと思っ
ています。

つきましては、おもてなしをしますゆえ、我が城に来られませんか？

お互い酒でも酌み交わしながら、今後のことでも話し合いまし
う。

綾山常光

という、なんと馴れ馴れしいものである。

これが、田舎の若者が親しい老爺に送る手紙なら問題ないの
だろうが。飛ぶ鳥を落とす勢いの大豪族頭領中村家成に対し、ずっ
と年下の隣の豪族の若い頭領がよこした手紙なのだから。プライド
の高い家成が怒るのも無理はなかった。

しかも城に来いということは、仲良くするどころか、従属をせよ
ということをも意味しているのだ。

あまりにも見当違いな手紙であり。仲良くしてほしいのなら、ま
ず常光が出向くべきである。これは、武家の礼儀としても当然のこ
とで、無礼といわざるを得ない。

「あやつ、わしをなんと心得る。中村家成であるぞ」

とわめきながら、家来が見守る中使者の去った広間をぐるぐるま
わった。

家来たちは、どういつていいのかわからなかった。ここで下手を
いおうものなら、その逆鱗にふれとばつちりを受けるのは火を見る
よりも明らかだった。

そんな中、誰かが口を開いた。

「やはり、きやつの首を獲るより他はございませんな」

口元にしわを寄せた老臣の須木屋主水すきや・もんどだった、主水は綾山常光の
討伐を最初に提案した家来でもあった。

いわく、生かせば必ず災いとなる、と。実際、常光の人柄はいう

に及ばず、その人柄にあわぬ戦上手であるという。

これはもう、討伐しかございませぬと、口をきゅっとしぼって主に進言すれば、家成は動きを止めて、頷いて。

「そのとおりだ」

と、言い。戦への決意を固めた。

追い返した使者が、その様子を思い浮かべて薄ら笑いをしていることも知らずに。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その二十

輝虎は、今何がどうなっているのか、全く知らず。今まで胸にとどめていたお雪への想いを注ぎ。お雪もそれを受け止める。

ふたりは、ふたりでいられる時のなかにいた。

ふたりが愛し合うことは、子供のころから、大人から義務づけられたことだった。

でもそうじゃなくて、心の底から、お互いを愛し合いたかった。郷に降り、郷を分ける川の川原を、手を取り合って歩いている。

石ころに足を取られ転びそうになりながら、お雪は輝虎に支えられながら。輝虎はお雪を支えながら、川のふちに向かい歩む。

「きや、あ。あ、輝虎様」

「ははっ。大丈夫か」

「は、はい。なんのこれしき」

と、お雪は強がりと言った。輝虎はそれが可笑しそうだ。いつも城の中にいる妻が。

「輝虎様と一緒に外に出てみとうございます」

といったので。輝虎はお雪と共に馬に乗って、言葉通りここまでやってきた。それまで、輝虎の背中にしがみつのお雪が落ちはしな

いかと冷や冷やものだだったのは、内緒だった。そのふたりの乗った馬は、どこぞの木にくくりつけている。

お雪は初めて見る川の流れや、そのきらめき。ほどよく丸みを帯びた色とりどりの川原の石ころを、子供のような好奇心一杯の目にながめていた。

そういえば、こうして外に出ることは初めてだった。箱入り娘とはよくいったもので、外に出ること自体あまりなかった。

時折桑の実をお凜やお藤と一緒にとりに出かけるも、おひい様の身を案じる忠実な侍女や乳母の気遣いからすぐに戻ってくる。

そのたびに、もっと向こうに行きたいという気持ちができきて、それを、夫が叶えてくれた。

日差しも城にいるときとは、違って感じる。何の隔たりもなく、じかに降り注いでいるようで、それにくすぐられて見も心も暖かになってくる。

少し上を向けば、周りを囲む山々。その山々のどれかに、お城がある。そのまた上、青い空に白い雲。雲はゆっくりと空を泳いでいる。

「わあ」

と、声を上げる。何もかもが新鮮だった。空気まで変わったようだった。川辺ということもあって、ほどよく涼しい。

輝虎に身を預けながら、子供のころ、自分が嫁ぐ前のことを問うた。

「輝虎様は、ご幼少のころよりここで遊ばれていたのですごくいますか」

「そうだな。十兵衛らと一緒に、郷のこどもたちと合戦ごっこをしたものだ。たまにお凜もまざってたな。まったくお凜のお転婆は天性のものだ、十兵衛がのめされて泣かされていたくらいだからな」

「まあ」

ふと、お凜の名を聞いた途端、何故かそっぽを向いた。

輝虎は、「えっ？」と不思議そうだった。何か悪いことでも言っ

ただろうか、いやしかし、ただ幼少のころのことを言っただけだ。
では、なにがいけなかったのだろうか。

—ここでお凜とだなんて。—

ここでは、よそ事を忘れて自分と輝虎のふたりきりでいたかった。
それなのに、他の女性の名前を出してしまうなんて。というより、
どうして今他の女性の名を聞きたくない気持ちになったのか。

お雪自身もよくわからなかったが。それがやきもちだということ
を知ったのは、ずいぶん後になってからだった。

「どうしたんだ。何かあったか？」

「い、いえ。なにも……」

「そうか」

と、言うや否や、輝虎はお雪を抱きしめ。

「ここは誰もおらぬ。おれとお雪のふたりきりだ」

と言った。そうだと思つて、お雪は顔を上げれば。互いの唇が触
れる。どちらからともなく、互いの唇を求めていた。

ここではふたりきりなのだから、そのために、ここにいるのだか
ら。

続く

第二章 あやめ（菖蒲）の旗 頁三

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その二十一

十兵衛は、同僚の善景とともに城の庭に出て、剣の稽古をしていた。

ほんとうなら、輝虎と稽古をしたかったが、いかんせん、今しがたその奥方とともにどこかへと風とともに行ってしまったではないか。

で、仕方なく、善景に稽古の相手をしてもらっている。が、これもまたいかんせん、手ごたえがない。善景はどちらかといえば内政向けの男で、剣や槍でひと働きともなると、どうにも頼りない。

「ま、参った」

と、木刀を二振り三振りしたところで、早々にもろ手を上げる始末。

「へっ？」

このあっけなさに、さすがの十兵衛もきょとんとしてしまい。結局のところ、十兵衛の稽古、というより、善影への剣術指南になっってしまった。

家中で十兵衛と対等に木刀を振り回せるのは、主の輝虎ただひとり。他のものは、誰一人として十兵衛と稽古をしたがらなかった。もしうかつに相手をしようものなら……、次の戦に出ることができなくなってしまうからだった。

「あのう、善影殿。本気で打ってほしいのだが……」

「わかっている、わかっているのだが」

もちろん、善影が内政向けとはいえ、いざというときには戦に出ねばならない。それが、十兵衛にのめされ出られなくなるなどということがあるては、武士の面子にかかわり、さすがにまずいし。親父の晴景になんと言われることやら。

それでも気の強いところはあつて。その昔、十兵衛に説教をくれたことがある。輝虎に対しあれこれと不満たらたらな十兵衛に向かい、「そんなに不満があるなら反逆でもしてみろ」と、怖い事を言い十兵衛を黙らせた。「殿とおひい様の首をはね、津川家の旗を立てよ」と。

このあたり、やはり善景もまた武士なのであるということでもあり。それでいて根が善良に出来ている、ということを示すエピソードにもなっている。

それはともかくとして、これでは稽古にならぬと十兵衛は濡れ縁に腰をかけ。空を眺めた。やけに雲の流れが早かった。

「はあ。さてさて」

つまらん、と言つてやりたかったが、さすがに善景が年上だということを考え、口に出しては言わなかった。

「やはり、おぬしの相手は殿でなければつとまらぬな」

と、苦笑する善景。まったく、と心の中でうそぶく十兵衛。我ながら強くなつてしまった、で、稽古をつけた輝虎もまた強くなつてしまった。

それはいいのだが、そのおかげで、この間のような軽率な振る舞いをしてしまうのがある種の悩みどころでもあった。

―大将としての自覚をもつともってほしいものだ。―

と、たびたび思う。今お雪とともに出かけているのだから、ほんとうなら慎むべきであり、どうしても行くというのなら、警護のためのお供をつけねばならないのに。

ふと、善景がうわの空になつていることに気付いた。はあ、とため息をつき、問いたです。

「奥方の腹におわす『やや』が気がかりでござるか」

「ん、んん、まあ」

やはりうわの空で応える善景。めでたいことに、善景の妻お八重は腹に子をみごもつていて、そのことで頭が一杯のようだ。晴景など、そのことに有頂天になり。涙を流し嫁に「でかした」といい、

何度も孫の顔をはようみたいと繰り返していた。

十兵衛はなぜかやるせない気持ちになって、ふたたび空を見上げた。やはり、雲は早く流れていた。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その二十二

やけに早く流れる雲。

お雪と一緒に郷の川原まで下りたときの帰り、輝虎自身もそれを感じていた。

―また戦があるか。―

十七での初陣以来、幾たびもの戦場を駆け巡り。その気配を感じられるようになり。武士としての本能が、血を騒がせる。

これからももっともたくさんの戦があり。それに馳せ参じなければならぬ。

輝虎は、中村家成の家来であり、娘婿であるのだから。家成が戦をすると決めれば、それに対し断る権利をもちあわせていない。お雪を妻にしたことと同様に。

輝虎の権利、それは先祖代々受け継がれてきた大高の小城一つと、その領土の保有。その権利のために、家成の命令に従う義務がある。だからこそ、義のために戦わねばならない。だからこそ、命を賭けてきた。そのために、多数の家来をなくして。

その中で、気にかかることがある。

―もしおれが死ねば、お雪はどうなる。―

あのきれいな黒髪をおろし、尼になって亡き夫の菩提を弔うか。

まだ十八の若さで……。

それとも、一度出戻りをして、他のものもとへ嫁ぐのか。そういう事例はたくさんある。未亡人となった女性が、またよそへ嫁ぎ、そこで新たな生活を始める。

家と家を繋ぐ道具として。いわゆる、政略結婚で。そこで更なる仕合わせをつかめれば、それはそれでよいかもしれない。しかし、更なる不幸に見舞われぬとも限らない。

そう思うと、ただならぬものを感じた。お雪が、他の男のものになるなど。決して許したくはないことだった。

輝虎はお雪しか知らない。お雪も、輝虎しか知らない。

―死ねぬ。―

武士たるものの考えることではない、しかし、死ねば死に切れぬ思いをすることはまず、間違いない。

だが、さきほど述べたように、戦にゆくのを断ることはできない。ならどうする。

勝たねばならない。

鬼神のごとく戦い、己を討とうとするものを、討たねばならない。いや、討たれる前に討たねばならない。

そのために、強くなるうとしたのではないか。そのために、前の戦で才木長久の首をもとめたのではないか。

なら、次にもとめるは誰の首か。

綾山常光。

その名が浮かんだ。

中村家成と双璧をなすこの大豪族のもとに、多数の小豪族が駆け込み庇護を求めているという。となれば、このままいけば戦は免れない。

それくらいのことは、輝虎にもわかる。

わかるだけに、これからますますの武者働きをせねばならないと、強く心に誓ったのだった。

早く流れる雲は、それを見た人の心を逸らせるだけはやらせて、夜の帳に飲み込まれて。月の輪にわずかばかり白いところを照らされて。

それもまた、流れていて。

月は雲の幕の向こう、うつすらとその身を夜空にさらす。

十兵衛は鞘に納まる刀を肩に担いで、その夜空を眺めながら。我が館（といってもそれほど大きくはないが）の庭で、夜風が恋しいとばかりに、その身をなでさせる。

いや、なにもこれと言った理由は、あるにはあるのだが。手燭も持たず月明かりのみを頼りに、庭に出た。

母の言葉が、今も鼓膜をついている。

「そなたは津川の家を絶やすのか」

昼間見た、善景のぼうつとした顔が思い出され。ため息をつき、ついには館を出た。どこに行くでもない、城に続く郷の小道をただうろろとする。

目が暗さに慣れて、月明かりもあって、特に不便はなかった。

十兵衛、いまだに嫁はない。

手ごろな大きさの岩を見つけ、そこに腰掛ける。肩に担ぐ刀の鞘の重みが、のしかかる。母の言葉がそのままのしかかっているようだった。

―だがなあ、母者よ。おれは嫁などほしゅうない。―

男色というわけではない。しかし、女にさほど興味もない。それでも、胸につかえるもの。

自分のわがままで母と、亡き父を困らせているのはわかるが。

母は言う。晴景殿が妬ましゅうてならぬ、と。孫の顔が見たいという、親としての心。十兵衛は、いまだにそれをかなえられないでいる。

さてはてと、考えをめぐらせている時。草のざわめき。

とっさに刀を鞘から抜いて、身構える。

何奴？ と、息を殺し草をざわめかせるものの気配を探れば。

「十兵衛か」

と呼ぶ、女の声。

「な、なに？ その声は」

と、姿を現したのは、お凜だった。

間違いない。幼馴染みであり大高家の侍女であるお凜が、今目の前にいる。しかし、奉公の身で勝手に城を抜け出すなど、下手をすれば打ち首である。

「ど、どうして。お凜おぬしなにをしている」

「そういうあんたこそ、なにをしているのよ」

お互いが驚いていた。まさかこんなところで、と闇夜の中からぼうつと浮き出る顔にある目を見開いて。十兵衛は刀をそのまま、お凜に向ける。

こやつまさか「くノ一」か、と思ったが。そのあとあっさりと鞘に収めて、それにお凜のほうが無気取られていた。

「あんた、なにしてるの」

「ん、いや。おぬしがくノ一など、ありえぬと思ってなあ」

「そりやどついう意味よ」

「自分で考える」

「まったく。疑いもしないなんて、そつちの方が余計にタチが悪いわ」

「なら疑ってほしいか。おれがおぬしを城までしょっぱけば、打ち首までもいかずとも、十叩きくらいはいくぞ」

「い、いや……」

「そうだろう」

と、くくつと笑った。ばったりと会った幼馴染みの侍女をからかって面白がっているようだ。昔こそ喧嘩で負けたこともあるが、今はどうか。

だが、そんなのんきなことなどにすぐに頭から引つ込めて。お凜のふくれつつらなど、目に入らない。

「まったく、家来と侍女がそろってこんな夜中になにをしているの

だろうな」

「……」

お凜はなにと言わない。こんなことは、あつてはならないことだ。領土統治という面で、秩序に関わる問題である。こんな時代に、自由に夜外に出歩く自由を皆に与えれば、暗殺者さんいらっしやい、とばかりに我が身を危険にさらすことにもなる。

もっとも、大高の郷を納める大高家の殿様はどちらかというのんき者が多いから、それほど厳戒態勢がしかれているわけではないようだ。それはふたりをみればわかる。

ふと見れば、お凜はため息をついた。なにか悩みでもあるのだろうか。この元気すぎるほど元気な侍女が。と思えば、おもむろに、口を開いた。

「ねえ十兵衛」

「ん？」

「あたしを嫁にしない？」

その言葉に、十兵衛は一瞬石になってしまっていた。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その二十四

「はあ？」

「……」

お凜は自分のいったことの恥ずかしさに耐えかねているのか、諸手を握り締めている。暗くてよくわからぬが、顔は真っ赤だった。突然なんだ

「だ、だから。あんたの嫁になら、なつてやつてもいいって、言ってるのよ」

「冗談だろ」

「冗談ではない」

身もだえするお凜に対し、十兵衛は平然と返している。それが、さらに身をもだえさせる。

どうして、と。お凜は心の中で繰り返す。必死になって勇気をふりしぼっていったのに、相手はそ知らぬ顔。それが、己にただならぬものを感じさせていた。

自分にいわれても、なんともないのだろうか。そう思うと、女としての恥辱を覚えてしまう。そりやお転婆で、それほど美人というわけでもないが。

「母者か」

十兵衛の声を聞き、お凜の動きがぴたりと止まる。どうやら凶星のようだ。

「なるほどな。母者は孫をほしがっていた。津川の家を恋しがってあった。だから、だれぞよき娘をと思ったのだろうか。よりにもよっておぬしをか」

普通、侍女は皆殿様のもので、家来が勝手に嫁にしてよいものではない。それこそ、輝虎がお凜を欲しがれば、そのままその身を差し出さねばならない。が、このような小さな家はそれが徹底されているわけではなく。

だれぞの嫁になって、いとまをもらった（やめること）侍女も何人かいる。

それ以上に、輝虎はお雪以外はまったく望んでいないので。侍女が夜伽をするということもない。こういえば、輝虎とお雪は純愛で結ばれているともいえるが。実際のところはそんな生半な言葉ではまず、それこそ死活問題でもあった。

もし輝虎がお凜をはじめとする侍女に手を出せば、どうなるか。主君の家成の娘をめとりながら、不埒千万と。取り潰しの良い口実を与えてしまうのだ。

お雪は、輝虎の首輪として嫁がされたのだから。

それはともかくとして、十兵衛は母がお凜に、我が家に嫁に来ないかなどと話していたことに呆氣にとられていた。そりや確かに幼

馴染みで他の郷の娘よりも知ってはいるが……。

「母者にも困ったものだ」

「どうしたことよ」

「おれは、嫁など要らぬ」

「十兵衛……」

「それより、どうして城を出た。見つかつて打ち首をくらっても文句はいえぬぞ」

「そ、それは……」

十兵衛は後に続いた言葉を聞いて、頭を抱えた。

「よ、夜這い？ おれのもとに夜這いにゆけ、と。母者がそう申したのか」

「……」

お凜、なにも言わない。なにも言えない。羞恥心と恥辱がないまぜになつて、身を震わせる。

「あれは甲斐性なしだから、女の方からゆかねばなるまいと、そう言われて。あとのことは、輝虎様に言つてなんとかするとか」

「それで、首を縦に振ったのか。ばかな」

こんなばかな話があつてなるか、と十兵衛は首を横に振った。どこに息子の幼馴染の女に、我が息子に夜這いをせよなどと言う母親があるか。

それほどまでに、嫁が欲しかったのか。しかも、お凜はそれを引き受けた。

血を残す。それは武家に生まれたものにとつて、なによりも代えがたいものだつた。その執念に、お凜は飲み込まれてしまったのかもしれなかった。下手をすれば、十兵衛も飲み込まれる気持ちだつた。

「とにかく城にもどれ。母者からはおれのほうから言つておく」

「それは」

「言つたはずだ。おれは嫁など要らぬ」

そう言いながら、襟元から見える白い肌が気になっていた。人並

みに持ち合わせるものは持ち合わせているのだろうが。振り払うように、お凧を追い返そうとすると。

「馬鹿！」

と、叫ばれた。

「なにが馬鹿だ」

「せっかく嫁になってやるというのに」

「いらぬ。それにおれが馬鹿なのは前からわかっていたことだろう、今さらなにをいうか」

「だからあんたは馬鹿十兵衛なのよ！」

捨て台詞をはき、たたと、小走りに城に帰ってゆくお凧。その闇に飲み込まれる後姿を眺めながら、十兵衛も岐路に着く。

やはり、昼間善景を見たときと同じ、やるせない気持ちになっていた。しかし、その雲の流れる早さを思えば、と思うと、我知らず首を横に振っていた。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その二十五

風が吹いている。だが、風は雨雲を蹴散らせられず雨のつぶてを弾のように兵たちにぶつけている。

皆、兜や陣笠からしたたりおちる雨粒に目を射られ何度も目を閉じていた。中には、槍で突かれ刀で着られて、永遠に目を閉じているものもあった。

足元は雨でぬかるみ、ふんばりがきかず。馬も役に立たない。

輝虎はやむなしと馬を降りて、徒歩立ちになり槍を振った。輝虎のみならず、味方も敵も、足を泥まみれにしながら徒歩立ちで戦っていた。

ふと見れば、菖蒲あやめの旗がひとつ、雨に濡れて、倒れ、それをたくさん**の**兵たちの足で踏まれて、泥まみれになっている。

我知らず舌打ちをして、突っかかる敵兵を槍で突く。

「こりやたまりませんな」

後ろから僚友の久遠実成が叫んだ。振り向けば、兜のまひざしからしたたり落ちる雨粒越しにその姿が見えた。実成は槍を折られて、太刀を手に戦っていた。

泥沼の戦い。そのままの言葉のことが、今ここで起こっている。

ついに起こってしまった綾山常光との戦。

避けられないと誰もが思ったことだった。

家成は常光への怒りに任せて、家来たちを総動員して、綾山領飯歌の城へと攻め込んだものの。

待ち受ける綾山の軍と真っ向からぶつかった。それと同時に、雨が落ちてきた。

雨に打たれ、体力の消耗も著しく。それでも、戦わねば、死ぬ。

齒を食いしぼり、輝虎はひたすら敵兵に槍を見舞う。

顔には雨粒とともに、突いたものの血がとびちる。雨粒を血で落とし、それから血で雨粒を落とす。それを何度繰り返したか。

――ご武運をお祈りいたしております。――

という、お雪の言葉が脳裏をかすめる。

一緒に鞠をついた手で、刀槍を握って。

「ぎゃっ」

という、声にもならぬ声。

見れば、自分より少し年下のような、まだあどけなさの残る少年の兵を、おのれの槍で突いていた。

その槍を抜けば、待ってましたとばかりに、今度は自分たちの家来が一斉に飛びかかり、同じように槍で突いて、ハリネズミにする。いつだったか、お雪と初めてのくちづけをしたとき。

「初陣首など取らせはさせぬさ」

と言った。

しかし、ともすれば、その言葉に反して。この少年兵のようになっ
っていたかもしれないのだ。

少年兵は物言わぬ屍となつて、その首は誰かの手に掴まれていた。だが哀れにも思うこともなく、感傷になどひたることもなく、またふたたび槍を振るっていた。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その二十六

常光は言う。

「いずれは、中村家成と雌雄を決せねばならぬ」

その言葉に、家来たちや、庇護を受けている小豪族たちは固唾を呑んだ。いよいよ、戦が始まるのだ、と。もう常光は、そのつもりでいるのだ、と。

「どうせ避けられぬ戦だ。なら、わざわざこちらから正直に仕掛けることはせずに、向こうから来てもらおう」

と、家成を挑発する手紙を送りつけ。

その思惑通り、相手は挑発に乗った。

それを知ったとき、家来や小豪族たちは、黒雲がこちらにやってくるかのごとく、顔色を失い恐怖した。中村家成の軍勢の強さは、四方に響き。小豪族たちの中には、その強さを身を持って思い知らされているものもある。

だが、常光は動じない。

「ならばこそ、勝機はわれらにあるぞ」

と、全軍を鼓舞した。

挑発に気付き、笑って済まされれば、常光も多少は頭を抱えたるうが。それはなく。見事なまでに、おのれの思い描いたとおりに相手が動いてくれた。

どしゃ降りで、両軍ともに泥沼の死闘を演じる中。雨粒が叩き付けるのもかまわず、常光は采配を振るった。さすがに馬は役に立たぬが、己の足で立ち、自軍を指揮する。

だが、戦況はかんばしくないようだ。次から次へと、押されているという知らせがひっきりなしにやってくるばかり。

―やはり中村家成の軍は強い。殿は道を誤まれた。―

常光のそばにいて、一緒に知らせを聞く家来たちは、主の開戦の意をひそかに呪った。しかし、常光は動じない。いやそれとも、これも作戦のうちか。

口元を引き締め、しきりと何かを待っているようだった。

「中村家成の娘婿、大高輝虎の軍の勢い凄まじく。次々と陣を突破されております」

その知らせが来たとき、家来たちはみな思わず、おお、っと声を上げた。家成の娘婿のことは、以前からうわさされていたことで。あの才木長久も、その娘婿に滅亡のきっかけを与えられてしまったではないか。

「殿、ここはひとまず退き。またあとで陣を立て直すしかないのは」

誰かが言った。しかし、常光は聞かない。

「待て。まだ堪えよ」

「しかし、何を待つのですか」

「わしに考えがある。それまで動くな。動けば負けとこころえよ」

「とは？」

「わからぬか、その輝虎という若武者の強さは最初からわかっておったことだ。それよりも、万事わしの言うとおりにせよ」

「ははっ……」

納得しきれず、やはりわからないような家来をあえて無視し、常光は仁王立ちのまま。采配を握る手に力がこもる。

家来たちは、ただ茫然としている。雨に打たれ、そんな中で自軍が押されているといういやな知らせを聞かされて。

それなのに、まったく引こうともしない常光の指揮はどうであるうか。皆、恐ろしさのあまり狂われたかとまで思うものもあった。

常光自身、なにも思わないでもない。家来を犠牲にしているのだ。

こうしているあいだにも、次々と犠牲が出ている。しかし、犠牲が出るのは承知の上だった。

犠牲を出さずに済む方法など皆無である。戦を起こすということは、そういうことなのだ。

「なに、本当に負けたときは、わしもそやつらのもとにゆくさ。――と、自分に言い聞かせて。

そんな中で。

「ついに田尾和孝殿の陣が破られました」

という知らせ。田尾和孝という家来の敷く陣は、ここよりそう遠くないどころか、目と鼻の先ではないか。

いよいよ本陣に迫られようかというところまで、敵は来ている。

「よし引け」

と、やっとその待ち焦がれた下知（命令）が飛んだ。だが。

「敵に背中を見せて走るな。ゆつくりとじわじわと、後ろに下がるのだ。逆らうものは斬る、よいな」

という下知までも一緒に飛んだ。何故だと思いながらも、逆らえば斬ると言われれば、それに従うしかなく。常光の配下のものたちは、敵にも、主にも、ひそかな怨みを抱きながら下知に従うしかなかった。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その二十七

おかしい。

輝虎は槍を振るい敵を打ち破りながら、そんなことを考えた。

押しても押しても敵は動かない。頑強に壁のように立ちはだかり、前進を阻む。

これは正直堪える。

今までのこし強さを見せれば、すぐに敵は逃げ出したのに。それ

はなく。防戦一方ながらも、まるで足を地に植えつけているかのように、まさに壁のように立ち塞がるではないか。

気がつけば味方を置いてけぼりにして、自分たちが一番前だ。この泥沼の中でもそれだけ強いということなのだが、素直に喜べない。

打ち破っても打ち破っても、果てがない。まるで無限回廊の中にさ迷いこんだような、虚無感と脱力感を感じずにはいられなかった。自身はもとより、家来たちや、実成ら同僚たちの疲労はいかばかりか。

なのに、家成は仮の宿とする寺社にこもり。そこで号令を飛ばすばかり。家来だけに命を賭けさせて、自分は安全な場所にいる。

主に不平不満を抱いてはいけけないのだが、釈然としない。

—あのお方はそのようなお方であったか。—

虎と恐れられたほどの猛将が、雨を嫌がって外に出ない。そんなことがかつてあっただろうか。いついかなるときも、悠然と騎乗にて家来たちを指揮し、鼓舞していたはずなのに。

才木長久を破ってからというもの、なにかが変わりつつあるようだった。

「お、やっと引きはじめたか」

十兵衛の声がする。十兵衛も敵の粘り強さにへきえきしていた、そこで敵が退却をはじめ、やっと勝機が見えてきた。輝虎と十兵衛のみならず、ここで戦っているものたち皆がそう思った。

だが、しかし。

おかしい。

敵が引きはじめても、その違和感は変わらない。

少しだけ壁が揺れた。でもそれだけで、壁が消えたわけではない。それどころか。

知らずに手をつかまれて、引き摺り寄せられているような気がするの、気のせいだろうか。

これは、おかしい。おかしすぎる。

「待て、深追いをするな」

思わず叫ぶ。十兵衛はそんな輝虎を珍しそうに見ている。いつもならここで勢いに任せて突っ込む主が、待てとは。

十兵衛もまた、異変に気付いたようだ。

「輝虎殿。何をしておる」

僚友の実成が追いつき、留まる輝虎のもとまで来る。

「実成殿、おかしいとは思わぬか」

「おかしい？」

「そうです。おかしい、何かがおかしい。あんなに粘っていたのが、とたんに引き始めた。それはよい。問題はその引き方です。まるで、手をつかんで引きずりこむような……」

「……？」

「それがしもよく言えないのですが、ここは深追いをせぬ方がよいのでは」

よくわからぬが、輝虎がそう言うなら、そうしたほうがよさそうだ。ふとそう思いかけたが。そこでぶつけられる怒号。

「おぬしたち、そこで何をしておる。敵は引いておるぞ。なのになぜ追わぬ。追って完膚なきまでに叩こうとせぬのか」

須木屋主水だった。主水もこのどしゃ降りの中に身を置いて戦ってはいたが、ずっと後ろの方で、前に着いてゆくだけだった。それが、敵の後退に気を良くして、やっと前に出てきたようだ。

「しかし、その引きようがおかしいのです」

「輝虎殿よ、臆したか、もったいなくもお屋形様よりおひい様をいただいた身でありながら。何故にこの機を自ら見逃そうとする」

「主水殿、言わんとすることはわかりますが。輝虎殿の言うことも一理あります。敵は戦上手といわれた綾山常光でござる、何か策があるのでは？」

策、そうだ策だ。さっきから感じている違和感、それは相手がなんらかの策を構えているのではないかということ、それがあるのではないか。

頑強に立ちほだかりながら、しかも手をつかんで引き摺り寄せるようなゆっくりとした退却。

そこには、策というものがあるのではないか。もしこのまま進めば、その策にはまってしまうのではないか。

「ばかばかしい。それこそ臆病というものじゃ。いやよいのじゃ、そのことお屋形様にとくとお伝えするまでのことよ」

主水の言葉が終わるか終わらぬかのところで、そばで聞き耳を立てていた十兵衛が、ずかずかと主水のもとまでゆこうとする。それを善景があわてて止める。

そのあいだにも、敵はゆっくりと引いている。

その時、雨がやみ、雲間から陽がのぞく。主水はそれを見逃さなかった。

「あれを見よ、ご神仏も行けと申しておるぞ。この吉兆にもかかわらず、それでも行かぬと申すのか」

実成はこの天候の変わりようを、うらめしく思わずにはいられなかった。なんということだ、と。心の中でつぶやいた。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その二十八

「見よ、空を見よ、ご神仏が我らを見守っておられるぞ」

常光は采配を天にかざし、声高に叫んだ。そのあと、おお、という歓声。

灰色の景色の中、雲間を貫き通す陽の光。

雨も完全にやんだ。

「勝利は我らにありと、ここで中村家成の魔軍を破れと、ご神仏が申されておるぞ。臆するな、討たれたものの仇を討ちたくはないのか、ここで負けてなにかもを中村家成に奪われてしまうのか。いやであるう。ならば戦うしかないのだと、そうご神仏は申されてお

るのだ」

この天候の変わりようを常光は吉兆ととらえ、ゆつくりと引きながら、自軍を鼓舞する。家来たちとともに雨に打たれながら、采配を振るった甲斐があった。

もし屋根のあるところでくつろぎながら自軍を指揮していれば、すぐにそのことに気付くことなかっただろう。

家来たちは、常光の意をくんでくれたようで。あれは吉兆ぞと、皆が言葉をかわしあい。ひとたび落ちた戦意を取り戻す。

天候の変わりよう一つで、こうまで人の心も変わるものか。

―ご神仏の加護は我にあるぞ。―

という確信的なものが、常光自身にもこみあげてくる。

やがて雑木林がみえてきた。ふと、まだ元服もせぬ幼い日に、この林やその周辺で遊んだころの記憶が頭をよぎる。だが今は懐かしさを噛み締めるようなゆとりは、ない。

すかさず軍の大部分をその林の中に押し込め、自らはさきほどと同じ、わずかばかりの手勢とともに林のわきをゆつくりと、引く。

「殿、気は確かでござるか」

「ああ、確かだ。確かだからこそ、さ」

と、主を気遣う家来に微笑みかける。さきほど大高輝虎に自陣を破られた田尾和孝だった。退却の下知のとき、ほうほうの体で常光のもとまで逃げてしまつて。それをひどく気に病んでいるようだった。

にもかかわらず、常光はとがめるどころか他の家来と同じようにこれからどうするのかを和孝に話してくれて。是非その役目をそれがしに、と何度繰り返したことが。だが、その役目は常光自身が引き受けるという。

「なに、一番良い方法をとっているだけのことさ」

「……」

笑顔の主に、和孝はなにも言えなかった。

そうすれば、勢いに乗った中村家成の『魔軍』が追いついてくる

ではないか。勢いに乗るといっても、雨がやみ陽がのぞくといっても、まだ足元はよくなく。皆徒歩立ちで追いかけてきている。

「それゆけ、綾山常光はあれにあるぞ、もう一息ぞ」

と、主水は大腿で駆けながら叫ぶ。

輝虎はうるさそうにしながら、槍を握り締めて同じように駆けている。どしゃ降りのなかの戦いで疲労がたまりにたまっていたが、休むことも出来ない。それは、皆同じだった。

ただひとり、主水だけが鼻息を荒くしている。

疲れのせいか、ほとんどの者たちがただ身体の覚えている動きをしているに過ぎない状態で。そんな中では、警戒心も薄れてしまっている。

そのまま、雑木林のわきを通り過ぎようとしていた。

常光は、やった、と叫びたいのを堪えて。采配を天にかざした。

そうすれば、わつ、という関ときの声。

今こそ『魔軍』を打ち破らんと、雑木林から吐き出されるようにして大勢の兵たちが群がり出て、中村家成の軍勢のわきを突いた。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その二十九

「これは」

という主水の声がしたあと、それからの主水の姿を見たものはなかった。

あろうことが、進軍を強く主張した主水が突然の不意打ちにたまげて、真っ先に逃げ出してしまっていたのだ。

「ばかな」

という、実成の言葉。あれだけ進軍を強く主張しながら、この様はどうであろうか。これこそ家成にとくと伝えて、責任を負うべきではないか。

だが今はそれどころではない。

ひっかかってしまったのだ。

常光はみずからをとりとして、敵をおびき寄せたのだ。そこまでは思い至らなかったが、案の定、策にまんまとひっかかってしまったのだ。

綾山領内に深く入り込み、行く先に林があるなど知るわけもない。逆に、常光にはこちら辺の地理は明るい。

引きながら、引く先にある林に軍を潜ませて。自らをとりとして、敵をひきつける。

ひたすら常光を追うことばかりだったため、林に待ち伏せがあるかもしれないという警戒を怠り、その隙を突かれた。

「あの糞爺い」

十兵衛は叫びながら槍を振るう。だが、どれだけ叫んだところで意味など無く。

迫り来る敵兵を槍で突く以外にすることはなかった。でも、それもいつまで続くことか。

輝虎も槍を振るう。ひたすら敵兵を突く。

「よし、我らも行くぞ」

という常光の声。家来たちは皆、歓声を上げて乱戦の中へと突っ込んでゆく。もう常光に抱いた怨嗟などなくなっている。それどころか、常光の策が当たったことに歓喜し、勝利を確信していた。

形勢は一気に逆転した。いや、最初からそうなる手はずだった。

「主水などのばかさと無恥のために」

輝虎は主水をののしったが、どうしようもない。

いやな予感も当たった、それも最悪のかたちで。だからといって自分たちまでが無様に逃げられようか。

「踏みとどまれ。踏みとどまって、戦うのだ」

と、槍を振るい戦った。

だがその声も、刀槍の弾く音や叫び声に掻き消されて。どのくらいまで届いていることやら。もはや四方が敵である。

逃げたところで、逃げ切れるかどうか。

—こんなことで、死ぬのか。—

戦いながら、やり切れぬ思いがこみあげてくる。

—お雪……。—

先日、死ぬぬと思った。おれが死ぬばどうなる、それを思うと、死ぬぬと思わずにはいられなかった。それが、今はどうか。

「あつ」

という、聞き覚えのある声がした。それは善景であつた。見れば、足に槍が刺さっているではないか。

「善景！！」

輝虎は慌てて駆け寄り、善景の足を突いたものを、突き返す。だが足を突かれた善景は立つことも出来ず、尻餅をついてしまった。その間にも、敵は続々と迫り首を狙ってくる。

「殿、それがしのことは捨ておいてくだされ。でなければ殿が」

「馬鹿なことを申すな、おぬしには子が生まれるではないか！」

「しかし」

「生きて帰って、子の顔を見たくはないのか。八重を、子を腹に宿したまま後家にしたいのか」

「……」

善景はなにも言えなかった。

己の弱さはよく知っているが、その弱さのため、主に手をかけさせようとは。それだけではない、妻と子のことを気にかけてまでいてくれようとは。

「お雪が子を産めば、おぬしから父としての心得を学ばねばならぬ。それまで死ぬことは許さん」

足の痛みを感じながら、善景の目に涙が浮かぶ。輝虎の、家来を想う気持ちは嬉しいが。

しかし、この有様では。

迫り来る敵を、善景をかばいながら槍で突き倒すも、現実問題としていつまでもつか。

そんな輝虎の姿を見て、善景はそつと脇差を抜いて。
己の首を突いた。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その三十

戦いながら輝虎が目にしたものは。己の喉を脇差で突いて、息絶えた善景であった。

「善景！！」

我知らず叫んだ。しかし、駆け寄ることも出来ず、ひたすら槍を振るうことしか出来なかった。

― ばかな、なぜそんなことを。 ―

こうして守っていたのに。

足手まといになるのを嫌がったのか、そんなことなどちっとも思っていないのに。ほんとうに、善景から父としての心得を学ぼうと思っていたのに。

目に涙が浮かび、視界がかすむ。

こんなばかばかしいことのために、大事な家来を失うことになるうとは。

なにがご神仏なものか、あれは天魔が我らを誘い出していたのではないか。

だが、どうしたところで善景が生き返るわけでも無く。こうなった以上は、彼の遺志を酌むしかないだろう。

その時。

「そこにおわすは大高輝虎殿とお見受けするが、いかがか」

と、呼ぶ声。それは田尾和孝だった。

輝虎に陣を破られ、そのことに自責の念をもっていた和孝は、汚名返上と輝虎を捜し求め。ついにそれらしき若武者を見つけ出したのだ。

齒を食いしばって、己を呼ぶ声に振り向く。槍を持った武者がひとり、輝虎に突っかかってくる。

「その通り、大高輝虎である。我が首を取って手柄を立てたいと申すか」

「左様」

その言葉が終わるか終わらぬかのあいだに、和孝の槍が突き出され。輝虎はそれをすんでのところで、己の槍で払いのける。

それから、激しい槍での打ち合いとなった。

上から、右から、左から、隙あらばすかさずと槍の穂先を振りかざして打ち出し。そのたびに止められ、かえされ。

この乱戦の中はじまった一騎打ちに、気がつけば周りのものは皆戦いの手を休め、両将の勝敗の行方を見守っていた。

異変に気付いた実成は、敵を切り伏せながらその方へと行く。そうすれば、輝虎が誰かと一騎打ちをしているのではないか。

「て、……」

輝虎殿と呼びかけて、とめた。その輝虎の形相に怖気おそけを感じたのだ、のみならず、どうしてそうなのか。それは、かたわらにある善景とかいう家来の遺体を見てわかった。

―哀れなるかな、このようなことで果てようとは。―

と、密かに胸のうちに追悼の意を表し、他のものとともに一騎打ちを見守ろうとすれば。向こう側に、善景のもとへと行こうとする年老いた武者を、必死になって後ろから羽交い絞めにしてとめる若い武者の姿があった。

―あれは、晴景に、十兵衛か。―

晴景は哀れになるくらい狼狽している。十兵衛が必死に止めているにもかかわらず、死んだ息子のもとへ行くためそれをなんとか振りほどこうとしていた。

「善景、善景、善景」

と、涙と鼻水をたらしながら何度も息子の名を呼んでいる。だが若い十兵衛に後ろから羽交い絞めにされて、動けない。

「落ち着かれよ、落ち着かれよ。今行ってもどうにもならぬ、せめて一騎打ちが終わってからにきなされ」

十兵衛は必死に止めている。晴景の哀しみがわからないわけではない、十兵衛も、初陣の折父を亡くしている。父も、同僚の善景も、輝虎のために死んだのだ。

晴景をとめながらも、涙が流れ落ちるのをとめられなかった。

そうこうしているうちに、輝虎と和孝の周りを人が囲んで。その周辺のみ、休戦状態となつて。ひと打ちのたびに、おお、という声上がる。

そして、ひと際大きな歓声。

和孝はその巧みな槍さばきで、輝虎の槍を弾き飛ばしたのだ。

「いかん」

実成は思わず叫んでしまった。

すかさず和孝は槍を構えなおし、とどめを刺すためのひと突きを繰り出す。

槍を弾き飛ばされ無手になってしまった輝虎は、和孝ではなくその槍を見据え。

上手く身をかわし、その長柄をひつつかむ。

「むっ」

悪あがきを、と思いながらつかまれた槍を力任せに戻そうとすれば。輝虎は足を踏みしめ引かれるほうへと、つかんだ槍を押した。

てつきり槍を奪おうとして力任せに引っ張るものと思い込んでいた和孝は、突然のことにバランスを崩し。すかさず輝虎は槍を放し、バランスを崩した和孝の胸元へと飛び込みながら、太刀を抜き。その太刀を振り上げる。

和孝は後ろへと転びそうになりながら、振り上げられた太刀を見上げた。それが、最後に見たものだった。太刀の向こう、空を覆う灰色の雲が流れて、その雲間からお天道様が顔を覗かせていた。

それから、輝虎の太刀は、和孝の兜を割り。さらにそのあごまでを割った。

続
く

第二章 あやめ（菖蒲）の旗 頁三

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その三十一

常光みずから槍を手にとり、この乱戦の中を駆け巡っている時にわかに騒ぎ出す雑兵たちの姿を目にした。

―どうした。―

敵に不意打ちを食らわせ、形勢は一気に逆転し、あとはその敵を木っ端微塵に打ち砕くのみという時に。

「殿」

と呼ぶ声。家来がひとり息せき切って駆け寄ってくる。

「何事だ」

ともに槍を繰り出しながら、何事かと聞けば。

「い、一大事でござる。田尾和孝殿が、家成の娘婿に」

「和孝が、娘婿にだと。どういうことだ」

「う、討たれ申した」

「なに！」

すると、あとからあとから、雑兵たちがあらぬ方向へ向って走ってゆくではないか。皆、恐怖の色を湛えて。それを見たほかのもの達にも、その異変は伝わった。

これは何事か、皆そう思った。

「ばかめ」

それだけを言うと、苦い顔をあらわにし。

「もうよい、引け」

と、下知を下す。

もう十分に、敵に打撃を加えている。これ以上無理をする必要もあるまい。だがそれ以上に、あるうことが、仮にも一部隊長をつとめるものが討たれたとあつては。

ひとり討ち死にでも、雑兵が討たれるのと大将が討たれるのとで

は、わけが違う。大将ひとりの討ち死にで、戦の形勢が大きく変わることもあるのだ。単純に言えば、大将とは強く頼れる者をさす。その強く頼れる者が、討たれたとなれば。その下の者たちの動揺いかばかりか。

下手をすれば、こっちが逆転されるおそれがあった。だから、今勝っているうちに引かねば。

よく聞けば、一騎打ちを申し出、それで討たれたというではないか。

―家成の娘婿に陣を破られたのを悔いたのだろうが、それにしても軽率な真似をしてくれたものだ。―

そう思わずにはいられなかった。哀れに思わないでもないが、部隊を率いるものとしては、やはり軽率すぎた。そのために、己は討たれ。

そのために、引かねばなくなってしまった。

この時、常光の脳裏にひらめくもの。

―家成の娘婿は、必ずや殺さねばならぬ。―

そうしなければいけないような気がしてくる。

胸に殺意を生んで、それを秘めて。常光は残りの一突きを敵兵に食らわせて、軍を引いた。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その三十二

自分が倒した田尾和孝にも目もくれず、輝虎は善景のなきがらのそばにいて、呆然と立ち尽くしていた。

大将が討たれたことで、綾山の兵たちはみな恐慌をきたし、一斉にその場から逃げ出している。仇討ちと、輝虎に挑もうとする者はいない。

挑んだところで、和孝の二の舞を食らってしまうのがオチだ。そ

れだけの強さを見せ付けられたあとでは、逃げるより他はない。

右手で血塗られた太刀を握って、善景と、善景のなきがらにすがりつき泣きむせぶ情景を、輝虎は閉じられそうな目で見下ろす。逃げ出す敵兵にも目もくれない。

「……」

なんと言葉をかけてよいやらわからぬ実成だったが、はつとして「引け、もうここに長居は無用じゃ。引け、引け」

と、腑抜けになってしまっている輝虎に代わって下知を下す。林からの不意打ちで大きな打撃をこうむり、多数のものが討たれ、とてもこれ以上の進軍は出来ない。

それ以上に、この進軍そのものが不必要なものだったのだ。須木屋主水などのために……、と普段温厚な実成ですら怒りを感じ、このことを、主君の中村家成にとくと伝えねばと思っていた。

そうでなくば、ここで死んだ者たちがあまりにも哀れである。

「そうじゃ」

と、十兵衛もはつとして、輝虎が倒した和孝のもとにゆき。その割れた兜を取り、両の耳をそぎ落とそうとする。

輝虎が氏清父子を前にしてあの有様では、自らの手で『手柄』を持って帰るところまで気が回らぬであろう。

本当なら首を取って帰りたいが、あごまで割れていては持ち運びが不便だったし、それ以上に、さすがに歴戦のつわものである十兵衛でも、あごまで割れた顔を見るのは堪え切れないものがあつた。

兜と両の耳を持って帰り、それを輝虎の『手柄』の確かな証拠とするのだ。この状況下でも、輝虎は果敢に戦ったということを、皆に伝えたかった。もちろん、中村家成にも。

割れた兜を取り、耳をそぎ落とす最中、ふと背筋に怖気を感じた。この割れた顔をつくりあげた主の輝虎にも、怖気を感じた。

輝虎の怒りと哀しみは、それだけ大きかったということだろうが。これが戦なのだと、まざまざと思い知らされる。

やがて引き潮のように両軍の兵が引いてゆき、あとには死んだ者

たちが残された。

善景は晴景がおぶっている。首筋に血がしたたる、それを意にか
けず、鼻をすする音をさせながら、ただおぶって歩く。

孫の誕生を子と一緒に祝いたい、その想いは儚くも崩れ去ってし
まった。

善景が、武士であつたがために。

「この親不孝ものめ」

と、何度も何度も、繰り返しつばやいて。首筋にしたたる血の冷
たさを想う。

気がつけば、空の雲は風に流されて、蒼天が広がっている。雲は
思い思いの姿かたちになって、つわものどもをあとにして、空を旅
してゆく。

隠すもののなくなつたお天道様は、その恵みの光を降り注ぎなが
ら、ただ下界を見下ろす。

草花の雫は、恵みの光を受け、きら、きら、と輝いて。水たまり
は空を映し出して、輝虎の目にも、水たまりに映る空が見えた。

それを踏みつけ、空を濁してゆく。空を濁したあとに、見たもの
は。

泥にまみれた、菖蒲の旗だった。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その三十三

敗戦の報告をうけた家成は、最初こそ顔を真っ赤にしたが。やが
て落ち着きを取り戻し。

「勝敗は兵家の常である」

と、諸将だれひとりとして、責任を問わなかった。

確かに戦に破れたのは痛い、取り返しのつかないほどのもので
もないし。さきほど述べたように、勝敗は兵家の常である。

戦をする以上、勝つこともあるし負けることもある。それでいちいち咎めていては、キリがない。

という旨のことを家来たちに言った。

輝虎も実成も、主水も、家成の滞在する寺社にてその労をねぎらわれて。

その中で、輝虎が綾山家家来の部将を討ち取ったことが何より嬉しそうで。割れた兜と耳をさしだし、さすがは我が婿殿よ、と機嫌よく褒めちぎったものだった。

それどころか。

「はよう孫の顔をみせよ」

とまでいった。

輝虎はただ、ははっ、と深く頭を下げた。

自分のことなど、どうでもよいのだ。主水が敗戦の責任を取らされて、なんらかの処罰をうけることを期待していた、なのに、そうはならなかった。

確かに、勝敗は兵家の常である。家成の言い分がもつともだと、自分に言い聞かせるしかなかった。

しかし、孫の顔となると、こればかりは天からの授かりものである。みせよといわれて、すぐにみせられるものではない。

結局のところ、何もいえず。帰還を許されて、それに甘えて帰るしかなかった。

善景はというと、宿营地でだびにふされた。さすがに、そのまま郷へ帰すわけにはいかなかった。

帰り際、実成が輝虎のもとを訪れてきた。

朝、宿营地を引き払い、一路郷に向おうとする少し前のことだった。

「輝虎殿と話がしたいが、よろしいかな？」

と、気さくな表情で、ひょっこりと徒歩で姿を表したのだ。まるで近所さんへちよつと挨拶を、とでもいいたげに。

遺骨を納めた木箱を抱いて哀しみにふける情景や、物憂げな十兵

衛を横目に、訪問客を出迎える輝虎。

その顔を見て、実成はほえんだ。まだ疲れてはいるようだが、背筋をピンと伸ばし、なにごとでござろうか、とはきはきとした声で出迎える様は、まさにまだはたちの若者であり。

それが、うらやましくもあつた。

「いやいや、ちと、詫びをと」

「詫び？ いえ、実成殿に詫びられるようなことはありませんが」

「それが、あるのですな。ほれ、この前、わしが輝虎殿に言ったこと。大物うんぬん、と」

「ああ」

この前、久遠の城が才木長久に攻められ、その助けに行った時のことだ。そのとき実成は「ご自慢の武勇は大物にお使いなされ」と、輝虎にいった。

そのとき、大物がだれになるかまだわからなかったが、今回、綾山常光という大物を相手にして。その結果……。

「あのとき、わしは大物との戦というものがわかっておらなんだでな。つい軽くいつてしまったが。それが現実となると」

「いえ」

輝虎はあわててかぶりを振った。そんなことなど、とつくに忘れていた。それを、実成は詫びたいという。

「そのようなことで、実成殿がわたしに詫びる必要などありません。むしろ色々と助けていただいたて、こつちが礼を言わねばなりません」

田尾和孝を討ったあと、輝虎に代わって実成が軍を手際よく引かせてくれた。

詫びるという実成に、輝虎は遠慮して。ありがとうございました、と頭を下げた。

「そうでござるか。では、次にあいまみえるときまで、お達者で」

と、実成は自分の宿营地へと帰りゆき。輝虎はその背中を見送った。次にあいまみえるのは、そう遠い日のことではないだろうし。やはり、今回と同じように、ともに戦うことになるだろう。

ともに中村家成の家来なのだから。そして、自分は中村家成の娘婿なのだから。

「よし、帰ろう。郷に帰ろう」

と、輝虎は皆に言ってまわった。

今せねばならぬことは、それなのだから。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その三十四

輝虎らが郷に、城にかえりつけば。お雪をはじめとする女たちはたすきを巻いて、男たちに握り飯をふるまった。

早馬からの伝言で、もうすぐ皆が帰り着くことを聞いて。それと同時に、ひどい負け戦で、善景をはじめとしてたくさんのもんたちが死んだことも聞いた。

「……」

はじめは絶句していたお雪だが、すぐにお藤やお凧たちに命じて、米をたき、握り飯を作らせ。みずからもたすきを巻いて、はたらいた。

「おひい様みずから……。もったいなや」

敗戦のショックでこれでもかとしよげかえっていた男たちは、涙を流しそうになりながら、お雪の持つ盆の握り飯を手に取り、ひとつづつ残さず大事そうにほおばっていた。

お雪はただの城主夫人ではない、中村家成の娘なのだ。ゆびさきにささくれが立つことすら許されないほど、大事にされねばならない存在なのだが。

お雪自身、それがいやだった。

それこそ、お藤やお凧がとめようとしたが。

「わたしはただここに鞠をつきに嫁いできたのではありません」

と、とめるのも聞かず、はたらいた。米のとき方やたき方は確か

に知らぬが、皆に配ることぐらいのことは出来る。その昔、採った桑の実を、皆に配っていた。

男たちが戦から帰ってきてても、なにもせず笑顔を振りまくだけだった。でも、こたびの戦のことを聞いて、いてもたってもいられなくなかった。なにより善景は、輝虎のためにみずから果てたというではないか。

広間で腰を下ろす男たちの間をすり抜けはたらきながら。

―八重になんと言えば。―

そればかり考えていた。

「お雪……」

そんな妻の姿を見、輝虎は何も言わなかった。お雪が皆に握り飯をふるまう様にも見とれず、同じように。

―八重にどう言おうか。―

と、考えをめぐらせていた。八重は氏清家の邸宅にて、夫の帰りを待ち侘びているはずだ。身重でなければ、ここで皆と一緒に握り飯をくばっていたことだろう。

さすがに城主だけに、他の者たちのようにうなだれるわけにもいかず、背筋を伸ばしてしゃきつとして、お雪から受け取った握り飯をほおばる。

米が、甘くしみた。

大きくなった八重のお腹を思うと、涙がにじんでくる。

「ばかめ」

と、ちいさくつぶやいた。

晴景は、いない。庭に出て、陽の光になでられながら、ひとり哀しみをかみしめている。

とても飯など食おうという気にならなかった。

十兵衛は壁にもたれて、足をのばし、天井を見上げていた。その昔、善景に喝を入れられたことを思い出しながら、握り飯をほおばっていた。

お雪も、お藤やお凜も、皆の沈み具合を見て、よほどのひどい負

け戦であつたことを思っていた。

負け戦は今までもあつたことだ、それでもすぐに立ち直り、また次の戦へ元氣よく出向いたものだったのだが。

綾山常光との戦は、そんなにも厳しいものだったということだろう。

―武士とは、善景どのようなお方をいうのであろう。―

お藤は、ふとそんなことを考えた。それと同時に、晴景のあの落ち込みようは、いかばかりか。善景のあの優しい性格を思うと、厳しくも大事に育てたのは容易に想像できるし、なにより似合いの父子であつた。

八重もまた気の毒なことだと思わずにはいられないが。武士の妻であるということは、そういうことなのだ。

ただ、生まれてくる子が不憫でならなかった。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」その三十五

輝虎とお雪は晴景とともに、氏清家の邸宅へと出向き。そこで出迎えた八重に、すべてを語った。

居間にあつて、輝虎とお雪は上座に座して。その正面に八重、控えめに後ろに座す晴景。それらの間に、木箱。

遺骨をおさめた木箱を目の前にして、八重は、ぱつと涙をあふれさせて床に突つ伏したが、輝虎とお雪の手前、すぐに氣を取り直し涙をぬぐい。お見苦しいところを……、と言い、姿勢をただす。

それを見たお雪も、胸が張り裂けそうだった。八重のおなか、その中にいる、ふたりの子。

「見苦しいなどと、そのような。これで泣かぬようにというのが、無理というものです」

「お心遣い、いたみいます」

そう言いながらも、今も涙をこらえてふたりのまえで毅然と姿勢をただし正座をする八重。それを見、輝虎はいてもたってもいられず。

「どうだろうか」

と、八重になにか望みはないかと聞いた。

欲しいものがあれば、望みのままに、と思つてさえもいた。自分のためにみずから命を絶つた善景に少しでも報いてやりたくて、そのようなことを言つた。

「されば」

と八重は少し考えて、ふと、何かを思いついたように、望みを語つた。

「生まれてくる子が男であれば、殿のご幼名を、女であれば、おひ様の名を、いただきとうございます」

「名を……」

名を与える、それは主が家来にしてやれるもつとも名譽的なことだ、しかし辺境の小豪族である大高家の家中にあつては、その名譽に対する意識は薄い。

金なり食べ物なり土地なりという、実利的なものこそが真に褒美とするものであるが。

八重はそれらはいらぬという。代わりに、名がほしいという。

「はい、それをお願いいたしとうございます。それでこそ、我が夫の面目が立つというものでございます。是非、名をいただきとうございます。わたしも、武家のむすめでございますれば」

武家のむすめ。

その言葉がすべてだった。八重は、生まれてくる子に名譽をさずけてやりたかった。父は殿のために死なれたのだ。その褒美として名を頂戴したのだ、と。亡き父を、誇りに思えるように。

そのためには、名をもらうことより他はないと、八重は考えた。

だが、これはみずから望むものではない。主が自発的に家来に与えるものであつて、ある意味、これほど図々しい望みもないのだが。

輝虎も、お雪も、八重の意を酌むよりほかはなかった。

三人のやりとりの間、晴景は何も言わなかった。

八重の言葉を聞き、義父として、武士として、黙って嫁の望むままにすることが、最良の方法だと思っていた。

輝虎は、ひとこと。

「わかった。そのようにせよ」

と言い。それから、しばしの沈黙。

木箱の前に、何をどう話せというのか。

目を閉じ、ため息をつく、おもむろに輝虎はたちあがり。お雪がそれにつづく。

正直、この場にいるのは辛い。そのまま玄関まで歩く。見送りのため八重がそれに続くが、晴景は残った。それが何を意味するのか、輝虎はやむなしと、何も言わずにおいた。

邸宅の玄関まできたとき、お雪は、八重に。

「子が生まれたら、是非わたしにも抱かせてもらえませんか」と言った。

悲しそうにしながらも、どこか微笑ましそうに、八重のおなかを見ていた。自分もいつか同じように、子をなし、母親になるのだ。そう思うと、なにか腕に抱きたくなるような願望をおぼえずにはいられず。この空気の中場違いなと思いながらも、つい言ってしまった一言だった。

その一言に少し戸惑った輝虎は。

「これ」

と、小さく言う。

だが八重は意に介さず。

「もちろんですとも、是非抱いてくださいませ。子も喜びましょう」と、微笑んで応える。

八重も、お雪が大高家に来た当時のことを知っている。

あるとき大高家に嫁いだ九つの女の子が、もう母親になってもよい年頃になっいて。月日の流れというものを、思わずにはいられ

なかった。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」最終話

それからひと月ほどして。

八重は、子を産んだ。男の子だった。

名は、千丸と名付けられた。

お雪は出産に立ち会い、生まれたばかりの千丸を見つめ。

八重のそばで静かに眠る千丸の頬に、おそろおそろ、ふれた。

子は、ななつまで神のうち。

その言葉の意味を思い。とても小さくて、少しふれただけで消えうせてしまうのではないかというような、どこもないはかなさを覚えながらも。

その頬にふれたとき、それはたしかに生きているという、命あるものの息遣いとぬくもりを感じた。

すると、千丸の口が開き。あ、という声を上げようかとして。あつ、と思ひ慌てて手を離す。

その様子を、八重は微笑ましそうに見ている。

男たちはというと、戦にかりだされている。

晴景すらない。

輝虎は、八重のそばにるように言ったのだが。

「少しでも殿のお役に」

といって、無理矢理ついてきてしまった。善景を失った悲しみを、戦で忘れたいのだろうか。孫が生まれるというのに。

いや、だからこそ、なのか。

この哀れな老人に何を言っても聞きそうにもなさそうなので、輝虎は戦に行くことを許し。十兵衛は、今度は晴景のお守りをせねばならなくなってしまった。

大高家の家中のものたちはみんな、菖蒲の旗のもとに生まれて、生きて、そして死んでゆく。

千丸もまた、そういう生き方をしてゆくことになるのだろう。

「おひい様」

八重が、千丸を見つめていたお雪にいった。

「先日言われたとおり、千丸を抱いてやってくださいませんか」

布団にくるまり横たわって、顔をすこし倒し、我が子を見つめている。出産の疲れから、すこしやつれているようにも見える。

それでも、我が子、千丸を見つめる瞳は潤んで、輝いていた。

「いえ、まだ生まれたばかりですので……」

そばにいた産婆が、戸惑うお雪をあわててとめ。子供は鞠とは違うのですよ、と八重に説教をたれる。

「そうですね。わたしつたら、なんてせつかちなんでしょう」

八重は、自分のせつかちさがおかしくて、ふふ、と笑う。子供を無事出産できたことが嬉しいあまりのせつかちさだった。

千丸はそんな母親など意に介さず、開きかけた口を半開きにして、目は閉じられて、すやすやと眠っている。

お雪は、なにも言わなかった。何と言っていいのかわからなかった。

こうして新しい命が生まれる一方で、命を落とすもの。それこそいま男たちは戦の真つ只中にいる。

それが世の常であるという。

人の一生は、無常であるのに。

その人の一生は、みんな等しく、千丸のような小さな赤ん坊からはじまる。

お雪は、もう一度、その頬にふれようとしたが。

―それにしても、なんと小さな。―

と、思いとどまって、やめた。また起こしそうになって、泣かせてしまっても申し訳ない。

それにしても、赤ん坊のなんと小さなことかとを、思わずにはい

られず。

その小ささを思ったとき、自分の手をなにげに見てみれば。

鞆にふれていた小さな手が、子供を抱けるほどには大きくなって
いたことに気付いた。

第二章「あやめ（菖蒲）の旗」 終わり

第三章「赤日」に続く

第三章 赤日

第三章「赤日」その一

その腕に抱く赤ん坊の笑顔に、お雪は顔をほころばせて。

優しく体を揺らせば、揺れが心地よいのか、まだ歯の生えぬ小さな口をひらき、赤ん坊は目を輝かせて笑う。

腕の重みを感じながら、お雪は腕の中の赤ん坊に頬ずりをする。

頬に、赤ん坊の頬の柔らかさとあたたかみを感じた。

「おひい様」

そばにいろお藤が、すこし困ったような顔をしている。

「そろそろ千丸どのを八重に返してあげてはいかがですか」

「そうでしたね。そろそろ母親の乳が恋しいでしょうし」

それを聞いて、お雪ははっとして。お藤に八重の子、千丸を預ける。

千丸が生まれてひと月して、お雪は初めて赤ん坊を腕に抱いた。

思ったよりも重かったが、抱くうちにいとおしくなつて。気が付けば、八重に千丸をつれてこさせて、毎日のように自分の腕に抱いていた。

「おひい様は八重から子を取り上げたいのですか？」

可愛がるのはいいとしても、はたから見ればまるで母親から子供を取り上げようとしているみたいで。お藤は見かねて、ついそんな皮肉をいつてしまった。

最初こそ頓着のなかった八重も、さすがに最近は困っているようだ。

お藤に。

「いくらなんでも……」

と、ついもらしてしまったこともあった。お雪に可愛がってもらうのは嬉しいが、そのお雪の腕に抱かせるためだけに生んだのでは

ない。それ以上に、千丸は亡き善景の忘れ形見でもあるのだ。

その忘れ形見を、鞠で遊ぶような感じで抱きたがるというのは、
どうだろうか。

「八重に、詫びてください。申し訳ないと」

自分のしたことを反省し、哀しそうなお雪。

乳母としてお雪を幼少のころより育て上げたお藤だ、お雪のことが
わからないわけではない。

しかし、いくらかは分別というものを持ってもらわねば。城主夫人が、家来の子を抱きたがるというなど、古今聞いたことがない。
辺境の小さな豪族の家だからこそ許されるかもしれないが、これ
がお雪の実家である中村家であればどうなることやら。

晩方、輝虎とともに夕食をとっているとき。何度もため息をついて
しまっていた。

「どうした？」

妻の様子を案じて、輝虎が声を掛ける。その声色の優しさに引き
寄せられるように。

「いえ、千丸のことですが」

「ああ、千丸か。可愛いだろう」

自分の幼名を与えた赤ん坊を、輝虎も好きだった。だが、お雪の手前もあるが、自分が腕に抱く赤ん坊は、自分とお雪の子でありたい
と思う。千丸を抱くことはなかった。

それでも、内心は一度くらいはなどとも思わないでもない。

「いえ、今日お藤にいさめられました。八重から子を取り上げたい
のか、と」

それを聞き、思わず苦笑いをしてしまう輝虎。

「取り上げるか。お藤もきついことを言う」

「ですが、その通りですね。善景どのの忘れ形見であることを忘れ、
鞠で遊ぶように……」

「まった」

善景、その名を聞き、途中で言葉を止める。

「もうよい、終わったことだ」

と、言った。それ以上続けられたら、あるとき、善景が自分のためにみずから命を絶ったことを思い出し、泣いてしまいそう。いや、お雪も今にも泣き出しそう。よほどお藤のいさめが堪えたのだろう。

「よし、酒でもやるか」

「え？」

お雪はあまり酒が飲めない。それを思い、輝虎はお雪の前で酒を飲むことはなかったし、一緒に飲むこともまれであったが。今宵はともに一献、と言い出した。

「こんな時は、酒を飲めば良い。酒が、哀しみを溶かしてくれるかな」

と、輝虎にしてはめずらしく風情のあることを言った。

「まあ。お上手ですこと」

「なにが」

「そのような風情あることを、輝虎様でもいわれるのですね」

「おいおい、それではまるでおれは風情がない男のようではないか。そのようにおれを見てたのか」

「いいえ、滅相もない」

といいながら、なんだか笑いをこらえているみたいだ。さっきまで泣きそうだったのに。

やがて、侍女のお凜が酒と杯を持ってきて。杯をお雪に手渡し、酒をついでやった。

つがれた酒を少し口にふくめば、言われたとおり、胸中にある哀しみが身体の奥底へと溶けてゆくようで。それから、火照るような心地よさを感じて、ほっとため息をついた。

中村家成と綾山常光との戦がはじまり、気が付けば、山々の木の葉の色が紅く色づこうとしていた。

朝夕の風が涼しくなつてゆくのを肌身で感じながら、輝虎らは槍を振るい、戦場を駆け巡るも。

一進一退を繰り返し、なかなか決着はつきそうになかった。

ただ、刀槍を、己自身を、血で染めあげてゆく以外になかった。今も輝虎は、戦場の真つ只中、騎乗にて槍を振るっている。

乱戦の中、土ぼこりが舞う。それを突っ切り、槍を突き出す。そうすれば、ひとり騎馬武者が馬から落ちる。

そのまま駆け抜けたとき、顔には土ぼこりや返り血がこびりつく。「やあ、あれにあるは中村家成の娘婿ぞ」

「それ討ち取れ」

と、敵もさるもの、輝虎の戦場での働きを見て功名心を震わせて、いつせいに飛びつくように迫ってくる。それを、ひとり、またひとりと槍で突く。

しかし。

「さすが家成の娘婿よ、一筋縄ではいかぬわ」

輝虎が働けば働くほど、功名心はよりいっそう刺激されるのか、ひるむどころかますます迫ってくる。

逃げるものがないわけではないが、そんなものはまず輝虎の前に現れない。

現れるのは、輝虎の首を獲り手柄を立てたいという、名うての腕自慢ばかりだ。

「貴様ら、この津川十兵衛を知らぬか」

輝虎に次から次へと敵が迫り、とてもひとりでは防ぎきれそうもなかった。家来の十兵衛が、そのサポートにまわる。他の家来たちも主が討たれては大変と、輝虎を取り囲み必死の働きをして、そこでやっと一角を崩す。

そうなたらそうなたで。

「おのれ家成の娘婿め」

そう罵りながら、相手は引いてゆく。

―ちっ。―

と、舌打ちする。必死の働きで敵を引かせたものの、引っ掛かることがある。

―おれの名は、大高輝虎だ。娘婿ではない。―

何かにつけて、輝虎が家成の娘婿と呼ばれているのを、今までの戦でいやというほど聞かされた。これではまるで、虎の威を借る狐のようだ。

それは、何のためにか。

舅である中村家成への義のためでもあり。一城の主として、守るものがあるためでもあり。

そこに、野心というものの入り込む余地は、なかった。功名など、蛇足である。そのために槍を振るうのであれば、お雪を妻として愛してゆくこともなかった。

愛情を、闘争心へと転化し。戦場へと赴く。

それが、輝虎の生き方だった。

それは、お雪を妻として迎えた日よりさだめられたものだった。

第三章「赤日」その三

空は晴天、お天道様が地上に恵みの光を降りそそぎ。戦場の広野を囲む林の木々は、降り注がれる陽の光を受け止め、切り裂くように吹きつける涼風が、木々を揺らす。

揺らされる木々から、いくつもの葉が舞い散り。土ぼこりの中へと落ちようとする。その土ぼこりから響き渡る怒号、刀槍の音。そしてまた葉は舞い散り、地に落ちてゆく。

地に落ちた葉は、雑草らとともに無数の足で踏みしだかれて、降

りそそがれる血で赤く染まった。そこに覆いかぶさる武士のしかばね。首はなかった。

それもまた踏みしだかれる。

輝虎の槍は一閃する。そのたびに、血はしぶき、誰かが地に崩れ。しかばねは積み重ねられる。

そのしかばねを越えて、ひたすら前へ、前へと突き進む。

その手に握る槍で、綾山常光を討ち取るのだ。

だが、その姿ははまだ見えず。

奥歯を噛み締め、またひとり槍で突き倒す。

――綾山常光はいずこに。――

倒しても倒しても、津波のように押し寄せる敵兵たち。突き崩したと思つた一角は、後詰の部隊が駆けつけ、また新たな壁となって立ちはだかる。

「おのれ」

火でも吐くような声だった。綾山常光は戦上手とは知っているが、こうして突き崩した箇所がささず補修されて。結局またふりだし。ということが何度あったことか。

いままで、才木長久までは、少し強いところを見せればすぐに相手は引いていったのに。

「輝虎殿」

と、呼ぶ声。僚友の久遠実成だった。実成は輝虎のよきパートナーとなつて、なにかと助勢してくれる。十兵衛も実成の声が聞こえたか、開きかけた口を閉じる。

「もう潮時でござろう。これ以上戦つても無益でござる」

そのとおりだ。相手はこちらの力量を十分推し量つた上で戦をして、その手はずをきちんと整えているようだ。見よ、さきほど突き崩した箇所から、溢れんばかりに兵が集まり始めている。このままいけば、必ずや飲み込まれてしまうことであろう。

「引け」

槍を掲げ後ろを指す。もうこうなつては引くしかない。

相手もこちらが引くを見て、同時に引き始めた。必要以上の戦いで無用な損害を出さないため、追ったところで家成の娘婿に返り討ちにあうかもしれないとの警戒のため、後姿を見せず。槍を突き出しながら後ずさりしてゆく。

その用心深さが癢にさわり、輝虎は舌打ちする。十兵衛は息をのみ、その用心深さだけでなく、手際のよさに感心する。

実成は自分の部隊のみならず輝虎の部隊にも気を配り、スムーズな撤退が出来るようしきりに声を大にして皆を導く。

突き進むことは得意でも、後に引くことが苦手な若手の弱みを上手く補っている。

だが、これを何度繰り返していることが。

結局今回の戦も、ただの『戦』で終わってしまつて。何も得るものはなかった。

第三章「赤日」その四

またか。

という、舅、家成の言葉。今回もさしたる戦果なく、互いに刀槍を打ち合わせただけ、ということへの苛立ちもこめられていた。

過日、常光よりの挑発的な手紙を受け取り、開戦を決したものの。この様はどうだろうか。

虎と恐れられたこの中村家成が、若い綾山常光にてこずっている。紅い夕陽が山の陰に隠れようとする時刻。本陣とする古寺にあつて戦場より引き揚げた娘婿ら家来一同を出迎えた家成は、眉間にしわを寄せ、戦の報告に耳を傾けている。

長く伸びた皆の影が、石のように固まっている。

結局のところ、何の進展もなかった。それが戦の報告であつた。「もうよいわ」

というや否や、古寺の中にひきこもってしまった。古寺といつても、昔はそれなりの格式があつたのだらう、十数人程度の人数ならなんとか泊まれるだけの大きさはあつた。その中の個室を、家成は使っていた。そこに一人の少女がいた。

お鹿であつた。先に滅ぼした才木長久の娘で、生き残つた一族のごとく出家させてしまつたが。このお鹿はたいそう美しかったので、側室にした。それを、戦にもつれてきているのだ。よほど気に入つたのだらう。

「おかえりなさいませ」

と床に指をつき平伏する。

それを見て、うむと頷き。それから、お鹿は家成の鎧を脱ぐのを手伝う。その間、黙りこくつていた。家成もお鹿も。

もともとお鹿は物静かでおとなしい性格をしている。言い換えれば、つまらぬ娘ともいえ。その若さと美貌がなければ、出家させられていた。

よそ事を思っていたのか、うつかり、家成の肌に爪を立ててしまった。

「なにをするか」

と、怒号とともに平手が頬に飛んだ。ぴしゃりという音が室内にはじけ飛ぶ。

「お許しくださいませ」

痛みを感じる暇もなく、慌てて額を床にこすりつけ平伏して詫びる。

「どいつもこいつも、まったく使えぬわ」

と怒鳴り散らし。それをかわすように、お鹿は身を伏せるしかなかった。それから、出てゆけという一言。今宵は伽などいらぬ、ここより出て、どこぞで寝よ。という。

戦に連れてゆくほど気に入りの側室にそこまで言う家成の、その心情は、いったどのようなものであつたらうか。

「……」

お鹿は物言わず、部屋をあとにした。家成の側室ゆえ、猛々しい男たちからいたずらをされることはないだろうが。適当な場所を見つけ、木の床にねぞべりそこで夜を明かさねばならなかった。

家成の気まぐれで、好き放題に扱われて。

一族の皆とともに、出家させられていたその方がどれほどよかったか。と何度も思い。このような境遇に身を置かねばならぬことに、引き裂かれるほどに惨めな気持ちだった。

そして、どうして自分がようになったのかを思い、胸のうちにたぎる怨嗟の念。あの家成の娘婿のせいで、このようなことになってしまつて。

今になって、はたかれた頬がしびれだして。目に涙がにじみ、流れ落ちる。

中でそんなことがあるとも知らず。実成は古寺を眺め、あごに手を当て物思いにふける。

いまでこそ人っ子一人もない古寺も、建てられた当時は寺の住職や僧侶、周辺の郷に住まう信徒らで賑わっていたことだろう。それが、長く続く戦乱のため、皆出て行つてしまつて。

いまや血生臭い武士どもの寝所にされてしまつて。

「ご神仏のお嘆きはいかばかりか」

ぼそつとつぶやいた。

野営で夜を明かさねばならない実成や輝虎たち家来衆は、星がきらめきだし暗くなりつつある空の下、郷への恋しい気持ちを胸に抱いて。ひとときの眠りを貪る。

明日も生きているかなど、その時になればわからなかった。

第三章「赤日」その五

その明日になった。

綾山常光を討て、という果たさねばならない至上命令。

その至上命令のもと、刀槍も、血も弾き飛ぶ。

その中を、輝虎は駆ける。

朝方、目覚める前に夢を見た。

お雪の夢であつた。

お雪は言う。

「輝虎様が戦で人をあやめておられるなど、考えられませぬ。いいえ、考えとつもございませぬ」

どうして、あのお優しい輝虎様が、どうしてでございまするか。という妻の言葉。

一瞬、目が見開き、口は半開きで止まり、息を強く吐き出す。

―どうもこうも。―

誰かが突つかかってくる。

「おぬしのためではないか」

そういつたとき、騎馬武者がひとり地へと崩れ落ちる。槍で突かれた胸から血を噴き出しながら。

目もくれず、もうひとり。

―おれがこうして戦にゆかねば、家も城もない、おぬしも一緒にいられぬのだぞ。―

戦にゆく前、お雪を抱きしめていた。

お雪は輝虎の胸元で、ご武運をお祈りいたしております、といつてくれた。

これが今生の別れになるかもしれない。そう思つと張り裂けそうな気持ちになる、しかし、ゆかねばならない。

ご武運とは、どういう運をいうのだろうか。

はつと、思い浮かぶもの。

善景の子の千丸を腕に抱く、お雪の姿。

そうだ、こうして戦うのは、千丸のためでもあるのだ。もしご父君のご勘気をこうむり、家を潰されれば、千丸と遊ぶことも出来なくなるのだ。

ただ、戦をしているだけではない。すべてを、すべてを守るために、家成の命に従い戦にゆくのだ。

それを、ただ人をあやめるというのか。

しかし、どうしてそんなにそれが気になる。

それは、輝虎自身が一番感じていることだからか。いや、己は武士ではないか。と自分に言い聞かせ、戦場を駆け抜けてゆく。

その姿を見る綾山の軍勢のものたち。よってたかつて輝虎を討とうとする。

「殿」

十兵衛だ。相変わらず突っ込みすぎる主のあとを追ひ、大声を張り上げる。

「深追いでござるぞ、自重されよ」

何をそんなに力んでいるのか知らぬが、あまりにも無鉄砲だ。ただ勇に任せてひた走る一平卒のようだ。

「殿」

もう一度読んだ。聞こえないか、輝虎はそのまま突っ込もうとする。それどころか、なにやら口走っているようだ。その口の動きから。

「綾山常光はいずこにある」

と叫んでいるようだ。

常光は家成と違い、自ら進んで戦場に立つ。まるで首を獲ってくれと言わんばかりだが、もちろんそうではない。つねに戦場に身を置き戦うことが、家成と戦う上で、常光自身が決めた信条でもあり。またそうすることで、家来たちを鼓舞することになる。

御大将自らが槍働きをすれば、部下もおのずと励むものだった。強大なものを相手にするには、それくらいはせねばならないと、常光は思っていた。

それに、そうすれば必ず先走るものもある。そうすれば、軍勢の統率に乱れが生じる。

実際輝虎の軍勢は、指揮系統はなきにひとしかった。ただ、主に

続いて突っ込むというような、猪武者そのものの戦いぶりであった。
「来ているな」

槍を振るいながら、菖蒲の旗印が徐々に近付くを見て。
「おれの首もそうとうな高値がついているようだな」

と、つまらぬ冗談を口走る。思惑通りに、輝虎が動いてくれるからだった。

「須木屋主水ごとときと、何も変わらぬ」

中村家成の家来集はみんなそうだと罵ってやりたかった。先の戦いで先走った須木屋主水とかいう間抜けがいたが、条件をそろえれば、皆そのようになる。

実際、今の輝虎がそうだった。

常光から見れば、所詮彼らはただ喧嘩が強いだけのゴロツキ連中の寄せ集めでしかなかった。

第三章「赤日」その六

敵兵をかきわけかきわけ、輝虎は常光を探し求める。

髭面の三十半ばの大將、ときく。それらしきものを見つけようとしながら槍を振るうが、なかなか見つからない。

敵味方入り乱れての混戦の中だ、そうそうに見つけられるものではない。それでも、探し求める。

菖蒲の旗が、輝虎の後ろ、混戦の中を駆け巡る。

そんな様を思い浮かべながら、お雪は城の中の仏間にある本尊の前で、題目を唱え続けていた。

その黒い瞳に本尊を、本尊に書かれた御文を写し出して、数珠をもつ手を合わせて。

ご武運を、とはいったものの、それはどのような運なのだろう。わからない。

自分は武家のむすめだ、でも、そうとは思っても戦にゆく輝虎たちのことを思うと、心穏やかではられない。

いままで、何人のもものたちがその戦で死んでいったのだろう。

そして、あやめてきたのだろう。

唱題をするうち、いつしか頭の中は空っぽになり、何も考えられなくなってきた。それでも、ただひたすら唱題をしていれば。

本尊を通して、脳裏に戦場が見えてきそうだった。

そのとき、ふと、思い浮かぶもの。

ひとついしだん（石段）あがりや

ひとつまりつけ

ふたつあがりや

ふたつつけ

おてんとさま（お天道様）は

それみてわらへ（笑え）

みつつあがりや

みつつつけ

よつつ いつつ むつつ ななつ やつつ ここのつ

とう

とうあがりや

とうまりつけ

とうあがりや

そこはおじょうど（お浄土）

それ

おてんとさまが

わろうとる

おてんとさまも

つけや つけや

まりつけや

幼いころ、輝虎とともにうたった手まり歌が、脳裏をかすめてゆく。

あの時は意味もわからずうたっていたけれど、それが唱題のさなかに、心に入り込んでくる。

「ああ」

ぴたりと、口の動きが止まった。口だけでなく、すべてが止まったようだった。

その手まり歌の意味。

人は石段をひとつひとつあがるように、年をとり、そして死んでゆく。

それは、あまりにも当たり前すぎるほど、当たり前なこと。生あるものは必ずや滅するのだ、それを幼き日に無邪気にうたっていたのだ。

だけど、その人の臨終は、どのようにして迎えられるのであろうか。

それを思うと、弾かれるようにしてまた題目を唱えていた。

そうすれば、本尊を通して、いま輝虎たちが身を置く戦場がまた見えてきそうだった。

声は震えていた、それでもお雪は題目を唱え続けていた。

第三章「赤日」その七

ふと、人の気配を感じて唱題を中断して後ろを向いた。閉ざされた仏間のふすまから、「おひい様」と呼ぶ声がする。その声は、八重のものだった。

「八重ですか」

と呼びかければ。

「はい」

という応えがかえってくる。

お入りなさい、というと、八重は静かにふすまを片手で開ける。もう片方の手には、千丸が抱かれていた。

「……」

千丸を見て、お雪は息を止め、その姿をまじまじとみつめる。先日、あまりにもおもちゃのように扱ってしまったため、母親の八重はもちろん乳母のお藤にまでひんしゆくを買ってしまった。そのために、八重は千丸をお雪のもとへと連れてこなかったが。

これはどういう風の吹き回しであろうか。

「千丸」

正座のまま回れ右をしながら、家来の子の名を、ぽそりとつぶやく。そうするうちに、ふすまは静かに閉められて、千丸を抱いた八重がやってくる。

「お城にやってきましたところ、おひい様は仏間にあるといわれ、

お邪魔させてもらいましたが」

「そうですか。でも、どうしたのですか？」

「いえ……」

八重は、千丸をみつめながら、なにかためらいがちに語った。

「いえ、その。家にいるとお義父様おぢうへさまが、千丸が泣いて嫌がるのも聞かず、腕に抱いてばかりで……」

いくら孫かわいさとはいえ、これでは千丸の心に障ると思い、城に避難して。同じ腕に抱かれるのなら、おひい様のほうがよい、という。

今男たちは戦に赴いているが、年寄りの晴景は留守をさせられていた。以前は無理矢理にでも輝虎についていたのだが、それでも役に立てられればよかったのだが、役には立てられなかった。年齢が晴景の戦闘力を落として落としていたのだ。これでは足手まといになるだけである。

そこで、今度は輝虎が無理矢理にでも留守番をさせている、ということだ。が、そうしたらそうしたで、今度は千丸が被害を受けた。

それを聞き、お雪は晴景を不憫に思った。子に先立たれ、嫁や孫からも逃げられようとは。その晴景の心情も、わからないわけでもないが、やはり千丸への被害はなるべく防がねばならなかった。

「千丸は、おひい様がお好きなのでしょね。さきほどまで泣きべそをかいておりましたのに、唱題の声が聞こえてくると、ほら」

と、腕に抱く千丸の寝顔をお雪に見せる。

目を閉じて、すやすやと眠っている。

ふくらんで薄紅色に染まった頬が、まるで桃のようだ。この頬を見ると、思わず指でそつと触れたくなる。

思わず千丸に見とれてしまったお雪だが、「あつ」と、八重を見て。

「今すぐわたしの部屋に戻りましょう。お布団を敷かせますので、そこで千丸をゆっくり眠らせてあげましょう」

八重は、その心配りに感謝して。お心遣い、痛み入りますと頭を下げた。

「お心遣いなど、滅相もない。わたしも千丸を鞠のごとくにあつかってしまいました。これは、その、せめてもの罪償いです」

と言いながら、幼いころにうたった手まり歌を思い浮かべていた。千丸も、大人になれば戦にゆかねばならないのだろうか。輝虎と同じように。

できることなら、そうはならないでほしいと、思わずにはいられなかった。

輝虎が、戦にゆき、そこで人をあやめているなど、考えられないことだったし、考えたくもなかった。同じように、安らかに寝息を立てている赤ん坊が、大人になれば戦にいつて人をあやめるなど、考えたくもなかった。

おびき寄せるだけおびき寄せ、畏にはめて、殲滅する。造作もない。

といったかったが。

そばに駆け寄った家来からの言葉を聞き、苦い顔をする。

同じ家成の家来である久遠実成が、猪のように突っ込む輝虎に追いつき、それを制止したというではないか。

「少しは戦を知っている者があるか」

ふと振り返れば、乱戦の中、遠くからこちらを鋭く睨みつける若武者がいた。かなり近いところまで来ていたようだ。

―あれが、家成の娘婿かよ。―

初めて顔を見る。それなのに、直感的にそう思う。向こうも同じようで、自分を綾山常光だと思っっているらしい。なんとも、お互い勘の良いことか。

少し後ろにいるもうひとりの若武者は輝虎の家来か、それで輝虎を押しとどめようとしているのが、久遠実成というものか。

もうすこしで、脇に潜ませていた伏兵の餌食にしてやったものを、いや、そのとき、常光の中に電撃が走った。

―殺さねばならん。―

輝虎らの軍勢が、大将に追いつきそれを囲みはじめ、ひと塊になっただけ。これでは畏にはめても効果は期待できそうにない。だが、それどころではなかった。

直感が、常光に。

「かかれ」

と、全軍突撃を命じさせた。

これには家来が驚いた。畏にはめそこねてしまい、無用の損害を避けて少し後に下がるかと思っただけだった。かかれ、とは。

少数とはいえひと塊になり、すんでのところで押し留まって、こちらからの急襲にそなえているというのに。いや、他の家成の家来の軍勢がやってくる危険性がないわけでもない。それでも、かかれ、

とは。これは、常光らしからぬ下知であつた。

しかし。

「なにをしておるか、かかれ、かからぬか」

と、叫ぶばかりだ。

そうこうしている間にも、輝虎らはじりじりと引いてゆく。こちらの氣配を察したらしい。

「実成殿、すまぬ」

「それはあとでござるよ」

己の突っ込みすぎを詫びる輝虎に、実成は笑つて応える。ほんとうなら、同僚として輝虎を叱らねばならぬだろうが、それどころではない。いや、ギリギリで追いつけた安堵の方が大きいようだった。とにかく今は引かねば。そうせねば、昨日のように引き切れるかどうか。

—なんと仏様のようなお方が……。—

十兵衛は実成を見て、感心するばかりであつた。機に応じ、進退の手助けを丁寧にしてくれる同僚の武將は、実成以外にまずいない。それどころか、他のものたちはばらばらで、お互い手助けするというような協力体制など、まずなかった。

だからこそ常光はそれを罵り、畏にはめようとしたのだが、地獄に仏と言わんがばかりに実成がしゃしゃり出てくる。

「中村家にも、人がおつたかよ」

その人がもつと多ければ、こんな戦などせずにすんだろうに。なにと考えている場合ではない。

「かかれ」

と、何度も叫んで、叫びながら常光が馬に鞭を打って飛び出した。家来たちも主が飛び出ればゆかぬわけにもいかず。

「それ、殿に遅れるでないぞ」

と、いつせいに輝虎たちに襲い掛かる。

「きてるぞ」

十兵衛が叫んだ。綾山の軍勢がこちらを追ってくる。みれば、今

まで見なかった軍勢まで加わろうとしている。やはり伏兵がいたようだ。

―他のご家来集はなにをしている。―

輝虎と実成の、合わせて三百余の軍勢以外に、味方の軍勢が見えない。いや目を凝らせばいるにはいるのだが、ばらばらで統率が取れていない。おのおのそれぞれが自分たちの思うがままの戦をしている。

それに対し綾山のほうはどうだ。十兵衛は、舌打ちした。

「なんなんだ、これは」

と、吐き捨てずにはおれなかった。

―所詮、田舎の地侍の集まりに過ぎぬのだ。―

実成は、苦虫を噛み潰すような顔をした。はつとする輝虎。

―悲しいかな、おれもそうだ。田舎の地侍のまま、勇も知もない。

できるとすれば、機を見て恩ある輝虎殿を危機より遠ざけることだけだ。―

それが、せめてもの実成のできることであった。実際、やばそうだという勘だけは当たる。それだけが、実成の唯一の取り得であった。

「あつ」

と誰かが声を上げた、と思ったら、倒れた。綾山の軍勢が前に立ちほだかり、突っ込んできて。

ぶつかつた。

さきほど自分たちが追い越していったものたちが、壁となって立ちほだかり、輝虎らに襲い掛かってきたのだ。皆氣勢を上げ、輝虎らを討ち取ろうとしている。

「おのれ」

遅かつたかと、実成は叫んだ。逃げ切れなかった。囲まれてしまった。

輝虎は振り返った。

その途端馬首を返し、乱戦の中、綾山常光に向ってゆくではない

か。

「ばかな、何をしている」

実成が叫んだ。

まさか、とは思ったが。そのまさかだった。

「ええい、ままよ」

十兵衛も輝虎に続く。完全に囲まれてしまつては、逃げ切ること
は出来ない。死中に活ありと、いちかばちかの賭けに出たのだ。も
う、それしかないように。

輝虎、十兵衛に続いて、菖蒲の旗が綾山常光に向かってゆく。

先頭の輝虎は、乱戦の中を突つ切りながら、我知らず、お雪がい
つも唱えている題目を唱えていた。

第三章「赤日」その九

一度退いた菖蒲の旗が、またひるがえり、こちらに向かってくる。
その中から、ひとりの若武者が竜巻でも起こさんとするほどに槍を
振るつて飛び出してきている。

それに触れようとするものはことごとく、竜巻に飲み込まれて、
血煙を上げながら吹き飛ばされてゆく。

吹き飛ばされゆく者はその直前に、唱題の声を聞いた。

「修羅」

ということが、あちらこちらで叫ばれた。

これには常光も驚かずにはいらなかった。

「ばかな、あやつには天魔がとりついておるのか」

思わずそう口走れば、そばの家来がすかさず。

「まことに、あれは修羅そのものにござる」

と付け加える。

さきほどから、修羅、修羅、とまわりの者たちが騒いでいる。そ

れほどまでに、輝虎の働きぶりは凄まじかったということだろう。事実、何人束になってかかったところで、皆槍で突き伏せられてしまっていたのだ。

しかも後に続くものたちの働きも凄まじく、まるで、ひとつの塊がこの乱戦をかき乱し始めているようだ。

「逃げ切れぬと思い、わしを道連れにするつもりか」

齒軋りをしながら、菖蒲の旗を恨めしげに睨みする。どうすべきか、引くか、それとも受けて立つか。よもや家成の娘婿がここまでやるとは。

「やるか」

苦々しくつぶやく。やはり大将たるもの、敵に背中を見せるわけにもいくまい。それよりも、輝虎らの戦場での働きが、常光の心に己は武士であるということに、火をつけた。

と思うや否や、常光は輝虎目掛けて馬を走らせた。

さきほど見た若武者が、きっと家成の娘婿、大高輝虎であろうとみて、まず間違いはないだろう。

――よい目をしておったな。――

輝虎という名に負けぬ若々しいその武者ぶりは、同じ男として嫉妬を覚えるほどだ。だが哀しいかな、その輝虎は、中村家成という粗暴な大豪族の手足でしかなかった。だからこそ、娘婿になったのだろうが。

「大高輝虎というは、うぬか」

と、乱戦の中馬を駆け巡らせ、ようやくその若武者を見つけた。

返り血を全身に浴び、真っ赤に染まった顔をさらに赤くして槍を振るい敵兵を屠るさまは、まさに修羅であった。

常光の呼びかけに気付き、輝虎は声の方を向いた。声の主は、さきほど綾山常光と思しき（おぼしき）ものだった。

「いかにも、大高輝虎でござる。綾山常光殿でござるか」

「左様、綾山常光である。汝ほどのものを雑兵づれに討たせるは忍びない。このわし自らの手で葬るが武士の情けと心得よ」

これに慌てたのが常光の軍勢のものたちだった。御大将自らの槍働きで敵方のいち部将を討ちとろうなど、正気の沙汰ではない。そうでなくとも相手は修羅の如きものだ。氣ぐるいあそばされたか、と家来たちが駆け寄ろうとするが。

「手出し無用ぞ！」

と輝虎に向かってゆく。

そう思ったところには、すでに槍を数合あわせた後だった。

しかし、槍働きに関しては輝虎が数段勝っていたようで。常光は押され気味だった。

槍を交わす中、常光は輝虎の目を見た。その黒い瞳はららんと光り輝いていた。

――綾山常光を討てば、戦は終わる。――

お雪を悲しませることもない。

「うぬは……」

押されながら、常光がつぶやく。ららんと光り輝く瞳の奥に、何かが見えたようだった。

だがつぶやいたのはまずかった、一瞬の隙を作り出してしまったのだ。

両勢の者たちはそれに合わせるように、一瞬だけ戦の手を休め、それからどうなるのかを、固唾を呑んで見守ろうとしていた。

常光の体勢が崩れ、喉目掛けてて槍がほとばしろうかとする、まさにその直前。

輝虎の目先を矢がかすめ飛んだ。

「卑怯」

十兵衛が叫んだ。御大将を討たせまいと誰かが矢を放ったのだろう。が、あとであれば流れ矢であろうと言い訳も出来るのが、なんともたちの悪い仕業であった。

かすめ飛ぶ矢に氣をとられ、輝虎の動きが止まったのを見計らい、誰か家来が常光を無理矢理引っ張っていつて、その場を脱した。

一瞬でも動きを止められてしまえば、もう機会はなかった。

「おのれ」

と叫びあとを追いかけてようとしたが、肩を掴むものはつとした拍子に、その拳が頬にぶちつけられた。

第三章「赤日」その十

目先を矢がかすめ飛んだかと思えば、次は拳がぶちつけられた。

輝虎は馬上よりよろめき落ちそうになり、ようやくにして手綱を握り堪える。

同じく馬上にて、剣を左手に持ち替えた実成が、右手の拳を握りしめて、輝虎を睨みすえている。

「さ、実成殿」

ぽつりとつぶやく。

周りの者たちはことの事態についてゆけず、何故輝虎が僚友に殴られねばならぬのかわからずぼかんとしていたが、はたかれたようにして「はっ」と我に帰り。また再び刃を交えはじめる。

しかし、綾山常光が後ろへ引いたために、ともに刃を交えながら後ろへと下がってゆく。

輝虎も、実成も、さきほどのことなどどころではなく、下がってゆく。下がりながら、実成は輝虎のその様を見た。

全身に返り血を浴び、槍も血に染まり、槍の穂先より滴り落ちる血に柄も赤く、柄を握る手も、赤かった。

十兵衛も見た。

その姿を、お雪に見せられるかどうか。

平時にあつては、良き夫であり、良き領主であつても。有事にあつては、どうだろうか。それこそ、いまのような、真っ赤に染まらねばならない。

実成もまた、同じことを思う。

自分たちが今生きているとき。それが、どのようなときなのか。生まれるときは、選ぶことは出来ない。

出来る事といえば、生まれ出でたときを、精一杯生きること。

輝虎のその真つ赤な姿も、生まれ出でたときを精一杯生きているということなのだ。

大きな声を上げて泣き喚く赤ん坊のままに。

頬にこびりついた血。まるで血の涙を流したかのようだ。

その頬が、痺れる。

―あの仏のような久遠実成殿が……。―

なぜおれを殴ったのか。

しかも戦のさなかに。

思えば、猪のように突っ込むばかりの輝虎を上手く導いてくれた。行くときも、引くときも。

どうして、そうしてくれたのか。

―おれを思うあまりのことか。―

落城寸前の久遠の城を、急ぎ駆けつけた輝虎が救った。いまでも、その恩義を抱き続けている。

いや、それだけではない。

輝虎に、死んでほしくないから。

にもかかわらず、死に近付くようなことばかり。

それどころか、猪のようにつつこむことで、無用な戦死者も出る。実成はそれを戒めたかったのだろう。

―しかし、我らは武士ではないか。それが死を恐れるなど。―

なぜか頭が冴え、色々と思い巡らせている。

もうだいたい引いた。綾山の軍勢も見えない。なにはともあれ、今日も命を繋いだ。と思ったそのとき。

「見たぞ見たぞ」

と、わめきながら近付く影。

須木屋主水であった。

「家成公の娘婿殿を殴るのを、この目でしかと見たぞ」

騎乗にて家来を引き連れ、まっさらにきれいな槍の穂先を実成に向け、家来を引き連れてやってくる。

――まずいのが来た。――

十兵衛は顔をしかめた。

輝虎もはつとして、実成をかばうように前に進み出た。

実成は、表情を変えず動じない。それを見た輝虎と十兵衛、よもやと思うが、すべて承知のことか。

たしかに、あの乱戦、人ごみの中、敵も味方も多数のものが見ているはずであるが。

よりにもよって、須木屋主水にまで見られていようとは。

しかし、あのまっさらにきれいな槍の穂先はなんだ。ただ乱戦の中にいるだけで、何の働きもしなかったということか。おそらく、家来どもに周りを囲ませて敵を凌いでいたのだろう。

――卑怯。――

輝虎は顔をしかめ主水を見据える。常光との一騎打ちの際に十兵衛が卑怯と叫んだが、主水にこそその言葉を浴びせてやりたかった。当の主水はそんなことなどちつとも気にかけていないようだ。

「このこと、お屋形さまにとくと申し付けておくぞ」

と言いながら、引き揚げてゆく。

その後姿すら見たくもなく、輝虎らは距離を置きながら、引き揚げてゆく。

その後どうなるのか、悪い予感が脳裏を離れなかった。

続く

第三章 赤日 頁二

第三章「赤日」その十一

「もうよい、はなせ」

という言葉は何度言ったか覚えていないが、だいぶ後ろへと引いてから、やっと家来が手綱を放した。もう敵の姿はない。

整然と隊列を組み、主を待つ自軍のものたち。

綾山の旗もまた整然と並び、風になびく。

その風に頬をなでられ、ようやくにして常光は落ち着きを取り戻す。

「ふう」

思わず漏れる吐息。それに気付き照れ笑いをすれば、家来たちも笑い。あたりは陽の光に照らされているのもあって、朗らかな雰囲気になる。

「ゆるせ。思わず血気にはやってしまつてな」

「いやいや、我ら一同肝を冷やしましたぞ」

「左様左様」

ははは、という笑い声をこぼしながら、隊列の中へと駒をすすめゆく。

「しかしまあ、なんだ」

「は？」

「あの矢は、誰が放った」

それこそ輝虎の槍に喉を突かれようかとする直前、ふたりの間を矢がかすめ飛んだ。その隙について、家来が常光の手綱を引いて下がっていったのだが。

「さて、存じませんか。そこもとは？」

「いやいや、それがしも存じませんな」

「なら、流れ矢であるか」

家来の会話を聞きながら、常光はほくそ笑むのみ。しらはつくれおつて、と言いたげに。どうせ誰かに命じて射掛けさせたのであるう。

しかしそれで助かったのだ。我ながら運の良いことよ、と思う。つらつらと思うに、どのようなことがあるかと、今死ぬのはまずい。黒雲の如き中村家成の侵略を食い止められるのは、綾山常光だけなのだ。

中村家成が黒雲、ならば、さしずめ大高輝虎は雷いかずちとしたところであらうか。その名に輝の字がある通り、黒雲より放たれた雷のような若武者。それが輝虎。

その輝きぶりを見て、男として黙っていられようか。否、黙っておれぬ。とはいえ、それは今後控えるべきであらう。己の立場を考えるなら。

常光の命は、常光だけのものではないのだ。

我ひとりの命に、どのくらいの者たちの命がかかっているのか。

輝虎の家来らしき男が「卑怯」といったが、そういわれることも承知のうえで、生きてゆかねばならぬであらう。

当主とは、そういうものなのかもしれぬ。

それを思えば、ほとんど一瞬だけとはいえ、輝虎のような剛の者と男として一騎打ちできたのは僥倖と言ってもよいのもしれぬ。それに、今度のことでわかったこともある。

―討ち取るは、あの娘婿だけでよいな。―

他は烏合の衆だ。輝虎ひとり討ち取れば、おのずと崩れ去る。まったく統率の取れていないあの戦ふりはどうだろうか。

目の前の、整然と並ぶ家来たち。

ほんとに同じ武士であるのか、といたくなるほどだ。

「わしの軽率さのために、みなに迷惑をかけたな。すまん」

馬上より家来たちに詫びる常光。家来たちは、押し黙って次の言葉を待っている。ふと、輝虎に討たれた田尾和孝を思い出した。

人のことは言えぬ。その軽率さを苦く思ったことを、心の中でそ

つと詫びる。

「中村家成との戦、勝てるぞ」

というやいなや、隊列がざわめく。ざわめくまま、常光は言葉を続ける。

「しかしながら、いまは兵馬を休めるため、引き揚げよう。これまでの戦でみな疲れていよう。その疲れが癒え、次に矢合わせ（合戦）するときに、勝つときである。わしに考えがある、勝算もある。それまで、ゆつくりと骨休みをするがよい」

おお、という関の声があがる。その声に、あたりの空気が震えたようだ。その震えが、肌で感じられた。

馬上より家来たちに檄を飛ばす常光の背に、太陽。その太陽が、まるで後光のように光っている。さながら仏の遣いのようで。その言葉は予言にも感じられた。

―我らには綾山常光様がおられる。―
という安堵感。

家来たちにとって、綾山常光はただ御大将であるというだけでなく、心をひとつにしてともに戦う同志のようでもあった。

事実、常光自身も槍を手に取り戦っている。それで士気が上がり、皆よく働く。おかげで中村家成の侵略は足踏み状態にある。

もう一押しで、形勢が変わる。

かつて家成に泣かされてきた者たちにとって常光は、その名の通り、常に光り輝く希望の光であった。

しかしながら、と常光はまた思う。

―惜しいかな。大高輝虎。―

一騎打ちをしたからこそわかる。殺すには、惜しい青年である。血にまみれ修羅の如き働きをしようとも、その瞳の輝きは、そしてその瞳の奥にあるものは。

そこにこそ、ほんとうの輝虎がある。

惜しいと思うが、惜しい男だからこそ、討たねばならない。そうせねば、戦はいつまでも続く。

―ご神仏も酷なことをなさるわい。―

それでもやらねばならない。もし己が今の世に生まれた理由があるとするならば、まさにそのために生まれ出でたのかもしれないのだから。

第三章「赤日」その十二

本陣宿営の古寺にて、家成の一喝が響く。

腹を切れ、という一喝が飛んだ。

それは、久遠実成に向けられたものだった。

戦の後の軍議において須木屋主水の告げ口により、実成が輝虎を殴ったことが、輝虎が常光と一騎打ちをしたこと以上に本陣中に知れ渡った。

古寺の庭にて、家成をはじめ数人のものたちがあつまっている。

実成はその真ん中、平伏している。

「我が娘婿を殴るのは、我を殴るに等しい。その罪、万死に値する」という、家成の言葉。

家成と輝虎に血のつながりはないとはいえ、舅と婿の、義理の父子の間柄である。家成の娘のお雪が子を産めば、その子は家成の実の孫であり。

そうなれば、名実ともに大高家は中村家の親族となるのだ。

それを殴った。しかも大勢の前でやったことで、家成の親族に恥をかかせたことにもなる。

理由はどうあれ、なんぞ叛意があるのではないか、と勘ぐられるのも仕方のないことであつた

家成は、口々に実成を罵っている。実成は、何も言わず、黙ってそれを聞いている。

「ご父君。しばらく、しばらく」

たまらず輝虎が進み出た。実成に叛意がないことは、輝虎自身が一番よく知っている。だがしかし。

「さがつておれ」

と、まともに取り合ってくれようとしな。が、このままさがれようか。

「いいえ、さがりませぬ。どうかこの不肖輝虎の言葉をお聞きください」

平伏する実成の横で同じように平伏し、輝虎は粘る。

実成は申し訳なさそうに、横目でちらつと輝虎を見た。輝虎はますますに鬘を見据え、その身を岩にでもするかのように、動こうとしない。

告げ口をした主水はいまいましたように、苦々しく舌打ちする。いい子ぶっているように見えるふたりのことを、よく思っていない。

むしろ、そんな忠臣こそ主水の嫌うところだ。中村家の家中にて、欲するままに、虎の威を狩る狐のままだに、権力の衣を着飾りたいという、己の忠実なる野心の邪魔になるからだ。

主水にとって家成は、忠誠心を尽くす対象ではなく、うまくやれば利用できるもの、という認識のほうが大きい。おべっかをもつてそれを覆い隠し、家成のおこぼれに預かる。

これが主水の人生設計といってもよい。

それはともかくとして。

「言うてみい」

輝虎の粘り具合を見て、やれやれと言いたげにして、輝虎に発言をうながす。なんで己を殴るようなものをかばうのか、皆目見当もつかないようであった。

どうもそれはほかの家来たちも同じようであった。

―わけがわからん。―

と、輝虎を不思議そうに眺めている。家成の娘婿という立場にあることを、どうして利用しようとししないのか。

これが自分なら、家成や主水と一緒にになって実成を切腹させると

いうのに。

「ありがたき幸せ」

と一度頭を下げて、それからまた舅を見据える。

「実成どのがそれがしを殴ったことについて。これは、それがしにこそ咎があります。猪のように突っ込むばかりで、味方を危険にさらし無用の損害をあたえることを、実成どのに叱っていただいたのです」

「叱る、だと」

「はい、武士として、実成殿に叱っていただきました。それだけのことです。そこになんの罪がありましようや」

輝虎殿……、と言おうとする実成を、横目で目配せする。何も言わなくてもいい、と。

「武士としてか……」

輝虎の言葉を聞き、家成は顎に手をやりながらなにやら考えているようであった。

実成と輝虎が仲が良いのは、まあ知っていた。その友情の厚さ固さは、確かに天晴れである。これを怒りにまかせて壊してしまえば、むしろ己の当主としての器が問われはしまいか。

いやそれよりも、舅であり当主である自分に対してしゃしゃり出るようなまねを、ひそかに面憎く思う。

――小僧。――

とあやうくいいそうになったが、それを堪え。

「ふむ、輝虎の言うことも一理ある。そちは勇のみを頼りによく突っ走っておったの、まさに猪のごとく」

「恐れ入ります」

「それを実成に叱ってもらったか。なるほど、それはいずれは誰かがせねばならぬことであろう」

その言葉を聞き、輝虎の胸に安堵が広がる。期待できそうだ。

「よろしい。ここは輝虎に免じ、切腹は許そう」

その言葉に、実成は驚き、とっさにふかく頭を下げた。実際、す

でに死は覚悟していたが、まさかこのようなことになるとは。

―一度ならず二度までも輝虎殿に救ってもらった。―
という感慨が胸に溢れる。

「だが、手を出すのはやはりやりすぎじゃ。実成よ、そちに謹慎を申し付ける。城へ帰り、沙汰あるまで一步も外へでることはまかりならぬ、よいな」

切腹から一転しての謹慎処分。この沙汰に、一同驚き、感心した。主水を除いて。

―ちえっ。くだらぬ。―

白けるように、ふたりから視線を外す。見ていられない、という気分だ。

「さすが我が殿。その寛大なお沙汰、我ら一同感服つかまつってござる」

誰かがそんなおべっかを言った。それから、異口同音に同じようなおべっかが次から次へと聞こえてくる。そのおべっかの中から飛び出すもの。

「いやはや、実成殿をかばう輝虎殿もまた天晴れである。こたびの戦で、すんでのところまで綾山常光を追いつめるほどの働きをなされ、そしてこれじゃ」

「そうじゃ、なんと頼もしいことか。次の戦も、輝虎殿がおられればこれほど心強いことはない」

というものであった。

聞いていて、白けてくる。胸にわだかまりが澱のようにつもってゆく感じがするのは、どうしてだろうか。はつきりいって、違和感を感じる。

「そうじゃな。次こそは常光の首を見せて欲しいものじゃ。頼むぞ、輝虎」

家成は家成でおべっかが心地良さそうで、知らぬうちに上機嫌になっっている。人の心はこうも簡単に変わるものか。

それよりも、なぜかその場の空気に首を締め付けられているよう

な思いに駆られる。

義父の心は、いまどのようなものだろうか。それは、知らぬが仏であつた。

―さてこのふたり、どうしてくれようか。―

などと考えているなど、思いもよらなかった。

―お雪は我がむすめとはいえ、あれがどうなるうと知らぬ。―

なんなら反乱を起こし、その際に殺してくれても構わなかった。だからこそ、大高家のような辺境の小豪族のもとへといかせた、というもある。

家成にとつて、所詮は、お雪は可愛げのない侍女の産み落とした私生児でしかないのだから。

それでも一応、利用できるものは利用したつもりであつた。それは輝虎の戦働きというかたちで功を奏したかに見えたが、どうも見当違いであつたか。

―このわしに意見するなど。可愛くないやつじゃ。―

どちらにも、父親としての愛情など、これっぽっちもない。

―そうじゃな、いつそのこと……。―

どす黒いものが、家成の胸中を覆う。常光の軽蔑するとおりの、粗暴な大豪族のままに。

第三章「赤日」その十三

綾山常光が一端引き揚げ、中村家成も結局は同じように引き揚げた。

その引き揚げ具合は実に見事なもので、夜陰に乗じて相手に悟られぬようこつそりと戦場から抜け出したのだ。抜き足差し足忍び足はもとより、馬の口には真綿をかませ、その上から縄で縛り声を封じるといふ周到さであつた。

もちろん、中村家成はそんなことを知らなかったから。慌てた謀者の報告をあつけにとられる気持ちで聞き、引き揚げの下知を下すしかなかった、という体たらくであった。

—なんと戦の下手なことか。—

十兵衛は呆れる気持ちであった。なにかにつけて綾山常光に出し抜かれている。

才木長久までは、少し強いところを見せればそれでよかったのだが、綾山常光はそれが通用する相手ではない。にもかかわらず、家成はまだそれに気付いてなさそうだった。

「愚かな」

その言葉は、自分たちに投げかけたものだった。相手の力量も知らず、ただの戦をしでかしていたずらに戦死者を増やすだけという今の状況に引き摺られっぱなしだ。

これを愚かといわずなんというか。

城下の郷を馬でひと駆けして、郷を流れる川の川原で馬を止め、手ごろな岩を見つけそこに腰掛け空を見上げる。

青空が広がり、雲がただよう。あの雲はどこへゆくのであろうか。馬は近くの森の木につながれて、尾を振りながら静かにたたずむ。草木や花たちは、陽の光をうけ、川のせせらぎを聞きながら、そよ風に気持ちよさそうになでられている。

郷の人の営みも、その中であつた。

だが、今の自分たちは。

「義とはなんぞや」

輝虎は、家成への義のために戦うのだ、というが。正直言って、それに値するようなものだろうか。

義、とは。

愛する妻と娶わせてくれたことへの恩義のことか。
ばかばかしい。

とは、言わない。

上下関係というものもある。されば、今自分たちがやっているこ

とに、何の大義があるというのか。

武士は、大義のために戦うのではないか。

中村家成のただ領地欲しさの欲望が、武士の大義といえるのだろうか。

もしそうだとしたら、いまはそんな世の中だということか。

「難儀なものだ」

ぽそつとつぶやく。そのつぶやきは川のせせらぎに流されてゆく。さて、もう帰ろうか。と腰を上げようとしたとき、十兵衛の従者が息を切らしてこちらに駆け寄ってくるのが見えた。

何事か、と思いきや。

「十兵衛さま、大変じゃ大変じゃ」

と、十兵衛をみかけるなり叫んでいる。

「どうした、なにがあつた」

「そ、それが、輝種さまが、みまかられた」

「なんだと！」

輝虎の父、輝種が亡くなった。

その訃報が郷を駆け巡った。

「そうか、死んだか」

それだけであつた。正直、この先代も気に入らない。輝虎が高家を継ぐと同時に、世を捨て寺にこもつて僧となつた。それから、一度も見えていない。

あの先代は、何かあればすぐに神や仏にすぐることばかりで、己の力で解決してやろうという気概がまったくなかった。

そのために、十兵衛の父はわざわざ戦死しなければならなかった。人の死をききながらなんと大人気ないと思うのだが、なまじ人の死に慣れている身のため、ほんとうに何も思わなかった。わざわざ悲しむ振りをするのもどうかと思う。

―先代、この不忠を許されよ。―
とだけ、思つた。

第三章「赤日」その十四

「そうか」

とだけ、輝虎は言った。

城の庭で木刀を振るっている最中、父の訃報が舞い込んできて、しばし空を眺め考え事をしていたが、早速葬儀の準備にとりかかるうとし。

その前に、お雪に会いにいった。輝種の訃報はすでにお雪も知っており、喪に服するために、仏間で唱題をしようとしていたところだった。

手にある数珠を見て、輝虎は。

「もう知っていたか」

という。

「はい、いましがた、お凜から」

「おれの父であるということは、そなたの父でもある。父のために題目を送ってくれようとしたこと、子として礼を言うぞ」

「いえ、当然のことでございます……」

ふたりとも、訃報の後だけに顔は暗い。その胸中、複雑な思いであつた。ともに、輝種の思い出が薄かつた。

千丸と呼ばれていた頃の教育は家来にまかせつきりだったし、輝種自身が父として何かしらの愛情をしめしたことはなかった。それだから、お雪に対しても特に自分から接しようとしなかった。

いや、輝種にとって、お雪は敗北の象徴のようなものだから、尚更だつたらう。中村家成に攻められ、降伏し、その支配下に置かれた上に父権を奪われ、嫁を押し付けられたのだから。

小なりとも一城の主という身にしては、踏んだり蹴ったり、という感じだつたらう。

それ以前に輝種は、ただ平穏な暮らしが欲しいだけの、おとなし

い人だった。この戦国乱世に生まれたところで、どうすることもできず、道端の小石にも等しい存在だった。

―それでも、父は父だ。―

と思い、輝虎もお雪とともに、本尊の前に正座し、唱題をし。その冥福を祈った。輝種と、その妻お志野がいなければ、この世に生まれることはなかった。

その後、葬儀は、輝種のいた郷の寺でそれなりにきちんとした形式をもっておこなわれ。城から輝虎以下大高家のものが出席した。

僧の読経をが、あたりに響く。

読経の言葉ひとつひとつが、耳を打つ。打たれるたび、輝虎はこれからのことを思う。

これから、父と呼べるものは、中村家成だけとなった。義理とはいえ、子として、どれだけの孝行が出来るのであろうか。どれだけの孝行をせねばならないのであろうか。

それは、ご神仏のみぞ知る、というところか。

家成への孝行は、戦働きしかない。

戦働きをしてこそ、孝行。それが、中村家成の娘婿としての道だった。

第三章「赤日」その十五

さて、綾山常光である。居城である飯歌の城へと引き揚げてから、軍備再建に力を入れた。

次に戦をしたときに、必ずや中村家成を撃破するために。

それから、どのようにして戦をするかという段取りも、家来たちと相談しながら決めていた。その中に、まずは大高輝虎を討つべし、というものがあつた。

いままでの戦で、輝虎以外にこれといった働きをするものがいな

かった。ということは、輝虎さえ討てば、あとは簡単だということだ。

その輝虎を討つために、さてどうすればよいか、いかにして、確実に輝虎の首を獲るか。

家来たちとの議題は、やがてはほとんどがそれになった。

「聞けば」

「はい」

評議の最中、常光がいったことは、家来たちをすこし呆気に取らせるものだった。

「輝虎とその妻である雪の方、ふたりは評判のおしどり夫婦であるそうだな」

「いかにも。であるということは、家成への忠義も厚く、先の戦のように修羅の如き働きをするのでございましょう」

「そうかな。――」

「と思いつつ。」

「その昔は、夫婦雛と囃し立てられたとも聞く」といえば。

「その夫婦雛が、鷹となって、我らに食らいつこうとしておる。なんと私たちの悪いことではござらぬか」

「そうじゃ、雛のままであれば、そのほうがどれだけよかったか」

「いや、鷹になるとわかっておったからこそ、家成は姫を輝虎にくれてやったのであろう」

それから、口々に輝虎とその妻への恨み言が評議をしている広間に響き渡った。いうまでもなく、綾山側では情報収集もぬかりはなく、どのような些細なことでも仕入れていた。

そこに、実際に戦でしてやられた恨みが重なればどうなるか。

顔を真っ赤にして怒る家来たち。それを見て、常光はあの時の、一騎打ちをした時の輝虎の瞳の奥を思い出す。

「輝虎のみならず、雪の方も討つべし」

という意見が出た。他のものも、左様と答える。恨みがこもって

いるだけに、お雪を討つことに關しても、家成と血縁關係にあるというだけで、彼らには殺すだけの十分な理由が出来上がる。

いやもし、子をなしておれば、その子も討つべし、とまで思っている。

彼らにとつて、中村家成の血筋は天魔の血筋であり、この世から根絶やしにせねばならないものであった。そうでなければ、黒雲が世を覆いつくし、暗黒の世界が出来上がってしまうようであった。

「……」

常光は黙っている。家来たちのいうことを聞きながら、何か思案しているようだった。

だが熱くなる家来たちをそのままにしておけば、すぐさま攻め入るべきという過激な意見まで出てきそうだったため、やれやれと思いながら、かたく閉ざした口を、重々しく開く。

「そちらの言い分はようわかった。だが今は、軍備再建のときだぞ。なによりあの家成の気性、このまま黙つてはいまい、またいつも通りこちらへ攻め入るであろう。戦はそれからじゃ。それまで、辛抱せい」

今度は家来たちが黙る番だった。綾山常光が戦をしているのは、中村家成のような侵略的な領土拡大のためではない。あくまでも、それを食い止めるための義軍的な役割からである。ゆえに、無闇にこちらから攻め入るわけにはいかないのだ。

広間に沈黙が垂れ込め、家来たちの怨嗟の念を含んだ空気に、肌をなでられているような重々しさだった。

第三章「赤日」その十六

輝種が亡くなり、初七日が過ぎて間もないころ、中村家成よりの使者がやってきた。

すぐに戦支度をし、綾山領内の城を一つ落としてこい、ということな
んとも突飛なことを使者は告げた。

「……」

これには輝虎も絶句した。つい先日戦より戻ってきて、それから
ひと月もせぬうちに、今度は城を落とせ、とは。

いくらなんでも、無茶な話である。

「ご案じめさるな。なにも輝虎殿の手勢だけでゆけと申すのではな
い。同じく久遠実成殿にもご出陣のお下知が下っており、輝虎殿と
実成殿のおふたかたをもつて、小さくても構わぬゆえ家成公に城を
ひとつ差し出せば良いのだ」

「実成殿も、でござるか」

「左様。本来ならば切腹といたすところであつたが、輝虎殿の働き
かけにより一命を取り留め、今は久遠の城へ沙汰あるまで謹慎され
ておる。しかしながら、こたびの出陣によりお屋形様への罪償いの
道を得た、とまあそういうことになるでござろうな」

「……」

またも輝虎は絶句した。

「輝虎殿よ、おふたりが中村家への忠義厚い家来であることを示さ
れるる絶好の機会でござる。謹んでお受けされよ」

使者は輝虎の絶句など意に介さず、上座より声高に言った。ひれ
伏す輝虎は、ただ、頭を下げた。

逆らうことは出来ない。

家成の命令はなにがあつても聞かねばならない。それが無茶なこ
とでも、だ。

今の生活は、その上に成り立っているのだ。

使者が帰った後、輝虎はすぐに十兵衛や晴景ら家来を呼んで、こ
の出陣の支度をすぐにさせた。いつも留守をさせている晴景も、今
回ばかりはゆかせようと思った。

輝虎が出せる兵は二百、実成もまた同数だろうから、総勢四百ほ
どが精一杯である。城攻めをするにはあまりにも少ない。どのよう

な小城であろうが、落とすのは至難の業である。

このようなときにこそ、晴景のベテランとしての知識と経験が欲しかった。

だが。

「申し訳ござらぬが……」

年のせいかこのごろ体調がすぐれぬゆえ、勘弁してほしい、というのである。

「このような様では、かえって足手まといになるより他はなく。皆の足を引っ張るのみでござる」

と、輝虎がどんなに是非というのも聞かない。

ふと気がつけば、なにやら震えているようだ。

―臆したか。―

やはり、年がそうさせるのだろうか。

「わかった。では、いつも通り留守をたのむ」

結局、そういうしかなかった。

「晴景殿ももうろくなされたわい」

十兵衛が憎憎しげに舌打ちしながら言った。若い頃、なにかにつけて若造と呼ばわっていたくせに、今の晴景はただの臆病な老人に成り下がってしまった。

「十兵衛、そこまでいうことはあるまい」

「いいえ、言わせていただきます。この、大高家の一大事というときに、己の安穩のみを考え龜のように頭を引っ込めるなど、同じ家来として許せぬのでござる」

大高家の一大事。十兵衛も、事の大きさがわっている。わずかな手勢で城を落とせなど、まるで死ににゆけ、といわれているのと同じではないか。

それを、いやとも言えず、黙ってゆかねばならぬとは。

結局のところ、捨て駒ではないか。どうしてもかは知らぬが、捨て駒になることを強要されたのだ。それに従うのもまた、忠義だという。

特に十兵衛の父は、大高家が中村家に攻められた際にわざわざ戦死したのだ、その悔しさは言葉では言い表せない。

輝虎とて、わかつている。舅が近隣よりどう思われているか、また自分たちはなにをしているのか。

しかし、どうして家成は突然そんなことを命じたのか。そこが腑に落ちない。

どこでもよいから、一つ城を落とせ、と。あまりにも曖昧な命令であった。そこに何の戦略的意義があるのだろうか。

いや、もし落とせなかったらどうするのだろうか。

輝虎の脳裏に、思い浮かべたくないことがありありと思い浮かんでくる。それを振り払うように。

「とにかく、出陣じゃ。あとは出陣してから考える」

とだけいうと、奥へと引つ込んでいった。

家来を背に奥へと引つ込むなど、こんなことは初めてだった。そんな輝虎を見て、十兵衛は苦い顔をする。

輝虎の行く先のことを、思う。それに罪はないとはいえ、そのためにいまのようなばかばかしい命令を下されたようなものだからふと、桑の実の味を思い浮かべた。その桑の実を配っていた小さな手のことを思うと、気持ちはますます複雑なものになってゆくのであった。

第三章「赤日」その十七

輝虎はお雪のいる部屋へと来ると、ごろんと横になり。

「戦だ」

とだけ言った。

「さきほどの、父よりの使者はそれでありましたか」

「そうだ。いますぐ出陣して城を落とせと言った」

「え？」

さすがにこれにはお雪も驚いた。先の戦から戻ってきてひと月も経っていないというのに、またゆけという。しかも、城を落とせ、とは。

しかし、それよりも驚いたのは輝虎の様子であった。部屋へ来るなりごろんと横になるなど、そんな無作法な真似はいままで一度たりともなかったのに。

——なんと無茶なことをいうのだろう。——

と、父に対して思った。輝虎の今の様子は、そのせいだとすぐに察しはついた。

思えば、戦戦で心休まる時がない。今はそんな世の中だというのはものの。

輝虎は寝転んでじつと天井を見据えている。かと思えば。

「ややは、まだか」

といった。

「それは……」

「まだか」

言葉を詰まらせるお雪に、輝虎はため息をつく。

が、ため息をついたことに気付き。がばつと半身を起こし。

「あ、いや、深い意味はないぞ。気にするな。そなたが元気であれば、それでよいのだ」

と、慌てていった。その慌てぶりがおかしく、お雪はくすつと笑って。

「お疲れのようですね。わたくしの膝を」

と、膝枕を申し出た。

「ああ、ありがとう」

と、輝虎もお雪の申し出のまま、膝を枕にしてふたたび寝転んだ。ふと、包まれるような良い匂いがした。

戦支度をせねばならぬが、少しくらい遅れてもかまわないか、と。膝の心地を確かめながら、目を閉じた。

なぜか、お雪を見ようという気になれなかった。

目を開けられなかった。

その代わりのように、式頭城で初めて会った時のことが、閉じられたまぶたの裏に浮かんでは消え、また浮かんでは消え、を繰り返していた。

お雪も、そんな輝虎を見て。輝虎が千丸と呼ばれていた年少のころを思い出していた。

―うそつき。―

心の中で、ぽそつとつぶやいた。

あの時、千丸少年は鞠が好きだといったが、ずっと後でそれが嘘だとわかった。

「とんでもございません。殿は鞠で遊ぶようなことはございませんでしたよ」

初めて会った時のことをお凜にはなしたら、そう驚いて言ったものだった。

でも、どうしてそのようなうそを言ったのかを思ったとき。このまま騙されていようと思った。千丸は千丸なりに、お雪と仲良くしようと思死だったのだ。

その必死さが、いまは……。

できることなら、またあの頃に戻りたかった。

千丸の必死さが、お雪にのみ向けられていた、あの頃に。

しかしふたりの時は少なく、昔の思い出に浸ることも満足に出来ず。すぐに、という命令のため輝虎はお雪の膝にいつまでもいられず、四半刻（三十分）もせぬうちに起き上がり。

「では、ゆくか」

と言って部屋を出ようとする。

「いましばらく」

「ここに、というか。そうしたいのは山々だが」

「なりませぬか」

輝虎は物言わず頷いた。お雪の瞳が濡れているように見える。

「おれが戦にゆくのが、そんなに悲しいか」
喉につまりものがあるような言い方だった。

お雪が何を言いたいのか、わかつている。しかしそれは、武士の妻にあるまじきことでもある、と輝虎は思っていた。いや、思おうとした。

だがそれは、口には出せない。

心の片隅で、同じことを思う自分がいるのも、また確かだったからだ。

できることなら使者に、「いやでござる」と言つてやりたかった。それができれば、どんなに楽なことか。

お雪を妻として愛してゆきたい、そのために、ゆかねばならぬ。という葛藤が、胸中を支配する。

「ご武運を、お祈りいたしております」

濡れた瞳のまま、意を決するようにお雪はいった。輝虎は、そんなお雪を見て、一家の主として、静かに頷いた。

第三章「赤日」その十八

輝虎率いる二百の軍勢が大高の郷を出立する。菖蒲の旗が風になびく。

郷を出るとき、目についたもの。田畑が荒れている。

度重なる戦で働き手を狩り出されて、土地の世話をするものが少なくなり、かつて豊かだった土地が徐々に荒れてきている。

兵の中に、荒れた田畑をいたたましそうに見るものがあつた。

戦がなければ、鋤や鍬を手に田畑を耕し耕作物を収穫していたはずである。

その働き手が、戦のたびに少なくなつてゆく。はたして、こたびの出陣でどのくらいのものが死んでしまうのであろうか。

このまま戦が続けば、大高の郷には男が消えていなくなってしまうのではないか。

そう思うものまであった。

―結局、我らはなんなのであろう。―

中村家成の家来で娘婿。舅への義のために、戦う。建前としてはそうだが。しかしそれは輝虎ひとりの問題であり、下々のものにしてみればただ辛いだけなのではないか。

義、とはなんぞや。

自分にそう問いかける。

「殿」

十兵衛が物憂げな輝虎を見て、声をかける。

「そのように暗い顔をしてはいけませぬ、大將は常に明るく強く、ですぞ」

という。

「明るく強く、か」

「左様。でなければ、士気に響きます」

「そうだな」

と、すこし笑ってみせた。十兵衛とて、わかっている。しかし出陣するとなれば、戦に専念せねばならない。ここで気持ちを暗くしてしまえば士気がさがり、それこそ生きて帰れる確率が下がってしまうではないか。

「そうだな」

というと、すうっと大きく息を吸って。

「聞け」

と後ろを向いて、家来たちに呼びかける。

「こたびの出陣で城を獲れば、おそらくその城をいただくことになるであろう。そうなれば、大高家の所領も増え、お前たちに分けてやれる褒美も同じように増えるぞ。新しい田や畑が欲しいのならば、今まで以上に励むことだぞ。わかったか」

と大声でわめいた。

大声を出せば、気持ち心がすつきりするような気がした。

「褒美がふえるのでござるか」

「そうだ。存分に励めよ」

その輝虎の呼びかけに、兵たちの気持ちは徐々に昂ぶってゆくよう
うで。

「そうじゃな、励めば励んだ分だけ褒美がもらえる」

「もうひと頑張りじゃ、もうひと頑張りすれば新しい土地がもらえる
かも知れぬ」

「やろうではないか、わしとて男じゃ、女房こどもにえいところを
見せたいものじゃて」

と、お互いを励ましあい、士気を上げてゆく。

それもまた、いたたましいような気がしなくてもなかった。

自分たちは、わずかな手勢で城を落とせという理不尽な命令のた
めに出陣しているのだ、これはいわば、特攻のようなものである。

それを忘れさせねばならない。

痛む心を抑えて、輝虎は、えいえいおう、と兵たちに関の声をあ
げさせていた。関の声をあげながら、皆、頭の中で明るい未来を描
いているようであった。

第三章「赤日」その十九

郷を出立して、やがて久遠の城へと着いた。まずは実成と合流す
べく久遠の城へとゆくべし、という指示だった。

ここには、久しぶりに来る。かつて才木長久に攻められたのを救
援すべくいそぎ手勢を率い駆けつけ、その才木長久の軍勢を追っ払
ったものだった。

「よう来られた」

と広間の上座から声を掛けたのは、実成ではなく、年のころ三十

半ばの武将だった。こたびの出陣には軍監として、戦地に赴くことになっている。

軍監とは主将（この場合は中村家成）から直接命令を受けて陣地へと赴く代官のことで、大将らの功罪についての監視と作戦参謀長の役をつとめる。

たしか名を聖通時ひじり・みちときといった。その通時は高飛車な態度をとって、あごをあげ気味に、威嚇するような目で輝虎を見ている。

―また須木矢主水のような男だな。―

と、心の中で舌打ちする。いかに相手が家成の娘婿とはいえ、所領に家禄、仕えた年数、すべて家来としての立場は通時が上なのだ。それで、尊大な態度をとっている。通時にすれば。

―おぬしごとき若造が家成公にお目をかけていただき、こともあるうにおひい様までいただくなど、分不相応である。―

と言つてやりたいのかもしれない。

「お早いお着きであるな。殊勝でござるぞ」

と、やはり尊大な態度でいった。

「ありがたきお言葉でございます」

と返しても通時は、ふん、と知らぬ顔の権兵衛であつた。

この通時、実成謹慎の監視役としても、久遠の城に居座つていた。いうまでもない、実成に叛意ありとなればすぐさまそれを取り押さえるためである。

そんな役目なのだから、一応人数は揃えてある。その人数は百名。この百名もゆくのだから、城獲りにはあわせて五百名余の人数でゆくこととなるが、それでも、やはり城攻めには少ない。

尊大な態度は気に食わないが、それはともかくとして、通時はこのことをどう思っているのだろうか。

脇にいる実成は黙っている。

「さて城攻めの件であるが、どこの城を獲るかはおふたかたで決められよ。それが決まれば支度をととのえて出陣じゃ」

それだけいうと、さっさと奥へと引つ込んでしまった。

―御家中には、なんと高飛車な人の多きことよ。―

と、内心うんざりする思いであった。

そしてまた、これである。やる気が感じられない。

だがそれも仕方あるまい。捨て駒の行く末を見届けよなど、そんなのは面倒なだけだ。

しかし、なぜ自分たちは捨て駒としてゆかねばならないのか。

「輝虎殿」

という実成は深々と頭を下げ。

「面目ない」

というではないか。輝虎は驚き実成をまじまじと見やった。

「な、なにがでござるか」

「こたびの出陣のことです」

「それが、なにか」

実成は知っているようである。実成が知っているということは、通時も知っているかもしれない。固唾を吞んで続きを待てば。

「それがしをお庇い（おかばい）くださったこと、お屋形さまのご勘気にふれたようです」

「なんですと」

信じられないことだった。あのとき、許してくれたのではなかったのか。しかし実はそうではなかった、ということか。

「やはり、お屋形さまは内心は大変お怒りのご様子であったそうでした。しかし償いにどこかの城を獲り差し出せば、全ては水に流そう、と申されたそう」

「そ、そのようなことを……」

「そうです。通時殿より確かに聞いた事です、間違いござるまい」

「……」

絶句するしかなかった。許してもらえなかったのだ。許すそぶりを見せ、このような仕打ちとは。

家成は、輝虎のことを婿とは思っていなかったのか。では、お雪

は。お雪はどうなる。輝虎が死ねば、お雪はどうなる。

知らずに、身体は震えていた。

――捨てられた。――

と思った。自分も、お雪も。

そんな冷たいもののために、自分は戦っていたというのか。そんなものへの義のために、戦ってきたというのか。

綾山常光という強敵と戦っている最中に、そのようなことを平気でしでかすとは。これにはさすがに、輝虎も愚かと思わざるをえなかった。

だが、だからといっていつまでも落ち込むわけにもいくまい。齒を食いしばって震えをとめ。実成の手をとり、握りしめ。

「ご案じめさるな。それがしが一番槍をつとめ、見事城を獲ってみせましようぞ」

と強気を見せた。

城を獲れば許してくれるという、なら、そうしてみようではないか。

実成は、かたじけない、というしかなかった。

第三章「赤日」その二十

夜も更け、月がたくさんの星たちを引き連れ夜空に浮かぶ。

闇がすべてを包み込む。

式頭城も、中村家成も、なにもかも、包み込む。覇者を志すものといえど、この自然の摂理に抗う事は出来ず。

燭台の火で、わずかでも払いのけようとする。部屋に、ほのかに灯がともる。

ともしる灯のなかに浮かび上がる、蒼白の美少女。

お鹿は、灯のなかに座りこんで、長い黒髪をだらんと着物の背に

垂れ下げて、燭台を眺めていた。

瞳の中で、灯がゆれている。

家成は来ない。

最近、新しい女を手に入れたようで、お鹿は相手にされなくなっ
てしまっていた。

その陰気な性格が、家成の気に障ったようで。

ならいつそ、尼にさせてほしい、と思ったが。それすらも許され
ない。つけず、はなさず。とりあえず、一応は置いておこう。そん
な感じだ。

そんな飼い殺しにされていて、心に来ないわけもなく。

満足に食事も取らず、夜も眠れず、ときおり城内をさまよい、世
話役の女たちをこまらせることもしばしばであった。

自分がなぜ生きているのかわからない。

自分自身が木偶になりつつあるようだが、それすらも気付かない。
それ以前に、なぜ自分がこのような目に遭うのか。一族は滅ぼさ
れ、自分は慰みものにされ、挙句の果てにこの仕打ち。

もはや人として生きてゆくことは叶わないのであろうか。

灯をともし椿の油がなくなったか、部屋が暗闇に包まれた。

だがお鹿は意に介する様子もなく、闇に包まれるままに任せた。

それから夜が明けて、世話役の女たちがお鹿の部屋にやってくる
と。

お鹿は、燭台を眺めたままの姿で、ぼお、っとしていた。

朝日が差し込むなかにあっても、その姿はゆらぎ、さながらかけ
ろうのようであった。

世話役の女は首を横に振り、一歩下がって、また一歩さがって、
お鹿から遠ざかっていった。

続く

第三章 赤日 頁三

第三章「赤日」その二十一

お鹿が白痴になつてゐるということにも関心を示さず。家成は家来の須木屋主水の娘をよく可愛がつてやつていた。

正確には、主水の娘ではなく、養女である。主水は娘がおらず、そのため、めぼしい娘のいる自分の家来から、養女としてそれをもらうけ、家成に貢いだ。

もし娘が子をなせば、血のつながりはないとはいえ、中村家の親族となる。そうなれば、今よりも高い位置につける。

それこそが主水の狙いであつた。いたずらに戦場で命を危険にさらすよりも、このやり方の方が安全であり、確実である。

輝虎は真正直に戦場で頑張つてゐるが、主水から見れば、頭が悪いと思う。もつとも、そんな頭の悪いものがいなければ、戦場で面倒くさく危険な思いをせねばならないのだが。

頭の悪さもまた使いようである、としたものか。

「これこそが、世の渡り方というもののよ」

と、自分を誇らしく思つていた。事実、家成も主水に目をかけてやつてゐる。よほど娘が気に入つたのであろう。

お鹿は美しいが、いかんせん性格が暗い。なぜそうなのか考えることはなかつたが、とにかく暗い娘は家成の好みではなかつた。

それに対し、主水の娘は明るく、よく家成になつく。

これもまた、主水の計画通りであつた。そのような娘を選びだし、養女としてもらひつけたのだから。

「なにが娘婿だ、ざまを見ろ、だ」

と、ひそかに輝虎をののしる。娘婿であるということを生かさず、生かせず、捨て駒にされてしまつて。

さすがに、奇跡でも起こらない限り、輝虎の武勇をもつてしても

わずかな手勢で城を落とすなど、無理であろう。

所詮、武辺一本の正直者など、その程度なのだ。なにも無理に働きなどせずとも、出世は出来るのだと、近しいものにあからさまに言い捨ててもいた。

輝虎を捨てる、ということは、娘である雪姫も捨てるということ。邪魔になる親族としてのライバルがいなくなること、安堵と快勝の気持ちでいっぱいだった。

朝方出仕した式頭城の窓から見える朝日、空。その空の向こうにいるであろう輝虎たちがどんな思いをしているのかと思うと、たまらないくらい、心地よくなって。

我は勝った、と会心の雄叫びをあげたくなるのだった。

第三章「赤日」その二十二

来ぬか、まだ来ぬか、と常光は待ち受けていた。中村家成がまた攻め入るのを待ち受けていた。

今度こそ、確実に完膚なきまでに叩き潰せる、という自信と確信。そのための準備も怠りない、なにより、士気も高い。

そんなときに、入った吉報。

「申し上げます」

から始まった家来の言葉に、常光は小躍りしたくなるような気持ちだった。

「中村家成の娘婿、大高輝虎およびその僚友久遠実成と聖通時の軍勢が領内は鐘賀城へと向かっております」

「数は？」

「およそ、五百」

「五百？」

思わず耳を疑った。鐘賀城は平地にある小城で攻めやすいとはい

え、わずか五百でそこを落とすというのか。城攻めには、五百は少ない。

「間違いではないのか」

「それがしも、謀者に何度も確認したのですが、間違いではなく、まこと五百であるということです」

「それはおとりで、別に軍勢が控えておるのではないか」

「それも、ないようです」

「？」

わからない。なぜそのような無理な攻撃を仕掛けるのか。しかし、それよりも軍勢の中に輝虎がいる。

「まあよい、輝虎が来ているというなら、かねてより打ち合わせていた通りのことをするまでよ」

と、家来に何か指示を出す。

この指示を実行にうつすのは気が引けるのか、家来が自分の部屋から飛び出した後で、苦い顔をする。だが、それもやむなし、と自分に言い聞かせていた。

まずひとつ。鐘賀城を預かる金子庄介に使いを出す。

もうひとつ、常光の指示を受けた隠密の者三名が、大高の郷へと向っていた。

そうとも知らず、輝虎らは鐘賀城目指して進軍する。なるべく国境近くにあつて、平地で、攻めやすい小城、ということ、進軍先は鐘賀城となった。

そこを落とし、家成に差し出すのだ。

とにかく、早めにしなければならぬ。遮二無二に駆けた。もし籠城をされて援軍が駆けつけければ勝ち目はない。

よしんば落とせても、まさか置いて帰るわけにもいかず。そこへ城を取り戻さんと大軍を持って来られればひとたまりもないから、そうなる前に、落とした直後に使者を出し家成に援軍を頼まなければいけない。

どうやって落とすか、とにかく力攻めしかない。下手な策では時

間が長引き失敗するのがおちだ。もつとも、どう足掻いても失敗という公算のほうが大きい城獲りなのだが……。

留まるも地獄、行くも地獄、そんな心境だった。

そんな中で、自分たちを迎え撃つために敵方が城より打って出てくれることをひたすら祈っていた。そうなれば、道は開ける。

己の槍働きで、敵方を木っ端微塵に打ち砕き城を奪い取るのだ。そうなるように、我知らず、題目を唱えていた。

輝虎は題目を唱えながら、修羅になろうとしていた。

お雪も、いまごろは仏間で本尊に向って、おなじように題目をあげているだろう。いくさというものに、今の世に、悲しみを覚えながら。

第三章「赤日」その二十三

鐘賀城の城主、金子庄介は常光からの使いから受け取った書状を見て、ふむと鼻息荒く頷き。

「よく承つてござる」

と野太い声で言った。

それから、戦闘準備に入った。輝虎らを、城より打って出て迎え撃つために。城兵は五百。互角の兵数である。

それとは別に、大高の郷へ向かった隠密の者三名。

大高の郷へ入って、接触するものがある。

大高輝虎の家来、氏清晴景。

晴景はまさかそんなものが来ているとも知らず、邸宅で孫の千丸をあやしていた。

千丸は泣きっぱなしだ。それを見て、自分も泣きたい気持ちだった。

こんなにも愛しているのに、どうして笑ってくれぬのか。

すまぬと嫁の八重に千丸を返し、自室の濡れ縁で日向ぼっこをする。老齢にさしかかり、いまや安穩のみを求める老人となった晴景。かつて若者らをこわっぱだの若造だのと呼ばわったころの気概はなかった。

気概はないが、気がかりなことがある。あの、捨て駒にされたともとれる無理な城獲りの命令。なぜ家成がそんな命令を下したかは知らぬが、何かで怒らせてしまったのかもしれない。というくらいの想像はできた。

それからの、大高家の命運は、おのずと連想させられた。いままで中村家成という大きな存在が背後についていた。それがなくなり、裸同然にされたのだ。それで城を獲れ、などと。

輝虎が何かで家成を怒らせて、見切りをつけられてしまった。そうに違いない。

そうなれば、大高家はどうなる。それに仕える我らはどうなる。

千丸はどうなる。

気がかりは日増しに大きくなり、それは不安に形を変えた。

特に孫への愛情が複雑に絡まって、自分でもどうしようもないくらいだった。

善景亡きあと、孫の千丸だけが心の支えだった。

戦でたたかい、戦死するのはいとわれない。だが、もし千丸が敵の手にかかってしまうなど、考えただけでも気が狂いそうだった。

中村家より棄てられた、大高家という宙に浮いた小豪族に仕えることに何の意味があるのか。どのような未来があるというのか。

千丸は、その未来に身を置かねばならないのか。

「わしはどうすればよい」

お天道様に向って、ぼそっとつぶやいた。

「綾山常光さまにお仕えすればよろしゅうございます」

という声が返ってきた。

これには晴景も驚き、四方八方を見回したが、人の姿は見えない。空耳かと思ったが、それにしてもなんともしやな空耳ではないか。

実際、それも考えていたのだから。

「己が一番の大事とするもののために余生を捧げるならば、それし
かありますまい」

といいながら、誰かが目の前に現れた。さも自宅の庭を歩くかの
ごとく、氏清家の邸宅の庭を歩き、晴景の前に姿を現したものだ。見
たことはない、郷の者ではなさそうだが。

「お、おぬしだれぞ」

「それがしは綾山常光様にお仕えする者でござる」
「げっ」

狼狽し、声にならぬ声をあげて立ち上がり、腰の刀に手をかけた。
しかし。後からまたふたりと現れた。ひとりとは女だった。

いつの間にこの三人は邸宅に入り込んだのか。

「よろしいのですかな。我らは三人、おひとりで敵いますでしょう
か？」

「ひ、ひとを呼ぶぞ」

「どうぞ」

「……」

あまりにも堂々とした態度に気圧され、力なく座り込んだ。白昼
堂々と綾山常光の手のものがここまで入り込んでくるなど、しかも、
こつちの内情にも詳しそうで。それがどうということなのか。その衝
撃は大きかった。

完全に、なめられている。だが、いまや我々はその程度のもので
しかない、ということだろう。それで意地を見せたところで、どれ
ほどのことがあるのか。そう痛感せざるを得なかった。

「まず、我らの話をお聞きください。千丸さまがかわいいと思うの
であれば……」

晴景は、力なく頷くしかなかった。

第三章「赤日」その二十四

輝虎らの向かう鐘賀城では、城主金子庄介がしきりと動いて迎撃の軍勢を整えつつある。

常光よりの書状には、城に籠るな、打って出てよ、とあった。

「それこそ我らが望むところ」と鼻息が荒い。

城に籠り援軍を待つなどかつたるい、打って出て思いっきり暴れまわりたい。それが庄介の好きな戦い方であった。

またそんな主に仕える家来たちも同じだった。

「はよう来いはよう来い」

と、嬉々として輝虎らを待っていた。

それと同時に、城の女や子供たち非戦闘員の避難も着々と進んでいた。

「しかしのう」

庄介は戦の準備を進めながら、不満げにつぶやいた。

「城をくれてやれ、とはのう」

書状には、常光の捻り出した策が書かれてあった。城に籠るな、打って出てよ、とあるのも策のひとつであった。

鐘賀城は、先祖より受け継いだ城ではないが、庄介が綾山家に仕え、その働きを認められて常光より預かった城だった。

それだけに愛着もあるのだが、それどころではない、ということか。

むしろ、中村家成との戦いがこの城一つの犠牲ですむのなら安いもの、ということか。

書状にはしっかりと、戦の後の、建て直しの普請代くらい出してやる、と付け加えられていた。

向かう先で迎える側が何をどう考えているかなど知らず、輝虎は必死になって駒を進めていた。

休憩もそこそこ、とにかく急げやと。

軍監の通時はそんな輝虎の意中など知らず。

「疲れた」

といいすぐに休みたがる。

「通時殿、お疲れなのはわかりますが、事は急を要します。なにとぞ、ご辛抱を」

といつても聞かない。だからといってまさか軍監を置き去りにするわけにもいかない。実成も輝虎と同じようにいさめるのだが、あまりいさめすぎると無用の恨みを買いか成に何を言われるかわかったもんじゃない。

そのためやむなく、途中途中でしばしの休憩をとった。

馬を下りた輝虎は家来の一人に手綱を持たせ、もどかしそうに腕を組み同じところをぐるぐる回り、落ち着きがない。

それを見る十兵衛は、手綱を持ったまま馬のそばでどかっとな腰を下ろし、ため息をつき、ふと城のある方角を向き空を見上げる。陽が紅く染まって、山々の中へと沈もうとしている。

ほんとなら、ここで休憩をせず夜通し駆け抜けて鐘賀城にゆくつもりだった。

―さてお凜のやつは、どうなることやら。―

以前、自分を嫁にしろと言われたことがある。しかし、嫁など要らぬと、それを突っぱねた。

大高家が中村家の家来である以上、いつか、今のような城獲りにゆかねばならぬようなことがあるのではないかと思っただ。ほんとうにそうなってしまうとは。

―だから要らんと云ったのだ。―

しかし事はお凜だけには留まらないだろう。大高の郷そのものの未来がこの城獲りにかかっているのだ。

いや、大高の郷だけではない、実成の治める久遠の郷も同じだ。いま城獲りにゆく皆はもちろん、それに関わるものたちの未来がかかっているのだ。

―おのれ。―

齒を食いしぼり、拳を握り締める。今は、おのれ、以外の言葉は思い当たらなかった。

その十兵衛が思いを馳せる大高の郷では、氏清家の邸宅で、八重が床に突っ伏して泣いていた。

千丸は女中にあずけ別室で寝かしつけている。

義父より話があるというので聞いてみれば、それからただ泣いてばかりだった。

「なんのために我が夫は死んだのでございますか」

「いうな」

「でも」

「殿はかわいい、しかし、孫はもつとかわいい」

その言葉に、八重は返す言葉もなく、泣き続けるしかなかった。

「泣くな八重、ゆけ、ゆかぬか」

「……」

何も言わず、涙をぬぐいながら立ち上がり、義父の言うがままに千丸のいる部屋へ向う。そこで、女中にすべてを話し。旅の支度を整えさせる。

最初驚いていた女中だが、八重の様子に何もいえなかった。

千丸は何も知らず、すやすやと眠っている。その寝顔を見るのが、八重には辛かった。

陽はだいぶ傾き山に沈もうとしている。支度を終える頃には丁度良い加減の暗がりとなるだろう。

女がひとり、部屋に入ってきた。常光の命で大高の郷にやってきた隠密の女だ。

「飯歌の城につくまで、わたくしが千丸様をおあずかりいたします」といった。

旅の間、千丸の世話は全て自分が引き受けるという。旅に慣れていない八重が、道中千丸の世話をするのは大変だろうからと、そのために、来ていたのだった。

常光は、輝虎の家来の家庭事情まで探りを入れていた。そこで、

晴景という良い戦略的素材を見つけた。

隠密をもつてそれをそのかし、大高家を内部から分裂させるのだ。ただ分裂させるだけではない、輝虎が出陣している留守の間にひとつ仕掛けてやるのだ。

八重は、女を赤くなつた目で睨みすえ。

「結構です」

といった。

子連れて、生まれ育つた郷を出ていかざるを得ないことになつてしまつて、八重は、ただ無念さをつのらせるばかりだつた。

第三章「赤日」その二十五

金子庄介は城外の野原に陣を敷き、輝虎らを待ち受ければ、向こう側の森より馬のいななきが聞こえ、それから人馬の影が現れて、砂塵が舞う。

「来たぞ」

騎乗にて、槍を片手に庄介は鼻息荒く言つた。

「来ておりますな」

隣にいる家来も同じように鼻息を荒くして言つた。

「さて、おぬしら手はずは心得ておろうな」

「はい。輝虎と一戦を交え、さつさと逃げて城をくれてやれ、と」

「そうだ、抜け駆けは許さん。これを破るものは斬る、よいな」

「心得ました」

と言いながら、後ろを向き城を見る。

「しかし」

せこい、といったかった。そんなことをしなくても、我らが正面切つて叩き潰してやろうものを。

「なんじゃ？」

「いえ、常光さまもよくお考えになることで」

「言うわ。まあ、おれもおぬしと同じ事を考えておるわい」

「せつかくのお城でございますのにな」

「それよ、しかし確実に輝虎を討ち取るためには、やむをえん」

庄介も後ろを振り返り、城を見る。せつかく手に入れた城なのだが、この一戦のあとで新しくなるというのであれば、文句も言えない。

「まあよい、一戦を交え退くまでは本気でやってやるわい。敵に弱いと侮られるなど、心外じゃ」

正直いって、正面切って輝虎とぶつかり、それを打ち破ってやりたい気持ち大きい。だが、常光の策を実行することが大事である。影が濃くなると同時に旗印が見えるようになって、人馬の声も聞こえだし、砂塵も大きくなってくる。近付いてくる。

「ふっ」

と笑った。

「楽しそうですな」

「まあな」

庄介は笑顔で応える。退けという命令は不満だが、それまでは本気でぶつかる気にいる。相手は、中村家で武勇第一とされる若武者、大高輝虎。

腕が鳴る。まるで腕白小僧がこれから合戦ごっこをするような、胸のときめきを覚えずにはいられなかった。

― おれは武士なのだ。―

という強烈な自覚。強いものをもとめ、命を賭けて戦うことの歓喜を覚えたものの、快感。

大高輝虎、相手に不足はない。

おのずと、また一段と鼻息は荒くなる。

槍を握る手に力がこもり、その槍の穂先にまで自分自身の力がみなぎってゆくようであった。

第三章「赤日」その二十六

「見えた」

輝虎は叫んだ。

目指す鐘賀城が、見えた。興奮のあまり槍の穂先で城を指し示す。森を抜け、広い野原に出た。その野原の向こうに、鐘賀城があった。小さな平城だ。

輝虎の槍の穂先の向こう、中天が傾きかけようとしている。鐘賀城は陽の光を受け、ひなたぼっこをするように、静かにたたずんでいる。

「あ、あれは」

実成が言った。

「敵は城外に出て、我らを待ち受けておりますぞ」

ということは、途中物見に見つかり報告されたか。何も知らなければ、外で待っているわけもない。

「むしろ好都合ではないか」

と通時は言う。籠城などされるより、この野原で揉み潰してやつたほうが戦術的に楽だからだ。その後、城を獲つてすぐに家成への使者を出す。

常光が大軍をもつて奪い返しに来てもなんとかふんばって、家成よりの援軍を待てばなんとかなるだろう、と思っていた。

輝虎は齒を食いしばった。槍を握る手に、力がこもった。そうすれば。

「殿、どっちが一番槍をとるか、競争しましょう」

と、隣にいた十兵衛は言う。

「なに」

いきなりなにを、と思って十兵衛を見た。

笑っている。これから遊びにゆく無邪気な子供のように。

「十兵衛」

輝虎は一瞬呆気にとられたが、その笑顔につられ、頬をほころばせてしまった。

「ぼやぼやしていると、置いていきますぞ」

「そのときは、おぬしの背中を突いてでも先頭に立ってやるわ」

「おお怖や。ならそれがしも本気で相手しますぞ」

「望むところ」

というと、声を立てて、笑った。ここまで来たら、泣いても仕方がない。どうせゆくなら、笑ってゆこう。

我らは、武士なのだから。

「あつはははは」

という、ふたりのけたたましい笑い声が進軍する中に響いた。

これには通時はぽかんとした。だが実成は、まともにふたりを見ることが出来なかった。

自分のために捨て駒にされてしまったのに、それを恨むどころか、敵陣を前にしてこうして笑っていることが、実成には心苦しかった。

——どうしてお屋形さまは咎をおれひとりに背負わせなかったのか。——

しかし、不思議と自分も笑っていた。なぜか、心苦しさは解けてゆくようになり、いつの間にか、楽しいと思っていた。

輝虎と一緒にいることが、輝虎と一緒に戦うことが。

気がつけば、皆笑っていた。最初こそお互いに顔を見合わせ何事かと思っただが。

結局は、輝虎と十兵衛の笑い声につられて、皆笑いだして。

これから戦場となる野原に笑いが響きあっていた。

第三章「赤日」その二十七

ふたつの集団がひと塊になって、お互いに近付こうとしている。

それぞれの旗がはためいている。馬はいない。陽の光が刀槍に反射して、きら、きら、と飛び散るようにきらめいている。

輝虎は大きく息を吸った。

それから、我知らず題目を唱えていた。

庄介は、鼻息も荒く、槍を構える。

後方で弓の弦が引つ張られ、きしむ音がする。

馬は、徐々に速度を上げてゆく。

頬を風がなでてゆく。

目の前には、敵。

打ち倒すべき敵がいる。

ぴたっ、と題目をとめた。

「かれ」

と叫ぶや否や、槍を構えて馬を走らせる。

横で十兵衛が輝虎を追い抜こうとしている。

「十兵衛、一番槍は渡さぬぞ」

というと同時に、数十本の矢がふたりの頭上を跳び越し、目の敵目掛けて勢いよく落下してゆき、それに当たった不運なものたちを転ばせる。

向こうからも同じように数十本の矢が飛んでくる、後ろのものたちがそれで転ばされてゆく。

だが目もくれず、ひたすら馬を走らせた。そうしている中で、再び題目を唱えていた。唱えながら、仏間にいるであろうお雪を想った。

題目が効いているのか、輝虎に矢が当たることはなかった。

「まだまだ」

距離はある。あきらめず、十兵衛は輝虎を追い抜こうとして必死だ。そうしている間にも、向こうとの距離は縮まってゆく。

馬蹄の音が、鬨の音が、野原に響き渡り、空を揺らす。全速力で馬を駆けさせ、目の前の景色は吹き飛ぶようにして流れてゆく。

全身で、空を、風を裂いてゆく。馬を走らせるにつれ、馬蹄の音が早まるにつれ、空の、風の壁は厚さを増してゆき。それを、全身で体当たりし、打ち砕いてゆく。

打ち砕かれた風の破片が、頬を切り裂かんとするばかりにしてなでながら、駆け抜けてゆく。その風は涼やかだった。

もう向こうの兜に目鼻顔立ちまでわかるようになってきた。皆、顔を赤くして、目を血走らせて、まるで鬼のようだ。

その中に、鐘賀城城主金子庄介もいた。庄介もまた、一番槍をとろうと家来と張り合っている。

「その修羅の首、わしが貰い受けるわ」

と叫んだ。どさくさに紛れ、あわよくば輝虎の首を、と思っていた。家来に抜け駆けするなど言いながら、すっかり自分が抜け駆けすることを考えていた。

――ようは輝虎の首を獲ればよいのじやろうが。――

と、それが庄介の言い分であった。それよりも、輝虎は、娘婿から、修羅と呼ばれるようになっていた。先の戦で、あわや綾山常光を討ち取ろうとしたほどの働きをして以来、そう呼ばれるようになっていた。

馬が、騎乗の武士たちが、陽の光を受けきらめく槍の穂先が並んで、その先頭に輝虎がいて。向こうに、すぐ目の前に同じように、鐘賀城のものたちがあって。

激突した。

「一番槍とつた！」

という輝虎の叫び。その叫びが終わるころ、馬から落ちるもの。そのものは胸から血を流して、もう動くことはなかった。

どこかで同じように。

「一番槍とつた！」

という叫びがした。それを聞いた庄介は、家来に先を越された無念さを、鼻息も荒く槍をもって目の前の騎馬武者にぶつけた。

それから人馬刀槍入り乱れて、合戦となり。

砂塵舞う中、血が流されていった。

第三章「赤日」その二十八

そのきざしは、突然やってきた。

仏間で、数珠を手にもって本尊に向って題目をあげているとき、こみ上げるもの。

そのきざしが消え、落ち着きを取り戻したとき。お雪は自分の中で何が起きているのかをさとした。

これは、と思い、真っ先にお藤のもとへといこうとした。

このことを、お藤に一番に言おうと。ほんとうなら輝虎にいいなかったが、今は戦にいいない。

その代わりというわけではないが、お藤もこの日を待ち望んでいたのだ。

九つのときに大高家に嫁いで、何年になるだろう。

はやる気持ちを抑え、お藤がいるであろう奥の部屋へと向つていった。

そしたら、なにやら城内が騒がしくなった。

急に男たちの声がしたと思ったら、女たちの声もある。なぜかとも大きな声を出していて、喧嘩でもしているのだろうか。

声は城の入り口から広間にかけての渡り廊下からしていた。

こんなときだと思います、なんだろう、と思って声のするほうへへ行けば。

そこには、なぜか甲冑姿の晴景がいて、同じように甲冑姿の家来数名もいた。その中に、隠密の男もひとりいるのだが、お雪にそれがわかるわけもない。

お藤とお凜に数名の侍女と女中が、それらとなにやらもめているようだった。

―どうしたのだろう。―

あまりのことに声も出ず、呆氣にとられる気持ちでそれを眺めていた。それにもお構いなく、怒号が響いた。

「はようこの城から出てゆかぬか」

「いいえ、そうはまいりませぬ」

「聞き分けのないことを」

「それは晴景どののほうじゃ。血迷ったのか」

今何といった？ 城を出てゆけ？

なぜ晴景はそんなことを。

「あの」

おそろおそろ、お雪はそこにいる者たちに声をかけた。かりにも城主夫人の自分をさしおいて、何を論議しているのか、とまではお雪は思わなかったが。これはただ事ではないというくらいのはわかった。

「もう大高家は終わりじゃ。殿はいった先で討ち取られ、やがてはこの城に綾山の軍勢が押し寄せるとぞ」

「何を縁起でもないことを。殿のご武勇は晴景どのがよくご存知のはず」

「そんなもの、焼け石に水じゃ。常光様がそのように手はずを整えておる。このままでは、そちらも危ういのだぞ。そうならぬためにも、城から出よと申しておるのに」

「聞こえませぬ。我ら女たちは、殿の勝ちを信じ、お帰りをお待ちするまで。それを、こともあろうに千丸どの惜しさに寝返るなど。」

それこそ武士の風上にも置けぬ。この無様を善景どのがご覧になれば、そのご心痛いばかりか」

お雪の声など聞こえぬか、晴景らとお藤ら女たちは喧々諤々の口論を繰り広げている。いやそれよりも、晴景が千丸惜しさに寝返る、とは。これは、どうということなのだろうか。

お藤が善景の名を出したのが堪えたか、晴景の体が震えだした。「のう晴景どの、なぜお優しいあなたさまがそのようなことを申さ

れるのですか。千丸どののことも、殿を信じておれば……」

お藤は必死の説得を続けていた。しかし。

「聞けぬと申すか」

と言いながら、晴景は太刀に手をかけた。女たちは怯んだが、お藤は毅然として。

「太刀になど手をかけて、どうなさるおつもりじゃ」といった。その刹那。

「こうするのじゃ」

と、白刃がきらめき、鮮血が舞った。お藤は、舞い散る鮮血の中、髪を振り乱し、仰向けに崩れ落ちた。

その鮮血に弾かれるようにして、女たちは悲鳴を上げながら、一目散に城から出て行った。残ったのはお凜だけだった。がたがたと震えていて、あまりのことに足が動かないらしい。

「お藤！」

お雪は叫んで、崩れ落ちたお藤に駆け寄ったが。すでに息絶え、目は閉じられていた。

「そんな、どうして。――」

乳母として、乳飲み子のころから大切に育ててくれた育ての母が、よもや兇刃に倒れることになるうとは。

しかも、お藤に一番にいいたいことがあったのに。

あまりにも衝撃が大きすぎるのか、涙も出なかった。ただ、うつろにお藤のなきがらを瞳に映し出すことしかできなかった。

「おひい様ですか」

血塗られた太刀の切っ先をお雪に向けて、晴景はいった。

「ご覧になりましたか。もはや大高家はこれまで。悪いことは言いませぬ、お城より出られ、尼にでもなられた方がその御身のためです」

第三章「赤日」その二十九

晴景の目は血走って、口をつむぎ震えながら鼻で大きく息を吐いた。自分でも、この狂い様が痛いほどわかつているのだろう。

お雪に刃を向けるということが、どういうことか。

さすがにこれには、晴景の家来も、狼狽しているようだった。仮にも、中村家成の娘である。それを、斬るか。

いや、もうすでにこうして裏切っているのだから、家成の威光など関係ない。一番大きいのは、まだ小さなおひい様だったころを知っていることだった。

嫁いで間もないころ、慣れぬ他家での寂しさから、よく泣いていた。それを、幼い主だった輝虎が何度も優しく慰めてあげて、ともに手まり歌を口ずさみ、鞠をついていたものだった。

そののみならず、お雪のために、輝虎は十兵衛相手に打ち負かされても打ち負かされても、泣きながら喧嘩をして。

それを、心温まる思いで見ていた。いや、今斬ったお藤だって、お雪の恋を知って、感激の涙を流していた。

なのに、今こうして裏切り、お藤を斬り。さらにお雪に刃を向けねばならぬとは。なんとという因果のめぐり合わせであろう。

―これが戦国という世だ。―

晴景は、心の中で必死に言い訳をしていた。今こうせねば、千丸の未来はないのだ。

「お、おひい様」

お凜は、声を震わせ搾り出すように、ようやく「おひい様」とだけいった。それ以外のこと、何も出ない。ただ、がたがた震えているだけだった。

十兵衛相手に喧嘩で勝ったことがある、といっても、昔と今とでは勝手が違う。いつも自慢している昔の武勇は、所詮は昔のものでしかない。今は、無力な女でしかないことを痛感していた。

「お凜」

ふと、自分が呼ばれたのに気付いて、その方を向いた。お凜は震えていた。それを見て。

「もう、いいですよ。ありがとう」

といって、微笑んだ。

それは、自分に仕える侍女に、ではなく。初心な自分に恋というものを教えてくれた、仲の良い友達に向けるような微笑だった。

「おひい様……、ごめんなさい」

お凜は、そういうと手で顔を覆いながら、駆け足で城から出てゆく。その後姿を見送ってから、ふたたび目をお藤のなきがらに向け

た。

「……」

何も、言葉は出なかった。

「どうなさるおつもりですか」

と晴景が問うた。返答次第では、お藤二の舞である、と。

お雪は、ぽそつとつぶやくようにいった。
「わたくしは、大高輝虎の妻です。ここで、お帰りをお待ちします」

晴景の手が震え、太刀もつられて震えた。

お雪は、ここで輝虎を待つという。

「それはご本心から、ですか」

「はい」

即答だった。今さっきお藤を斬った、そのお藤の血がついた太刀など目にも入らないらしい。じつと、目を閉じたお藤をみつめていた。

その横顔は、晴景の裏切りを責めるでもない、お藤の死を悲しむでもない、ただじつとお藤のなきがらをみつめながら、まるでお藤のなきがらの、そのまた向こうに何かがあるような、遠くをみつめる眼差しをしていた。

瞳は、濡れているようでもなく。そのみつめるものを映し出すように、澄んでいた。

晴景の手の震えが止まった。と思うと、太刀を鞘に収めくると背中を見せて、家来どもを無視して城から出ようとする。

殿、おひい様はどうするのですか、と隠密の男が言ったが。

「捨ておけ。女ひとりになにができる」

と吐き捨てる。

お雪は関心がないように、何の反応も示さなかった。男たちはみんな出て行って、城にお雪ひとりが残された。

第三章「赤日」その三十

常光の仕掛け、それは晴景を裏切らせ、郷の城でひと暴れさせて、城を空にさせることだった。

大高家において晴景の存在と信頼は大きい。それが裏切って、城でひと暴れしたとなれば、その動揺は大きなものになるだろうし。それでみんな驚いて逃げ出して、城は空になるだろうと見込んでいたが。

見事常光の見込みどおりとなった。

もちろん、そんなことをしでかした晴景が安穩と常光の到着を待っていていられるわけもなく。万一中村側から手勢を向けられればひとたまりもないだろうから、城でひと暴れしたあとに綾山領内へと逃げ込む手はずになっている。

それに先駆けて、八重と千丸は、隠密の女とともに綾山の領内へと逃げ出していた。その護衛のために、もうひとりの隠密の男がつねに太刀を抜ける体勢で、一緒に歩く。

道中、やはり足が堪えた八重はやむなく千丸を女に預け、杖をつきながらほうほうの体でよろめき歩く有様だった。女はやはり慣れているのであろう、千丸を抱きながらも、足取りは軽い。

隠密の女と男は、八重にも千丸にも無関心そうで、ただ常光の命

令を遂行することのみに専念していた。

もうすぐ小屋がある、そこで休みながら晴景たちを待とう。ということだが、八重にはその小屋がまだまだ遠く感じられて、足は重くなる一方だった。

千丸は、女の腕の中ですやすやと眠っていた。もう、お雪に抱かれることもないなど、知る由もないし。自分の幼名の由来を、知ることもないかもしれない。

―おまえさま、お許しを、お許しを。―

心の中でそればかり唱えていた。我が子の未来と引き換えに、大高家を売らねばならないとは。その大高家のために、善景は我が子の顔を見ることなく、みずから命を絶ったというのに。

これから、心の底から笑えることがあるだろうか。どのような顔を、我が子に見せれば良いのだろうか。

八重は、このような時代に生まれたことを、呪わしく思わずにはいらなかった。

その八重らが捨てねばならなかった城で、お雪はまた仏間に戻って、本尊を前にうつむき、手は膝の上に置かれ、その手に持つ数珠をじっとみつめていた。

ゆびさきに、赤い血がこびりついている。仏間に戻る前、お藤の手を胸元に置き合わせ、着物をかぶせた。そのときに、ゆびさきに血がついた。

誰も、城に來ない。

晴景の寝返りは郷全体に大きな衝撃を与えて、それで、みんな次から次へと郷から逃げ出していた。もうここにいても仕方がない。新天地を求めて、みんな郷を捨てた。

誰も大高の城など気にも留めなかった。誰も城の中のお雪のことなどかまわなかった。

もう、輝虎らはいった先で、討ち取られているかもしれない。

もはや、大高家に未来はなく、終わりだけが足音も立てずにひたひたと近付きつつある。皆、そう思っていた。

お雪は、何も思わなかった。思えなかった。

手の数珠を、ゆびさきの血を、じつとながめながら。ながめているうちに、まどろみにおそわれて。

やがて、倒れこむようにして横たわって、瞳を閉じて眠りこけてしまった。

本尊は、横たわるお雪を前にして、窓から入る陽の光を受け止めていた。

その陽の光が、赤く染まってゆく。

まだ陽は落ちず中天の空に浮かんでいるというのに、その姿は、赤く染まりつつあった。まるで、死んだものたちの血を吸い tooka かのよう to、赤く染まりつつあった。

白い雲も、青い空も、染みわたるような赤い陽によって、赤く染まってゆき。

ついには、空そのものが赤く染まった。赤い空に、赤日が浮かんでいた。せきじつ

眠りこけるお雪を、本尊を、赤日の光がつつみこむ。

赤日の光につつまれて、本尊も、お雪も、赤く染まっていた。

続く

次頁にて完結

第三章 赤日 頁四

第三章「赤日」その三十一

輝虎は槍を振るう。

槍が一閃するたび、返り血をあびる。

砂塵が舞い、その中でけたたましい刀槍の音、人馬の声が空を揺るがし、震わせ。それに人の心も振るわされて。

皆、必死の形相で戦っていた。

城を獲るために。未来のために。

菖蒲の旗が、砂塵の中を駆け抜けた

騎馬武者が、輝虎に突っかってきた。

「いざ」

と一騎打ちを申し出。

「応」

という応えがあがった途端に、討ち取られてしまった。主人をなくした馬が乱戦の中消えてゆくのも構わず。

―大将はどこだ。―

と、しきりに大将をもとめる。雑魚などいくら討ったところで意味はない。戦は大将を討ってこそ勝てるものだ。

「御大将はいずこにあるか。われは大高輝虎なり」

と大声をあげた。その叫びが相手に聞こえ、さっきの騎馬武者のように出てくるのではないかという期待を込めて。

だが、なかなか見つけれなかった。

庄介は十兵衛と激しく槍をぶつけあっている真っ只中だった。

輝虎と並んで一番槍を競いあつて、それから乱戦の中はぐれはぐれになつてしまった。

十兵衛も輝虎に負けじと槍を振るい。振るううちに、庄介とばつたりでくわし、とっさのことにお互い名乗りも忘れて、相手が誰か

わからぬまま、そのまま一騎打ちとなった。

「ぬしゃあ、できるな」

と庄介が叫べば。

「おぬしこそ」

と十兵衛も、槍をぶつけながら叫ぶ。お互いに、我知らず、顔がほころぶ。

―こりや楽しいわい。―

と、庄介と十兵衛は一騎打ちを楽しんでいた。庄介は、中村家には輝虎以外たいしたものはいないと思っていたが、なかなかどうして。他にも齒^{さか}ごたえのあるやつがいるではないか。

十兵衛も、武士の性^{さが}というものを、隠し切れなかった。所詮、そういう生き方をしてきた者なのだ。

―お凜の言うとおり、やつぱりおれは馬鹿なんだなあ。―
と、しみじみと思った。

実成も奮闘していた。輝虎や十兵衛ほどの戦働きができるわけではないが、実成は実成なりに、必死に戦っていた。

「押せ、押して押して、押しまくれ」

菖蒲の旗を横目に、声も大きく家来たちを鼓舞しながら、上手いとはいえぬ槍さばきで乱戦の中を駆け抜ける。

だが敵もさるもの、そうはさせじと押し返してくる。

それでも。

「ひるむな。押せ、押せ、押しまくれ」

と、なんとかかのひとつ覚えのように「押せ」ばかり叫んだ。

聖通時は後ろに控え、大高と久遠の、両軍勢の働きを眺めていた。乱戦から少しはなれ、敵が近付けばそれを矢を放ち追い返す、というせこさであった。

通時にすれば、捨て駒の行く末を見届けるとというのがこの戦での仕事だった。負けたとなれば、一目散に逃げるつもりだった。

正直、面倒くさいと思った。
しかし。

―おれは何をしている……。―

と、両軍勢の働きを見るうち、自分のしていることを考えるようになりはじめていた。

城を獲ろうと、皆戦っている。誰も後ろを振り向かず、鐘賀城へと向かい、たちはだかる金子庄介の軍勢とぶつかり、押しあいへしあい。

その中で、輝虎や十兵衛、実成は槍を振るう。

次第に、体が震えてくるのをおぼえた。

「ゆくか」

というと、配下のものに突撃の下知をくだした。皆と一緒に戦い、城を獲るのだ。

この「勝ち戦」で、自分だけ傍観していたなど、とても家成には言えない、と。

その攻防戦の報を、常光は謀者から聞いた。

現在中村側の軍勢が、城より打って出た金子庄介の軍勢とぶつかっている、と。

今いる場所は、鐘賀城より一里もない。率いる軍勢は、かき集められるだけ集めて、三千。それが、足踏みでもするかのように、鐘賀城より一里もない距離で、とどまっていた。

「ようし、いい塩梅だ」

と、采配を握る手に力がこもる。

―しくじるなよ、庄介。―

心配があるとすれば、あの荒い鼻息が名物の家来が、無闇に輝虎の首を狙わないかということだ。

下手にそんなことをしてくれたら田尾和孝の二の舞になりかねない、そうなれば、全てご破算だ。ここまで来て、そんな失敗は許されないのだ。この一戦で、中村家成との決着が着けられるのだ。

全ては、輝虎の首ひとつ。それを獲るために、城一つを犠牲にするのだから。

たとえ討ち損じても手は打ってある。

どう転ぼうとも、輝虎に壊滅的な打撃を与えられるのは、間違いない。

それを、輝虎は知らない。

城を獲ろうとひたすらに槍を振るう。

脳裏にお雪の姿が浮かぶ。赤ん坊を抱いていた。

その赤ん坊が、自分たちの子となるのは、いつの日であろうか。

その日を迎えるためにはまず、目の前の城を獲らなければいけないのだ。

皆、一緒だった。自分たちの未来をかけて、城を獲ろうとしていた。押し返されても、押し返されても、ただひたすら押しまくって思えば十一の年、九つのお雪を妻として娶った。いや、娶らされた。

それが、今日の城獲りへとつながった。

――お雪……。――

齒を食いしばる。胸の中に広がる戦意。それは、言い換えれば殺意ともいえて。澱のように胸の中に降り積もる。

その気持ちのまま、槍の穂先を血に染めてゆき、自身は返り血を浴びる。

気がつけば、知らずに題目をあげていた。お雪も、今頃は同じように唱えているだろうか、と思った。はなればなれでも、互いが同じ題目をあげること、心はつながっているような気がした。

「修羅」

誰かがそう言っているのが聞こえた。

輝虎がゆく。

槍を振るい、ゆく。

ゆく先々で、修羅という言葉聞いた。何度も聞いた。

守らねばならぬものがある。そのために、修羅になり、修羅と呼ばれた。

それが、輝虎の生き方だった。

第三章「赤日」その三十二

城をめぐる戦はさらに激しさを増してきた。捨て駒とされた輝虎と実成らの必死の前進が、守る側の金子庄介の軍勢を押しつつあった。

十兵衛との一騎打ちを楽しんでいた庄介だが、次第に自分の兵たちが後ろへ後ろへと下がりつつあるのを感じ取った。

――強い。――

ただそれだけを思った。その時。

「十兵衛、それは大将か。おれによこせ！」

と、こっちにむかってまっしぐらに突っ込む若武者があった。若武者は突っ込みながら。

「わが名は大高輝虎」

といった。

――なに。――

その声が聞こえたか、十兵衛は庄介へ槍を繰り出しながら。

「おぬし、大将だったのか」

と問うた。

「おお、鐘賀城城主、金子庄介じゃ」

「なに、そうだったのか。おれは大高輝虎が家来、津川十兵衛」

と、ようやくにしてお互い名乗りを上げた。そうしている間にも、輝虎は近付く。途中それを妨げようとするものもあったが、すべて輝虎の槍で屠られてしまった。

まるで、竜巻にでも吹き飛ばされるように。

一騎打ちの最中、それをちゃんと見れたわけではないが、気迫はいやでも肌で感じ取ることが出来た。それこそ、その気迫がそのまま竜巻となってこっちにやってきているようだった。

「ええい、くそ」

と吐き捨てると、突然十兵衛から逃げ出した。予定通り、退却をするためであった。

「逃げるな」

と十兵衛と輝虎は一緒に言ったが。庄介は聞かず、引け、と言いながら遠ざかっていった。庄介の号令を聞いた兵たちも、敵兵にかまわず一目散に逃げ出した。

おのれ、と輝虎と十兵衛は庄介を追いかけようとするが、それの後ろから実成がとめる。

「それよりも城を」

と言う。

そうであった、と舌打ちをしながら、輝虎は城へと駆け出した。敵は逃げ出し、城へゆくのを妨げるものはいない。

人の背丈よりやや深めの空掘と、それなりに高い堀に囲まれた木造の屋形を目にし、それが自分たちのものになると思ったとき。

「やった！」

と、輝虎は吼えた。つられて十兵衛や他の者たちも、次々と「やった！」と吼えた。獲った、城を獲ったのだ。

心の中で雪解けがあつて、春が訪れるような、会心の心地よさであつた。

「獲った、獲ったぞ。あはは……、あつははははは！」

自分でも知らないうちに、そんなことを何度も何度も、吼えた。いつの間にか、えいえいおう、という勝ち鬨があがっていた。

「かつはつは。もう一本」

敵の敗走に、実成も珍しく上機嫌になり、勝ち鬨を家来たちにあげさせていた。よほどの勝利が嬉しいのだろう。それもそうだ、もし城を獲れなかったら、もう自分たちは終わりだったのだから。

勝ち鬨を背に、逃げ出す敵兵たち。それを見送りながら、通時はごくりと唾を飲み込み。

「やりおつた……」

とつぶやいた。

つぶやきながら、輝虎と十兵衛に出くわした。そうすれば、すぐさま馬を降り。

「申し訳ござらぬ」

と平伏する。

輝虎らは通時の様子に驚き、何事かと思った。

「それがし、輝虎どのをあなどり、よもや見事城を獲るなど思っていないませんでした。ゆえに無礼な振る舞いをしてしまいました。面目次第もございません」

平伏しながら、これまでの非礼を詫びた。それを見た輝虎と十兵衛も馬を降り。

「何を言われる。それがし、そのようなことなどちつとも気にしておりませぬ。さあ、お顔をお上げください。ともに城へ参りましよう」

と、輝虎は通時の手をとっていった。十兵衛も続いてひざまずき、笑顔で、左様左様、と言っていた。

「輝虎どの……。かたじけない」

輝虎の優しさに、通時は人目もはばからず男泣きしていた。意外に情にもろい性格なのかもしれない。そんな通時を見て、輝虎は彼を見直した。

これからは実成と同様に、良き僚友となってくれるであろう。

「さあ、ゆくぞ」

と、馬に乗り、城に向う。十兵衛と通時と馬を並べて。やがて実成も同じように馬を並べて、城へ向った。後ろには家来たちが続き、皆笑顔であった。

和気藹々としていた。

城門前では、先に城門前に来ていた家来たちが数名詰め掛け、大将を待っていた。彼らは、なにか大声で話し合っている。

城を獲ったことに興奮し喜んでいるのであるう、と思った。しかし、近付くにつれ、様子がおかしいことに気がついた。

なぜ城を獲ったにもかかわらず、彼らは険しい顔をしているのだ

ろつか。通時は、こんなめでたいときにどうしたと、不審に思い。
「何事だ」

と問えば。

「あ、殿。そ、それが、城の中にはひとつこひとりおりませぬ」
という応えがかえってきた。

第三章「赤日」その三十三

「なに」

家来の言葉に通時は、一瞬まさかと思った。しかし。

「まことでございます。ひとはおるか、米粒ひとつもありませぬ」
「そればかりか、門の門かどぬきもありませぬ」

次から次へと、耳を疑う言葉が、まるで噴き出すように出てくる。
輝虎と実成、十兵衛は顔を見合わせ。まさかと思いつつも、騎乗のまま家来たちをどかし、門をくぐった。そして、門の門があるうかと思うところを見れば、確かに門がない。止め金具も、中を通す大きな角材もない。あつたと思われるところには、何かでえぐったような凹みがあった。ということは、取り外したということか。

これでは城の守りがままならぬではないか。そんな門の城を、金子庄介は守っていたのか。

いや、そんな馬鹿なことはありえない。

輝虎は、春を迎えたはずの胸の中に、また再び冬がおとずれようとしているような不吉さを感じ、とっさに馬を降りて槍を家来に預け、城に入り、中をぐるぐるとまわった。

「……」

一階をまわり、狭く急な階段を上り二階へと上がった。そこにも、なにもなかった。ただ、窓から空が見えた。空はにくらいいほど青く澄みわたり、雲やお天道様が気持ちよさそうに浮かんでいた。

何も言葉は出なかった。家来たちの言うとおり、城の中は空だった。ひとつこひとりもない。

これは空の城ではないか。

しかしなぜ、城は空なのだろう。

十兵衛と実成が輝虎のもとまで来て、同じように絶句する。通時はうろたえはじめてきた家来たちを必死になだめていた。

そういうときに、余計なことを言うものがあるもので。

「城は空じゃというのか。ではこれは、空城の計というものではないか」

とか何とか言って、いらぬ知識の披露をしてくれる。

空城の計とは、あらかじめ空にした城をおとりとしておびき寄せ、奪わせて。敵が奪いとった城の異変に気付き狼狽するその隙について急襲し、城もろとも攻め滅ぼす策のことである。

「余計なことを言うな」

通時が、いらぬ知識の披露をしたものを殴りつけ黙らせる。だが時すでに遅し。

「これは敵の策なのか」

城に詰め掛けた兵たちの動揺は、一気に広がった。大将にだけこつそりといってくれば、また対応のしようもあつたろうが、まったく下手に物知りなものほどタチが悪いものはない。

おかげで、勝利の喜びから一変、どん底に突き落とされたような失望感が城の中に広がっていた。まさにこれこそが、常光の狙いであつた。

「うろたえるな。お屋形様への使いを出せ。援軍が来るまで、持ちこたえるのだ」

だが策とわかって踏みとどまろうとするものはほとんどなく、我先にと門のない門をくぐって数名が逃げ出した。

「逃げるな」

と太刀を振りまわしながら、門の真ん中で仁王立ちするが、効果はなかった。皆弾かれるように、通時の太刀をかわしながら逃げ出

した。

そうしているうちに、輝虎らが門まで戻ってきた。

輝虎は、預けた槍が地に横たわるのを見て、呆然としていた。

それから、遠くで関の音がするのを聞いた。と思うと、逃げ出したものたちが城へとんぼ返りに帰ってきた。

それがなにを意味するのか。

言うまでもない、綾山常光率いる三千余の軍勢が、鐘賀城目掛けで突き進んでいるというこであった。

その中に、さきほど逃げ出した金子庄介もいた。

「どうじゃ、輝虎は強かつたろう」

という常光に返す言葉もなかった。

城から少し離れた場所で、謀者が戦の様子を見、庄介が逃げ出すと同時に馬を駆って一足先に常光に知らせに行った。

謀者から知らせを聞いた常光は、ついに三千の軍勢を動かした。

動かして、逃げてきた庄介の軍勢と合流した。

庄介は合流とともに、かつて自分が城主をつとめていた城を攻め落とそうとしていた。

三千余の兵がひと塊に、城に向っている。それは大きな黒い化け物が地を這って向ってきているようだった。

その様が、城から見える。

見張り台の立つものが。

「来た」

と叫んだ。叫び声は恐怖に震えていた。三千余の軍勢、地を這う大きな黒い化け物は翼を広げるようにして左右に広がってゆき、城を取り囲もうとしている。逃げ道も塞いでゆく。これでは逃げ出すことは不可能に思えた。

「うろたえるな。門を閉めろ。守りを固めろ」

通時が叫ぶ。なんということだ、と苦虫を噛み潰した顔をする。

自分の軍勢の兵たちは、一応は通時の言うことは聞くが、三千という大軍に恐れおののき、戦意を喪失していた。皆おびえ、うろたえ、

全身をがたがたと震わせていた。

中には城の屋内へと逃げ込み、猫のように身を縮めているものもあった。しかし、そんなことをしても何の意味があるう。もはやそれすら思いも及ばない。

謀られた。すべては、常光の手のひらの上で踊らされていたのだ。その時。

「な、なんじゃあれは」

と、空を指差すもの。

その声に、皆空を見上げ、顔色を失った。

空が赤く染まるうとしていた。

まるで死んだものたちの血を吸ったかのように、お天道様がまず赤く染まった。それに続いて、血をしたたらせたかのようにして、空が赤く染まってゆくではないか。

無論下界までもが、赤い空と同じように、何もかもが赤く染まっていた。まるで地獄が降りてきたかのように思われた。

それは錯覚ではなかった。皆、空を指差し。

「空が……」

と足を止め、絶句する。ひとり、ふたり、それから次々と、足を止めるものが続いた。何かよからぬことでもあるのか、なんぞ天魔の仕業なのか。庄介までもが、空を見上げ馬を止めた。

赤い空に怯えて、三千余の軍勢の足取りが鈍くなる。

「……」

さすがの常光も、これには怖気を感じずにいらなかった。皆の言うとおり何かよからぬことの兆しなのか。このまま攻め入ってよいものか、どうか。

「天が泣いている」

ぽそつと、常光はつぶやいた。今の世、この戦国乱世を、天が嘆いているのか。これからおこなわれようとすることに、天は泣いているのか。

先に天に昇ったものたちの血が、そのまま天の涙となって、空を

濡らしたというのか。

あまりの空の不気味さに、引き返そうか、という気持ちが沸き起ころうとしたが。ふと脳裏によぎる輝虎の瞳。その瞳の奥にあるもの。常光は齒を食いしばって、それから。

「なにをしている、止まるな、ゆけ、ゆかぬか」

と叫んだ。言うまでもない、家来たちは空が不吉と戸惑った。

「不吉は向こうとて同じことではないか。ならば、いつそ我らがその不吉になって、あやつらを葬り去ってやろうではないか」

馬上より家来たちに向って、そう、ひたすらに吼えた。ここでやめるわけにはいかないのだ。ここでやめれば、戦はまだまだ続く。それを終わらせるために、まずは輝虎の首を獲るのではないか。そのため、城一つを犠牲して策に陥れたのではないか。

「思い出せ、今までの中村家成の所業を、輝虎の修羅のごとき働きを。またあやつらに好き放題させたいのか」

それを聞いた家来たちはお互いに顔を見合わせて、次に常光を見て、「応」とこたえた。

そのとおりだ、ここで空の赤日におびえ逃げ出してしまうことは、中村家成の軍勢を助けることになってしまう。

中村家成のせいで、どれほどのものたちが無念の涙を呑んだのか、どれほどの血が流されたのか。そしてその手先となる娘婿の輝虎を生かしておけば、これからもまた修羅のごとき働きをして、我らを苦しめるであらう、と。

皆、己自身を空のような不吉として、城のものたちを葬り去ろうと、止まりかけた足をまた進めはじめた。

第三章「赤日」その三十四

輝虎は動かなかった。周りが恐怖の色に染まり、乱れに乱れて、

がたがたと震えながら応戦しようとするのも気にもとめなかった。
―今までおれのやってきたことは、なんだったんだろう。―

何のために戦ってきたのだろう。何のために、この身を血に染めてきたのだろう。お雪を妻として迎えて、お雪の悲しみを振り切つて、結局はこんなことのためだったのか。

空が赤く染まっている。ただぼんやりと眺めることしか出来なかった。今まで自分が殺してきたものたちの血が、空を染めあげたようだった。

その赤い空が、綾山常光の軍勢を呼び寄せたような思いがした。

「輝虎どの、輝虎どの」

「殿、殿」

実成と十兵衛が互いに輝虎の肩をゆすりながら、大声で叫ぶ。そこでやっと、我に帰る輝虎。

「ああ……」

とだけ応えた。

実成と十兵衛は、呆けた輝虎に苛立ちながら、必死の形相でいった。

「逃げましょう」

「逃げる？」

「どうやって？」

小城に籠るたった五百弱の軍勢でもって、どうやって三千余の軍勢から逃げようというのか。

それ以前に、よくこんな状況で己を保てるものだ、とそんな変なことに気付いた。

「我らが血路を開きます」

その言葉を聞いてもしばらく呆けて、それから、その言葉の意味を理解して。そこでやっと、はっとして。

「血路？ 血路を開くとはどういうことだ」

「言つまでもない、我らが殿のために逃げ道をつくるのです」

「何を……」

何を言うのかと思えば、それは、輝虎のために実成と十兵衛が死ぬことにはならないのか。と思えば、実成は、いつもの実成らしいお人好しそうな顔に戻って。

「それがしは、一度ならず二度までも輝虎どのにこの命を助けてもらった。その命、今度は輝虎どののために使わせてくだされ」

「馬鹿な」

自分のために死ぬ。それは善景でたくさんだ、と思っていた。なのに、次は実成がそうなるというではないか。輝虎は首を横に振り。「そのようなことを申されるな。死ぬのであれば、ともに」

もう助からないと思っている。今までのことを思えば、是非もないと思っていた。

「殿、実成どのだけでなく、それがしもでござるぞ」

と十兵衛がいった。彼もまた輝虎のために死ぬという。なぜ十兵衛までもそんなことを、と思えば。

「それがしは殿の家来でござるでな。家来が殿のために命をなげうつことのどこに、不思議がござる」

などということさらりと言うではないか。

そうこうしているうちに、敵は迫ってくる。鬨の音が、馬蹄の音が、だんだんと大きくなってくる。それにつられるようにして、地が、空が揺れはじめてくる。

「嫁をもらわなくて、……いや、もらえなくて、よかったでござるよ」

十兵衛は可笑しそうに言いながら、地に横たわっていた輝虎の槍を拾って、輝虎に差し出す。

「馬鹿な、馬鹿な」

輝虎はそればかり繰り返す。自分は、そこまでしてもらうほどのものなのか。どうして自分のために人が死ななければいけないのか。守るために、戦ってきた。それなのに。

「もうよいのでござるよ。我ら、輝虎どのには、死んでほしくないのじゅうるよ」

「そうじゃそうじゃ」

ふたりとも、笑顔でそういった。とはいえ、輝虎としては合点がいかない。なら、死なないにしても、それからどう生きるというのだ。

「己が一番の大事とするもののために、生きればよろしゅうござる。それが、我らの望みでござる。それでも聞かぬというのであれば、また、輝虎どのを殴らねばならぬ」

何もいえなかった。

十兵衛から槍を受け取った。それから、数十本の矢が高塀を飛び越えてきた。悲鳴が聞こえた。もう戦にならぬことは、周りを見ればよくわかった。

――もはやこれまで。――

実成と十兵衛は、全ての終わりがやって来るのを本能的に察していた。そこから輝虎を逃がせるかどうか、残りの命を、全てそれに賭ける。

「輝虎どの、実成どの」

と通時が三人に割って入ってきた。気がつけば他にさらに、数十人の心ある家来が、三人を取り囲んでいた。彼らもまた。

「我らが血路を開きますゆえ、そこよりお逃げなされよ」

というではないか。さらに通時まで。

「もうこの城はだめですな。なら、せめて輝虎どのに逃げていただくよりほかはなし、ということ。お願いでござる、どうかせめてもの償いをさせてください。お屋形さまなことなど、もうよいのじゃよ」

と頭を下げた。その愚慮から勇将を捨て駒にし、拳句にこのような馬鹿馬鹿しいことを迎えてしまつて。通時は、家成の主としての素質に、今になって気がついた。そんなものために死ぬのはごめんだ、しかし、助かりそうにない。なら、このままむざむざと死ぬのではなく、男として、武士として、命を賭けるに値するもののために、戦って死んでいきたくかった。

そこまでいわれて、頑固に死ぬといえなくなってしまうて。輝虎は黙って頷くしかなかった。

「ゆくぞ」

実成が吼えた。十兵衛も、通時も、心ある家来たちも。

「いざ」

と馬にまたがり、輝虎も慌ててそれに続けば、突然どんと門が開いた。ついに攻め手がやってきたのだ。城のものたちを皆殺しにしよう、皆鬼のような形相をしていた。

城門だけではない、三千余の兵は城を四方八方に取り囲み、空掘に丸太の橋を架け、高塀を取り壊し、次から次へと鼠が群がるがごとくに城へと押し寄せてきた。

実成と十兵衛、通時らは輝虎を取り囲み、まずは城門より出ようと次々と潮のように押し寄せる敵兵を槍で突き伏せていた。

「ええい、どけどけ！」

通時みずから先頭に立ち、城門への道を切り開こうと槍を振るった。それに輝虎らが続く。

その働きが功を奏し、やっとのことで城門をくぐったが、目の前にはまだまだ敵兵が満ち溢れていた。通時もさすがに一瞬ひるんだ、怖くないと言えばうそになる、しかし覚悟を決め満ち溢れる敵兵の中に身を投じた。

「通時どの」

続きながら輝虎は叫んだが、その叫び声は届かなかった。通時はただひたすらに槍を振るっていた。

頭上では矢が、火矢が、飛び交っていた。

城の高塀の中では、阿鼻叫喚の地獄絵図が展開された。ところどころで悲鳴があがっていた。

城のものたちは必死の抵抗をこころみるが、いかんせん、多勢に無勢、話にならなかった。

戦にもならなかった。

容赦はなかった。今まで苦しめられた恨みが満ち溢れていた。

その恨み凄まじく、多勢をたのみにひとりを数人で取り囲み、まるで芋を串でさすかのように槍で突き、大根を切るかのように太刀で斬り殺す。

城に雪崩れ込んだ綾山の軍勢によって、そんな、一方的な殺戮が繰り返られていた。

血が飛び散り、屍の山と血の川が出来。火矢により、火の手もあがっていた。

城の中では、天井から、上の階で死んだもののたちの血が板の継ぎ目から滴り落ちる。そして、その下にあるなきながらも滴り落ちる。見張り台のものも、いつの間にか矢でハリネズミにされていて、息絶えていた。丸太の囲いによりかかり、だらんと上半身を垂れ下げていた。と思ったら、頭の重みでずり落ち、仲間のなきがらの上に落ちてきた。

それを、火が包もうとする。

その下界の様を、血の涙で空を染め上げたような赤日が見下ろしていた。

第三章「赤日」その三十五

輝虎は城の中がどうなっているかを思いながらも、後ろを振り返らずに、通時らに囲まれながら馬を走らせた。

「どうして、どうして」

こんなことになったのか。

まわりは、なにかもが赤くなっていた。

それこそ自分たちは、地獄の真っ只中にいるように思われた。

―おれは、今まで何をしてきたのだ。―

今までしてきたことは、地獄に堕ちることだったのか。ただ、守るもののために戦ってきたのに。それが、地獄に堕ちることだった

というのか。

「ぼやぼやするな！」

叫ばれて、はっと我に帰った。それで、そう叫んだのは十兵衛であることに気付き、その方を向いた。

返り血を浴びて、顔中赤く染まっていた。それよりも、家来が主に、ぼやぼやするな、とは。しかし十兵衛はかまわず。

「何も考えるな。ただ逃げることだけをせんかい」

とまた一喝した。

気がつけば、綾山の軍勢の中へ、かなり奥深く入り込んでいた。付き従うものの数も減った。その中で特に戦下手な実成はところどころに傷を負い、息も絶え絶えで、それでもなんとか必死になって輝虎のそばにいた。

四方を取り囲まれて、無論後ろからも追われて。

――十兵衛。――

何もいえなかった。ぽかんとその顔を見、その言葉遣いに、彼の必死さを思った。そうすれば十兵衛は、可笑しそうに笑った。

「ははっ」

と笑った。

城獲りの戦の前にも笑っていた。

――ここまで来たら、泣いても仕方ないじゃないか。――

泣いて今までのことがなかったことになるなら、いくらでも泣こう。でも、そうはならない。なら、笑ってゆこうではないか。

我らは、武士なのだから。

輝虎は齒を食いしぼり、前に向きなおり十兵衛の言うとおりひたすら前へ前へと突き進んだ。壁のように立ちはだかる敵兵たち。それをなぎ倒しながら、ひたすらに前へ、前へ、と。そしてそのたびに、付き従うものたちは減っていった。

最初鐘賀城を守っていた金子庄介が、輝虎らが城から飛び出すのを見て。

「卑怯」

と叫んだ。大将ともあろうものが、悪あがきか、見苦しい、という軽蔑の念が起こった。が、しかし。

「いやまて、さっきのあやつもおるではないか」

と、途端に嬉々として、十兵衛めがけて突っ込んでゆく。よほど先の一騎打ちが楽しかったのである。

「おい、さっきの続きじゃ続きじゃ」

と鼻息荒く変なことを叫んでいる。

それに気付いた十兵衛は、先に一騎打ちをした武者が迫ってくるのを見たが、今はそれどころではない。邪魔そうに苦々しく舌打ちをし。

「あと、あと」

と、しつしと槍を振る。

だがそれで素直に「はい」という庄介ではなく。続きじゃ続きじやと叫びながら、しつこく迫ってくる。言うまでもない、迫るのは庄介ひとりではない、その配下のものたちも迫ってくる。

まったく仕方ないといったげに。

「殿、それでは、ごめん」

と馬首を返し、庄介のもとへと向かう。

「十兵衛、よせ、相手にするな」

輝虎は叫ぶが、十兵衛は聞かない。そのまま突っ込み、槍をぶつけ合う。槍をぶつけ合うふたりを囲む人の壁。

その人の壁は十兵衛を押し囲み、押し潰そうとする。

「十兵衛」

輝虎のその声は届かず、かすかに、十兵衛が槍を振るっているのが見えた。庄介自身は一騎打ちでいきたいだろうが、他のものたちの今まで積もりに積もった恨みが、それを許すわけもなく。

手を出すな、こやつはわしの獲物じゃ、という庄介のことなど聞かれなかった。

——しまった。——

と思っても後の祭り、庄介と十兵衛の間に出来た人の壁は厚みを

増し、ふたりをさえぎる。

「どうせこんなことになると思ったわい」

と庄介に毒づきながら、十兵衛は槍を振るう。まったく馬鹿を相手にするところくなことがない。と思ったが、また同じように自分も同じ類のものではないか。今まで何度馬鹿と呼ばれたことであろうか。特にお凜のやつに。

―ほんとに、あいつの言うとおりだなあ。―

それがなんだか可笑しくて、思わず笑みがこぼれた。自分には似合いの終わり方ではないか。

「是非もない」

笑って、そう叫んだ。

叫びながら、押し寄せる人の壁の中に埋もれていった。庄介は、それをただじつと眺めてゆくことしか出来なくて、得意の荒い鼻息も、出なかった。

第三章「赤日」その三十六

「十兵衛、やめろ、十兵衛！」

輝虎は思わず馬首を返そうとしたら、傷だらけで息も絶え絶えなはずの実成が。

「十兵衛を犬死にさせたいのか」

といって、輝虎の馬の手綱をとった。

実成に曳かれ（ひかれ）ながら、何度も何度も後ろを振り返った。時折十兵衛の槍が遠目に見えていたが、やがては、その槍は見えなくなっていくた。

そう思ったら、今度は前の通時が、脇に槍を食らってしまった。

「おのれ」

と言いながら、脇の槍を左の手で握ったまま、相手を自分の槍で

突き返す。しかし、かなり奥深くまで刺さったようで、口から血を吐いた。

「いやこれは、はしたないところを見せてしまったな」

口のまわりを赤くしながら素晴らしい、刺さった槍を抜き。

「実成どの、あとは頼みましたぞ」

といいながら、十兵衛と同じように笑いながらさらに前へとまっしぐらに進み、前方の敵兵の中へと消えていった。そうすれば、道が開かれた。しかし道が開くとともに通時は馬から転げ落ちていて、びくりとも動かなかった。

後は、知らない。

輝虎は実成に曳かれながら、残り少ない心ある家来たちに囲まれて、綾山の軍勢の中を突っ切っていった。

そのことは常光も知っていた。自分たちが取り囲む鐘賀城から輝虎らが飛び出し、この軍勢の中を突っ切って逃げようとしていることを。

「なんと」

それだけだった。それ以上のことはいわなかった。

いう必要もない。それに対しどうするかは、おのずと家来たちが実行するだろうから。

ただ、空を見上げた。

城は燃え出して、その煙が赤い空へと昇っていかうとしていた。

―天よ、我を許さずともよい。閻魔の裁きを受けるのも、やむなし。

理由はどうかあれ、自分の判断で、どのくらいのものたちが死んだのであろう。自分の判断で、どのくらいのものたちを殺したのか。殺したものは、皆が皆中村家成のようなひとでなしというわけではないのだ。

そのひとでなしを殺すために、そうでないもまでも殺さねばならない。

常光は、やがては己も天に昇ることを思いながら、齒を食いしば

り、拳を握り締めた。

そんな常光の心など知らず、いつの間にか輝虎は遮二無二に槍を振るっていた。いつまでも実成が手綱を曳くわけにもいかず、なかばやけになって、槍を振るっていた。

「修羅」

という言葉が、また聞こえた。いい加減その言葉も聞き飽きたものだ。

―逃げる修羅などあるものかよ。―

自嘲的にそう思いながら、大高の郷のことをも思っていた。

こうなれば、何としても大高の郷へと逃げ延びて、そこで再び軍を整えなおし、死んだものたちの弔い合戦をするのだ。

それだけを考えて、槍を振るった。

後先のことなどまで、考えが及ぶわけもなく。お雪のことすら、今は何も思わなかった。

「輝虎どの、もうひとふんばりでござる」

と実成が叫べば。

「待っておれ、待っておれよ」

必ずや弔い合戦をせんと、赤い天に昇ったであろう十兵衛と通時に、槍を振るいながら輝虎はそう叫んだ。それを聞いた実成は、てつきり大高の郷で待つ妻の雪の方に言っているのであると思う。

「その意気でござる。それでこそ、それがしも励み甲斐があるというもの」

と笑顔でいった。

いいながら、馬から崩れ落ちた。すでに体の数箇所を傷を負い、甲冑もぼろぼろになり、息も絶え絶えであったのだ。それでも実成は氣力を振り絞り戦い続けて、輝虎がやっと生き延びようとする気になったことに安堵して、氣が抜けたのであろう。

―もうよいかな。借りも返せたようであるし。―

敵が首を獲ろうとしている。しかし、何も気にならず。なぜか安らぎを覚えて、そのまま眠るようにして、実成は瞳を閉じた。

第三章「赤日」その三十七

お雪が目を開いた時、あたりは夕焼けの赤に染まっていた。手にもつ数珠を握り締め、辺りを見回し、それから本尊を見た。仏壇の中、一枚の紙にえがかれた御文が、浮かび上がるようにして見えた。

その御文は、宗祖の魂を墨に染め流し書いた御文であるという。その御文を眺めて、自分の腹に手をやり、ため息をつく。それから、題目を唱えていた。

時間が経つのも忘れ、ひたすらに題目を唱え続けていた。

もう城には、誰もいない。なぎがらとなったお藤を除いて、誰もいない……。

いや、いる。自分の中に、もうひとりいる。

そう思うと、胸の中からこみ上げてくるものがあり、次から次へと湧き出るようにして題目を唱える声が出た。

そうしていると、本尊を通して、輝虎の姿が見えてきそうだった。お雪は、題目を唱え続けていた。

輝虎がこの城に帰ってくることを信じて。

その輝虎はというと、自分でもどこをどうやって走ったのかわからないまま、馬を駆って郷を目指していた。どうやってあの中を突っ切ったのかも、覚えていなかった。実成が死んでから、我武者羅に槍を振るい、やがて目の前が真っ白になって。

気がつけば、自分ひとり。

城から出て、家来の津川十兵衛が、僚友の久遠実成と聖通時が、死んだ。

自分のために、どれほどのものたちが、死んだのか。

その中で、ただひとつ覚えているもの。赤い空に昇る煙。

それは、皆が煙になって赤い空に昇るように思えた。

「……」

何かをぶつぶつとつぶやいていた。

それはお雪が唱えている題目であった。気がつけば唱えていた、それが何度あったのだろうか。

中天にあつた赤日は傾きはじめ、山の中に身を沈めようとしている。

影が伸びている。

その影を見た。ほっそりとしていて、頼りなく秋の終わりのすすきのように頭を垂れている。

「修羅か」

輝虎は、寂しそうに笑った。

影は人を映すという。なら、このほっそりと頼りなく伸びたすすきのような影のどこが、修羅なのか。戦に敗れた敗者そのものではないか。

「おれが修羅なものかよ」

ぼそつとつぶやいた。

それでも齒を食いしばり。

「いや、待っておれ、待っておれよ」という。

何としても郷に帰り着き、死んだものたちの弔い合戦をするのだ。もう、父君のことなどどうでもよい。どうせこの敗戦で許してはもらえないだろうから。

勝敗もどうでもよい。合戦が出来ればよかった、そこで死のうと思った。

それで、お雪はどうするのか。

いや、考えるな、と首を横に振った。女のことなど考えても始まらない。女子供は女子供で、自分たちでどうにかするだろう。

今の輝虎を支えているのは、死んだものたちへの弔いの気持ちだった。それを、弔い合戦という形にしてあらわすことしか、考えが

及ばなかった。

やがて陽が落ちた。赤日によって赤く染まった景色が、闇に包まれていった。

その闇から、題目を唱える声だけが、響いていた。

第三章「赤日」その三十八

城の有様を見た常光は、何も言わず口をつぐんで、首を横に振った。

空の赤日はすでに山に沈み、あたりには夜の帳が落ちていた。かがり火を焚いて、自分たちが攻めた城を照らし出す。

かがり火は闇を払い、光を灯し。城のまわりはまるで昼のように明るかった。

その光によって、闇から浮かび上がる焼けた城。骨組みをあらわにして、ところどころが黒く焼け焦げた無残な姿をさらす。

まるで城が食い散らかされたかのようなだった。

かつては自分のものだったこの焼けこげた城を、庄介は魂が抜けたような目で見つめていた。

やがては建て替えられるとはいえ、死者が吐き出されるようにして次から次へと運び出されるのを見て、もうこの城はいらない、どこか他の城をくれと常光にお願いしようかと思った。

庄介とて武士である、死というものを恐れてはいない。しかし、戦というにはあまりにも一方的な殺戮がこの城の中で繰り広げられたことを思うと、またこの城に住もうとはとても思えなかった。

ここで死んだものたちの世話は、自分には荷が重過ぎる。

それから、敵味方の区分なく、死んだものたちは丁重に弔われた。死者の大部分は、中村側の兵たちである。

大きな穴を掘らせ、そこに死んだものたちを埋めて、木で作った

急ごしらえの墓碑を立てて。その作業中、ずっと従軍の僧らに読経をさせていた。

軍勢三千余のものたちは、常光の死んだ敵兵への弔いように首をかしげていた。かつて自分たちを苦しめていたものたちである、それでなんでこんなに丁重に弔うのかと。

その中で少しでもその心情を察したものは。

「常光様はお優しいお人なのだ」

と、そのお優しいお人が戦で号令せねばならなかったことに、密かに涙した。

死者を弔う作業を見守っていた常光だが、輝虎のなきがらがなくことが気がかりだった。どう探しても、輝虎のなきがらがいないという。

家来の十兵衛、僚友の実成と通時のなきがらはあったというのに、輝虎はいない。ということは、逃げ切ったということか。

それに対し。

「あやつは修羅どころか畜生以下の卑怯ものでございますな」

と輝虎を非難する声もあった。地獄の餓鬼ながら、たくさんの人の死と引き換えにしてもまだ生を貪るのか、と。

―それは違っただろうな。―

常光はひとり思っていた。

もし自分が輝虎の家来か僚友なら、命を賭けても彼を助けたくなかったろう。それだけの価値はある男だ。おそらく、彼らは命がけ、いや己の命と引き換えにして、輝虎を逃がしたのだろう。

輝虎も、その意志を酌んで、逃げ切ったに違いない。

なぜか確信的にそう思う自分が不思議でもあったが、それを思うと、あの時、一騎打ちをした時に見た輝虎の瞳を思わずにはいられなかった。

一点の濁りもない、とても澄んだ瞳だった。その瞳の奥に秘めたもの。

「夫婦雛か」

ぼそつと、つぶやいた。

――もしかすると、ほんとうに助けたかったのは……。――
妻である雪の方は、今自分の瞳に何を映し出しているのだろうか。
きつと、雪の方の瞳も、輝虎と同じように、とても澄んだものに違いない。

ため息をつき、光の届かない闇の向こうへと思いを馳せる。

「ゆかねばなるまいか」

大高の郷へ。三千余の軍勢を率いて。

第三章「赤日」その三十九

どれくらい時が経ったのか、走ったのか、わからない。

地獄が降りてきたかと思うほど空が赤く染まって、それから今は、大高の郷にいる自分がいた。

それほど離れていたわけでもないのに、何故か懐かしい景色。

「帰ってきた」

そういった途端、どこか異変を感じた。

人の気配がないのだ。

郷の人々の気配が、まったくなかった。

どういうことだと、郷の家々を一軒一軒まわってみれば、誰もいない。郷の家や家来の邸宅すべてが、もぬけの殻だった。

無論、氏清晴景の邸宅も空だった。

「……」

輝虎は呆然としている。そこに、晴景や八重、千丸がいなくては、いないのに、どうしていないのか。

空の城を掴まされて、それで必死の思いで郷に帰ってきてみれば、郷もまた空、とは。

「お雪」

お雪はどうなっただろうか。心が異様に騒ぎ、飛ぶようにして城へと急いだ。空の郷にあつて、知らないうちに、自分がどこか別の世界に飛ばされたような錯角さえ覚えかねなかった。

もしかしたら、お雪すらいけないのではないかと。

山の坂道を登り、城の門まで来て、馬から飛び降りた。それから、鬱陶しそうに兜を地に投げ捨てる。体が震えていた。城に入るのが怖かった。

城もまた、人の気配がなかった。

馬は、輝虎が降りると崩れるようにして倒れた。あつと思って馬を見たが、もう息がなかった。馬もやはり傷だらけで、輝虎に鞭打たれ命を削りながらここまで走ったのだ。

これでまた、自分のために、またひとつ死が積み重ねられた。

それから目をそらし、意を決して城に入れば、廊下になにか着物をかぶせられたものが置かれてあつた。その着物はお雪のものだった。

「お雪」

慌ててその着物を掴み、引き剥がせば、斬り殺されたお藤のなきがらがあらわれたではないか。

「……」

絶句し、着物を掴んだまま、後ろへ下がる。背が壁に当たった。するりと力が抜け、着物が手から滑り落ちる。

「お、お藤」

その名をつぶやくも、応えはなく、ただ瞳を閉じて横たわるのみだった。なぜお藤が斬り殺されて、お雪の着物をかぶせられているのだろうか。

「お雪。どこだ、お雪」

声を荒げて、妻の名を呼んだ。鐘賀城を回ったとき以上の恐怖が、胸をかき乱した。それこそほんとうに、気が狂いそうだった。

―おれは無間地獄に堕ちてしまったのか。―

いけどもいけども、何もない。死だけが積み重ねられた空の世界

に、放り込まれてしまったのか。
その時、耳にそつと触れる声。

「あれは」

と声の方を向いた。

それは、お雪の題目を唱える声だった。仏間からしていた。
まさに地獄に仏と、声の方へと走れば、確かに仏間にお雪がいた。
数珠を持つ手を合わせ、本尊に向い題目を唱えていたお雪がいた。
輝虎に気付いたお雪は、唱題を中断し。

「お帰りなさいませ」

と指を畳について頭を下げた。

第三章「赤日」その四十

輝虎は力なく座り込み、力なく頭を垂れていた。お雪は正座し、
頭を垂れる自分の夫を静かに見つめていた。

お互いにこれまでのことを話し、それから、沈黙。仏間はしんと
静まりかえる。

空気はよどみ、二人の肩に重くのしかかるようだった。のしかか
られて苦しいのか、輝虎の肩がぶるぶると震え始め、ぎゅつと拳を
握り締めたかと思うと。

「あれは大糞をたれたのだ。屁は風に飛ばされれば終わりだが、糞
は肥やしになる。あやつは、その大糞をたれたのだ。それに比べれ
ば、おれの義など屁のようなものだ、ということだ。同じ尻の穴か
ら出すなら、屁よりも糞ということだ」

と、晴景と自分自身を口汚く罵った。

よもや晴景に裏切られようとは。それもまた綾山常光の差し金だ
というではないか。

空の城を掴まされ、その間に郷も空にされて。
それほどまでにおれは憎まれていたのかと、やるせない気持ちに

なる。でも、それだけの働きをした。

「この日のために、おれは身命を投げうって戦ってきたというのか。このために、みんな死んだというのか」

郷に帰って、弔い合戦を、と思っていたが。この有様でそれは無理だった。

なんのために、なんのために戦ってきたのだろう。

義のために、といった。しかし、それで得られたものはなかった。それどころか、全てを失った、と思った。

輝虎は、拳を床に叩きつけた。本尊は、お雪はそれを何も言わずに静かに見守っていた。一通り荒れてから、やがて輝虎が静まると、お雪は静かにいった。

「もうよろしいではありませんか。今までのことは夢でございます、夢でございました。これからは、これからの明日を生きてゆこうではありませんか」

「ばかな」

何を寝言を言っているのかと、お雪を憎たらしく思った。生きてゆこうなど、何を言うのかと思えば。

吐き捨てるように、輝虎は言った。

「おれは死ぬ。お雪、おぬしも死ぬ」

「いやでございます」

「なぜだ。なぜそんなことをいう」

「腹に、ややがおりまする」

「……」

腹にややがあるという。その言葉に、輝虎は金縛りにあつたように動かなくなった。

お雪の腹にいるやは、言うまでもない、輝虎とお雪の、ふたりの子供だ。

「こんなときに。――」

喉まででかかった言葉を、危うく止めて、まじまじとその腹を見る。

お雪は少しはにかんだようにうつむき、輝虎の言葉を待てば。

「それがどうした」

という、冷たい物言い。

「もうなにもかも失くしたのだ、今さら生きてなんになるというのだ。腹のややとて、産んだところでかえって、むごい思いをするだけだ。ならばここで親子ともども果てるほうがよいではないか」

もう輝虎には、生きることの意味も意義も見出せなかった。今の惨状に、何もかも投げやりになり、お雪の懐妊さえ、何とも思わなかった。

むしろ、またひとつ死を積み重ねさせようとしているように、子をなしたお雪が憎く思えたほどだった。

――なぜこんなときに子をなすのだ。――

ふと、ここにきて初めて自分の妻に対し憎いなどと思う自分に気付いた。ちよつとした気持ちのすれ違いはあったものの、憎いなど思ったこともなかったのに。

どうして、お雪を憎いなどと思わなければいけないのだろう。あれだけ守らなければいけないと思っていたお雪を、憎いなどと。

「生きて」

「はい」

「生きて、何とする。何のために、生きるのだ」

輝虎はがたがたと震えていた。もう混乱する寸前までいっていた。手は、いつでも脇差にこうとしているようだった。

それを見て、お雪はそつと、輝虎の手の上に、自分の手を添えた。手に持つ数珠のふさが、輝虎の手を優しくなでた。

「ややのために、ややのために生きてくださいませ。晴景どのは千丸のために明日を生きようとなされております。それと同じように、輝虎様は我が子のために明日を生きようとしてはくれないのですか」
手のぬくもりを感じながら、輝虎はその言葉をじっと聞いていた。
「死ぬのは、ややを生み育ててからでもできまする」

また、沈黙が流れた。思えば、小さいころ鞠をついていたその手

は、今は数珠を握っていた。宗祖が魂を墨に染め流したという御文に向かい、題目を唱えた。それは、なんのためか。

「お雪」

救いを求めるように、輝虎はぼそと、妻の名をつぶやいた。そのつぶやきに応えるように。

「わたくしが恋こがれたお方は、我が子に死ねと言われるお方だったのですか」

という、お雪の言葉。その瞳は澄んでいた。

澄んだ瞳に、輝虎の姿が映し出され、それが濡れてゆき。大きなしずくが溢れ出て、お雪の頬をつたいおちてゆく。

輝虎が、お雪の瞳の奥に見たもの。

幼き日の、ふたり。

ともに鞠について遊んでいる。

お雪も、輝虎の瞳の奥に、同じものを見ていた。

第三章「赤日」最終話

綾山常光率いる三千余の軍勢が、大高の郷に入った。

鐘賀城での勝利の余勢を駆って、中村家の所領に入り込み、大高の郷を目指し、最後は中村家の居城である式頭城を落とす。

途中晴景らと合流し、常光は八重と千丸にも会って。

「悪いようにはせぬ」

と、飯歌の城へと向わせた。

まだ戦乱は続く。しばらくは飯歌の城でゆっくりとくつろぐがよいと、そう八重に言えば。

「お心遣い、いたみいます」

と、子の千丸を腕に抱き頭を下げた。

母は、子の未来を思い義父とともに主家を売らざるをえなかった。

そうでなければ、討たねばならなかったかもしれない。しかし、実際に会って、そんなことにならなくて済んだことに、常光は安堵した。

母の腕の中で眠る幼子は、己の運命が今激しく動いていることを知らない。今はただ、母の腕の中で眠るのみ。

はたして、自分の名の由来を知ることがあるかどうか。

これからの行く末を案じながら、晴景を案内人として、郷に入り、城に入った。

郷も城も、空だった。

―我ながら、ようやったわい。―

怖いくらいに、なにかもがうまくいった。

城の中にあるお藤のなきがらは、痛ましいことになっており。それを哀れんだ常光は、家来たちに丁重に葬るように命じた。

聞けば、晴景が斬ったという。

「そうか」

の一言だけで、何も言わなかった。

城の中には、お藤のなきがら以外、何もなかった。輝虎とお雪の姿もなかった。

逃げたか、と誰かが言った。その通り、逃げたのだ。

城の仏間に入り、仏壇を見れば、その中にあるはずの本尊がなかった。

常光の脳裏に、輝虎と、ついに見ることのなかった雪の方が、手に手を取って、当て所のない旅へとゆく様がありありと浮かび上がった。

いったい、どこへ行こうというのだろう。

雪の方が、丸めた本尊を握りしめて、それにこれからの全てを託そうと、そう思っているかもしれないことは、本尊のない仏壇がなによりも物語っていた。

晴景は終始無言のまま。

常光は、それもやむなしと、家来たちを引き連れ城の広間へ行き、

もちろん上座に座る。

下座にて晴景が平伏している。

広間の両端に綾山家の家来たちが並び、晴景をじっと見据えていた。常光が、この主を売った老人にどのような沙汰をくだすのだろうと、静かに事の成り行きを見守っている。

「晴景よ」

「はっ」

「よくぞ、氏清の郷と城を明け渡してくれた。礼を言うぞ」

その言葉に、晴景はやや動じたものの。

「ははっ」

と、さらに頭を深く下げた。

それから、三千余の軍勢は、氏清の郷を手始めに、次々と中村家側の郷や城を落としてゆき、その都度綾山家の旗印が立ち並んだ。

輝虎のいない中村家の家来集など、まるで齒ごたえがなく。まさに破竹の勢いで、最後、式頭城を業火の炎につつまこませた。

中村家当主、中村家成は一門のものたちとともに、城の中で自害し果て。

ここに、中村家は滅びた。

その滅びを嘆くものはなく。

焼けた式頭城は、その無残な姿をさらしながら、ただ朽ち果てる日を待つのみであったという。

何も知らぬ小鳥たちが、群れをなして煤けた柱の上に寄り添うようにして降り立った。

お天道様の、恵みの光をうけて。しばしくつろぎながら、あたりをきよろきよろと見回したが、気を惹くものはなかったようで、小さな羽をはたかせて、皆どこかへと飛び立っていった。

小鳥たちは、どこへ行くのだろう。

山から山へと飛び移りながら、旅は続けられた。

若者が、そんな旅する小鳥たちを見上げる。どこかの峠道で、どこかの農家でもらい受けたらしい車を引いていた。

その車の荷台に、若い女が、身を丸めて横たわり、寝息を立てていた。優しくなでられているような、お天道様の恵みの光が心地よさそうだ。

女は何かの巻物を、大事そうに腕の中に抱いている。

輝虎とお雪だった。

輝虎は護身用の太刀を腰に差してはいるが、ぼろの服をまとい、牢人に身をやつしている。

お雪のおなかは、大きくふくらんでいた。

その寝顔は、安らかなものだった。

母親になるというよろこびに満ち溢れているようだった。

輝虎は後ろを向いて、お雪の寝顔を見た。

その安らかな寝顔に微笑み、前に向き直り車を引いた。

車輪が回る。

足をひとつ動かすごとに、車輪もひとつ回る。

山から山へ、まるでさつき見た小鳥たちのように、旅をして。車輪は回る。

そしてこれからも、回り続ける。

夫婦雛物語 完

夫婦離物語 番外編 子守唄

早春のある日、ようやくにして風がこちよく感じてくる時期。中村家の居城式頭城のある山やそれを取り囲む山々に桜が咲き始めて、ほのかに薄紅色に染まりゆく季節。

中村家の侍女、お藤は、城の中にある自室で暇をもてあましていた。何故か知らぬが、最近自分が侍女の仕事から外されていた。ベテランの領域に差し掛かり、個室を与えられるまでになり、今では若い侍女たちのとりまとめ役となっていた。自分は、それだけの仕事をしてきたという自負があった。が、それがどうして、思ったら。こういうことだった。

侍女を従えた当主の家成が、お藤のもとまでやってきた。侍女の腕の中に、赤ん坊が抱かれていたではないか。

家成は、お藤を真つ直ぐに見据えていた。この豪気な武勇の士は、誰と接するにもそうだった。それは、生まれながらにして人の主であるという無意識的な自覚がそうさせているようだった。だから、その声も高い。

その高い声が、お藤に投げかけられる。

「おさなのことは、覚えておるか？」

「はい」

「これは、そのおさなの子だ。名は、おゆきというそうだ」

「おさなの……」

覚えている。その若い侍女は家成の夜伽をつとめるも、主の不興をこうむり追い出されるようにして、侍女をやめた。

おさなという、ひらがなの名であることから、かなり身分の低い家の出であることはわかった。そのため、何か気に入らないことがあれば、すぐに追い出されてしまうのも、わかっていたが。

いざその現実を目の当たりにすると、お藤はおさなが哀れに思え

てくる。素朴なその娘に、男の悦ばせ方などわかるわけもなく。侍女としての奉公も、食い扶持にありつくためだったのだろうが。

しかし、子を産んでいたなど初耳だった。それからのおさなのことを、家成はこれといった感情も表さず、簡単に「死んだそうだ」と言い放つて。

しかし、なんというか、むごい。一瞬そう思ったがまさか主に向かつて表に出すことも出来ず。ふと、家成が全然おゆきに目もくれていないのに、気がついた。もちろん、それも表に出せない。

「おゆきさま、ですか」

と、当たり障りのない返答をする。名前からして、女の子のようだ。

「そうだ。おゆきの面倒は、お藤、お前に任せる」

「は、はい」

「よきむすめにせよ」

よきむすめ。

よき姫ではなく、むすめというのか。かりにも近隣にその名を轟かせ猛威を振るう大豪族である中村家の血を受け継いだ子を、むすめというのか。

おゆきは侍女の腕の中で、目をとじすやすやと眠っている。肌はその名の通り白いけど、やや膨らんだ頬はほのかに赤らんで、桃のようだ。

つん、と指先でつつきたくなるような、柔らかさを思わせた。

それを見ると、我知らず自分の頬も緩む。

お藤は侍女からおゆきを受け取り、自分の腕に抱く。おもったより、重い。

ようやく首がすわったばかりのころようだが、慎重に腕に抱きかかえる。

「では、たのむぞ」

というと、家成は侍女を従えて部屋を後にした。それを見て、お藤はおゆきを抱きかかえたまま、胸のつかえる思いがした。血をわ

けた父でありながら、この冷たさはどうであろうか。これが、武家というもののか。

お藤がおゆきを受け取る間、一度でも我が子に目をやっただろうか。従う侍女も、家成の手前なのか、おゆきには無関心を決め込んでいるようだった。

とはいえ、役目を引き受けた以上はやらねばなるまい。

そう思うと、抱き方が悪かったのか不意になにか声が漏れ、おゆきの目が重そうに開かれた。

「あっ」

と思ったときには、涙が溢れ出て、わっと泣き出しそうだったが、

「おお、よしよし。よしよし」

と、慌ててあやす。時には舌も出し、べろべろばーもする。何をしているんだろうと思ったが、それしかあやす方法を思いつかなかった。

でも、効果はあったようだ。重そうに開かれた目がやわらかい「へ」の字を描き、溢れる涙も止まった。

「よしよし、いい子じゃ。ああ、違った。よいおひい様じゃ」

あやすうち、おゆきの顔は笑顔になってゆく。桃のような頬の赤みもましてくる。

でもすぐになまけようとすれば、とたんに目には涙が溢れてきて……。

そうするうちに、あやすのに必死になっていって、お藤の頬も赤くなつていつていた。

それから五年の歳月が経った。

お藤はおゆきの面倒をよく見ていた。最初こそ、おさなの子を育てることに戸惑ったが。主の命であれば逆らうわけにもいかず。

寝食をともにしてきたお藤の自室で、ふたりは年月を過ごした。気がつけば、もう五年になるのだ。それを示すように、おゆきはお

藤が手を貸さなくとも、もう十分自分で歩けるようになった。

日が昇り、侍女たちがふたりの布団を片付けた後朝食を持ってくる。おゆきは、箸も使えるようになってきた。朝食を一緒にとつてそれを見て、ならその次はと。お藤は、朝食が終わり、それを侍女が片付けた後。

「名は、漢字でなければなりませんね」

と、言った。そろそろ、字も教えてあげなければ。ならまずは、自分の名前を漢字で書くことからはじめようと思った。

「漢字？」

「はい、あなたさまはかりにも家成様の御娘さまでありますゆえ。いつまでも、おゆきと平仮名のままではなりません」

「では、私の名は、漢字ではどうかのですか？」

そう言いつつも、平仮名も漢字も、その意味があまりよくわかっていなさそうだったが、それはおいおい教えればいい。

「そうですね。こう書くのですよ」

と、お藤はおゆきの手をとり、その手のひらに指で『雪』の字をなぞろうとすれば。

「きゃは」

と、おゆきはわらった。おや、くすぐったいのかしら、と思いつつも。お藤はそのまま、『雪』の字を書きつづけた。書き続けながら、自分の握る手の、なんと小さなことかと思う。

「お藤、お藤。くすぐりたい」

よほど敏感なのか、おゆきはじつとしていらなくなっていた。

おやおや、これは字よりもお行儀のほうも教えてあげなければと思いつつも、仕方がないと手を離して。

「しばしお待ちを」

と言って、どこかへ行って、お盆に乗せた紙と筆と墨の満たされたすずりを持って戻ってくる。

「さて、おゆきさまのお名前は、漢字ではこう書きます」

と、畳に下敷きを敷き、そのうえにひろげた紙に、『雪』の字を

書く。なかなか、達筆だった。おゆきは、好奇心一杯に、それを見ている。

自分の名は、漢字ではどう書くんだろう。そう思って、筆の走り具合をまじまじと見つめる瞳は、きらきらと輝いていた。

「雪、雪……。これが、私の名ですか」

「はい、そうでございます。空から降ってくる雪でございます。雪は、白くてきれいなものでございます」

お藤とお雪の脳裏に、庭やお城の屋根、山々がうつすらとおしろいを塗ったような雪化粧をしているところが浮かんた。雪化粧とはよくいったもので。このあたりは温暖な気候で冬でも雪が積もるところとは稀だが、時折灰色の空より舞い落ちる白い雪の織り成すその冬景色の美しさに、心とらわれぬ者はないだろう。

「おひい様も、そのような姫御前さまにおなりくださいませ」
「うん」

とお雪は、無邪気にもにつこりと首を縦に振った。

人の過ごす年月は、楽しい事もあれば、悲しいこともある。

お藤にとって、この時ほど、お雪とともにすごす中で、悲しさを覚えたことはなかった。

「私には、母上様はいないのですか？」

その言葉を聞いたとき、心臓に杭を打ち込まれるようだった。人には、必ずと親があり。父親は、中村家成であるが、母親のことは知らない。

そのことは、いつかは話そうと思っていた。でも、そのいつかがいつになるのかは、決められなかった。

まだ小さいお雪に、ほんとうのことを教えて、それでお雪はどうなるのか。考えるだけでも恐ろしい。だが、それは否応なくやってきた。

「他の子には母上様がいるのに、どうして私には母上様はないのですか？ お藤は母上様ではないのでしょうか？」

その素朴な疑問がどこから持ち込まれたものなのか、考えるまでもない。家成の子はもちろんお雪だけではない。家成は妻を娶り、さらに二人の側室がいて。

それらの間に子をもうけていた。その子らが、母親に甘えるところを何度か目にしたことがある。それを見て、お雪はうらやましそうにしていた。

甘えるだけなら、お藤にも代わりができるが。やはり、血をわけた親子でなければなしえないものがあるのだろう。それを思うたび、お藤の心にはただ無念さがつのる。

どう足掻いても、自分はお雪の母親にはなれないのだ。たとえ自分の持つている愛情をどんなに注ごうとも、それによって血をわけあうことなど、出来っこないのだ。

お雪の母親は、おさなただひとりだけなのだ。

—どうしよう。—

と考え込んで、名案など浮かぶわけもない。下手にうそをついても、ただお雪を傷つけるだけなのは火を見るより明らかで。もっと下手をすれば、その火に自分も焼かれかねないのだ。

つぶらな瞳が、まっすぐにこっちを向いている。それに捉えられて、逃れることは出来そうになかった。

やんぬるかな。お藤はほんとうのことを話した。どうせ、いつかは話さねばならないのだ。なら、いつそ。

お雪は、じっとお藤をみつめたまま、そのままじっとしていた。その瞳から涙が溢れでてくるのでは、と思っただ、意外なことにお雪は泣かなかった。

「母上様は、もう、いないのですね」

ただそれだけを、ぽそつとつぶやいた。お藤はうなずくしかなかった。

真実を知ったお雪の心は、どのようなものか。それを思うと、お藤の心は張り裂けそうだった。ほんとうに悲しいときは、何もかもが止まって消えうせるようで、涙すらも出てこないようで。

それから、夜の帳が落ちるころ。お藤はお雪を寝かしつける。
燭台の灯火が、闇を少しばかり追い払って。先に布団に入ったお雪の顔は、ほの暗い中うつすらと浮かび上がっているようだった。
部屋にふたつ布団が並べられて、そのひとつにお雪が入って。お藤は、白い寝巻きのまま、お雪の入っている布団の横で正座をして。その寝顔に、そっと触れるような子守唄をうたっていた。

おかかが
なんぞいうたか
ねりゃれ　ねりゃれと
いうておる
ねねば　おかかもねらねぬぞ
ねらねねば　むすめもおこせぬ
むすめおこしたいから
おかかをねかせてたもれ
さもなくば
むすめおきるときには
おかかはまだねよる

【訳】

お母さんが
何か言いましたか
寝なさい　寝なさいと
言うておる
寝なければ　お母さんも寝られないよ
寝られなければ　娘も起こせない
娘を起こしたいから
お母さんを寝かせてちょうだい
でなければ

娘が起きるころには

お母さんはまだ寝ているよ

思えば、大きなお城に住まうお姫様なのに。どうして、こんな寂しい思いをしなければいけないのか。お雪が、一体何の悪いことをしたというのだろう。

それなのに、どうして、城の者たちはお雪を遠ざけようとするのか。一度でも、向こうから来てくれたことがあったらどうか。お藤がやっと頼み込んで、家成や兄弟たちと、少しの間顔を合わせさせてもらうのが精一杯だった。

ほんとうに、少しの間。

何もかもが、お藤に押し付けられてしまつて。同じ血を分けたもの同士ではないか、親兄弟ではないか。それが、どうして。それならば、貧しくとも祖父母のもとで暮らした方が、ひとりの子供としてまだ幸せなのではないか。

眠るお雪の閉じられた目から、一筋の涙がこぼれ落ちた。眠りについて心の籠たがが外れたのか、ひとつぶ、ふたつぶと、涙がこぼれ落ちてゆく。

それを見て、お藤はうたうのをやめて、声を押し殺して涙を流す。そういえば、いまうたっていた子守唄の歌詞には、どんな言葉があった。

ずっと、そのうたをうたってきたけれど。そのうたは、本当なら誰がうたってあげなければいけないのだろう。

その晩、燭台の火を消すことが出来なかった。火を消してしまえば、お雪の寝顔が闇に飲み込まれてしまいそうで、怖くて出来なかった。

「おさな、見えますか？ おひい様が」

お藤は空に向かって、ちいさくそう語りかけた。

蒼天に、陽が中天に昇り、雲が帯を引き、薄く幕を張りながら泳

いでいる。それを眺めていると、風がお藤の髪を揺らす。

気がつけば、髪に白いものが混ざるようになって。

部屋の障子を開けて、濡れ縁にすわり。そのまま空を眺めていた。目の前の庭では、草が伸びようとしているようだ。そろそろ、草刈をせねば。

と思うお藤のとなりには、お雪。小さな手に鞆を手に持っている。さきほど、父の家成が。

「新しい鞆が手に入ったでな、お雪、そちにくれてやろう」

と持ってきてくれたのだった。もつとも、すぐに引き返してしまつたが。それでも、お藤はこの家成の行為に、感謝した。少しでも、子に対する父性愛はあるらしかった。

お雪も嬉しそうだ。

「とてもよい鞆でございますね」

というと、まんざらでもなさそうに、につこりと笑う。えくぼが、かわいらしい。

お藤も、お雪の笑顔につられて笑った。

侍女として長年中村家に仕えてきたが、こう言つてはなんだが、よいお役目をいただいたと思った。おさなには、申し訳ないが……。だからこそ。

「おひい様は、私が立派に育ててみせます。だから、安心してね」

と、空に向かい、哀れな後輩侍女に語らずにはおれなかった。

だから、なにがあつても、守り抜こう。いつの日か、嫁に行くそのときまで。

さてはて、おひい様のお嬢様には、どのようなお方がなられるのか。と思いをめぐらせているうちに、気がつけば家中の殿方を吟味している自分に気付いた。

なんともかんと、何を勘違いしているのだろっ。そう思うと可笑しくて。

「ふふふ」

と、笑った。笑えば、お雪は何事かと問いかける。

「あ、お藤。笑った。何がおかしいの？」

「あ、いえいえ。別になにも」

「うそ、顔が赤い」

「え、そ、そうですか。いえ、ちょっと、風邪を召したようで」

「うそ、うそ。ほんとはなに？」

「ええ、だから、ほんとうに」

その執拗な問いかけには困ったものだった。お雪もなかなかどうして粘り強い。

でも、幸せだった。

その気持ちになれることが、全てだった。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3380j/>

架空戦国小説・夫婦雛物語

2011年10月28日03時15分発行